

1986

大井城跡 (黒岩城跡)



昭和61年3月

長野県佐久市教育委員会



鶴川

石鼓城

下小河



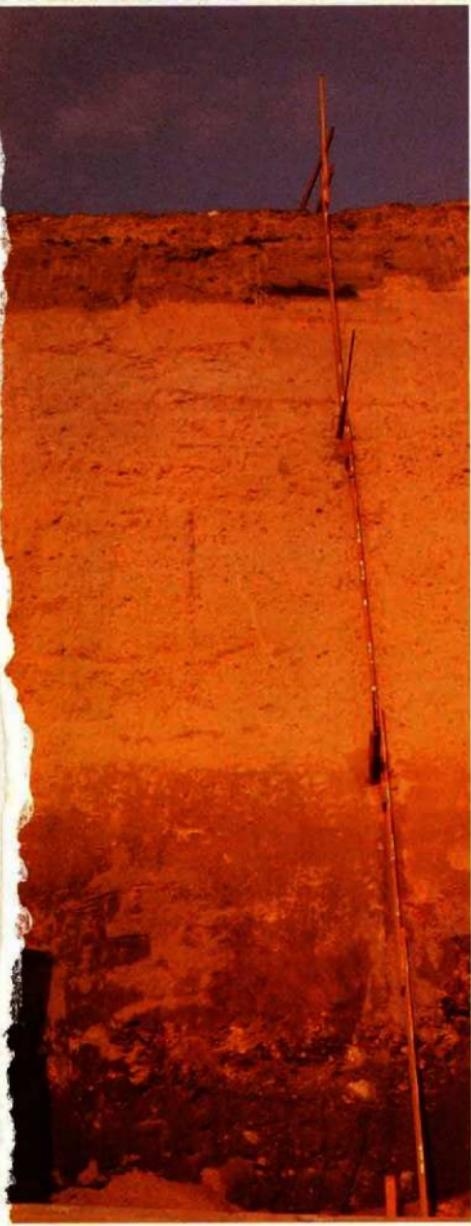
大井城跡（黒岩城跡）遠景空撮

（株式会社協同測量社撮影）

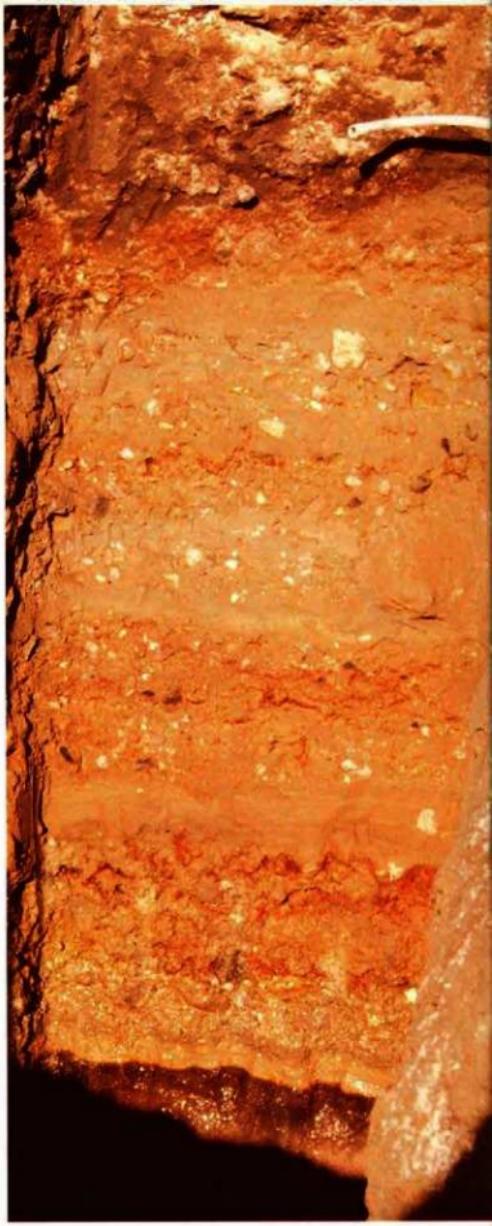
大井城跡（石並城・王城・黒岩城）周辺空撮

中央を蛇行する瀬川は、王城の東で県道豊昇・草越・佐久線と交差し南流する。瀬川がもっとも左方に寄った断崖上に石並城で開削を挟んで王城、さらに、県道の下方が黒岩城である。

（株式会社協同測量社撮影）



大井城跡（黒岩城跡）地層断面
城跡の調査区域北端が重機によって削平され、
新しく露頂した本文中第3図の粗石火砂混の地
層断面写真である。



大井城跡（黒岩城跡）付近地層断面
黒岩城と城跡の南側断崖下の本文中第1図
のBトレーナ断面写真。本文中第3図の不
整合面つまり桑川層の上部から下方の地層
状況である。上部から砂層、砂礫互層、鐵
砂層、砂層、火成灰・砂層、最下位に鰐眼
岩（含黒色泥炭）がみえる。

例 言

- 1 本報告書は、長野県佐久市（民生部同和対策課）を事業主体者として建設省の国庫補助金により実施している大和町小集落地区改良事業に併い、佐久市教育委員会が主体となり行なった大井城跡（黒岩城跡）発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、建設省及び文化庁の国庫補助金事業として実施した。
- 3 昭和59年度は、5月～12月まで発掘調査を、出土遺物・図面等の一部の整理を1月～3月まで行なった。整理・報告書作成は昭和60年度に実施した。
- 4 発掘調査対象地は、次のとおりである。
 - 第I地区（城郭） 長野県佐久市大字岩村田3444-1、3446、3447、3448-1。面積3,605m²
 - 第II地区 長野県佐久市大字岩村田3401-2、3402-1、3403、3418-2。面積7,375m²
- 5 本報告書は調査関係者が分担して執筆し、文責を文末に記した。
- 6 遺構のトレースは大井和子・市川香里・橋詰信子が、遺物の実測・トレースは佐々木宗昭・小山岳夫・三石宗一・羽毛田伸博・森泉かよ子・臼田利恵・井出百合子・押 益子・大井和子・湖沢壯一・小平武典・羽毛田卓也が担当した。
- 7 遺構写真撮影は、小山岳夫・島田恵子・佐々木宗昭・林幸彦が担当し、遺物写真撮影は島山俊彦氏が担当した。
- 8 調査・整理期間中、次の諸氏から御教示・御協力を得た。記して感謝したい。

赤羽 一郎、浅野 晴樹、石野 博信、井上 喜久男、垣田 修次、川島 雅人、木内 捷、木下 豊、木村 鐘雄、児玉 卓文、昆野 靖、桜田 隆、佐藤 信之、田熊 清彦、坪井 清足、仁科 章、服部 充喜、畠山 俊彦、花岡 弘、前原 豊、宮崎 重雄、矢島 宏雄、山崎嘉津美、大和町区、荒宿区。

調査組織

事業主体者	長野県佐久市	調査主体	佐久市教育委員会
事務局	佐久市民生部	教育長	大井 昭二
民生部長	飯島 綾昌	教育次長	森泉 郁太郎（昭和60年3月退任）
	西沢 正己		柳沢 真一（昭和60年4月就任）
同和対策課長	小林 三樹夫	社会教育課長	並木 進（昭和60年3月退職）
〃 係長	戸塚 満		茂木 多喜男（昭和60年4月就任）
〃 係	高橋 好範	社会教育係長	相沢 幸男（昭和60年3月退任）
	飯島 雅則		関本 功（昭和60年4月就任）
	伊藤 明博	社会教育係	白石 賢次（昭和60年4月就任）
	土屋 俊重		高橋 和敬（昭和60年4月就任）
	大井 清子		細萱 健一（昭和60年3月退任）
			林 幸彦
		社会教育指導員	森泉 かよ子

調査会

会長	神津 武士（佐久市市長）	白倉 盛男（佐久市文化財保護審議委員）
副会長	前島 宗之（佐久市役員）	小須田 盛慶（佐久市文化財保護審議委員）
	大井 昭二（佐久市教育長）	友野 一（佐久市文化財保護審議委員）
	本沢 慎輔（岩手県平泉町教育委員会）	平林 富三（佐久市文化財保護審議会会長）
	由井 茂也（佐久考古学会会長）	木内 寛（佐久市文化財保護審議委員）
	井出 正義（小海町文化財保護審議会）	小林 甚三郎（佐久市文化財保護審議会副会長）
	平林 富三（佐久市文化財保護審議会会長）	藤沢 平治（佐久市文化財保護審議委員）
	小林 甚三郎（佐久市文化財保護審議会副会長）	大井 隆男（佐久市文化財保護審議委員）
	大井 隆男（佐久市文化財保護審議委員）	臼田 都雄（佐久市文化財保護審議委員）

調査団

団長	大井 隆男
副団長	藤沢 平治
担当者	本沢 慎輔、井出 正義、木内 寛、林 幸彦
主任	森泉 かよ子、小山 岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター）、佐々木 宗昭（60年度）
調査員	井上 行雄、大井 今朝太、佐々木 宗昭、島田 恵子、三石 肇雄（以上、佐久考古学会会員）、三石 宗一（佐久埋蔵文化財調査センター）、高村 博文（佐久市教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センター）、堤 隆（御代田町教育委員会）

調査補助員 犀 益子

発掘調査参加者

赤城幸子	赤城たま子 浅沼陽二 市川かおり 井出百合子 上原あや子 上原幸二 臼田悦子
臼田充文	浦野隆子 遠藤しづか 遠藤みつ子 遠藤幸弘 大井和子 小田川榮子 小田川良子
柏木三宏	金森茂敏 神部妙子 木内亜友美 木内和枝 木内政彦 工藤勇 工藤安彦 黒沢はる子 黒沢文子 小井土節子 小林清彦 小林俊介 小松信男 駒村英明 小山いづみ 小山栄次
桜井修二	佐々木春蔵 佐々木正博 佐藤桂子 佐藤正幸 里見一幸 清水亮 清水祐子 須藤久米子 高橋純子 武内広恵 田中夏江 土屋早苗 土屋岳史 塚田真雪 伴野剛 中沢美春 中島たか子 中島とよ子 中島文子 中島ひで子 中条しげ子 長坂美樹 並木ことみ 並木亮 橋詰勝子 橋詰けさよ 橋詰信子 花里好美 早川俊彦 原文子 藤田為敏 野田敏彦 星野あい 前島弘子 丸山勝子 御園孝子 滝尾俊雄 宮浦きよ子 桃井澄人 桃井毅 森田博美
森泉泰和 柳沢祥子	山崎かな江 山崎喜一 山崎きよい 山崎幸一 山崎せつ子 山崎徳次郎 山崎としの 山崎トミ子 山崎直 由井かつ江 由井整 依田洋一 長沼隆年 犀 益子

遺物整理・報告書作成参加者

浅沼陽二 浅沼ノブ江 井出百合子 臼田利恵 大井和子 大塚大作 神部妙子 金森茂敏 木内亜友美 木内和枝 木内一徳 木内政彦 櫟沢壯一 小平武典 小林利鶴 小山いづみ 犀 益子
櫻井修二 桜井俊文 関口浩美 高木久江 高橋かおり 高橋純子 千葉博之 中山健児 長沼隆年 野田敏彦 橋詰勝子 橋詰信子 羽毛田卓也 林良一 細萱ミスズ 水沢敦子 市川香里

凡 例

1 本書では、遺構について次のように略号によって表示した。

H→古墳時代住居址、Ta→堅穴遺構、F→掘立柱建物址、D→土坑、M→溝状遺構、I→井戸址

2 遺構・遺物の縮尺は次のとおりであり。スケールを付した。

1) 遺構 住居址・掘立柱建物址・溝状遺構→1/5、堅穴遺構→1/5、堅穴遺構(一部)・土坑→1/5、カマド→1/5

2) 遺物 中世陶磁器・土師質土器・金属製品・石製品・自然遺物→1/5、中世陶磁器の大形品・臼・擂鉢・凹石・古墳時代土器・須恵器→1/5、錢貨・玉類→1/5。

3 掘図中におけるスクリーントーンは下記のものをあらわす。他は、図中に明示した。

1) 遺構

→焼土分布範囲・カマド、→炭化物分布範囲、→灰分布範囲

2) 遺物

→有機質付着範囲、→土師器内面黒色研磨、→須恵器断面、→施釉範囲

→煤範囲

4 遺構の海拔標高は、各遺構ごとに水糸ラインの上に水糸標高を明記した。

5 重複遺構については上端のみを、遺構内における擾乱についても上端のみを細い実線で表示した。

6 写真図版の遺物の縮尺は、掘図縮尺と同一にした。

7 写真図版中の番号は、掘図番号と対応する。遺物番号は簡略化し、例えば、第10図1は10-1とした。

8 各一覧表の数値について、不明は-、現存値は〈 〉、推定値は()とした。

9 遺物の実測は第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものもある。

本文目次

例言.....	
凡例.....	
第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 本調査の経過.....	1
第2節 遺物整理の経過.....	2
第Ⅱ章 大井城跡の概観.....	5
第Ⅲ章 層序.....	18
第Ⅳ章 第Ⅰ地区(城郭)の遺構と遺物.....	19
第1節 中世の遺構.....	19
1 厚穴遺構.....	20
2 据立柱建物址.....	73
3 土坑.....	76
4 溝状遺構.....	134
第2節 中世の遺物.....	135
1 土師質土器.....	135
2 内耳土器.....	138
3 胸巻器.....	154
4 瓦器.....	155
5 石臼.....	163
6 石擂鉢・搗き臼.....	173
7 石製品.....	239
8 金属製品.....	263
9 埋堀・羽口・鉄滓.....	272
10 鉄貨.....	279
11 その他.....	293
第3節 弥生・古墳時代の遺構と遺物.....	296
1 D203号土坑.....	296
2 H 1号住居址.....	297
3 H 2号住居址.....	299
4 H 3号住居址.....	310
5 H 4号住居址.....	314
6 H 5号住居址.....	317
7 H 6号住居址.....	319
8 H 7号住居址.....	320
9 H 8号住居址.....	321
10 H 9号住居址.....	324
11 H 10号住居址.....	329

12	H 11号住居址.....	331
13	H 12号住居址.....	337
14	H 13号住居址.....	339
15	H 14号住居址.....	342
16	H 15号住居址.....	343

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 本調査の経過

大井城跡総合調査は、昭和58年度に大井城跡及び大井氏関係文献史料集刊行、昭和59年度に黒岩城跡の城郭部分3,605m²と東側断崖下の湯川に続く低地7,375m²についての発掘調査および、大井城跡(石並城、王城、黒岩城)とその周辺地形 2km²の航空測量を実施した。さらに、昭和61・62年度は大井城と総称される3城の周辺を対象として遺構・範囲の確認を行なう。

昭和58年度

昭和59年2月より佐久市志賀纂室と佐久市埋蔵文化財資料室において『四脚譚鏡』・『千曲の真砂』等の文献より大井城跡及び大井氏関係の記事を拾うと共に古絵図等を複写し、順次編集し、印刷所へ送った。3月はゲラ刷りの校正と本調査へ向けての準備を行なった。3月31日『大井城一大井城関係文献史料集一』が刊行。

第1表 本調査経過表

地区名 遺構名 年月日	第Ⅰ地区(城郭)							第Ⅱ地区						
	発 杭 打 探 査 箇 所 も の	耕 作 土 除 去	遺 跡 ア ン テ レ ー ジ ー	住 居 時 間 地 点	窓 穴 状 態	土 状 態	開 溝 立 柱 建 物 址	ト レ ン チ	照 射 器	井 戸	水 田 延 長 状 態	土 坑		
昭和59年 (1984年) 5	■■■■	■■■■						■■■■						
6	■■■■	■■■■												
7		■■■■							—					
8		■■■■						■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■		
9	■■■■■	■■■■	■■■■			■■■■■	■■■■■							
10			■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■							
11			—	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	—						
12			—	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■							

昭和59年度

黒岩城跡の城郭南部3,605m²とこの東側断崖下の低地7,375m²を本調査の対象とした。城郭の調査区は、東から西へ0~14、北から南へあ~せとして、5mグリッドを設定した。

調査の方法については、下記のとおりである。

- 1 遺構確認面を可能な限り上層に求め耕作土層より手掘りで進めた。
 - 2 プラン確認
 - 3 遺構の掘り下げは、直交するベルトを残し、土層観察を行ないながら進めた。遺物は出土状態により分布図を作成した。
 - 4 遺構の実測図は原則として縮尺1/50、付属施設等は縮尺1/10とし、簡易造り方で測量した。
- 5月12日~16日、器材の点検・準備及び運搬を行なった。
- 5月13日~16日、トレンチを設定し、城郭の土層を確認した。耕作土の深さにバラつきが認められた。
- 6月10日~20日、草刈りを全面的に行ない仮グリッドを設定した。トレンチ掘り下げも続行した。
- 6月21日~9月14日、各グリッドの耕作土の除去を行なう。8月下旬まではほぼ全域を15cmほど掘り下げて、耕作土は除去できたが、褐色土層上でのプラン確認は不可能なため黄褐色土層上で確認した。この層より下層は極めて滲水性に乏しく、散水をしながらの作業でたいへん難航した。7月下旬より作業員の数が増して、ベルトコンベアの廃土運搬も急ピッチとなり置場に苦慮した。

10月からは古墳時代の住居址も隨時掘り下げた。とりわけH2号住居址は炭化材の遺存状態が良好であったため多くの資料が得られた。

12月になると降雪があり、まず雪掻きを行なわなければならず、大きな障害となった。また、凍結にもたいへん悩まされシートの被覆作業もウェートを占めることになった。ようやく、全遺構の記録が終了したのは、12月28日であった。第II調査地区は、現況が水田のため重機によって掘削することとした。地層確認トレンチより現水田下に鉄分凝集層が認められたため全面を調査することとした。

第2節 遺物整理の経過

昭和59年度

調査が進むにつれ遺構数が並々ならぬ状況となり次年度の整理の困難が予想されたので、現場での作業と併行してできる限り遺物の水洗いを行なうこととした。6・8月~11月に水洗いし、同時に註記も実施した。2月には、遺構図面修正と遺物復原も実施した。

昭和60年度

遺物整理については、水洗い・註記が前年度にほとんど済んでいたので、復原・実測作業を4月早々開始した。中世遺物では特に内耳土器に多くの接合がみられた。石臼や茶臼にも接合する個体があった。遺構図面修正は、350を越す遺構数なので多くの日数を費し、4月7日から6月10日の長きに渡った。下図作成もほぼ6月に終了した。遺物の実測は、5月4日から古墳時代の遺物より始め6月15日まで行なった。以後6月いっぱいは、中世の遺物実測を主として進めた。土師質土器小皿・陶磁器は100個体を越し、石臼・茶臼・擂鉢・凹石は、150余個体を数え、特に臼については、数面を表示したため予定よりかなり多くの日数を費した。7月になると他の遺跡調査で手不足となり、室内整理メンバーも全員動員されることになって9月まで一時中断した。再開した10月は、中世遺物実測等を継続し、年明けの1月は遺構図トレース、各種表作成を行なった。2月は遺構トレース、割付け、原稿執筆を行ない印刷所へ入稿した。3月は、原図の整理・収納、遺物の補修復原・収納作業を行なった。

(事務局)

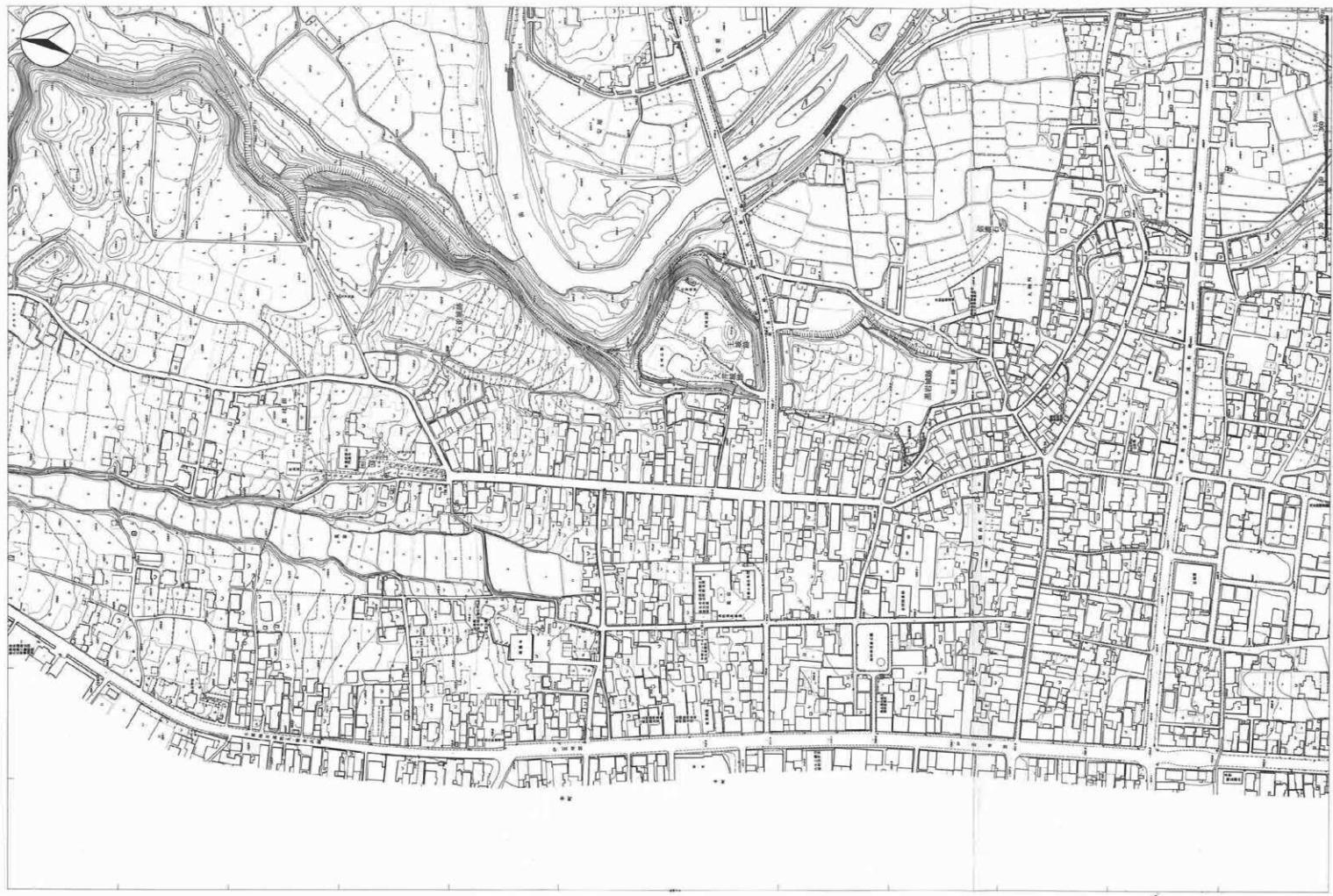


图6-4 大朴河入海形势图 (1:30,000)

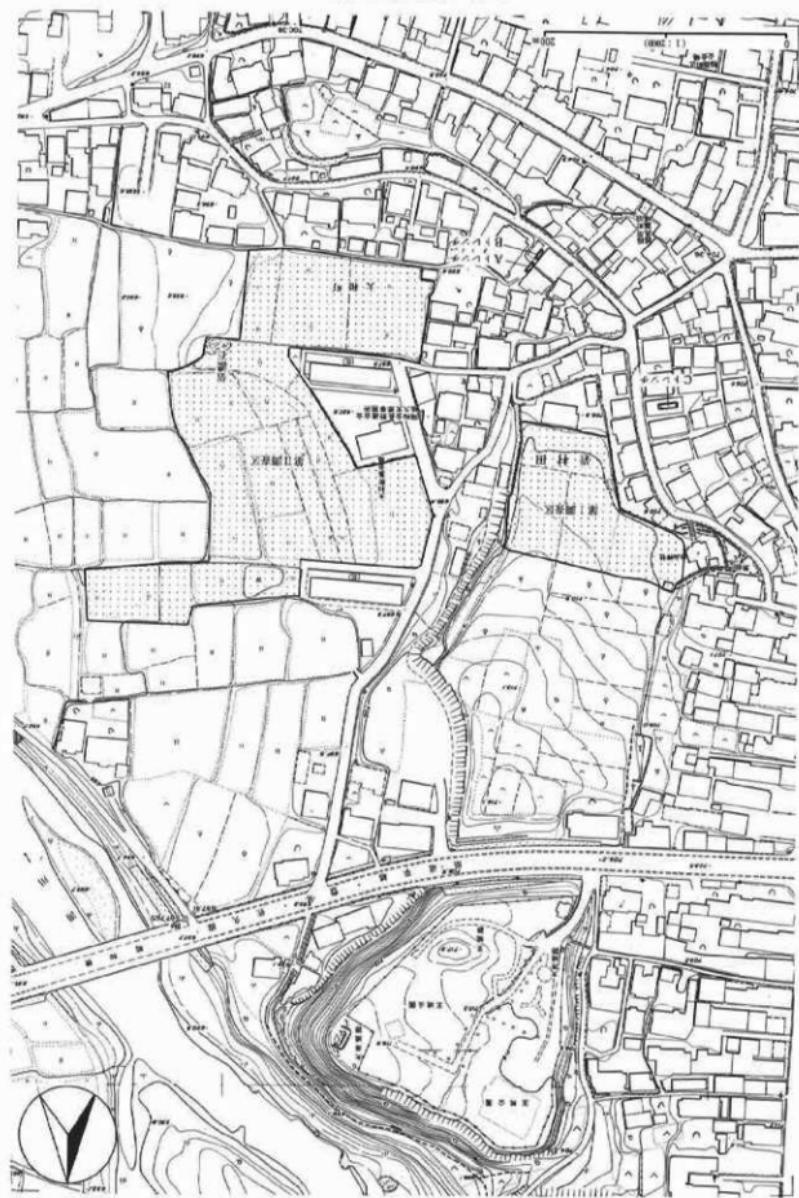


第5図 庄久市内世城跡と中世遺物を出土する道路 (1 : 50,000)

日付	午前工作時間	午後工作時間	休憩時間	午前休憩時間	午後休憩時間	午前就業時間	午後就業時間	午前就業場所	午後就業場所	午前就業職務	午後就業職務	午前就業工具	午後就業工具
9月1日													
9月2日													
9月3日													
9月4日													
9月5日													
9月6日													
9月7日													
9月8日													
9月9日													
9月10日													
9月11日													
9月12日													
9月13日													
9月14日													
9月15日													
9月16日													
9月17日													
9月18日													
9月19日													
9月20日													
9月21日													
9月22日													
9月23日													
9月24日													
9月25日													
9月26日													
9月27日													
9月28日													
9月29日													
9月30日													

表2 案 連続就業履歴

第1图 大井町地区地圖



第II章 大井城跡の概観

大井城跡（黒岩城跡）の自然環境（主として地形、地質）

佐久平は千曲川最上流部にある高原性盆地で、標高では小諸市布引附近で550m、千曲川をさかのぼって南佐久郡佐久町附近の河床で750m、平均高度約700m、南北距離20km、東西幅は佐久市中央部で最大東西10kmの南北に長いほぼ菱形の高原平地で、その真中を南から北に向う対角線状上に千曲川が流れ下っている。左岸には片貝川・鹿曲川が、右岸には抜井川・雨川・内山川・志賀川・湯川の支流が流入して平地帯全面を潤している。佐久平の四周は北は活火山浅間山（2560m）を南端とした上信越高原国立公園、東は妙義山（1104m）荒船山（1422m）を主峰とする妙義荒船佐久高原国立公園、南は金峰山（2595m）平武信ヶ岳（2468m）を中心とした高山地帯の秩父多摩国立公園、西はフォッサマグナ（日本中部地溝帯）中心部に隆起噴出した赤岳（2899m）硫黄岳（2742m）蓼科山（2530m）霧ヶ峰・美ヶ森台地と続く八ヶ岳蓼科山火山列の八ヶ岳中信高原国定公園と国立27・国定52公園中の四つの自然公園に囲まれた風致自然景観に恵まれた地域である。

従って佐久平は確かに北西側の上田小県方面に続く部分のみ平坦地続きで他の各方面は何れも山地に囲まれ他地域への交通は全て越境をしなければならなかった。現在はあまり利用されていないが古代から通行した伝承記録のある峠道を詳しく数えてみると群馬県側18、埼玉県側2、山梨県側6、諏訪方面7、上小方面2計35にのぼっている。

高原盆地佐久平は、年平均気温C10度内外・降水量年計1,000mm内外で高寒な大陸性気候に恵まれ一年中晴天日が多く、日照時間・紫外線量も多く、牧畜・稲作の実績は古くから目覚しいものがあった事は次の記録が実証している。

奈良・平安時代から信濃勤使牧16の中の望月牧・塩野牧・長倉牧が佐久平周辺におかれ、とくに望

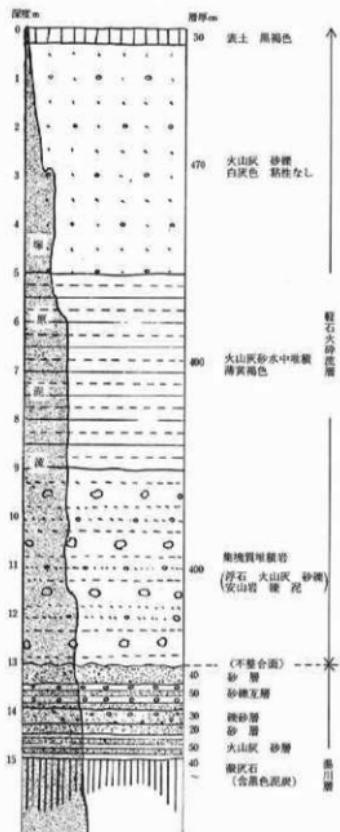


第2図 大井城跡位置図

月牧は信濃産貢馬毎年80頭中20頭を出す最大の牧であった。以来、佐久産良馬は中世源平・戦国時代の歴史の中に入られ、明治以後大正・昭和の現代に至っても多くの軍馬供給地でもあった。養蚕・山羊・羊・家畜・アンゴラ兎の飼育が盛んであった事も、その風土が牧畜適地の実証である。

弥生時代遺跡が佐久平全面に分布し、後期箱清水式土器の多い事は佐久の気象条件と千曲川本支流の水の安定と適温とが稻作を早く普及した事を物語っており、現在でも佐久平では連年冷害や旱害のないことと良質米の产地を自任し面積当たり収量が全国最高水準を維持している事は、毎年秋の農林省発表全国稻作収量統計が明示している。これに関連する地域産業として佐久高原では水田における稻田養鯉業が江戸時代中期から成果を挙げ佐久鯉として内外に知られている。さらに、水と米に恵まれた佐久の千曲川流域では、古くから醸造業が発達し、現在も15社の酒蔵が造石高の約半分を他地方に移出していることが風土性を表現している。

大井城跡（黒岩城跡）は、この佐久平中央部以北千曲川右岸の佐久市岩村田町内（旧中仙道岩村田宿）の千曲



第3図 大井城跡（黒岩城跡）附近地層断面図

川支流の湯川沿い台地標高700mの景勝要害堅固な場所に立地している。鎌倉時代初期から佐久郡東半部の大井庄地頭職として栄えた大井氏の宗家が居城とした所で自然地形を利用した平山城で北から石並城・王城・黒岩城と掘切によって区画され、直北に直線上に配列されている。

大井城遺跡の立つこの岩村田の台地は佐久平東北部・千曲川右岸の活火山浅間山の南斜面末端の緩傾斜面から平坦面となった標高700m内外の古くから開拓された地域で浅間山麓の湧泉に源流を持つ湯川・湧玉川の用水にささえられた米作適地でもある。とくに湯川は浅間山の東側から流出して南流、南軽井沢地域からの泥川と合流して西に向きを換え、御代田・岩村田地域では地殻変動の隆起運動の影響から下刻作用顕著な河岸段丘を二段に亘って形成し、しかも至る所で極端な蛇行曲流の河川となっている。大井城近傍では蛇行の曲幅も広く、沖積期に入つて地殻運動の沈降期の氾濫沈殿現象の結果による沖積層の数層の沈殿層が今回の発掘によって確認された。黒岩城東崖下水田面で中世までさかのぼると思われる水田址状遺構が確認された事は以上の地殻運動の隆起沈降を実証するものと考えられる。

旧南北都境を流れる内山川と志賀川の合流した滑津川の北岸が15~20mの新崖をなしていることと浅間山南麓の御代田町——小諸市附近に美事に発達している「田切り」地形の成因はこの地殻運動と若い火山噴出物の地層の水蝕に対して抵抗の弱さを如実に示しているものである。

大井城跡は湯川の浸食差（高さ約15m）と浅い田切りに挟まれた台地で今回の発掘調査と基盤整備のためのボーリングによって地質構成も明らかとなった。その断

面図を示すと第3図のようである。この附近の地層は全て浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が第一次黒斑火山の大爆発による山体破壊の大熱泥流（塚原泥流）が骨格をなし黒色集塊岩の頂上部がここにも姿を残し黒岩城の命名の基にもなっている。その上部に黒斑火山の発達過程に噴出した多量な火山灰砂礫火山弾などの湖成堆積物が火山活動の盛衰を明示するように水平互層を繰返す湯川層が一部に黑色泥炭層・褐鉄鉱層を挟んで重なっている。それより上部には第二次前掛火山の噴出物の降下軽石・スコリヤ・火碎流が大別して三回厚く不整合に被って地表面を形成している。大井城の立つ佐久平北東部は全面的に洪積期以後現在も火山活動を続いているわが国で最も若い火山浅間山の噴出堆積物分布地帯である。

（白倉 盛男）

大井城跡（黒岩城跡）の歴史環境

千曲川の上流にあたる佐久地方には、小諸市・佐久市の2市、軽井沢・臼田町など7町、北御牧村・八千穂村など7村、計16市町村が含まれる。これらの市町村行政区画は、千曲川沿いに東西に細長い形状をもっていて、千曲川と平行して南北に佐久地方を縱断する佐久甲州街道（国道141号線）によって相通じている。東と南を開東山地、西を八ヶ岳・蓼科山に囲まれ、北関東及び松本・諏訪・伊那・甲府地方とは、幾つもの峠越えで結ばれる。古くは古東山道、東山道、新しくは中山道が、東国と東海・畿内を繋ぐ政治・経済・文化上重要路線であって、佐久平の北部を東西に横断している。佐久地方から北関東地方への峠越えは、入山峠・香坂峠・矢川峠・内山峠、田口峠・余地峠等があり、南の甲府盆地へは川上村の信州峠や野辺山高原平沢峠越えて、上小地方や善光寺平へは千曲川の流域に沿って通じる。この地方南端甲武信峠から発する千曲川の两岸には、2~3段の河岸段丘がみられ下流につれその規模は大きくなる。さらに、千曲川に東西方向から流れ入る中小河川は、狭長の河岸段丘を形成している。このような佐久地方には、原始・古代から中世にかけて実に多くの遺跡が存在し、わが国の原始・古代史を解明するにあたって学史に名高いものも数多くある。

旧石器時代、縄文時代早期・前期の遺跡は、標高800mから1,300mの千曲川上流部や八ヶ岳・蓼科山麓、浅間山南麓、開東山地西麓に多く分布し、縄文時代中期から後期の遺跡は千曲川に注ぐ中小河川の750m~850m以上を測かる河岸段丘上や台地上に顕著な分布を示している。その後、弥生時代になって水稻耕作が生産の主体となるにつれ、冷涼ということに起因するのだろうか標高800m以上の地域の遺跡の存在は希になり、この傾向は古墳・奈良時代と続く。ここに再び多くの遺跡が認められるようになるのは、平安時代になってからである。佐久地方の南部と北東部のこのような状況は、水稻耕作を生産主体とする時代にあっては、当然のことであろう。そして散発的に採集される土器や磨製石器、1~2棟の住居址は、低標高の地帯に形成された集落址の人々とは異った生産形態（狩猟など）等を営んでいた人々の存在が想定できよう。

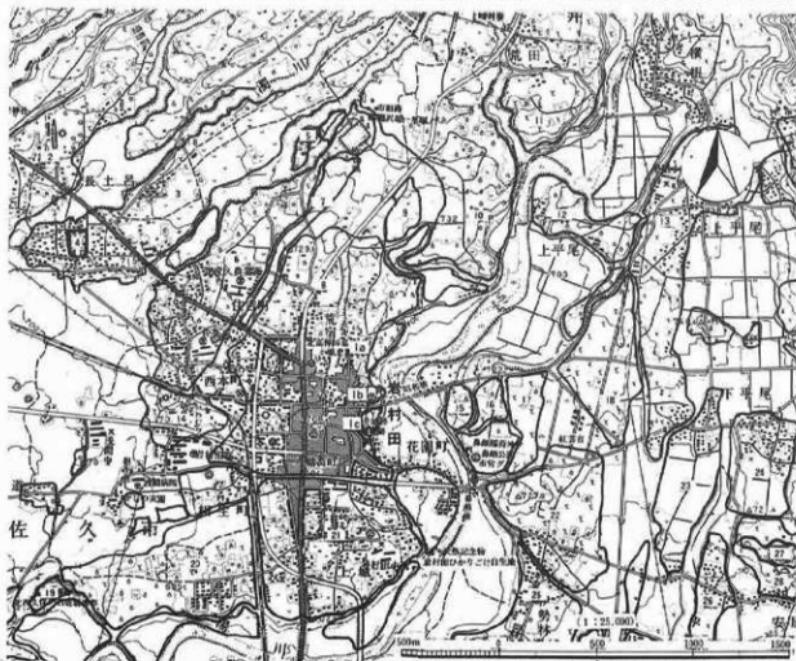
弥生・古墳時代の遺跡は、佐久地方の南部では千曲川の流域が拡がりをみせ、東から抜井川、西から北沢川が千曲川に合流する佐久町より下流に、北部では浅間山麓に放射状に展開する「田切り地形」の850m以下の地域により濃く分布する。このような遺跡の南北のあり様は、佐久地方の古墳の所在南北限と一致する。現在の水稻栽培のでき具合もほぼこのあたりを境としており、低所の野沢平が冷害気味の時、南北の850m以上は、重い冷害となる。

野沢平には千曲川と平行して北流する片貝川があって、両河川に挟まれる地帯には、南北に長い帶状畝高地が存在する。この畝高地上には古墳・奈良・平安時代の集落遺跡が検出されている。9遺跡が調査されているが、

縄文時代及び弥生時代の住居址は、いまだに1棟も認められていない。近年まで佐久地方の弥生時代の代表的な埋蔵地と考えられていたのであるが、以外な結果である。弥生時代の集落は、片貝川流域の低湿地に臨んだ野沢平の西部に位置する河岸段丘上や舌状台地上に存在する。発掘調査された小宮山の後沢遺跡⁽²⁷⁾、根岸の舞台場遺跡と西裏遺跡群⁽²⁸⁾、竹田峯遺跡からは、中期末～後期の集落が検出されている。この他にも、既出遺物や詳細分布調査の成果から佐久市内の千曲川川西には38箇所の弥生時代の遺跡が知られているが、いずれも規模が小さい。西裏・北裏遺跡群は、弥生時代中期末から後期、古墳時代の継続的集落で、面的な拡がりと遺構の密集度からも片貝川流域の中心的遺跡である。古墳時代になって野沢平の帯状微高地に集落が形成されるが、4・5世紀代の集落はまだ検出されず、微高地上の西端で和泉期の土器の出土、市道遺跡で1棟の住居址が知られているだけである。6世紀の鬼高になると現在の三塚・桜井・跡部・下県を中心に集落が形成され、奈良・平安時代もほぼ同様なあり方である。古墳～平安時代の片貝川流域以西は、弥生時代の遺跡分布に似るが、平安時代中期以後は谷の奥地や高所にも数が増える。

從来考えられてきた水田可耕地としての片貝川流域の低湿地は、弥生時代中期末から古墳時代前期においてはごく一部が利用されたにとどまり、可耕地としてより拡大するのは古墳時代鬼高一期である。鬼高には、さらに、微高地上の低地部も可耕地として考えられるが、集落の数や規模からは飛躍的な面積の増加は考えられない。ただ、片貝川以西でみられた平安時代の遺跡の小規模・数の増加という現象は、この微高地上でも認められる。平安時代になってより上流にあたる盛田遺跡や白拍子遺跡群、下町屋遺跡がみられる。

この野沢平および片貝川以西の地区の古墳は、蓼科山塊が沖積平垣地に突き出す尾根の先端やその山腹などに



第4図 大井城跡周辺道路分布図

第3表 大井城跡（黒岩城跡）周辺遺跡一覧表

No.	種別	遺跡名	所 在 地	時 代	備 考
1 a	城郭	石 壁 城	岩村田字石壁地	弥生～中世	
1 b	*	王 城	* 字吉城	*	昭和54年度公園化に伴い一部調査
1 c	*	黒 岩 城	* *	*	昭和55年度県道拡幅分調査
2	集落址	周防塙遺跡群	長土呂字周防塙・筑石南門地	弥生～平安	昭和54・55年度一部調査
3	*	長土呂遺跡群	* 字長土呂里・上原原他	*	
4	館跡	長 土 呂 館 跡	* 字城	*	
5	城郭	曾根新城跡	岩村田字下穴虫	古墳～中世	
6	集落址	就把坂遺跡群	* 字就把坂・久保田原他	弥生～平安	昭和53・55・58・60年度一部調査
7	散布地	中久保田遺跡	* 字中久保田・下久保田他	*	
8	集落址	岩村田遺跡群	* 字六供後・六供・新町他	弥生～中世	昭和59・60年度一部調査
9	包囲地	西赤塚跡	* 字西赤塚	弥生～平安	
10	集落址	栗毛坂遺跡群	小井田字前鹿部・岩村田字栗毛他	*	昭和58・60年度一部調査
11	包囲地	跡 枝 道 跡	* 字下金井・横根字島原他	*	
12	*	濱 石 道 跡	上平尾字濱石・中川原他	*	
13	*	東大久保遺跡群	* 字東大久保・深堀他	縄文～平安	
14	集落址	円正坊遺跡群	岩村田字円正坊・清水日他	*	昭和59年度一部調査
15	*	下 小 平 道 跡	* 字下小平	弥生～平安	昭和55年度一部調査
16	包囲地	上 小 平 道 跡	* 字上小平	平安	
17	*	横 箱 道 跡	安原字横箱	*	
18	*	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保・下平尾字六間地	縄文～平安	
19	集落址	北西久保遺跡	岩村田字北西久保	弥生～中世	昭和43・45・54・57・60年度調査
20	*	一本柳遺跡群	* 字東一本柳・下福寺寺地	*	昭和43・47年度一部調査
21	*	上の城遺跡群	* 字丹通・上の城他	縄文～平安	昭和48・54・58年度一部調査
22	*	蛇塚A遺跡群	安原字蛇塚・西大久保他	平安	
23	包囲地	戸屋敷遺跡群	* 戸屋敷数・西大久保他	*	
24	*	東 村 道 跡 群	下平尾字東村・下前原他	縄文～平安	
25	集落址	蛇塚B遺跡群	新子田字蛇塚・野馬久保他	平安	昭和54・58年度一部調査
26	*	筒 烟 道 跡 群	安原字筒煙・熊炮・下池他	縄文～平安	昭和60年度一部調査
27	城郭	燕 城 跡	* 字城山・城裏	中世	
28	包囲地	伐 室 道 跡 群	* 伐室・城前・城山・城裏	古墳～平安	

表中のNoは、第4回の遺跡Noと一致している。

第3表・第4表は、「長野県の中世城跡分布調査報告書」(1983 長野県教育委員会)、「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」(1983 佐久市教育委員会)による。

第4表 佐久市内中世城跡と中世遺物が出土する遺跡

No.	名 称	所 在 地	立地	形 状	存続期間 (推定伝承)	備 考	(推定伝承)
1	大井城	岩村田字吉城地	台地	複郭	(鎌倉～戦国)	石差・王城・黒岩城を総称。県史跡。大井氏	
2	荒林城	常田字豊林	平地	連郭	～(戰国)	田切りの台地上。(下曾根氏)	
3	長土呂城	長土呂字城	平地	單郭	(鎌倉～室町)	大井氏・原氏の都と伝える。別称一跡城。(大井氏)	
4	岩村田遺跡群	岩村田字六井地	平地	—	—	六井後遺跡、菅田遺跡。土師質土器	
5	曾根新城	* 字下穴虫	台地	連郭	～(戰国)	田切りの台地上。御跡氏・松平氏	
6	曾根城	小井田字六沢他	平地	單郭	～(戰国)	田切りの台地上。(神津氏)	
7	金井城	小井井字南金井	台地	複郭	～(戰国)	田切りの台地上。	
8	延寿城	横根字延寿城	台地	單郭	(鎌倉)～	難詮と思われる。(小笠原氏)	
9	白岩城	上平尾字白城跡	台地	單郭	(室町)～(戰国)	別称一里古城。(平尾氏)	
10	下 小 平	岩村田字下小平	台地	—	—	傳状遺構。土師質土器	
11	平尾城	上平尾字平尾山	山頂	連郭	(室町)～(戰国)	別称一山古城。白岩城と一連のもの。(平尾氏)	
12	落合神明館	鳴鹿字神明	台地	單郭	(鎌倉)～		

No.	名 称	所 在 地	立地	形状	存続期間 (推定伝承)	備 考	(推定伝承)
13	鳴 頭 津 明	鳴頭字神明	平地	—	—	土師質土器、内耳土器	
14	北 道 見	*宇北道見塙	台地	—	—	*	
15	根々井 館	根々井字龜田塙	平地	単郭	(平安)~	現正法寺、県史跡(根々井氏)	
16	根々井東原館	*字東原	台地	単郭	(平安)	別御一通本。 (根々井氏)	
17	松 の 木	岩村田木松の木	平地	—	—	土師質土器、内耳土器	
18	宮 の 西	*宇宮の西	平地	—	—	*	
19	北 西 久 保	*宇北西久保	台地	—	—	五輪塔	
20	一本柳遺跡群	*宇一本柳他	台地	—	—	土師質土器、内耳土器	
21	宮 の 後	*宇宮の後	平地	—	—	*	
22	上 の 城	*宇上の城	台地	—	—	*	
23	藤 ケ 城	*宇南上の城	台地	—	—近世	中世大井氏の詔城とされる。近世内藤氏。	
24	岩 尾 城	鳴頭字城跡他	台地	通郭	室町～戦国	県史跡。大井氏	
25	鳴 頭 中 屋	*宇中屋敷	*地	—	—	土師質土器、内耳土器	
26	銀 治 田	横和字殿治田	台地	—	—	*	
27	寄 草 遺跡群	*宇寄塙	台地	—	—	*	
28	今 井 城	今井字坂・前田	台地	複郭	(平安)~	(今井氏)	
29	今 井 宮 の 前	*宇宮の前・面	台地	—	—	土師質土器、内耳土器	
30	北 久 保	横和字北久保	台地	—	—	*	
31	中原 遺跡群	今井字大塙・荒子					
32	深 邪 城	鶴戸字深堀	台地	—	~(戰國)	(上原氏)	
33	深堀 遺跡群	*宇孤塙・西原	台地	—	—	土師質土器、内耳土器	
34	東 千 石 平	*宇東千石平	平地	—	—	*	
35	八 反 田 城	*宇八反田	台地	複郭	—		
36	鳥 坂 城	新子田字宇坂	台地	単郭	~(戰國)	昭和59年度一部調査。(上原氏)	
37	浅 井 城	*宇且ヶ久保	台地	壁?	—	伝承地。	
38	燕 城	安原字祇山・誠義	山頂	単郭	(南北朝)~(室町)	(安原氏)	
39	池 篠 城	新子田字池篠	台地	単郭	—		
40	異 頭 城	香波字青木	山頂	単郭	—	別称一つばくろ城。	
41	關 間 渡 山 城	香波字關門渡山	山頂	単郭	—	山號に、平安時代創建と伝わる明象寺がある。	
42	赤 ぶ 田 城	香波字赤ぶた	山頂	—	—		
43	志 貢 城	志賀字上小倉包	山頂	通郭	~(戰國)	戦国期の山城の形態がよく残る。(笠原氏)	
44	高 桶 城	志賀字高桶他	山頂	通郭	~(戰國)	別称一天狗岩。(志賀氏)	
45	笠 原 城	志賀字ミタガ	山頂	通郭	~(戰國)	笠原氏	
46	石 附	根岸字石附	丘陵	—	—	内耳土器、土師質土器	
47	向 タ 原	伴野字向タ原	台地	—	—	*	
48	小 金 平	觀岸字小金平	台地	—	—	内耳土器、古鉄、苦滑、鐵斧、羽口、土坑、掘立柱。	
49	舞 台 線	*宇反り田絆	台地	—	—	掘立柱建築。	
50	堀 の 内	*宇掘の内	台地	—	—	内耳土器。	
51	日 内 城	*宇三番勝所	丘陵	複郭	~安土桃山	番手城か? (長浜氏)	
52	虚空蔵山裏火台	*宇比良・宮崎	山頂	—	—	鏡火台と伝わる。	
53	西 落 城	伴野字西落	台地	—	—	内耳土器。	
54	室 生 山 城	*宇酒石	—	—			
55	町 の 後	前山字町の後	平地	—	—	内耳土器。	
56	前 山 城	前山字寅戻	山頂	通郭	室町～安土桃山	伴野氏築城と伝わる。別称一伴野城。(伴野氏)	
57	荒 城	前山字荒林	山頂	単郭	—	別称一新山城。(伴野氏)	
58	地 家	大沢字地家	平地	—	—	内耳土器、板碑他。	
59	荒 山 城	*宇城山	山頂	通郭	(室町)~(戰國)	前山城支城といふ。(伴野氏、市川氏)	
60	下 町 屋	*宇下町屋	平地	—	—		
61	泉 尾 城	板井字平馬塙	平地	単郭	(鎌倉)~	(泉氏)	
62	野 沢 館	野沢字居屋敷	平地	複郭	(鎌倉)~近世	伴野氏	
63	川 原 田	平賀字荒見	平地	—	—		
64	寄 山 遺跡群	志賀字寄山越	台地	—	—	内耳土器。	
65	内 附 城	平賀字月崎	山頂	単郭	~(戰國)		
66	内 山 城	内山字寺澤地	山頂	通郭	~戰国	平賀氏、大井氏、上原氏	
67	五 本 松 城	*宇日向地	山頂	通郭	~(戰國)	(笠原氏、内山氏)	
68	内 山 古 城	志賀字多々良塙	山頂	—	—	見張りの城か。	
69	荒 平	平賀字荒	平地	—	—	内耳土器。	
70	城 平	*宇城平・喬井	丘陵	—	—	*	
71	平 賀 城	*宇秋元・庵他	山頂	複郭	(平安)~(戰國)	(平賀氏)	

築造されている。現在11基が確認されているが、径10~15mの円墳でいづれも小規模である。6世紀末から7世紀代の年代があたえられている。

千曲川の右岸は関東山地から発する河川によって東西に峡谷が形成されているが、平賀・瀬戸に至って大きく聞く。この扇状地端部での河川との比高は8~10mを測り、東千石平遺跡・種村遺跡・平賀中屋敷遺跡群が存在し、弥生時代の遺跡は小規模で数も少なく大規模な集落が形成されるのは、古墳時代の鬼高郡で種村遺跡^(註10)はその代表的なものである。古墳群は群集し、長峯・大間・月崎・東能石古墳群が内山川の両岸の山腹に存在する。この千曲川右岸も左岸と同様に平安時代になると集落址の面的規模は縮少し、数が増加する。しかも、山間部の奥深い、狭い平坦地や台地上にも1棟ないしは2~3棟の住居址が検出されている。

滑津川以北には、千曲川两岸の平坦地より、もっとも標高差の低い所で30mを測る一段高い平坦地が浅間山麓より形成されており、随所に「田切地形」がみられる。この「田切地形」の台地上縁辺には多くの遺跡が存在する。

従来、佐久地方に水稻栽培が定着した弥生時代中期の遺跡は、冷涼な気候や水田可耕地の少なさから数は限られると共に大集落の存在も考えてこられなかった。しかし、詳細分布調査と幾多の緊急発掘調査の結果から「田切地形」の台地上上縁辺や「田切地形」が消滅し微高地が形成されている一帯には、大きな集落が存在していることが判明した^(註11)。それは、小諸市境から濁川、湯川、滑津川の流域である。これらの遺跡群からは、中期と重複し後期の集落址も検出されている。古墳・奈良・平安時代の集落もこれらの弥生時代の遺跡群と重複ないしは、近接して存在している。さらには、この地域では奈良・平安時代の大きな集落が標高750m以上の高所にも存在している特徴がある。佐久市・小諸市・御代田町にまたがる小田井の鈴鹿山遺跡群で昭和59年・60年と発掘調査され、61年・62年と継続調査が予定されている。検出された住居址165棟、掘立柱建物127棟、他の主な遺構としては馬5頭を埋葬した特殊な遺構、遺物は円面鏡や巡方および多数の鉄器が多量の須恵器や土師器とともに出土している。この付近は「長倉駅家」があったと想定されている地であり、北方の浅間山麓には御牧の「塩野牧」^(註12)が展開していたともされ、この遺跡群との関連が注目されている。御牧はこの他にも「長倉牧」と「望月牧」^(註13)が佐久地方には存在しており、野火付遺跡の埋葬馬などとともにたいへん馬に縁の深い地方であるといえる。

このような原始・古代の歴史環境の中で平安時代の末には、ここ佐久の地においても多くの武士団が形成された。牧の経営などで有力な豪族として滋野一族があったが、その一系である根々井氏は木曾義仲の四天王となるほどの勢力をもっていた。第5図の15・16がその居館址といわれている。その他佐久地方のおもな豪族には、横氏、八島氏、落合氏、志賀氏、桜井氏、石突氏、野沢氏、平原氏、小室氏、平賀氏があった。この頃、佐久には大井莊と伴野莊の二つの莊園があったことが知られている。大井莊は岩田村を中心とした大井郷、伴野莊は千曲川西の野沢平を中心とした刑部郷を中心とした莊園といわれている。このほか、平賀・田口など青沼郷を中心とした平賀郷があった。平安時代末から鎌倉時代の承久の乱に至る間の平氏と源氏、さらには官方と幕府との政権争いという大きな日本史の流れの中で、これらの佐久武士団は大きく関与し、一族の盛衰を体験したのである。承久の乱(1221年)後佐久には、小笠原氏が新興勢力をはじめ、時長は伴野氏を称して野沢平を中心とする佐久の南部に、その弟朝光は大井氏を称して岩田村を中心とする佐久の北部にそれぞれ勢力をふるった。伴野氏にに関する城郭跡としては、前山の前山城や原の伴野氏館跡があげられる。^(註14)大井氏一族では大井城跡のほかに長土呂・耳取・森山・平原・岩尾・上の城・燕城があげられ、承久の乱以後佐久において色々とその勢力を拡大したことかうかがえる。中先代の乱(1335年)では、大井氏は同族の小笠原貞宗や村上信貞らと共に北朝方に属し、信濃の旧勢力である南朝方の諏訪氏や佐久・小県の滋野一党と対した。一時大井城は落城したが、桔梗ヶ原の戦い(1355年)で南朝方が敗北してからは、望月氏ら滋野一党にかわって大井氏の勢力がのびた。さらに、信濃守護小笠原長秀と信濃の国人の盟主上満信との大塔合戦(1400年)では、大井光矩が仲裁に入ったり、1436年には川西の芦田氏と争い家臣に組みこんでいる。鎌倉府の足利持氏と京都の室町幕府との争い永享の乱(1437年)では、持

氏の末子永寿王丸を安原の安養寺にかくまつた。ついで起った結城合戦（1440年）の際にも大井持光は、永寿王丸を支持し反幕の姿勢を示した。文安4年（1447年）に永寿王丸（足利成氏）は許されて関東管領に補せられ、鎌倉公房足利成氏として復職させた大井持光は佐久において大きな勢力をもつた。このころから文明16年（1484年）に村上氏に大井城を焼かれるまでが、大井氏の全盛であった。これより前同族である大井・伴野の両氏は抗争を続けついには文明11年（1479年）の大井殿が伴野氏に捕われるという争いにまで達し、佐久郡内は大いに乱れ村上氏をはじめ甲斐武田氏の佐久侵攻のきっかけをつくることになった。文明16年の戦いに敗れ、以後大井氏は衰退する。この頃佐久郡内には、大井氏・伴野氏はじめ、数多くの小豪族が割譲し、多数の山城を構えていた。⁽¹²²⁾ 第5図の分布図は佐久市内に限っているが、佐久郡内ではその数100余を数えることができる。

さて、大井氏が承久間より260余年間佐久平にその勢力をふるったが、大井宗家とその一族が撫った大井城跡は、現在の岩村田中心街の東部にあって湯川に臨んでいる。城郭の東側は、約10~25mの断崖となっている。東西100m、南北700mの細長い一帯は西方に堀状の低地で区切られる台地となっており、この台地は東西の切通しによって三分かれている。北から石並城跡、王城跡、黒岩城跡とよばれておりこの3城を合せて大井城跡または岩村田跡といふ。王城跡では、昭和55年3月の調査により地表下50~70cmの深さに多量の瓦土を含んだ灰化物層が検出され年代は明確にし得ないが、王城跡が猛火にさらされたことを物語っている。黒岩城跡は、昭和55年7月に県道拡幅に伴ない北側の一角が調査され竪穴造構2基、土坑10基が検出され、土師質土器や陶磁器が出土している。この3城の西側は、現在ほとんど平坦となっていて、往時の堀跡が明確でない状況であるが、わずかに凹地が南北に連続しているところがある。そういう場所は、来年度以降試掘を行う予定である。この南北の堀跡に直交する掘跡が昭和55年5月に行なわれた六供後遺跡で検出された。幅1.8m~2.2m、深さ1.0m~1.3mを測り、断面形はほぼ「V」字をなす。この堀跡の北側へ約10mを測る地点には、幅約15mの凹地が平行して存在し、大規模な堀跡が想定される。大井城跡の対岸下平遺跡があるが、土師質土器が出土した溝状造構1基が検出されている。江戸時代の文献で吉沢好兼が著した『四隅譜載』によれば各所に大井城跡の関連遺跡がうかがえる。しかし、大規模な工場性地造成や宅地造成、さらには、高速道路建設に伴う関連開発が大井城跡の周辺に及んでおり今後とも県指定史跡である本城跡の保護・保存は片時も目を離せない状況にあるといえよう。

註1 旧石器時代では、1949年の群馬県岩宿遺跡発見以来、高まりを見せた旧石器文化研究の先駆的調査となった川上村馬場平遺跡・柏原遺跡、南牧村矢出川遺跡があつてナイフ形石器文化層や椎石器文化層が確認されている。縄文時代早期は、北相木村柏原岩陰遺跡が全国的に著名で、人骨・動物の骨・植物などの自然遺物とともに多量の土器・石器が出土している。また、佐久市小宮山後沢遺跡は、県下において数少ない集落の営まれた台地全城の発掘調査が行われて、縄文時代前期の集落が検出されている。

芹沢長介 1955 「長野県馬場平遺跡略報」『石器時代』1

芹沢長介・柳沢和明 1982 「柏原遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

芹沢長介・柳沢和明 1982 「矢出川遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

西沢寿光 1982 「柏原岩陰遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

佐久市教育委員会 1978 「後沢遺跡発掘調査報告」

林 稔 1982 「後沢遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

註2 川上村大澤山遺跡、佐久町川西小学校遺跡、佐久市宇喜坂曲尾遺跡、大字新子田戸坂遺跡、和田上遺跡、大字長土呂西近津遺跡群、群馬町茂沢南石堂遺跡、御代田町宮平遺跡、小諸市久保田遺跡・郷土遺跡、望月町下吹上遺跡・後沢遺跡などがあげられる。

八幡一部 1976 「信濃大澤山遺跡」川上村教育委員会

八幡一部 1928 「南佐久郡の考古学的調査」佐久教育会

佐久市教育委員会 1984 「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」

上野俊也 1982 「茂沢南石堂石道跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

前原 進・川島義人 1975 「北佐久郡御代田町宮平遺跡の後期構式土器」『信濃』III-27-4

花岡 弘 1984 「久保田」小諸市教育委員会

八幡一部 1982 「郷土遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

福島邦男 1978 「下吹上」『長野県考古学会研究報告書11』望月町教育委員会 長野県考古学会

福島邦男 1982 「下吹上遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

福島邦男 1983 「後沢遺跡」望月町教育委員会

註3 灰皮文が施された壺形土器が出土している標高1330mを測る高冷地の南牧村野辺山の三沢遺跡、赤色彫文の高杯形土器が知られている北

相木の御平道跡などは海拔高度が高く、気候も冷涼ということで往々される。標高800m以上の道跡の分布は、八千穂村3道跡、小瀬町6道跡、南相木村2道跡、北相木村2道跡、南牧村6道跡が現在わかっている。これらの道跡は、住居址などの遺構は検出されていない。出土している遺物は、弥生時代後期の土器が主体を占めている。しかし、野辺山高原や佐久町中原遺跡のように佐久地方では、最も古い時期（中期前半）の土器群が知られていることは、佐久地方への弥生文化伝播を考える上で貴重である。また、前述の道跡で磨製石器が多くみられる（野辺山高原だけで10点を超える）ことは、とともに記述される内容である。

浅間山南麓についてもほぼ同じような状況で、佐久市、小瀬町・御代田町境の小田井より高い標高の地域では、弥生時代の道跡はたいへん少ない。750m以下の地帯での数の多さ、密集に比べて遙かに少ない現象である。弥生時代後期では、經井沢町3道跡、御代田町6道跡が知られているが、いづれも、僅かな土器と石器が出土している。ただ、經井沢町の県道跡からは、住居址が2棟検出されている。

由井茂也 1970 「野辺山高原の弥生式遺物について」『長野県考古学年報』9

京都女子大学考古学研究会 1976 「野辺山高原道跡分布調査一昭和49・50年度報告書」

京都女子大学考古学研究会 1976 「野辺山高原道跡分布調査一昭和51年度報告書」

京都女子大学考古学研究会 1980 「野辺山高原道跡分布調査—1979年度概報」

渡辺重義、森鶴 稔 1979 「北佐久郡經井沢町道跡の調査」『長野県考古学年報』34

野辺山高原、南・北相木村、小瀬町、八千穂村など各町村の道跡分分布状況や内容について、由井 明氏・由井茂也氏・井出正義氏から多くの御教説を得た。

註4 古墳時代は、抜井川と北沢川が千曲川に合流する一帯（高野町・南瀬）までは道跡が知られている。それ以南の地域では、ごく希な存在である。また、佐久地方の北側においても、標高600m以上の地域では道跡の数は限られてくる。

註5 小瀬町の川上道跡、川上村の奥尾道跡、佐久市大字春坂兵士山道跡などは、発掘調査された山間部で高地に存在する平安時代の道跡として知られている。雨堀道跡は多数の墨書き土器や鉄器、横尾道跡は住居の構造を解明するに豊富な資料が検出されている。また、いづれの道跡も古道沿い時の近くにあって、立地的にも注目される。これらの道跡の地にも実にたくさんの数の存在が、山深い狭い僅かな台地や平坦地に知られている。時局的には次第陶器が当地に多く供給された10世紀から11世紀代に比較的多いよう思われる。

井出正義他 1986 「雨堀道跡」 小瀬町教育委員会

由井茂也・高橋博文他 「横尾」 川上村教育委員会

註6 南限の古墳として佐久町の高野町畠塚の御塚古墳と普原の入沢20号古墳、北東限の古墳として御代田町塩野のめね塚古墳が知られている。

註7 弥生時代中後半の住居址3棟、後期の住居址32棟と方形周溝墓3基が検出された。

佐久市教育委員会 1977 「後沢道跡発掘調査報告書」

註8 弥生時代初期の住居址13棟が検出された。

佐久市教育委員会 1981 「舞坂遺跡」

註9 僅かな道跡の轟道と集合所で組合せで2,000m足らずの発掘調査であったが、21棟の弥生時代中期後半から後期の住居址が西裏道跡群竹田峠道跡・西裏道跡から検出された。道路をへだてて接続する北裏道跡も古くから土器をはじめ石包丁や石斧が表面採集されていて、大規模な集落址の存在が予想されている。

佐久理文文化財調査センター・佐久市教育委員会 1986 「西裏道跡群西裏・竹田峠」

註10 佐久市教育委員会 1984 「佐野町佐久市道跡評価分布調査報告書」

註11 昭和39年佐久市立泉小学校の施設工事中に作成期の變形土器や手捏土器が採集されている。この手捏土器と類似するものとして、片貝川対岸の大門山道跡出土のものが挙げられる。

註12 佐久市教育委員会 1976 「市道」

註13 10に同じ。

註14 土屋長久 1975 「信州佐久平の後期古墳群について」『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』

註15 佐久市の平安時代長野郡常陸郡整備事業に伴ない、約40,000m²が発掘調査された。住居址は、弥生時代中期5棟、後期17棟、古墳時代後期273棟。奈良時代7棟、平安時代7棟が検出された。

佐久市教育委員会 1985 「野川道跡 道跡図」

註16 佐久市教育委員会により昭和54年に調査された香板の兵士山道跡では住居址が1棟検出され、昭和58年の調査でも内山の廻所平道跡で1棟検出されている。この地にも、多数の遺跡が山間に存在している。

註17 北方から近津・西近津・周防燒・芝宮・長土呂・楓坂・岩村田・一本柳・寄塚・和田上などの道跡群があげられる。

註18 御代田町教育委員会 1985「野火付道跡」

小諸市教育委員会 1982 「野火付古墳」

佐久市教育委員会 1985 「御代田道跡」

註19 菊地清人 1980 「佐久の交通史」

註20 堀 隆 1984 「V経緯」 「野火付道跡」

註21 前山城は佐久市の指定史跡に、伴野氏館跡は長野県指定史跡にそれぞれ指定されている。

註22 長野県教育委員会 1983 「長野県の中世城郭分布調査報告書」

註23 昭和54年度に佐久市教育委員会により、県道拡幅工事と王城公園設置に関係する調査が行なわれている。

註24 工藤かよ子 1981 「大井城跡」 佐久市教育委員会

註25 佐久市教育委員会 1981 「大井城道跡」

註26 佐久市教育委員会 1981 「下小平道跡」

第III章 層序

大井城跡は、第II章で述べているように浅間火山の噴出物によって構成されている地層が湯川等の浸蝕によって形成された台地の縁辺に築造されている。今回の調査は、堀原泥流の黒色集塊岩が一部に露頭し、黒岩城と呼ばれるにいたった大井城跡を構成する3城のうちもっとも南端の城郭についてなされた。

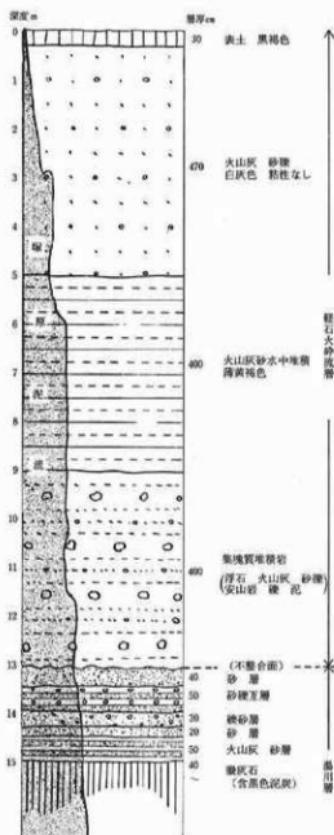
全体層序の第I層は、黒褐色を呈する耕作土であって層厚は20cm~60cmを測る。この層は城郭の南・西部で厚く、北・東部では比較的薄くなる。農作業時の深耕のため層中には、土器・石器等を多く含んでいる。特に石臼や五輪塔は、作業の支障になるためであろうか、畑境に石垣状に積み重ねられていたものが数多くあった。また

長年の耕作のせいいで深さ10cm~15cmのところでたいへん堅い面がみられた。調査開始時には、この面を城郭使用時の生活面と誤った判断をしたほどである。

第I層の直下が第II層となる。第II層は火山灰と砂礫を主体とした黄褐色土層で粘性はない。層厚は南側の断崖で確認したところ約4.5m~4.8mを測る。色調は、黄褐色を主とするものの、灰白色や黄橙色・淡橙色も部分的にみられた。堅穴遺構や土坑内の土層に多くみられ、一見してこの第II層であることがわかった。この層の上部はたいへんもろく、各遺構の壁際、特に古墳時代の住居址には壁の崩壊がみられた。

城郭直下の南部（現在宅地となっているところ）にも、堀跡等城郭に関する遺構の存在を想定し、家屋移転等が行われた場所（第1図のA・B・Cトレンチ）を精査したが、後世の搅乱層直下が第7図の地層不整合面下の砂層ないしは砂礫層となりまったく遺構は確認されなかつた。

城郭東側直下の現水田地帯は、地層不整合面下の凝灰岩または、火山灰・砂層の上面にあたる。この地層不整合面あたりの地層からは湧水がみられる。



第7図 大井城跡（黒岩城跡）層序模式図

第Ⅳ章 第I地区（城郭）の遺構と遺物

第1節 中世の遺構

黒岩城跡の南部3,605m²に5m×5mのグリッドを北方よりあ～せ、東方より0～14と設けて、平面発掘を行なった。表土である耕作土が浅く、遺構に達するのが早いと思われたため、また、破壊を防止するために重機による削平はさけて、手振りとした。当初表土下10cm～15cmではほぼ全域に比較的堅い面が認められたため、ジョレンから移植ごとに切り替えて精査を行なった。しかし、柱穴等落ち込みが認められないため、数箇所を試掘したところ下部よりビニール袋等が出土し、まだ耕作土の一部であると判断した。城郭の東・南・西部は、土留めのためのコンクリート壁があり、その崩壊防止のため約1mほど内側で調査区は設定されている。

城郭の東側、お～けー1グリッド及びこ～せー2グリッド内には、比高差約1mほどの段が検出された。これは、調査区外の東側にみられる段曲線の最上段と思われる。この段の内側1mには南北に伸びる幅約2m、長さ約23mを計測する溝状遺構が検出された。この反対の西側白山神社寄りは、い～おー13・14グリッド付近から西に向かって傾斜するが、これは自然地形の傾斜と思われる。調査前は約1.5mの土盛りをし、整地されていた。

遺構は、激しく重複しほば全面におよんで検出された。その数と内容は調査前の予想をはるかに上回るものであった。堅穴住居址、堅穴遺構、土坑、掘立柱建物址、溝状遺構が検出された。

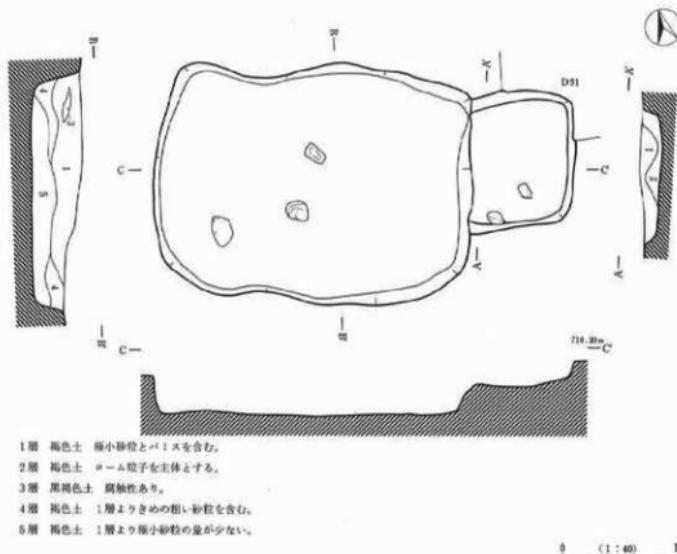
堅穴住居址——古墳時代後期	15棟
堅穴遺構——中世（15・16世紀と思われる）	54基
土坑——弥生時代後期 1基、中世（15・16世紀と思われる）	285基
掘立柱建物址——中世（15・16世紀と思われる）	3棟
溝状遺構——中世（15・16世紀と思われる）	2基

以上の遺構は古墳時代の堅穴住居址が、城郭東側より15mの範囲に1棟と存在せず中央より西側に偏在し、土坑はほぼ全域に、掘立柱建物址はほぼ中央に同様な間隔をもって存在し、堅穴遺構はこの掘立柱建物址と幾つかは重複関係があるものの他は周辺をとり囲むように配されている傾向があるといえよう。

これらの遺構からは、実に多量の遺物が出土した。古墳時代の堅穴住居址からは、土師器の甕・壺・高杯・杯・瓶・小型變形土器、須恵器の杯・蓋、石製模造品・玉類が出土した。中世の本城郭に伴う施設と考えられる堅穴遺構からは、石臼類、擂鉢類、鐵鋤、金属製品、石製品、内耳土器、土師質土器、國產陶磁器、舶載青白磁器などが出土した。これらの他にも、獸骨、炭化種子などの自然遺物も多く出土した。

1 穴道構（第8図～第63図、第5表～第6表、図版4～図版26）

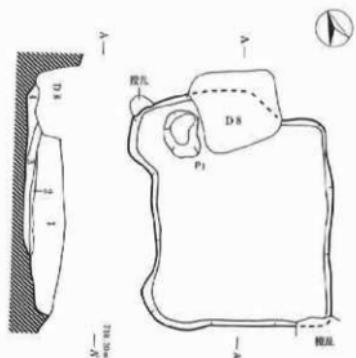
大井跡（黒岩城跡）の城郭平坦部より一覧表にまとめたように総数54基の穴道構が検出された。分布は、調査区域内のほぼ全域に及んでいる。54基の内14基に張り出し部が認められた。出土遺物には、次のものがある。船載陶器（染付・青磁・白磁・青白磁）、国産陶磁器（常滑、中津川、美濃鉄釉、美濃灰釉、備前）内耳土器、土師質土器、石臼（粉播臼・茶臼）、石擂鉢、砥石、磨石台、硯、凹石、小柄、鉄釘、銅製品、坩埚、羽口、鉄滓、錢貨などが出土した。時期的には、13世紀～16世紀に比定されるが、15世紀～16世紀に属するものが大半を占めている。



第8図 Ta1号穴道構実測図

第5表 Ta1号穴道構計測・説明表

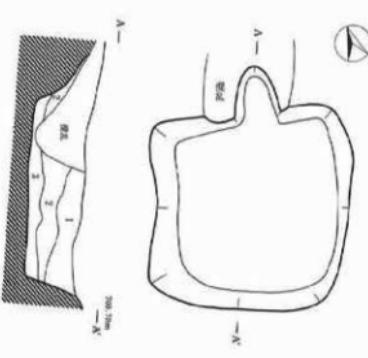
図版番号	4-2	検出区	き-4・5グリット		平面形態	不整長方形
重複状態	D91に破壊され、D30を破壊する。					
北	壁面	東壁面	南壁面	西壁面	面積	長軸方向
壁長	257cm	187cm	268cm	191cm	4.0m ² (1.2坪)	N-68°-W
壁高	41.5～43.0cm	31.5cm	19.0～30.0cm	30.5～36.5cm		
張り出し部	位置：東壁北寄り	形状：方形状	覆土	5層	ルム粒の混入が認められるが、褐色土主体である。	
長さ	84cm	幅160cm	奥さ20.5cm			
柱穴	—					
出土遺物	染付、白磁、青磁、内耳土器、粉播臼、石擂鉢					
備考	床面は池山ルム層をそのまま利用し、平坦である。特に堅固とは言えない。					



- 1層 褐色土 炭化物と焼けた粘土塊を含む。色調はやや暗い。
 2層 褐色土 白色ロームが多量に混って堅くしまる。上層部に板状の炭化物の塊がみられる。
 3層 褐色土 1層と似る。

0 (1:40) 1m

第9図 Ta 2号竖穴遺構実測図



- 1層 褐色土 白色ローム粒子を少量とバーミを含む。きめは粗い。
 2層 褐色土 白色ローム粒子を多量に含む。きめは細い。
 3層 褐色土 白色ローム粒子を少量、炭化物を若干含む。きめは細かい。

0 (1:40) 1m

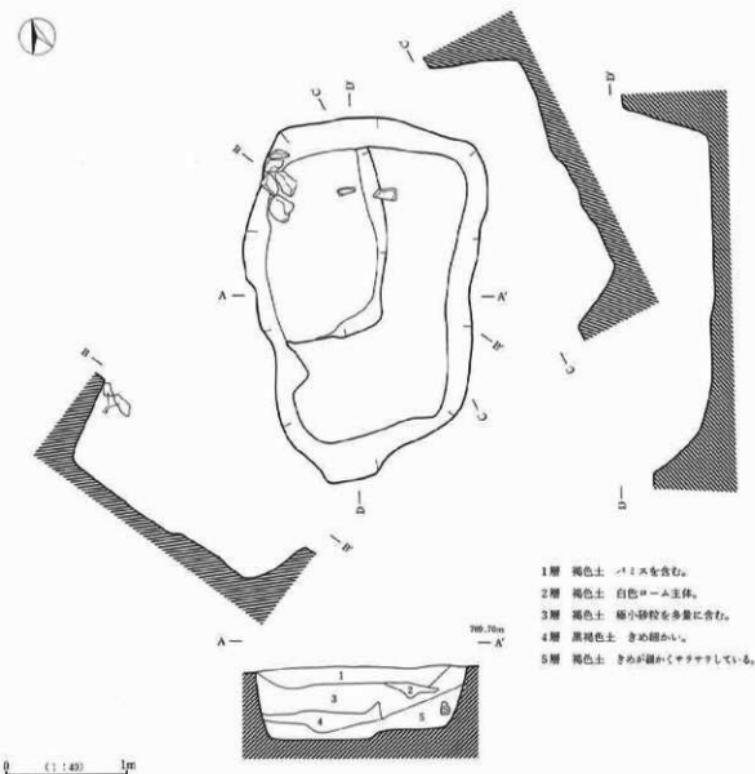
第10図 Ta 3号竖穴遺構実測図

第6表 Ta 2号竖穴遺構計測・説明表

因版番号	検出区 け-4・5グリット				平面形態	不整長方形	長軸方向
	D8に破壊され、Ta13・14を破壊する。						
壁長	北壁	東壁	南壁	西壁	面積		
壁高	16.3cm	16.8cm	15.4cm	18.6cm	2.4m ² (0.7坪)		
張り出し部	—	形狀	—	覆土	4層 褐色土主体。		
長さ	—	幅	—	深さ	—		
柱穴	北東コーナーより1個検出。						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、茶臼						
備考	床面は中央部が凹み、堅固とは言い難い。						

第7表 Ta 3号竖穴遺構計測・説明表

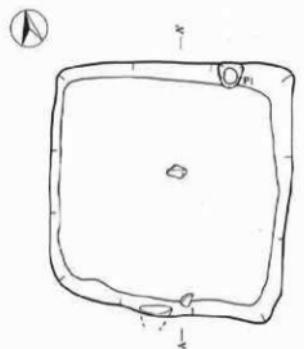
因版番号	4-2	検出区 か-1・2、き-1・2グリット	平面形態				方形
			北壁	東壁	南壁	西壁	
重複状態	Ta31を破壊する。						
壁長	175cm	180cm	152cm	148cm			
壁高	18.0cm	19.0~23.5cm	36.5~53.0cm	32.5~39.0cm	1.7m ² (0.5坪)		N-22°-E
張り出し部	北壁中央	形狀	南円状	覆土	3層 褐色土主体だが白色ロームの侵入がみられる。		
長さ	38cm	幅	30cm	深さ	25.0cm		
柱穴	—						
出土遺物	—						
備考	床面は平坦であるが、堅固とは言い難い。						



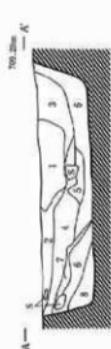
第11図 Ta 4号竖穴追跡穴測面

第8表 Ta 4号竖穴追跡構造計測・説明表

因版番号	5-3-4	検出区	さ-4+5グリット	平面形態	不整長方形		
重復状態	H4を破壊する。	北 墓 備	東 墓 備	南 墓 備	西 墓 備	面 積	長 軸 方 向
壁 高	196cm	242cm	150cm	300cm	3.2m ² (1.0坪)		
壁 高	45.5~68.0cm	47.5~55.0cm	38.5~45.5cm	38.5~62.5cm			N-18.5°-E
張り出し部	——	形状	——	5層	褐色土が主体であるが、白色ロームが大きく割り込む。		
長さ	—	幅	—	面積			
柱 穴	—						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、銭貨（差97枚、永泰通宝・宣泰通宝他）						
備 考	床面は東半分と南半分が高く、柔かい。北西部は長方形状に凹む。						



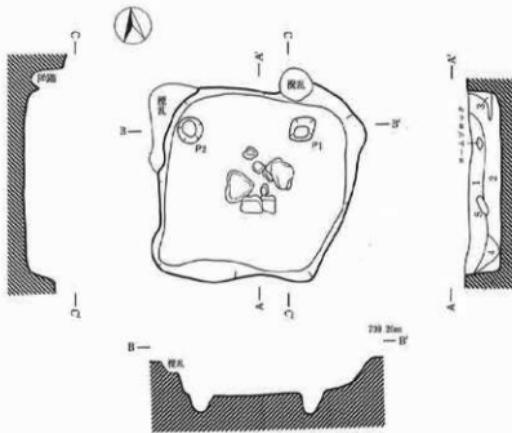
- 1層 褐色土 白色ロームブロックが多量に混じる。
- 2層 褐色土 白色ローム少量含む。
- 3層 褐色土 パイクスを少量含む。炭化物も含む。
- 4層 黄褐色土 黄色ロームブロック主体。褐色土が混じる。
- 5層 黒褐色土 きめ細かくしまったがある。
- 6層 褐色土 白色ロームが混じる。
- 7層 淡褐色土 小パイクスを含む。
- 8層 褐色土 きめ細かくサラサリしている。



第12図 Ta 5号窯穴造構実測図

開口部番号	4-3、5-I
検出区	寸-6グリット
重複状態	単独
平面形態	方形
壁 長	壁 高
北壁 傾	190cm
東壁 傾	190cm
南壁 傾	197cm
西壁 傾	210cm
面積	3.0m ² (0.9坪)
長軸方向	N-15° E
張り出し高	—
位置	—
長さ	—
幅	—
深さ	—
覆 土	8層 褐色土とロームが相互に入り組む。
柱 穴	北壁より1箇検出。
出土遺物	瀬戸灰釉、内耳土器、鉄釘
備 考	床面は極平坦であるが、堅固とは言ひ難い。

第12図 Ta 5号窯穴造構実測図



- 1層 褐色土 パイクスを含む。
- 2層 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3層 褐色土 きめ細かく純度が高い。
- 4層 黑褐色土 ローム粒を多量に含む。

0 (1:40) 1m

第13図 Ta 6号窯穴造構実測図

第10表 Ta.6号竪穴遺構計測・説明表

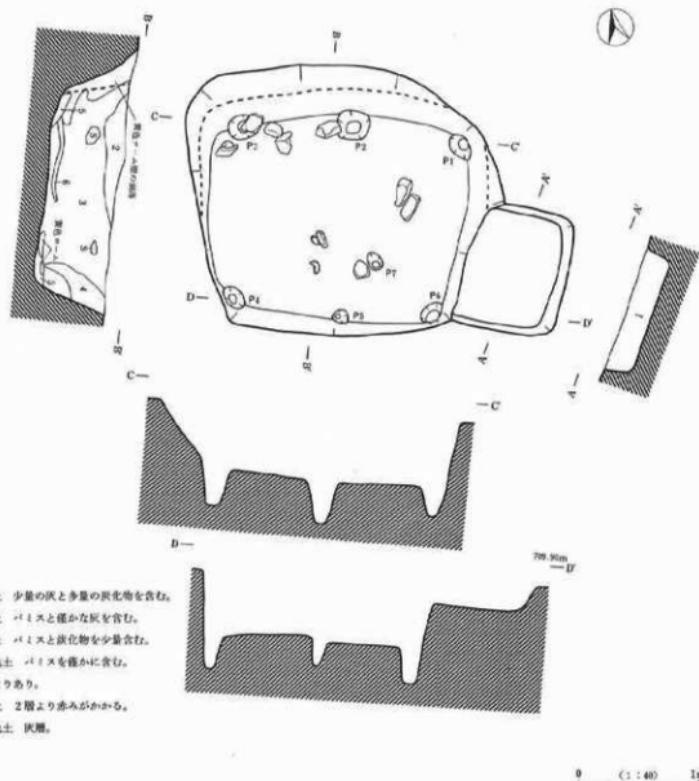
測定番号 4-3、5-2		検出区 す-5グリット				平面形状	面積	長軸方向
重複状態		単独	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		
壁 長	132cm		130cm		172cm		151cm	
壁 高	19.0~26.5cm		24.5~29.5cm		24.0~29.0cm		21.0~25.0cm	
張り出し層	—	形状	—	—	—	—	1.9m ² (0.6坪)	N-21° E
長さ	—	幅	—	深さ	—	—	—	—
柱 穴	北東、北西コーナーに各1個ずつある。							
出土遺物	美濃灰釉							
備 考	床面は極平坦である。							

第11表 Ta.7号竪穴遺構計測・説明表

測定番号 6-1		検出区 か-5・6グリット				平面形状	長方形	北 壁 高
重複状態		H17、F3を破壊する。						
壁 長	156cm		36.0~39.0cm					
東 壁 高	156cm		22.0~34.0cm					
南 壁 高	169cm		23.0~27.0cm					
西 壁 高	189cm		30.0~32.0cm					
面 積	2.5m ² (0.6坪)		長軸方向	N-17° E				
位置	—	形状	—	—				
長さ	—	幅	—	深さ	—			
覆 土	6層 ローム・褐色土・黒褐色土が入り組んだ状況を呈する。							
柱 穴	—							
	内耳土器、鉄釘、米糀通宝							
出土遺物								
備 考	床面中央が、ややふくらむがおおむね平坦である。							

第12表 Ta.8号竪穴遺構計測・説明表

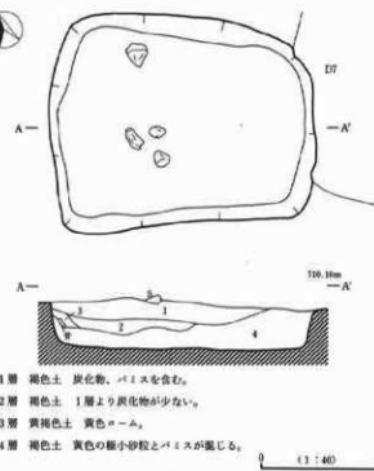
測定番号 6-2・3・4		検出区 <-6・7グリット				平面形状	長方形	
重複状態		H15、Ta52、D42を破壊する。						
壁 長	290cm		221cm		213cm		231cm	
壁 高	52.0~65.0cm		29.0~57.0cm		47.0~56.0cm		50.5~63.5cm	
張り出し層	東壁南寄り	形状	方形状	覆 土	6層 褐色土主体で、灰・炭化物の混入が著しい。最下層に帯状の灰		3.2m ² (1.0坪)	N-77° W
長さ	86cm	幅	104cm	深さ	28.5cm			
柱 穴	遺構四隅の縦直下に各1個、南・北壁の中央直下に各1個、計6個認められる。							
出土遺物	常滑、内耳土器、土師質土器、移播臼、茶臼、鉄釘、坩埚							
備 考	床面はおおむね平坦である。							



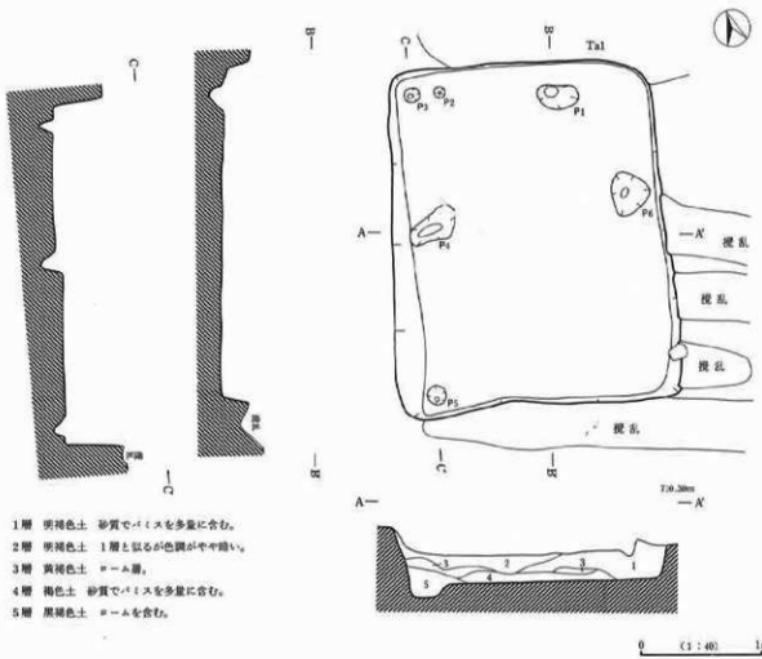
第15図 Ta 8号窓穴遺構実測図

第13表 Ta 9号窓穴遺構計測・説明表

測定番号		検出区 き-6 グリット				平面形態	不整長方形
直復状態		北側	東側	南側	西側		
壁長	205cm	155cm	208cm	185cm			
壁高	35.0~41.0cm	36.0~35.0cm	27.0~36.0cm	30.0~34.0cm		2.6af (0.8坪)	N-72°-W
張り出し部	—	形状	—	—	—	4層 棕褐色土が主体だが、炭化物が混入し、ロームがブロック状にはいる。	
柱穴	—	—	—	—	—		
出土遺物	内耳土器、土師質土器、水素通宝						
備考	床面はおむね平坦である。						



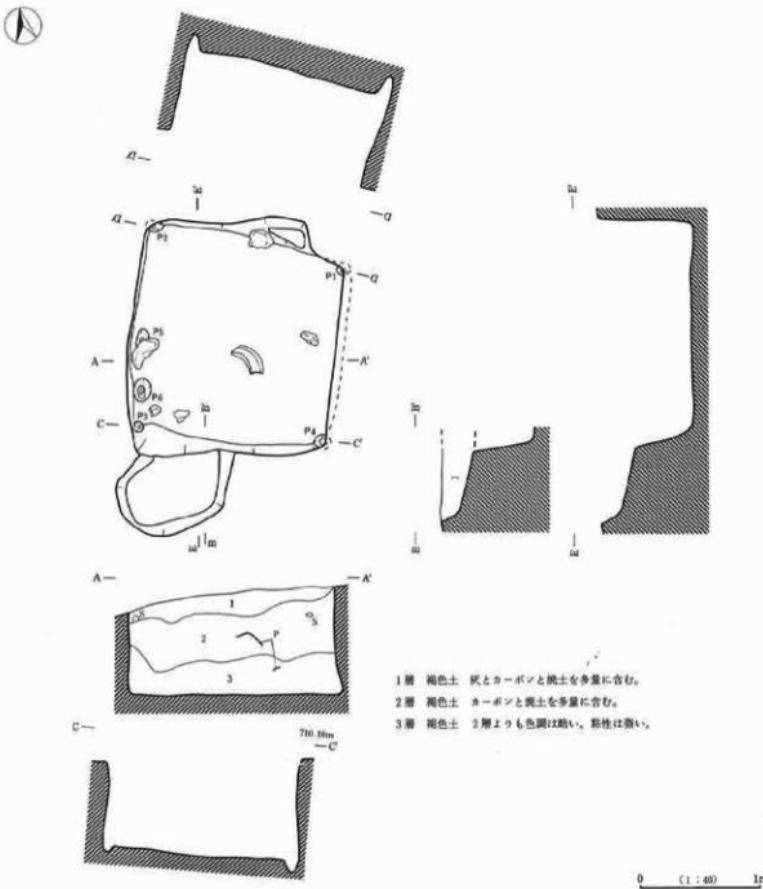
第16図 Ta 9 号整穴遺構実測図



第17図 Ta 10 号整穴遺構実測図

第14表 Ta10号竪穴遺構計測・説明表

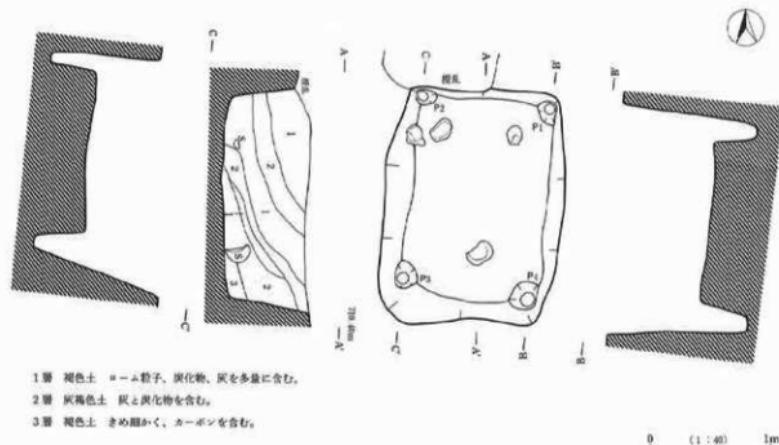
因版番号	7-2・3	検出区	き-5グリット	平面形態	長方形						
重複状態	H3、D287を破壊し、Ta1、D157に破壊される。										
北 壁 高	217cm	東 壁 高	276cm	南 壁 高	241cm	西 壁 高	291cm	面 積	5.5m ² (1.7坪)	長 軸 方向	N-15°-E
壁 高	20.0~44.0cm		37.0~41.0cm		21.0~47.0cm		43.0~51.0cm				
築り出し部	位置	形状	—	位置	—	土	5層	砂質の明褐色土と褐色土が主で、ローム層が入り込む。			
長さ	—	幅	—	度さ	—						
柱 六	北西コーナー直下に2個、南西コーナー下に1個、東・西壁の中央下に各1個、北壁下中央東寄りに1個、計6個検出。										
出土遺物	内耳土器、土師質土器										
備 考	床面はおおむねフラットである。										



第15図 Ta11号竪穴遺構実測図

第15表 Ta11号壁穴遺構計測・説明表

測定番号	B-I-2	検出区	C-5 グリット	平面形態	長軸方向						
重複状態	H5.、D44・126を破壊する。										
北 壁 高	175cm	東 壁 高	177cm	南 壁 高	174cm	西 壁 高	155cm	面 積	2.8m ² (0.8坪)	長 軸 方向	N-19°-E
壁 高	76.0~79.0cm	東 壁 高	83.0~89.0cm	南 壁 高	64.0~80.0cm	西 壁 高	68.0~70.0cm				
裏り出し高	直置 長さ 高さ	雨蓋西寄り 形状 長さ	86cm 幅 厚さ	円形状	複土	3層	褐色土主体で、灰・カーボン・燒土を多量に含む。				
柱 穴											
四隅に各1個ずつ整然と並ぶ。											
出土遺物	白磁、中津川、瓦器、内耳土器、土師質土器、粉拂臼、磨石、砥石、鐵製品										
備考	床面はおおむね平坦である。										

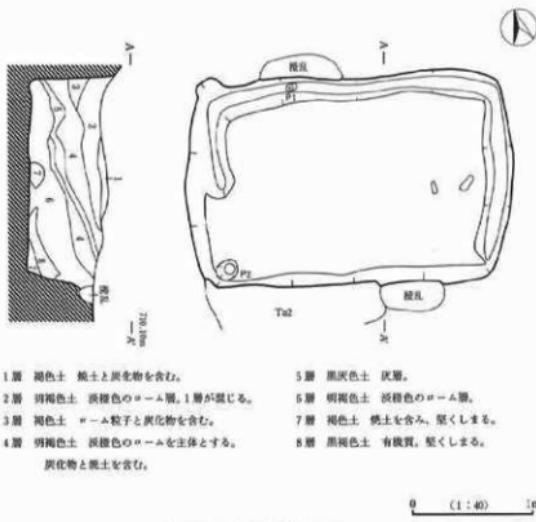


第19図 Ta12号壁穴遺構実測図

0 (1:40) 1m

第16表 Ta12号壁穴遺構計測・説明表

測定番号	—	検出区	B-6、C-5-6 グリット	平面形態	長方形						
重複状態	単独										
北 壁 高	127cm	東 壁 高	191cm	南 壁 高	127cm	西 壁 高	201cm	面 積	1.8m ² (0.5坪)	長 軸 方向	N-6°-E
壁 高	53.0~78.0cm	東 壁 高	74.0~85.0cm	南 壁 高	66.0~70.0cm	西 壁 高	60.0~72.0cm				
裏り出し高	—	形状	—	裏 土	3層	褐色土と灰がサンドイッチ状に入り組む。雨から北へレベルを低下させる一方からの堆積状況がみられる。					
裏り出し長さ	—	幅	—	厚さ	—						
柱 穴	遺構の四隅に各1個、整然と並ぶ。										
出土遺物	美濃鉄袖、土師質土器、粉拂臼、石櫛鉢										
備考	床面はおおむね平坦である。										



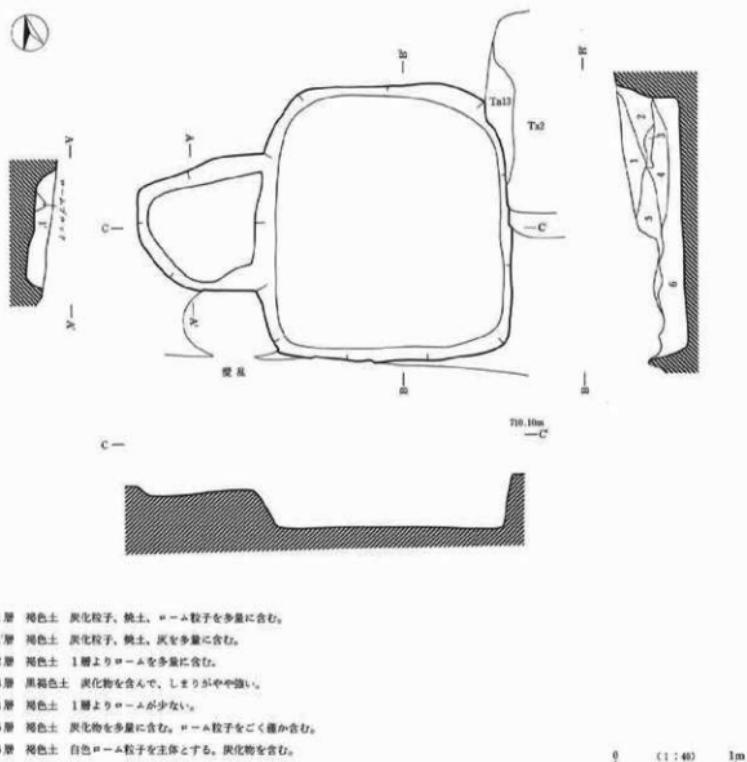
第17图 Ta13号竪穴道構造剖面图

第17表 Ta13号竪穴道構造剖面图・説明表

区段番号	8-3, 9-1	検出区	8-3・4, L-3・4グリット			
重複状態	Ta 2, D18に破壊され、Ta14に後継する。			平面形態	長方形	
壁 長	250cm	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面 横
壁 高	67.0~70.0cm	170cm	61.0~64.0cm	242cm	40.0~57.0cm	170cm
張り出し部	位置	——	形状	——	土	8層 褐色土・ローム・灰・黒褐色土がサンドイッチ状に堆積し、南から北へレベルを下げて方向からの流れ込みがみられる。
柱 穴	北壁、南西コーナーに1個ずつある。					
出土遺物	常滑、内耳土器、土師質土器					
備考	北・東壁下及び、西壁下の北側まで周溝がある。					

第18表 Ta14号竪穴道構造剖面图・説明表

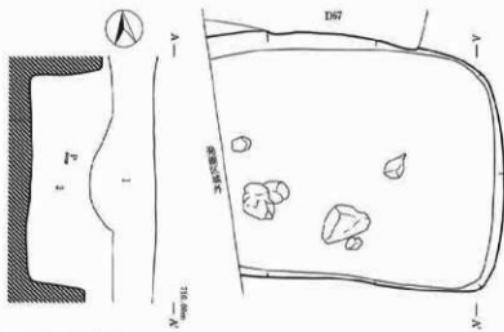
区段番号	——	検出区	け-5グリット			
重複状態	Ta 2・13によって破壊される。			平面形態	方形	
壁 長	260cm	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面 横
壁 高	45.5~53.5cm	20.5~43.0cm	226cm	17.0~30.5cm	204cm	224cm
張り出し部	位置	西壁中央	形状	椭円状	土	6層 褐色土とローム層が含まれる土が入り組んでいる。
柱 穴	長さ	98cm	幅	108cm	深さ	28.0cm
出土遺物	中津川、内耳土器、土師質土器、茶臼					
備考	床面は極平坦である。					



第21図 Ta14号窓穴構造実測図

第19表 Ta15号窓穴構造計測・説明表

調査番号	検出区			平面形態			長軸方向			
	D67に破壊され、H2を破壊する。									
重複状態	北壁面	東壁側	南壁側	西壁側	面積					
	C240cm	190cm	(200)cm	—	—					
壁高	36.0~59.0cm	22.0~46.0cm	41.0~46.0cm	—	N-97°-E					
垂り出し部	—	形狀	—	壁土	1層 黄色のロームと褐色土が混ざっている。					
長さ	—	幅	—	深さ						
柱穴	—									
出土遺物	内耳土器、土師質土器									
備考	床面はおおむね平坦である。									

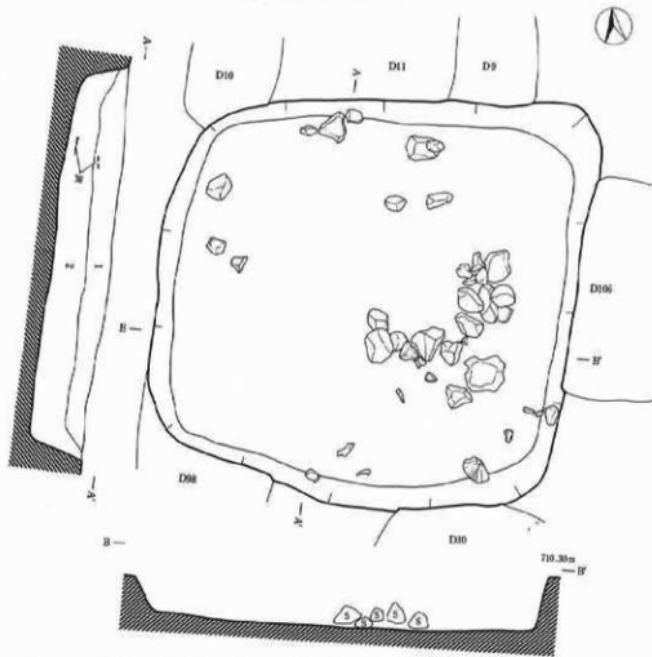


1層 稲作土 基本層序 I。

2層 黄褐色土 黄褐色ロームと褐色土が混じっている。

0 (1:40) 1m

第22図 Ta15号竖穴遺構実測図



1層 褐色土 淡褐色のロームを含み、バナナサしている。

淡褐色のロームを含み、バナナサしている。

2層 明褐色土 淡褐色のロームを少量含む。粒子は粗く粘性は弱い。淡褐色のロームを含み、バ

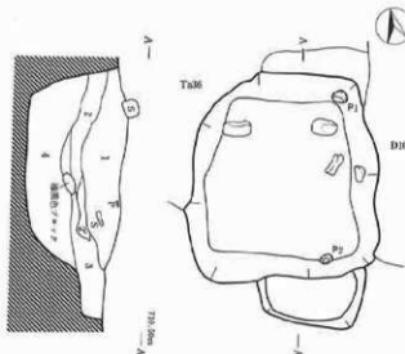
ナナサしている。

0 (1:40) 1m

第23図 Ta16号竖穴遺構実測図

第20表 Ta16号竪穴造構計測・説明表

面積番号	9-2-3	検出区	か-4-5、き-4-5グリット			
重複状態	D9-10-11-30-98-106-108-184に破壊されD287を破壊する。			平面形状	方形	
壁 長	北 壁 側	東 壁 側	南 壁 側	西 壁 側	面 積	長 軸 方 向
壁 高	363cm	353cm	332cm	318cm	8.6m ² (2.6坪)	N-83° W
盛り出し部	27.5~60.0cm	37.0~53.5cm	3.5~53.5cm	37.0~45.5cm		
位置	——	形状	——	層 土	2層褐色土を基調としてムームが含まれる。	
長さ	—	幅	—	厚さ	—	
柱 穴	—					
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉墨臼、茶臼					
備考	床面はおむね平直。					



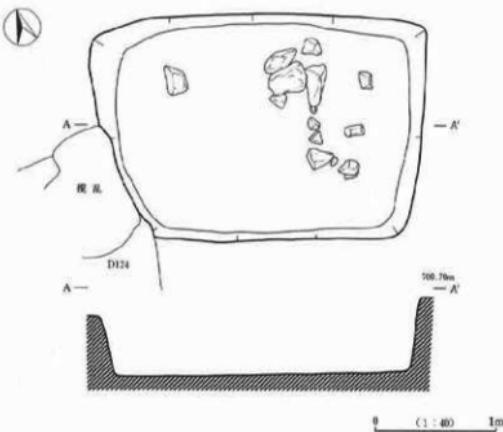
1層 黒褐色土。灰を少量、炭化粒子を多量に含む。粒子の細かい褐色ルーム、純土が1~2cmの斑点状に混入する。粒子が細かくしまりがない。
 2層 黄褐色土。炭化粒子を微量含み、黄色ルーム主体で褐色が混じる。粒子は細かく粘性は弱い。
 3層 黄褐色土。炭化粒子を微量含み、黄色ルーム主体。粒子は細かく粘性は弱い。
 4層 褐色土。炭化粒子、少量の黄色ルームを含む。直径1~2cmのバースおよび灰を少量含む。純土が5~6mmの大斑点状に混入する。

0 (1:40) 1m

第24図 Ta17号竪穴造構実測図

第21表 Ta17号竪穴造構計測・説明表

面積番号	10-1	検出区	か-5グリット			
重複状態	Ta36, D10に破壊される。			平面形状	方形	
壁 長	北 壁 側	東 壁 側	南 壁 側	西 壁 側	面 積	
壁 高	150cm	162cm	151cm	189cm	1.4m ² (0.4坪)	N-14° E
盛り出し部	22.0~73.0cm	26.0~53.0cm	29.0~61.0cm	27.0~63.0cm		
位置	南北壁寄り	形状	方形状	層 土	4層褐色土とルームが入り組んだ状態である。	
長さ	39cm	幅	84cm	厚さ	40.0cm	
柱 穴	北・南壁に各1個ずつある。					
出土遺物	内耳土器、土師質土器、茶臼					
備考	床面は壁の立ち上がりが低くらべて緩く、床面も中央に向って凹み気味である。					



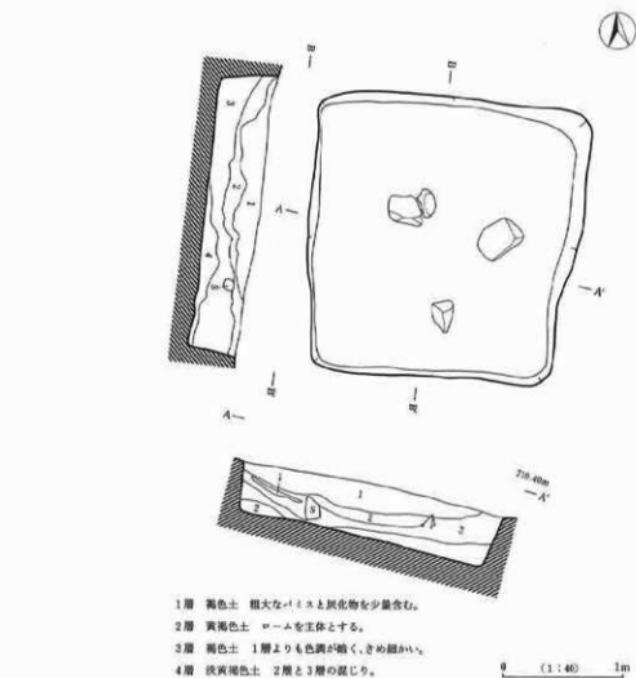
第25図 Ta18号竖穴造構実測図

第22表 Ta18号竖穴造構計測・説明表

国版番号	10-2	検出区	く-8・9グリット	平面形状	長方形
重複状態	D124に破壊される。				
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向
壁長	292cm	186cm	240cm	182cm	3.7m ² (1.1坪)
壁高	61.0~63.0cm	55.0~58.0cm	44.0~52.0cm	4.0~55.0cm	N-72°-W
張り出し部	位置	形状	覆土	—	
	長さ	—	幅	深さ	—
柱穴	—	—			
出土遺物	美濃鉄釉、美濃灰釉、内耳土器、土師質土器				
備考	床面はおおむね平坦である。				

第23表 Ta19号竖穴造構計測・説明表

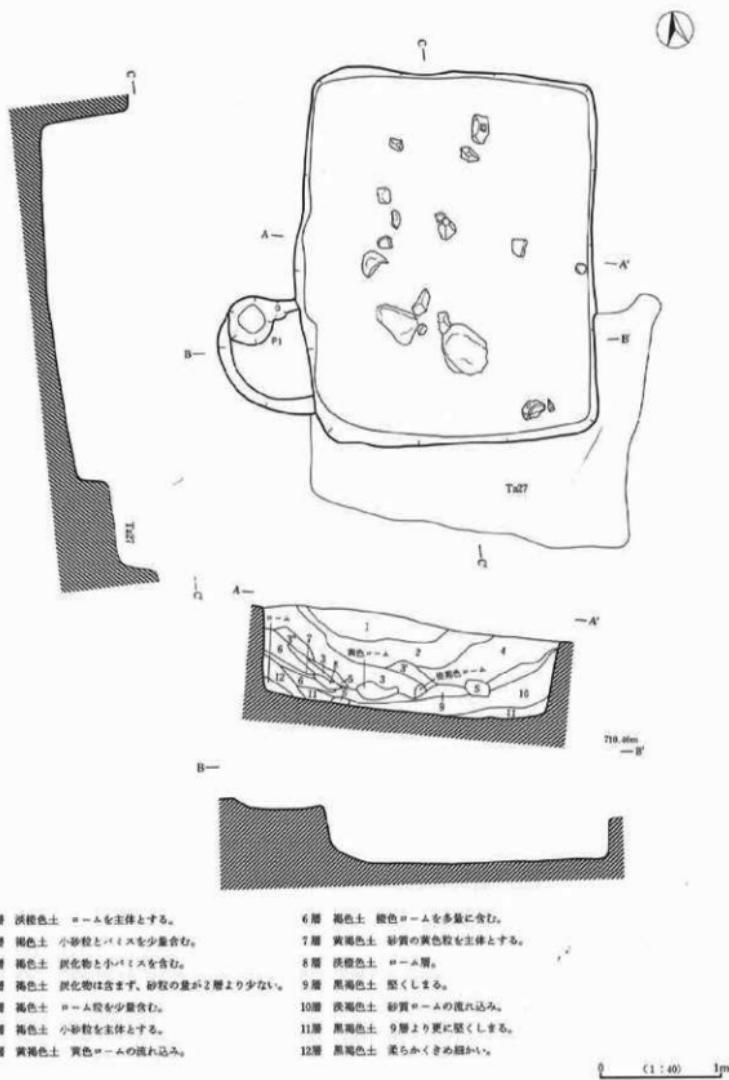
国版番号	11-1	検出区	き-2、く-2グリット	平面形状	方形	
重複状態	Ta21を破壊する。					
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積		
壁長	232cm	228cm	219cm	236cm		
壁高	46.5~49.0cm	37.5~42.0cm	36.5~42.0cm	30.0cm	4.3m ² (1.3坪)	
張り出し部	位置	形状	覆土	4層	褐色土とロームがサンドイッチ状に堆積している。	
	長さ	—	幅	—	深さ	—
柱穴	—	—				
出土遺物	白磁、内耳土器、土師質土器					
備考	床面はおおむね平坦である。					



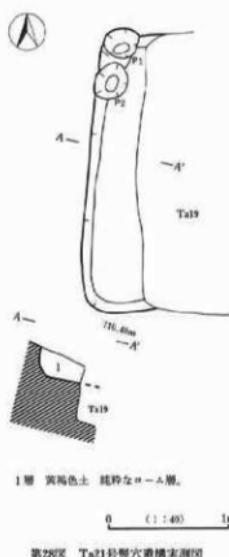
第26図 Ta19号壁穴遺構実測図

第24表 Ta20号壁穴遺構計測・説明表

回収番号	11-2-3	検出区	き-3・4グリット	平面形態	長方形
遺構状態	Ta27に破壊されている。				
北 壁 高	239cm	東 壁 高	298cm	南 壁 高	237cm
壁 高	73.0~79.0cm			西 壁 高	312cm
張り出し部	北壁 西壁南	形状	楕円状		6.5m ² (2.0坪)
長さ	75cm	幅	96cm	裏 土	N-7°-E
				11層 黄褐色土・黒褐色土・ロームが組かく入り組み、サンドイッチ状に堆積している。	
柱 穴	—				
出土遺物	美濃鉄瓶、備前、内耳土器、土師質土器、茶臼				
備 考	床面はおおむね平坦である。				



第27図 Ta20号竖穴式墓実測図



第28図 Ta21号壁穴遺構実測図

第25表 Ta21号壁穴遺構計測・説明表

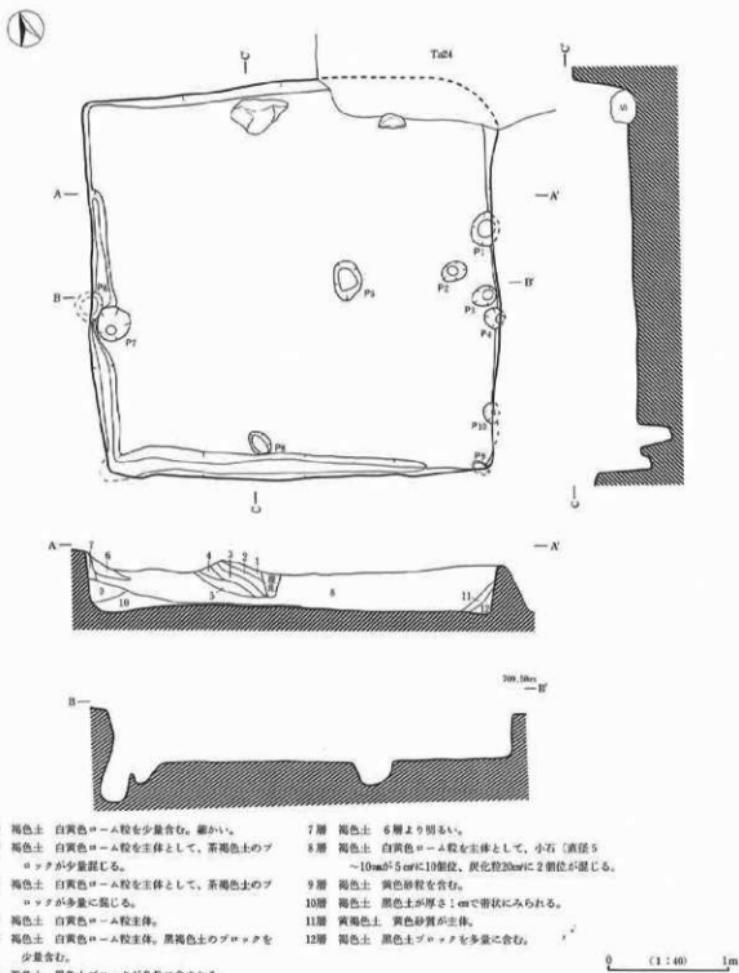
国版番号		11-1
検出区		き-2、く-2グリット
重複状態		Ta19に破壊されている。
平面形態		—
面長		面高
北壁側	—	17.0cm
東壁側	—	—
南壁側	—	16.0cm
西壁側	23.2cm	19.5-25.5cm
面積		長軸方向 N-5° E
位置	—	形状
張り出し部	長さ	幅
裏	—	深さ
覆土		1層 ロームのみ。
柱穴		北西コーナーに2個認められる。
出土遺物		土師質土器
備考		床面は平坦と考えられる。

第26表 Ta22号壁穴遺構計測・説明表

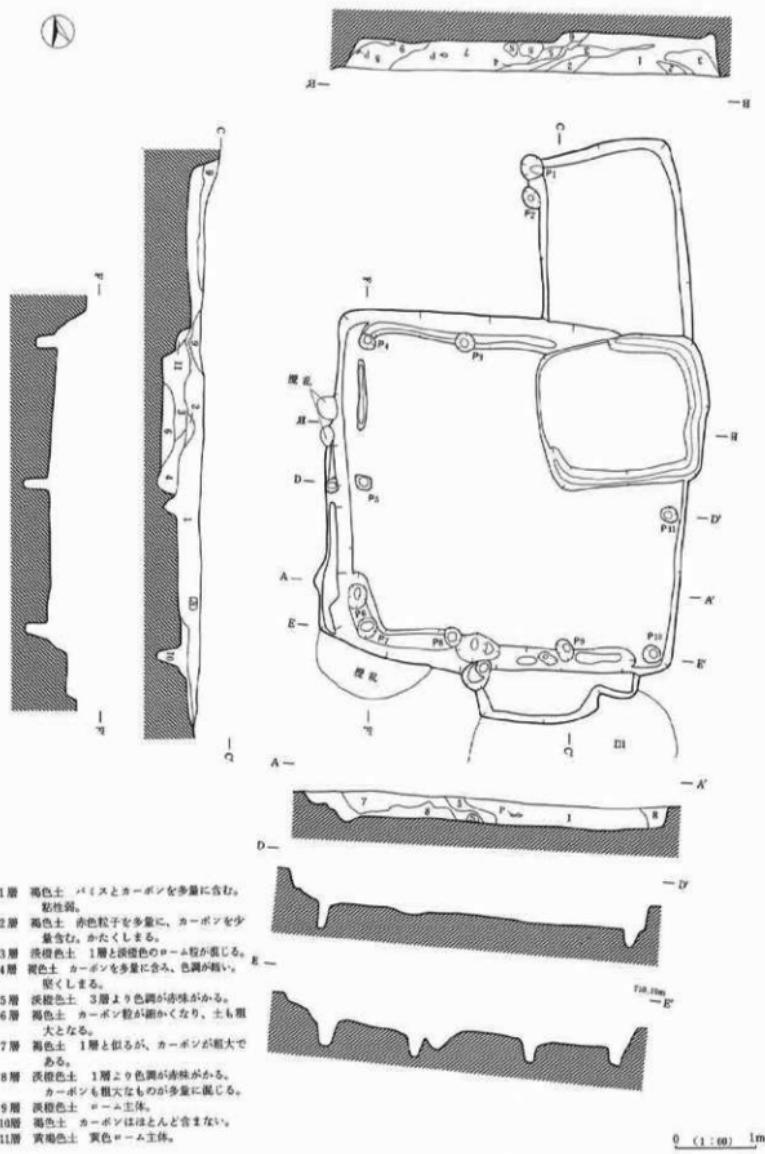
国版番号		12-1	検出区	き-2グリット	平面形態	方形
重複状態		Ta24に破壊される。				
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	348cm	334cm	334cm	310cm	9.1m ² (2.8坪)	N-72.5°-W
壁高	35.5-46.0cm	32.0-57.5cm	15.5-30.0cm	35.5-57.5cm		
位置	—	—	—	裏土	12層、おおむねロームを含んだ褐色土であるが、純粋なロームがあり込んでいる。	
張り出し部	—	形状	—	長さ	—	
柱穴	—	—	—	幅	—	深さ
出土遺物	美濃鉄袖、内耳土器、土師質土器					
備考	床面はおおむね平坦である。					

第27表 Ta23号壁穴遺構計測・説明表

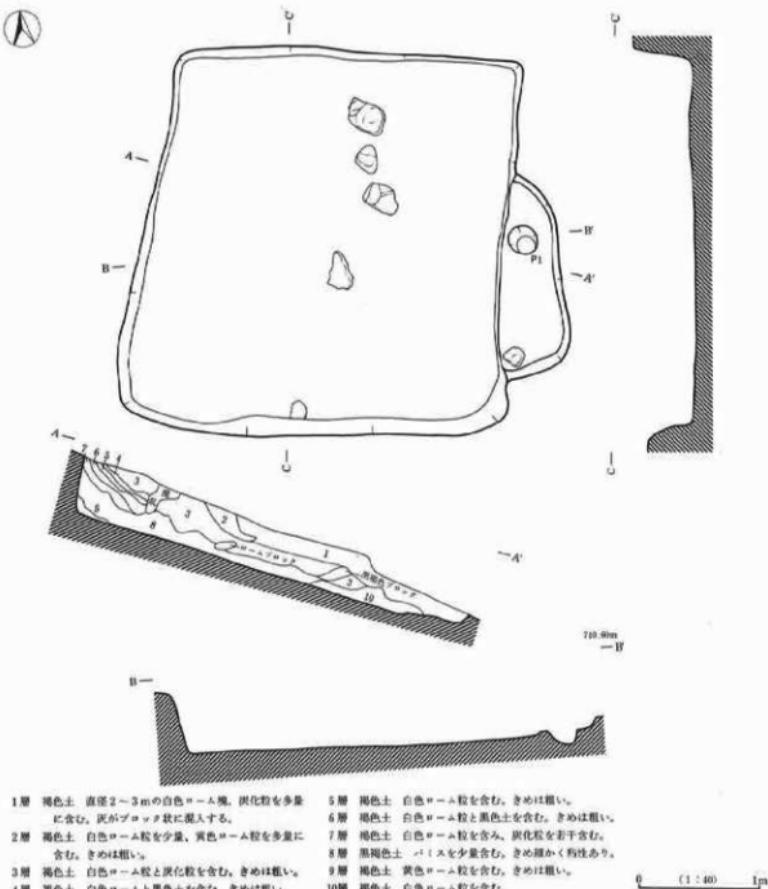
国版番号		12-2・3・4、13-1	検出区	け-3・4、こ-3・4グリット	平面形態	方形
重複状態		D1に破壊され、D96・188を破壊している。				
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側		面積	長軸方向
壁長	450cm	427cm	436cm	424cm	16.2m ² (4.9坪)	N-82°-W
壁高	30.0-39.0cm	18.0-47.0cm	14.0-32.0cm	27.0-40.0cm		
位置	北壁東側	形状	夷力形状	裏土	11層 褐色土主体だが、白色ロームを含む層が多い。	
張り出し部	—	—	—	長さ	—	
柱穴	北東を除く三隅に各1個ずつ、東・西壁下中央に各1個、他に北壁下に1個、西壁下に1個、南壁下に2個、計11個、比較的規則性をもって配されている。					
出土遺物	常滑、中津川、内耳土器、土師質土器、系豆、鏡、砥石台、石器、鉄釘、刀子、石器、銅製品、元禄通宝					
備考	床面は北東コーナー部に一辺2m前後の方形の凹みがあり、周溝を有して、底面はフラットである。他の床面もおおむね平坦である。周溝は、北・西・南壁下より検出されている。他、南壁東寄りも不整形の張り出し部と考えられる。					



第29図 Ta22号懸穴遺構実測図



第30図 Ta23号竪穴遺構実測図



1層 褐色土、直徑2~3mの白色ローム塊、炭化粒を多量に含む。泥がブロック状に混入する。

2層 褐色土、白色ローム粒を少量、黄色ローム粒を多量に含む。きめは粗い。

3層 褐色土、白色ローム粒と炭化粒を含む。きめは粗い。

4層 褐色土、白色ロームと黒色土を含む。きめは粗い。

5層 褐色土、白色ローム粒を含む。きめは粗い。

6層 褐色土、白色ローム粒と黒色土を含む。きめは粗い。

7層 褐色土、白色ローム粒を含み、炭化粒を若干含む。

8層 黒褐色土、 \pm スを少量含む。きめ細かく粘性あり。

9層 褐色土、黄色ローム粒を含む。きめは粗い。

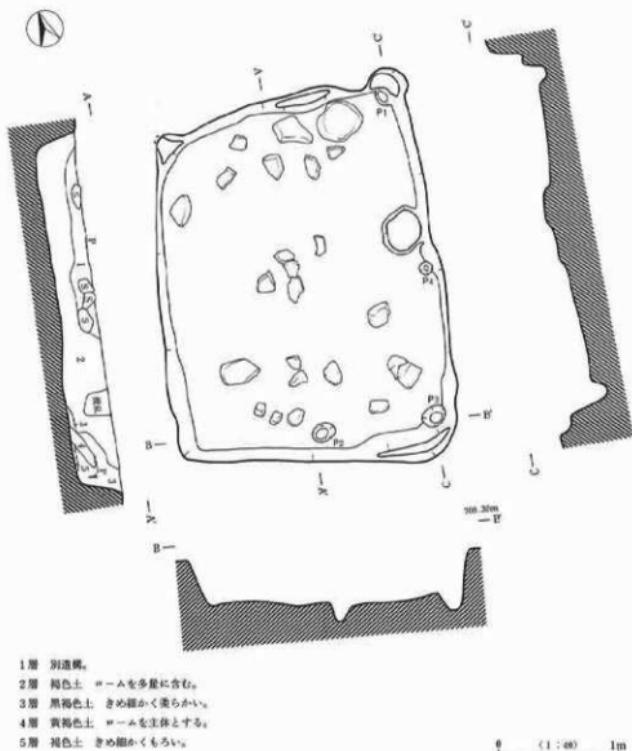
10層 褐色土、白色ローム粒を含む。

6 (1:40) 1m

第31図 Ta24号脣穴造構実測図

第28表 Ta24号脣穴造構計測・説明表

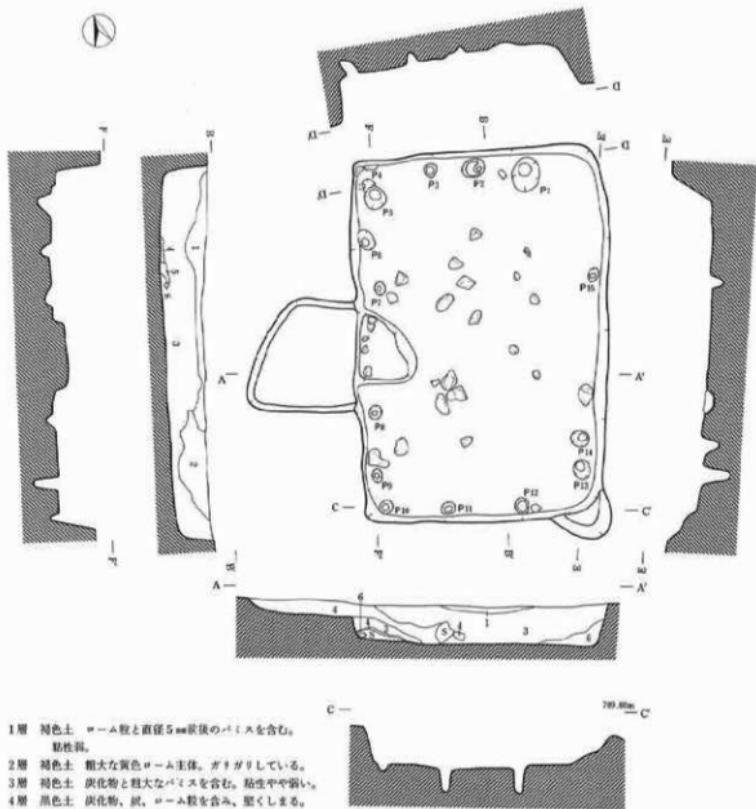
調査番号	13-2	突出部	か-1・2、き-1・2グリット		平面形状	不整形	
重複状態	Ta37・D33に破壊され、Ta22を破壊する。						
壁長	北壁側 286cm	東壁側 310cm	南壁側 336cm	西壁側 325cm	面積	長軸方向	
壁高	37.0~46.0cm	9.0~18.0cm	18.0~37.0cm	34.5~46.5cm	8.4m ² (2.5坪)	N-13°-W	
張り出し部	位置 東壁兩寄り 長さ 54cm	幅 154cm 深さ 14.0cm	形状 不整形半楕円状	覆土	10層 褐色土主体で、各層はほとんどに白色ロームが含まれる。		
柱穴	張り出し部に1個みられる。						
出土遺物	内耳土器、土筋質土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						



第32-2 Ta25号窯穴遺構素描図

第32表 Ta25号窯穴遺構計測・説明表

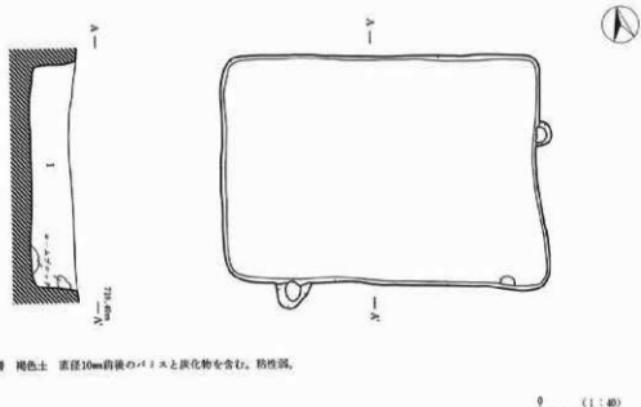
固版番号	14-1・2	検出区	寸-4、セ-4グリット	平面形態	長方形
重複状態	D5に破壊され、D4・5を破壊している。				
北 墓 個	216cm	東 墓 個	337cm	面 積	
東 墓 個		南 墓 個	247cm	長 軸 方 向	
西 墓 個		西 墓 個	273cm		
墓 高	31.0~45.0cm	形 状	17.0~35.0cm	5.6m ² (1.7坪)	N-15°-E
張り出し部	—	位置	—		
高さ	—	形 状	—		
柱 穴	北東・南東隅に各1個、東・南壁の中央下に各1個みられる。	覆 土	5層 褐色土が主体であるが、ヨームが入り込む。		
出土遺物	内耳土器、土師質土器、鷺羽口、土板、粉拂臼				
備 考	床面はやや凹凸がみられる。				



第33図 Ta26分岐穴造構造測図

第30表 Ta26号窯六造構計測・説明表

国版番号 15-1		検出区 合-4グリット		平面形状	長方形
重複状態	D24に破壊されている。	北壁側	東壁側		
壁 長	31.8cm	45.0cm	29.2cm	44.2cm	12.7m ² (3.8坪)
壁 高	51.0~57.5cm	44.0~52.0cm	34.0~50.5cm	46.0~58.0cm	N-20.5° E
張り出し部	位置 西壁中央	形状 扇状	形状 方形状	覆 土	6層 褐色土主体であるが、ローム層が入り込んでいる。
長さ	123cm	幅 134cm	深さ 22.0cm		
柱 穴	柱下をほぼ全周するように計15個検出されている。 張り出し部下のP7・8は一対となり、入り口に開通すると考えられる。				
出土遺物	美濃鉄物、常滑、内耳土器、土師質土器、鉄釘、灰寧元宝、水楽通宝、元豊通宝				
備 考	床面はほぼ平坦である。張り出し部下の床面上には、径80cm厚さ10~15cm程の堅い堆積がみられ、踏みかためられた様な状況を示している。				



1図 褐色土 直径10mm前後のバースと炭化物を含む。粘性弱。

0 (1:40) 1m

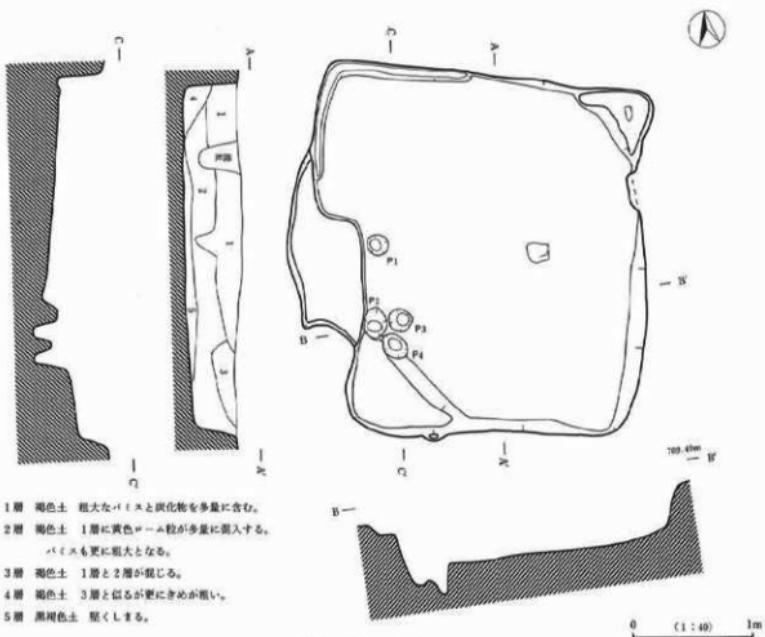
第34図 Ta27号竖穴造構実測図

第31表 Ta27号竖穴造構計測・説明表

測量番号	15-2	検出区	き-3グリット	平面形態	長方形
重複状態	Ta20を破壊する。				
北壁側	266cm	東壁側	195cm	面積	
壁高	34.0~35.0cm	24.0~37.0cm	22.0~37.0cm	4.6m ² (1.4坪)	N-75°-W
張り出し部	—	形状	—	覆土	1層 褐色土のみで構成される。
長さ	—	幅	—	覆土	
柱穴	—				
出土遺物	美濃鉄軸、内耳土器、土師質土器				
備考	床面はほぼ平坦。				

第32表 Ta28号竖穴造構計測・説明表

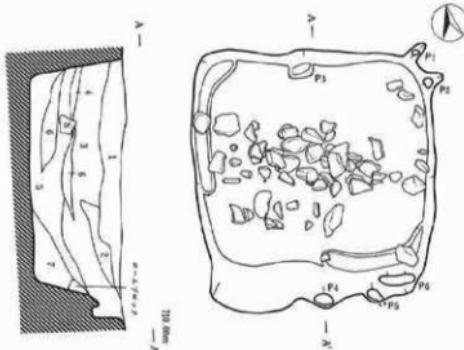
測量番号	16-1	検出区	し-5・6、す-5・6グリット	平面形態	不整形
重複状態	単独				
北壁側	298cm	東壁側	285cm	面積	
壁高	32.5~48.5cm	25.0~42.5cm	13.0~41.0cm	5.9m ² (1.8坪)	N-11°-E
張り出し部	—	形状	—	覆土	5層 褐色土主体。
長さ	—	幅	—	覆土	
柱穴	西壁下に4個ある。				
出土遺物	白磁、内耳土器、土師質土器、刀子、馬寧光宝、祥符元宝				
備考	床面はおおむね平坦である。				



第35図 Taz29号壁穴遺構計測図

第33表 Taz29号壁穴遺構計測・説明表

図版番号	16-2-3	検出区	二-四グリット		平面形態	方形
			北壁側	東壁側		
重複次数	D168を被覆する。					
壁長	192cm	194cm	190cm	208cm	2.9m ² (0.9坪)	N-11°-E
壁高	77cm	73cm	75cm	75cm		
張り出し部	位置 —	形状 —	覆土	7層 褐色土・ローム・灰がサンドイッチ状に堆積する。		
	長さ —	幅 —	深さ —			
柱穴	北東コーナーに2個、南東コーナーに2個、北・南壁中央に各1個ずつ計6個みられる。					
出土遺物	常滑、内耳土器、土師質土器、土板、筋織車、鉄釘、鉄柾、熙寧元宝、坩埚					
備考	床面はおおむね平坦である。					

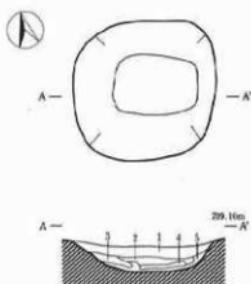


- 1層 棕色土 水化物と極小バーミクを含む。粘性質。
- 2層 黒褐色土 灰層。
- 3層 棕色土 多量の水化物とバーミクおよび少量のロームを含む。
- 4層 黄褐色土 ローム層。
- 5層 棕色土 3層より色調が暗く、きめが細かい。ロームを含まない。
- 6層 棕色土 ローム層。
- 7層 棕色土 极大バーミクと礫を含む。

第36図 Ta29号竪穴遺構実測図

0 (1:40) 1m

第35表 Ta30号竪穴遺構計測・説明表



- 1層 棕色土 灰を含む。
- 2層 深黒色土 岩化質の單一層。
- 3層 棕色土 灰と岩化質を含む。
- 4層 灰白色土 灰の單一層。
- 5層 黑褐色土 多量の岩化質と灰を含む。

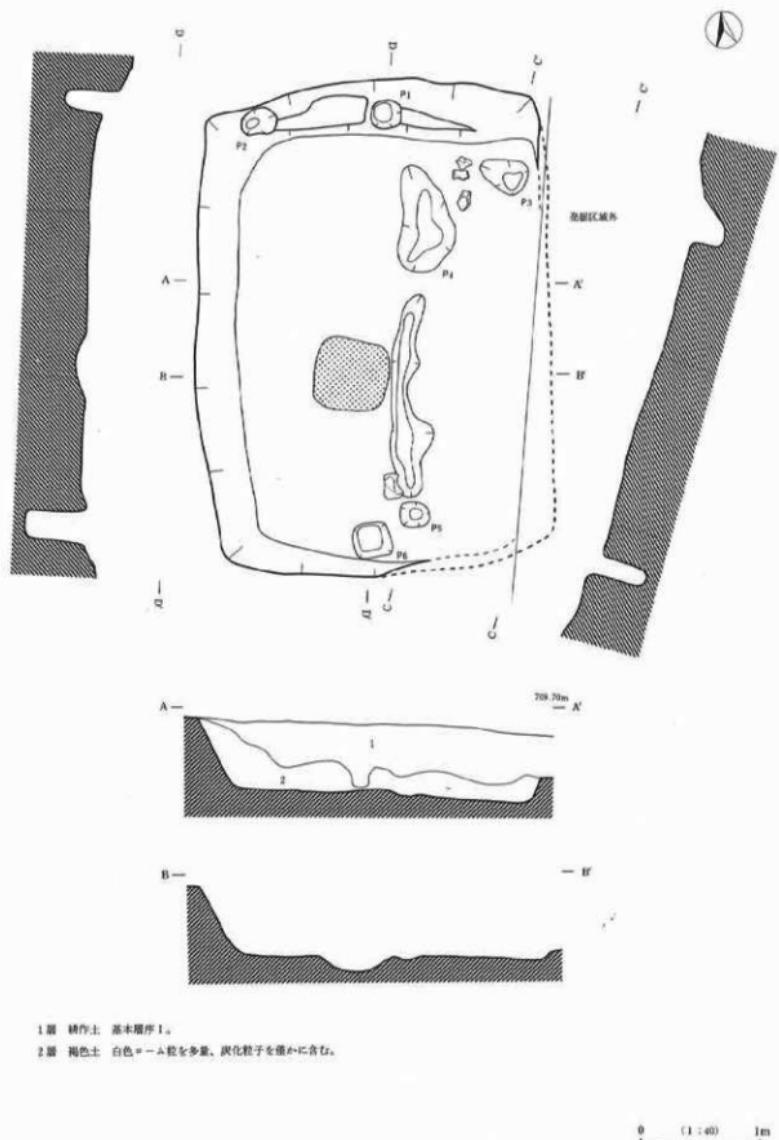
0 (1:20) 9.5m

第37図 Ta30号竪穴遺構炉址実測図

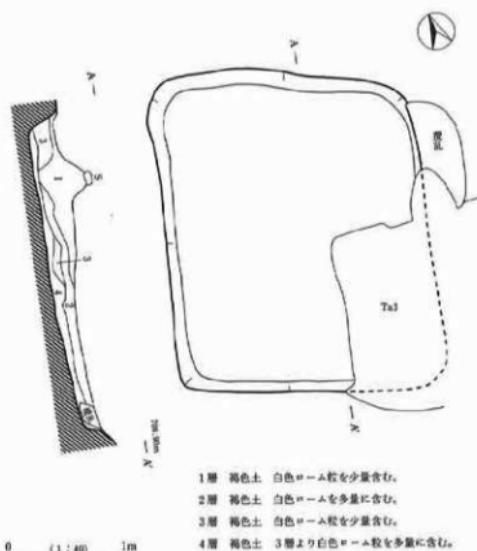
第34表 Ta30号竪穴遺構炉址計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	鍋底形
長軸	134cm	短軸	131cm
覆土	5層	底	13cm

図版番号	17-1
検出区	く-1、け-1 グリット
重複次元	単独
平面形態	長方形
壁 長	壁 高
北壁側 396cm	24.0~44.0cm
東壁側 (405cm)	4.5~8.5cm
南壁側 (265cm)	9.5~52.5cm
西壁側 384cm	52.5~58.5cm
面 積 8.2m ² (2.5坪)	長軸方向 N-12° E
底面 —	形状 —
張り出し部 長さ —	幅 —
底面 —	深さ —
覆 土	1層 白色ロームを含む褐色土。
柱 穴	南・北壁中央に各1個、東北・北西コーナーに各1個、南壁下中央に2個認められる。
出土遺物	内耳土器、土筋質土器、粉拂臼、埴輪
説 考	床面は平坦である。 中央南西寄りに方形の炉が存在する。 また、近接して溝が掘り込まれている。



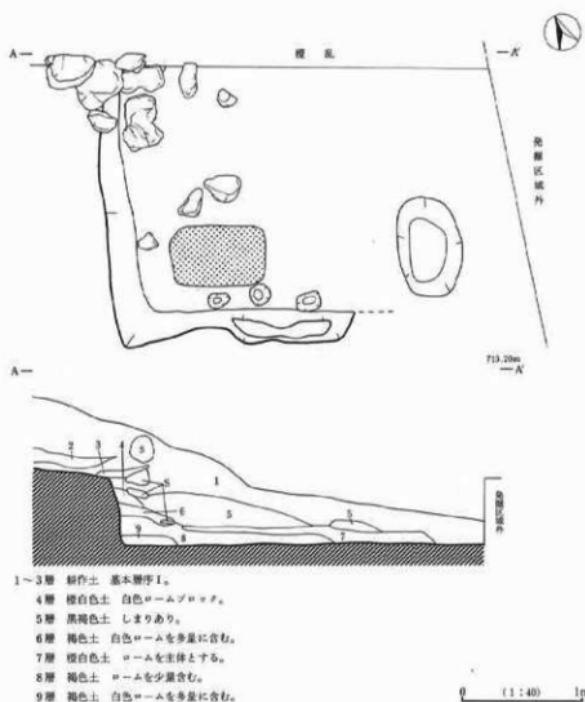
第38図 Ta30号竖穴式墓実測図



第39図 Ta31号竪穴遺構表面図

第36表 Ta31号竪穴遺構計測・説明表

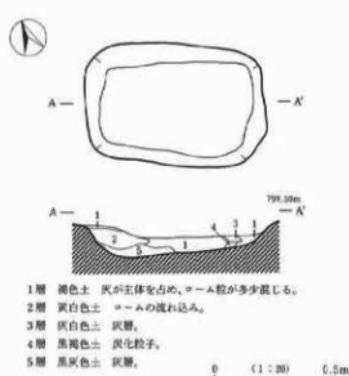
図版番号	4-2	検出区	か-0+1、き-1グリット		平面形態	方形
重複長軸	Ta3に破壊される。					
北 墓 墓	東 墓 墓	南 墓 墓	西 墓 墓	面 積		
壁 高	218cm	—	—	268cm	4.7m ²	N-19°-E
壁 高	15.0~53.0cm	1.5~6.5cm	20.0~28.0cm	9.5~53.5cm	(1.4坪)	
張り出し部	—	形状	—	覆 土	4層 褐色土を基調とし、白色ロームを含む。	
長さ	—	幅	—	覆 土		
柱 穴	—					
出土遺物	粉粂曰					
備 考	床面はおおむね平坦である。					



第37図 Ta32号竪穴遺構実測図

第37表 Ta32号竪穴遺構計測・説明表

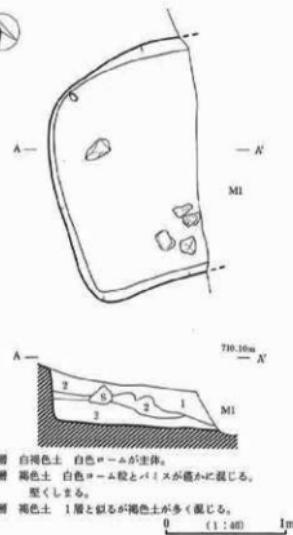
調査番号	17-4	検出区	お~0、か~0 + 1グリット	平面形態	方形		
直轄次第	単鉢	北 壁 側	東 壁 側	南 壁 側	西 壁 面	面積	長 軸 方 向
地 高	—	—	—	—	—	—	—
壁 高	—	—	—	7.5~32.0cm	57.0~83.0cm	—	—
張り出し部	位置	—	形状	—	覆 土	3層 褐色土とローム層が入り組んでいる。	
長さ	—	幅	—	深さ	—		
柱 穴	南壁下に3個、南壁下東寄りに1個検出されている。						
出土遺物	土師質土器、鉄釘、刀子、洪武通宝						
備 考	床面はほぼ平坦である。南北コーナーに方形の凹をもつ。						



第41図 Ta32号窓穴遺構実測図

第38表 Ta32号窓穴遺構実測図・説明表

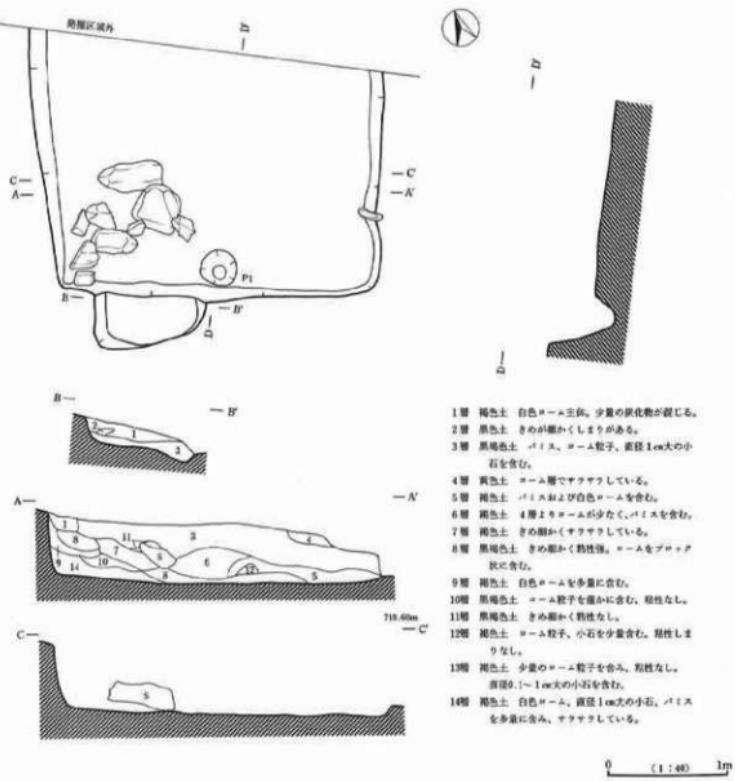
平面形態	長 方 形	断面形状	底 底 形
	長軸 75cm	短軸 50cm	深さ 3 12cm
覆 土	5層、灰主体で1部に炭化粒子が混くみられる。		



第42図 Ta33号窓穴遺構実測図

第39表 Ta33号窓穴遺構計測・説明表

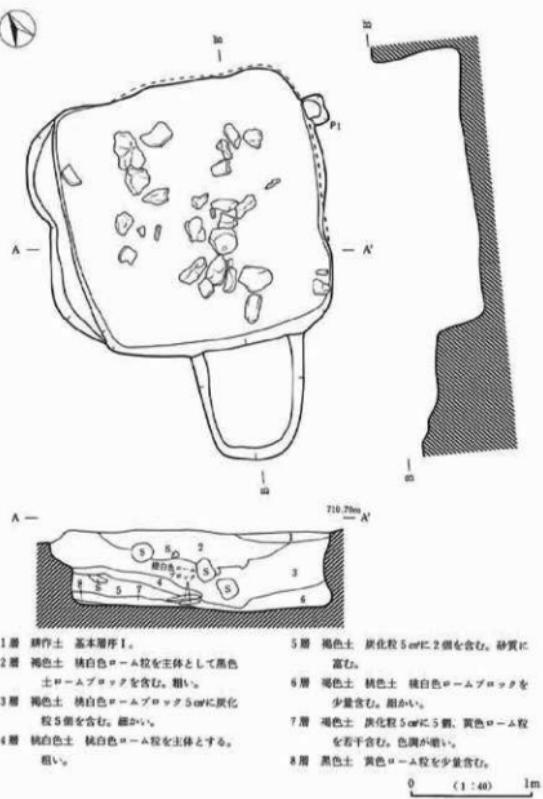
固有番号	—	検出区	く-2グリット	平面形態	—
重複状態	M1に破壊される。				
壁 長	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面 幅 長軸方向
壁 高	37.0~46.0cm	—	—	177cm	—
張り出し壁	位置 —	形状 —	—	22.0~46.0cm	22.0~24.0cm
	長さ —	幅さ —	厚さ —	覆 土	3層 棕褐色土と白色コームが入り組む。
柱 穴	—	—	—		
出土遺物	—	—	—		
備 考	床面はほぼ平坦。				



第43図 Ta34号竖穴道構造実測図

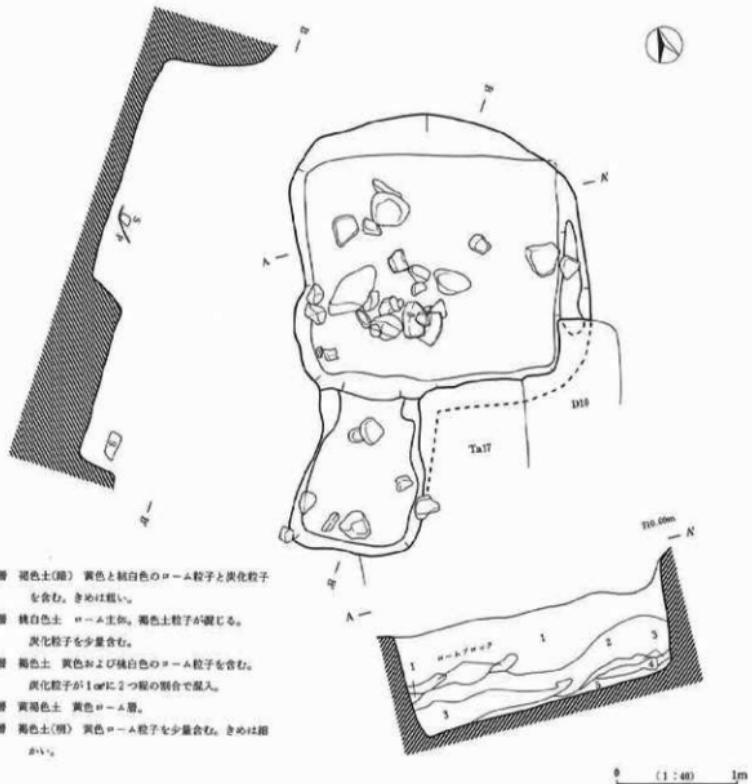
第40表 Ta34号竖穴道構造計測・説明表

国版番号	18-1	検出区	34-1 グリット	平面形態	長軸方向
重複状態	M1を破壊する。				
壁長	—	東壁側	—	南壁側	279cm
壁高	—	東壁側	5.5~7.5cm	南壁側	50.0~54.5cm
張り出し部	位置：南壁西寄り	形状	半円状	覆土	14層 黑褐色土・褐色土・ロームが複雜に入り組んだ堆積状況を示す。
柱穴	45cm	幅	92cm	深さ	14cm
出土遺物	青磁、内耳土器、土師質土器				
備考	床面はほぼ平坦である。				



第41表 Ta35号窓穴遺構計測・説明表

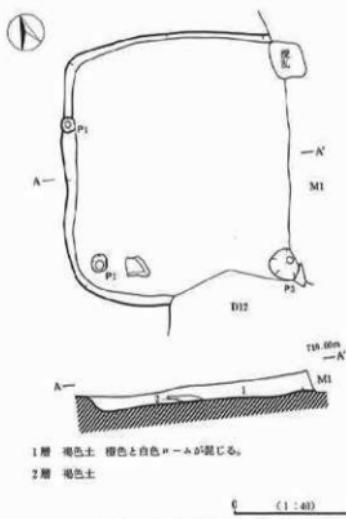
国版番号		18-2・3		検出区		3d-3 グリット		平面形態	方形
重複状態		D21・196を破壊する。							
北		壁側	東	壁側	南	壁側	西	壁側	面積
壁	長	232cm		226cm		214cm		222cm	4.2m ² (1.3坪)
壁	高	61.5~73.0cm		58.5~73.0cm		55.0~58.5cm		50.5~61.5cm	N-73°-W
突き出し部	位置	南壁	形状	長方形	覆	土	8層	褐色土とロームが、サンドイッチ状に堆積している。	
柱	穴		—						
出土遺物	内耳土器、土師質土器、碗、石器								
備考	床面はほぼ平坦である。								



第45図 Ta36号整穴遺構実測図

第42表 Ta36号整穴遺構計測・説明表

調査番号	19-1・2、20-1・2	検出区	北-4・5、南-5グリット	平面形態	方形
重複状態	D10に破壊され、D17、Ta51を破壊する。				
北 壁 側	224cm	東 壁 側	220cm	南 壁 美	254cm
壁 高	71.5~87.0cm		94.0~98.0cm		48.0~76.5cm
張り出し部	位置 南壁西寄り	形状 長方形	長方形	後 土	5層 ロームを含む褐色土と純粋なロームがテンドイチャ状に入り組んでいる。
	長さ 140cm	幅 95cm	深さ 53.5cm		
柱 穴	—				
出土遺物	白磁、内耳土器、土師質土器、粉搖臼、刀子				
備 考	床面はほぼ平坦である。				



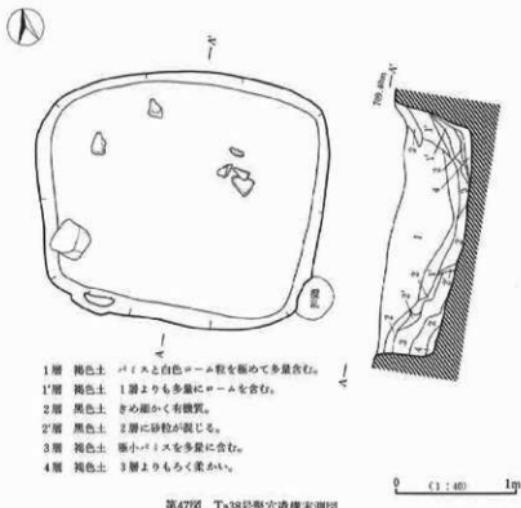
第46図 Ta37分壁穴構造実測図

第43表 Ta37分壁穴構造計測・説明表

調査番号	検出区				平面形態		長軸方向
	か-1・2・3	き-1・2	グリット		面	横	
Ta37, D33, M1に破壊される。							
壁長	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	212cm		
壁高	7.0~13.0cm		13.0~15.5cm	7.0~12.0cm			
張り出し部	位置	形状	位置	位置	2層 褐色土主体であるが、ロームが混ざっている。		
柱穴	北壁寄り、南西隅、南壁に各1個ずつ検出されている。						
出土遺物		—					
備考	床面はおおむね平坦である。						

第44表 Ta38分壁穴構造計測・説明表

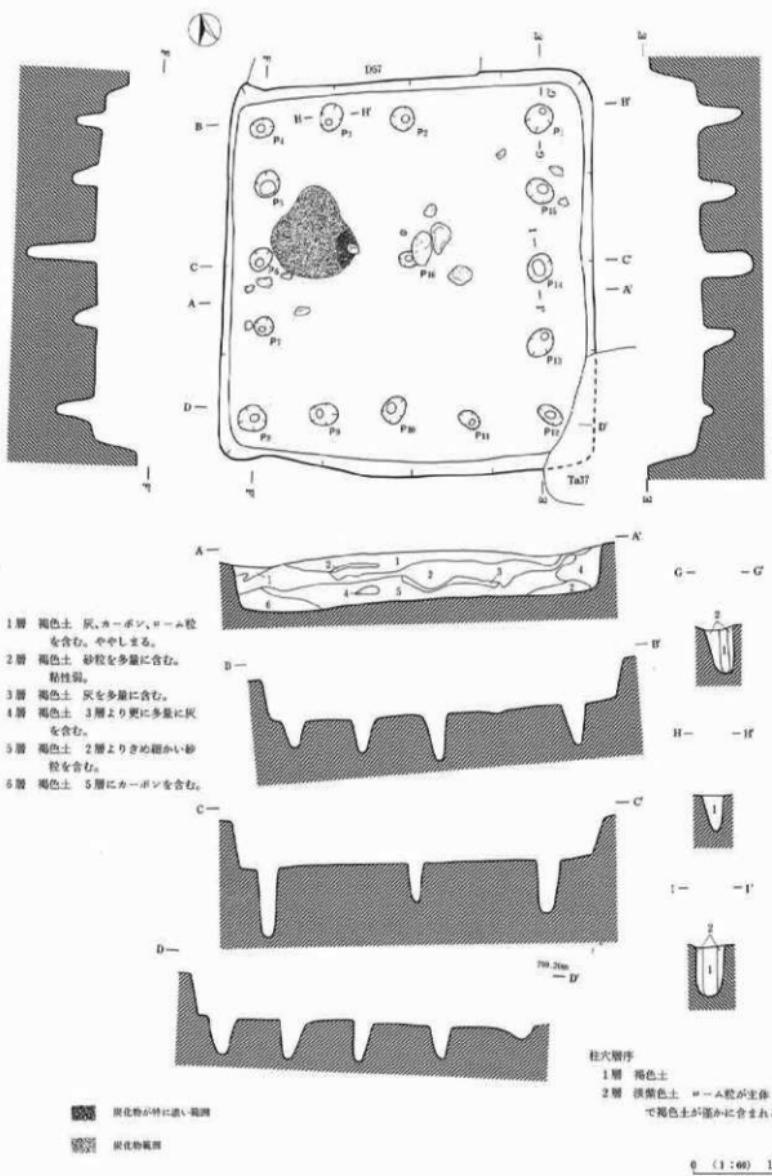
調査番号	検出区				平面形態		長軸方向
	か-10・11	お-10・11	グリット		面	横	
Ta39, H13を破壊する。							
壁長	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側			
壁高	342cm	200cm	214cm	174cm			
張り出し部	位置	形状	位置	位置	3.6m ² (1.1坪)		N-75°-W
柱穴	—	—	—	—			
出土遺物	内耳土器						
備考	床面はほほん平坦であるが、中央部が僅かに凹む。						



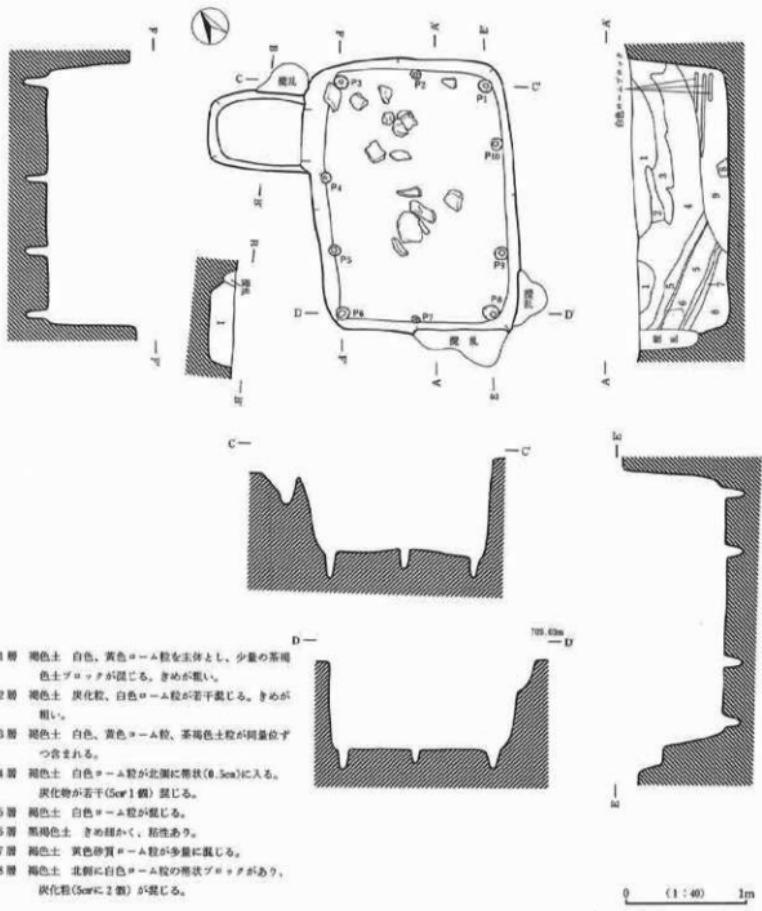
第47図 Ta38号竖穴構造実測図

第45表 Ta39号竖穴遺構計測・説明表

調査番号	21-3、22-1	発生区	北-11・12、北-11グリット		平面形態	方形
重複状態	Ta38、D57に破壊され、H13、D68・200・201を破壊する。					
壁 長	448cm	東 壁 長	490cm	(467cm)	西 壁 長	469cm
壁 高	44.0~64.0cm	南 壁 高	54.0~59.0cm	50.0~63.0cm	面 積	19.4m ² (5.9xF)
傾り出し部	位置 —— 形状 ——	底 土	5層	褐色土主体だが、灰・砂層も帶状、ブロック状に認められる。		
長さ	—	幅	—	深さ	—	
柱 穴	壁下の床面上を廻るように15個、床面中央に1個配される。北壁下のP1からP2の間隔のみが広い。					
出土遺物	白磁、青磁、美濃鉄袖、美濃灰袖、常滑、内耳土器、土師質土器、粉擦臼、茶臼					
備 考	床面はほぼ平坦である。					



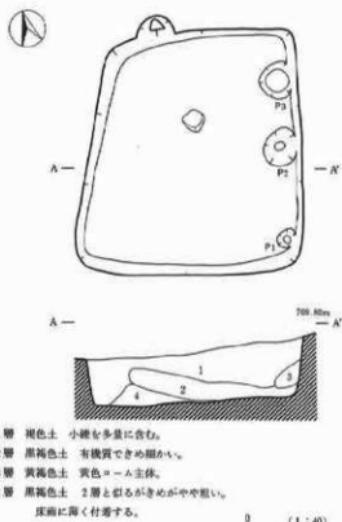
第48図 Tsuboi 39号穴構造実測図



第40図 Ta40号竪穴遺構実測図

第46表 Ta40号整穴造構計測・説明表

因版番号	22-2	検出区	お-12グリット	平面形態	長方形
重複状態	単独				
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向
壁長	165cm	225cm	160cm	220cm	
壁高	68.0~80.0cm	71.0~73.0cm	72.0~76.0cm	62.0~67.0cm	2.9m ² (0.9坪)
張り出し部	西壁北寄り 形状	長方形	底土	8層 おおむね白色ローム混じりの褐色土主体であるが、純粋な白色ロームも帯状に入り込んでいる。	N-28°-E
柱穴	壁下を廻るように計10個検出されている。				
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉器皿、埴輪				
備考	床面はほぼ平坦である。				



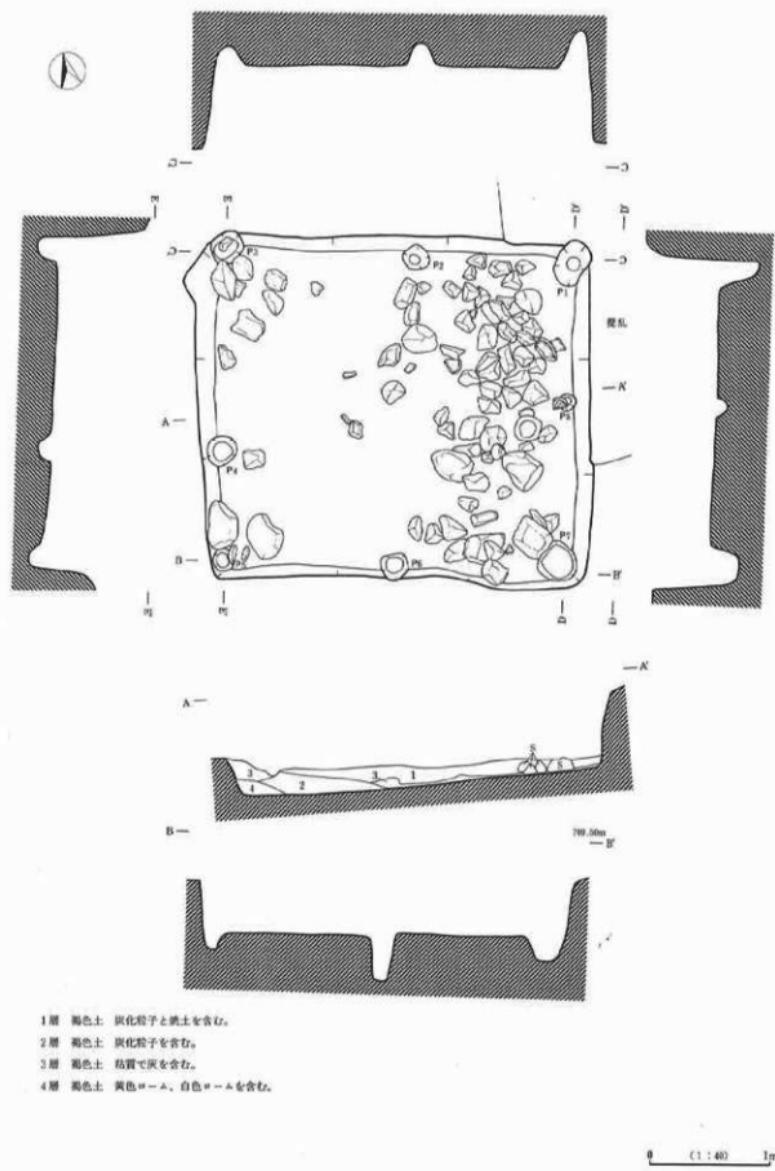
第50図 Ta41号整穴造構計測・説明表

第47表 Ta41号整穴造構計測・説明表

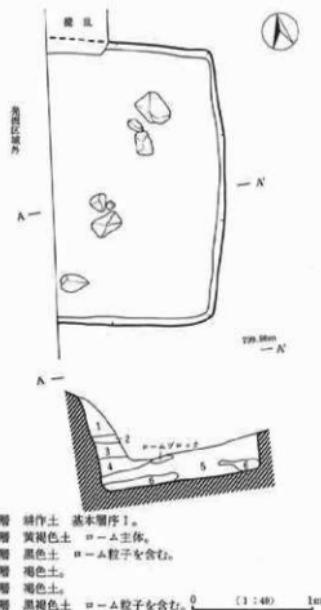
因版番号	24-3	検出区	丸-9グリット	平面形態	不整長方形
重複状態	D143, H13を破壊する。				
北壁側	155cm	40.0~54.0cm			
東壁側	203cm	57.0~61.0cm			
南壁側	198cm	31.0~36.0cm			
西壁側	198cm	24.0~40.0cm			
面積	2.8m ² (0.8坪)	長軸方向	N-20°-E		
位置	—	形状	—		
張り出し部	—	幅	—	深さ	—
底土	4層 棕褐色土・黒褐色土・ロームが入り組む。				
柱穴	東壁下に3箇認められる。				
出土遺物	—				
備考	床面はおおむね平坦である。				

第48表 Ta42号整穴造構計測・説明表

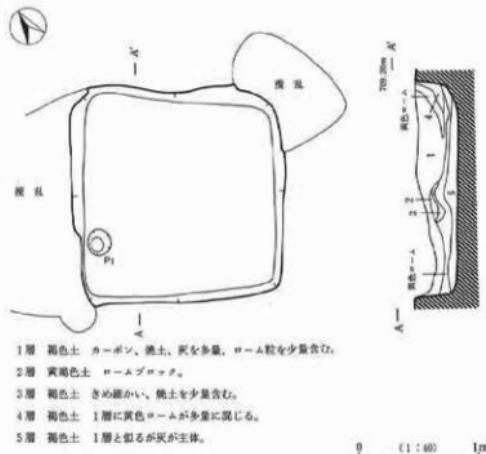
因版番号	23-2, 24-1	検出区	か-9、き-9-10グリット	平面形態	長方形
重複状態	単独				
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積	長軸方向
壁長	327cm	286cm	314cm	285cm	7.7m ² (2.3坪)
壁高	59.0~77.0cm	42.5~62.0cm	14.5~47.0cm	21.5~50.0cm	N-74°-W
張り出し部	—	形状	底土	3層 棕褐色土・ロームが入り組んでいる。	
長さ	—	幅	—		
柱穴	西隅に各1個、北・東・南壁下中央に各1個、西壁下南寄りに1個検出されている。				
出土遺物	内耳土器、土師質土器、粉器皿、茶臼、石擂鉢、凹石				
備考	床面はほぼ平坦である。周溝が壁下を全周している。				



第51図 Ta42号竖穴造構実測図



第52図 Ta43号竖穴道構実測図



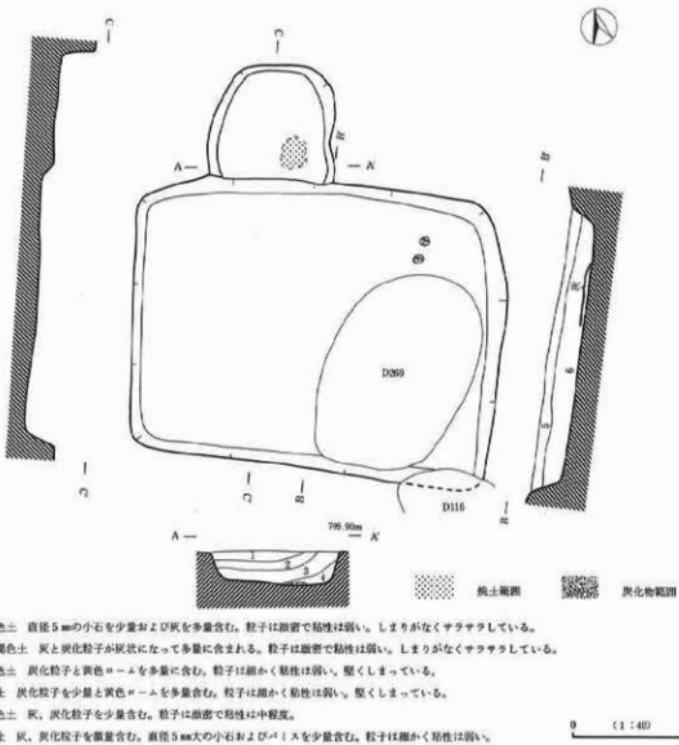
第53図 Ta44号竖穴道構実測図

第49表 Ta43号竖穴道構計測・説明表

調査番号	24-2
検出区	き-9グリット
重複状態	単独
平面形態	—
壁 長	壁 高
北壁側	— 14.5~15.0cm
東壁側	236cm 3.5~35.0cm
南壁側	— 28.5~33.0cm
西壁側	— —
面 横	— 長軸方向 —
張り出し部	位置 — 形状 —
	長さ — 幅 — 激さ —
覆 土	5層 黒色土・褐色土・ロームがサンゴイッサ状に堆積している。
柱 穴	—
出土遺物	青白磁、内耳土器、土師質土器
備 考	床面はおおむね平坦と考えられる。

第50表 Ta44号竖穴道構計測・説明表

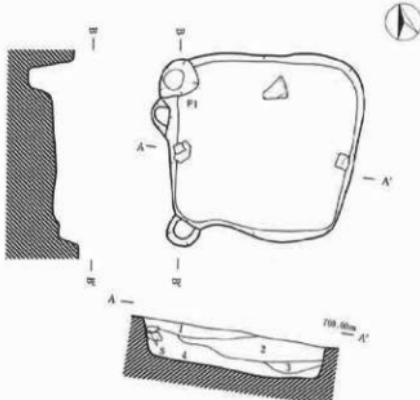
調査番号	24-3
検出区	5-12グリット
重複状態	単独
平面形態	方形
壁 長	壁 高
北壁側	173cm 28.0~42.0cm
東壁側	171cm 35.0~41.0cm
南壁側	173cm 37.5~40.0cm
西壁側	180cm 33.5~36.0cm
面 横	2.4m ² (0.7坪) 長軸方向 N-30°-E
張り出し部	位置 — 形狀 —
	長さ — 幅 — 激さ —
覆 土	5層 褐色土主体だが、ロームが細い筋状に入り込む。最下層は灰層となる。
柱 穴	西壁南寄りに1個検出。
出土遺物	内耳土器、土師質土器
備 考	床面はほぼ平坦である。



第54図 Ta45号窓穴追跡測定区

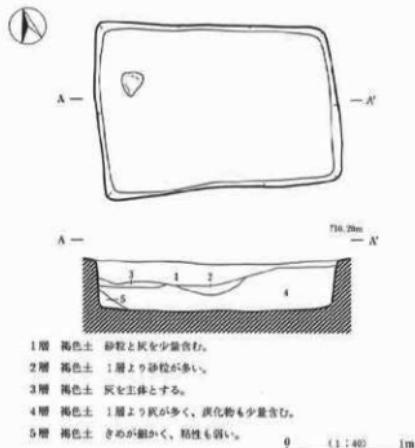
第51表 Ta45号窓穴追跡計測・説明表

回取番号	横出区	か-8・9グリット	平面形状	長方形
重複状態	D116・269に破壊され、F1、H15を破壊する。			
北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面積
標 高	311cm	240cm	301cm	229cm
壁 高	26.5~31.5cm	26.5~29.0cm	12.5~28.0cm	10.0~19.0cm
張り出し部	北壁西寄り	形狀	半椭円状	6層 褐色土、黒褐色土が主体だが張り出し部は灰が多い。
長さ	96cm	幅	106cm	深さ 33.0cm
柱 穴	—			
出土遺物	土器質土器			
備 考	床面はほぼ平坦である。			



- 1層 褐色土 黄白色ローム、直徑5mmの大い小石を少量含む。粘土質か。
- 2層 黄褐色土 黄白色ロームを多量に、直徑5mmの大い小石を少量含む。
粘土質か。
- 3層 褐色土 黄白色ロームを多量に、直徑5mmの大い小石を少量含む。
粘土質か。
- 4層 褐色土 黄白色ロームを微量、直徑5mmの大い小石、^{アシス}灰化粒子を含む。

第55図 Ta46号壁穴構造実測図



第56図 Ta47号壁穴構造実測図

第52表 Ta46号壁穴構造計画・説明表

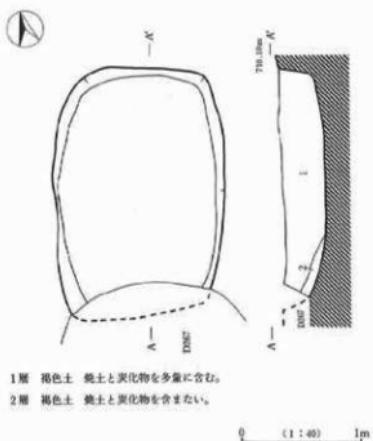
調査番号	25-2
検出区	J-7グリット
重複状態	D46を破壊する。
平面形態	方形
壁 長	壁 高
北壁 長	180cm 33.0~38.0cm
東壁 長	162cm 28.0~29.5cm
南壁 長	151cm 27.0~28.0cm
西壁 長	143cm 27.0~33.0cm
面 横	1.8m(0.5坪) 兵軸方向 N-70°-W
張り出し幅	— 形状 —
長さ	— 幅 — 深さ —
覆 土	4層 ロームを含む褐色土と純粹なロームが入り組む。
柱 穴	南西コーナーに1個検出されている。
粉擦印	
出土遺物	
備考	床面はおおむね平坦である。

第53表 Ta47号壁穴構造計画・説明表

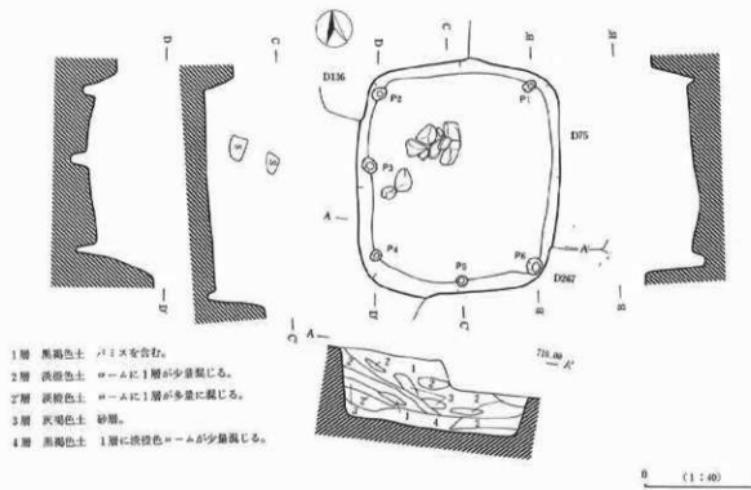
調査番号	—
検出区	J-7・8、32-8グリット
重複状態	D34を破壊する。
平面形態	長方形
壁 長	壁 高
北壁 長	194cm 38.0~40.0cm
東壁 長	127cm 33.0~40.0cm
南壁 長	201cm 33.0~45.0cm
西壁 長	148cm 40.0~43.0cm
面 横	2.3m ² (0.7坪) 兵軸方向 N-74°-W
張り出し幅	— 形状 —
長さ	— 幅 — 深さ —
覆 土	5層 褐色土主体だが、灰がまじり細い帯状の灰層も認められる。
柱 穴	—
出土遺物	美濃鉄軸、土師質土器
備考	床面はおおむね平坦である。

第54図 Ta48号竪穴遺構剖面・説明表

国版番号	—		
検出区	う-8、元-8 ダリット		
重複状態	D267に被覆され、D136+185を破壊する。		
平面形態	長方形		
壁 長	壁 高		
北壁側	144cm	25.0~31.0cm	
東壁側	—	25.0~31.0cm	
南壁側	—	—	
西壁側	—	10.0~26.0cm	
面 横	2.1m(0.6坪)	北緯 東向	N-16°-E
位 置	—	形状	—
裏出し幅	—	幅さ	—
長さ	—	幅さ	—
覆 土	2層 塗土・炭化物を含む褐色土を基調とする。		
柱 穴	—		
出土遺物	青磁、内耳土器、土師質土器、石器		
備 考	床面は断面はやや丸みを有する。		



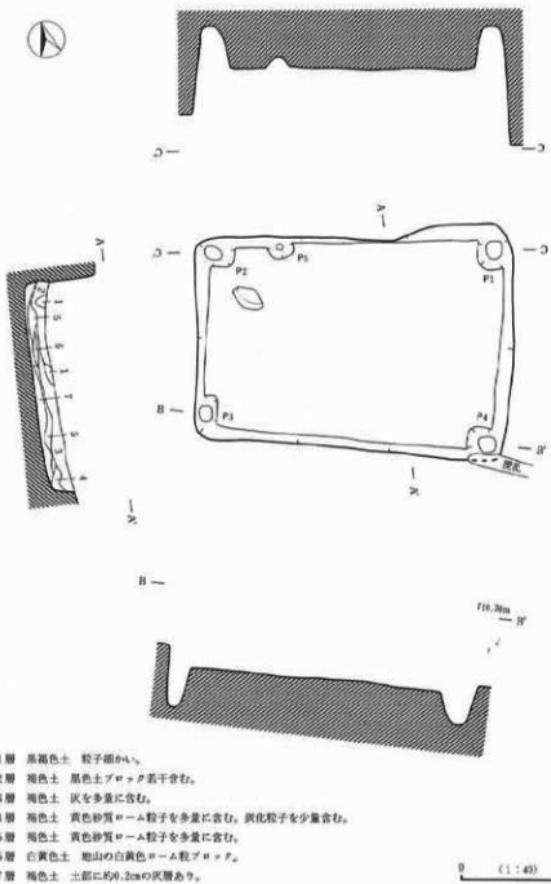
第57図 Ta48号竪穴遺構実測図



第58図 Ta49号竪穴遺構実測図

第55表 Ta49号壁穴構造計画・説明表

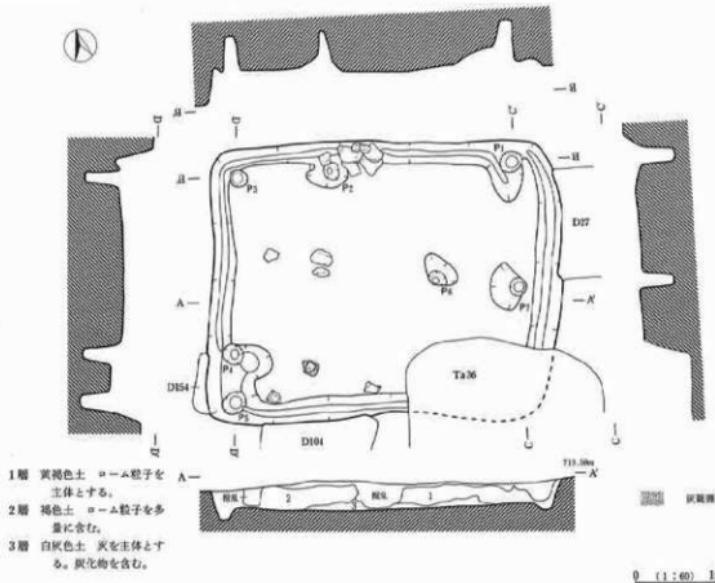
四版番号	25-1	検出区	う-8、え-8グリット		平面形態	方形		
重複状態	D75・136・267に破壊される。							
北 墓 刻	166cm	東 墓 刻	189cm	南 墓 刻	165cm	西 墓 刻	196cm	
墓 高	20.5~30.5cm		29.5~34.0cm		37.5~48.0cm		20.5~48.0cm	
張り出し幅	—	形状	—	覆 土	5層	黒褐色土・ローム・灰が、帯状・ブロック状に入りまじっている。		
長さ	—		—	深さ	—			
柱 穴	四隅に各1個、西・南壁下の中央に各1個ずつ配されている。							
出土遺物	内耳土器、土器質土器							
備 考	床面はほぼ平坦である。							



第55図 Ta49号壁穴構造実測図

第56表 Ta50号壁穴造構計測・説明表

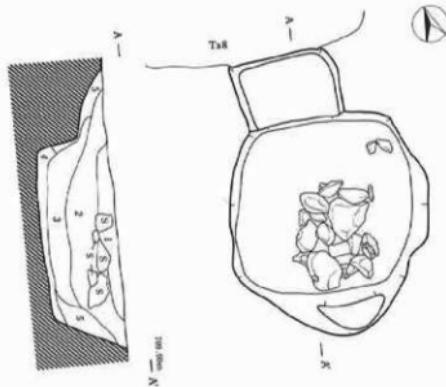
図版番号	25-3	検出区	丸-4、お-4グリット		平面形態	長方形
重複状態	D74・80を破壊する。					
北 壁 側	266cm	東 壁 側	(199cm)	南 壁 側	(258cm)	西 壁 側
壁 高	47.5~60.0cm		3.5~60.0cm		20.5~21.5cm	14.0~49.0cm
位置	—	形状	—	覆 土	7層	褐色土・黒褐色土・灰が入り組んでいる。
張り出し部	—	長さ	—	幅	—	
柱 穴	凹溝に各1個整然と並び、北壁下西寄りにも1個みられる。					
出土遺物	土師質土器、鉄釘					
備考	床面はほぼ平坦である。					



第56図 Ta50号壁穴造構実測図

第57表 Ta51号壁穴造構計測・説明表

図版番号	25-4	検出区	丸-5グリット		平面形態	長方形
重複状態	Ta27・36、D154に破壊される。					
北 壁 側	426cm	東 壁 側	348cm	南 壁 側	442cm	西 壁 側
壁 高	7.5~40.5cm		7.5~34.0cm		9.5~27.0cm	2.0~44.0cm
位置	—	形状	—	覆 土	3層	ロームと褐色土が入り組み、最下層に灰がみられる。
張り出し部	—	長さ	—	幅	—	
柱 穴	北東・北西コーナーに各1個、南西コーナーに2個、東壁下中央に1個、北壁下中央西寄りに1個、床面中央東寄りに1個みられる。					
出土遺物	土師質土器、鉄釘					
備考	床面はほぼ平坦である。周溝は壁下を全周すると思われる。					



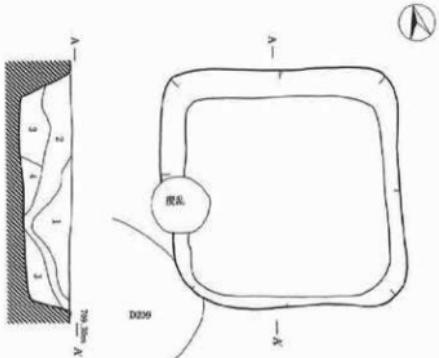
- 1層 褐色土 黒化粧、黄色ロームを含む。きめは細かい。
 2層 褐色土 黄色ロームを含む。きめは粗かい。
 3層 褐色土 黄色ロームを含む。きめは粗かい。
 4層 褐色土 黒褐色の有機質のブロックを少量に含む。きめは細かい。
 5層 褐色土 黄色ロームを含む。きめは粗かい。

第61図 Ta52号窯穴遺構実測図

第58表 Ta52号窯穴遺構計測・説明表

回収番号	26-1		
検出区	L-6グリット		
重複状態	H5.D41+42-207に破壊される。		
平面形態	方形		
	壁 高	壁 高	
北 墓 例	166cm	55.5~56.0cm	
東 墓 例	185cm	40.5~56.0cm	
南 墓 例	163cm	54.0~59.5cm	
西 墓 例	184cm	50.5~56.5cm	
面 積	1.8m ² (0.5坪)	長軸方向	N-20°-E
位置	北壁西寄り	形状	長方形状
張り出し幅	55cm	幅	86cm
覆 土	5層 褐色土が基調で各層にロームが含まれる。		
柱 穴	—		
出土遺物	内耳土器、土師質土器、土製品 粉拂曰、石瓶体		
備 考	床面はほぼ平坦である。		

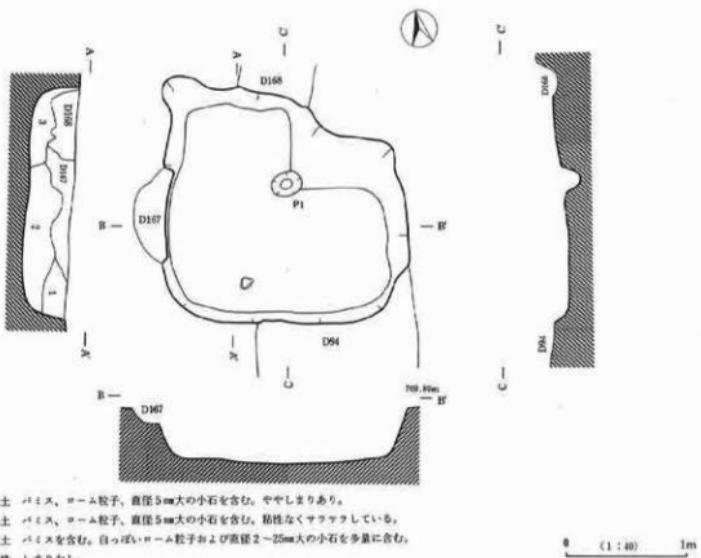
第59表 Ta53号窯穴遺構計測・説明表



- 1層 褐色土 壁と白質のロームブロックを少量含む。きめが粗い。
 2層 褐色土 1層よりも白質のロームブロックを多量に含む。大きな塊が混入する。きめが粗い。
 3層 褐色土 白質のロームブロックを少量含む。きめが粗い。
 4層 褐色土 茶褐色の土が混入する。泥を少量含む。

第62図 Ta53号窯穴遺構実測図

回収番号	—		
検出区	L-6グリット		
重複状態	D209に破壊される。		
平面形態	方形		
	壁 高	壁 高	
北 墓 例	195cm	36.0~50.0cm	
東 墓 例	197cm	36.0~45.0cm	
南 墓 例	193cm	24.0~35.0cm	
西 墓 例	199cm	10.5~36.0cm	
面 積	2.6m ² (0.8坪)	長軸方向	N-10°-E
位置	—	形状	—
張り出し幅	—	幅	—
覆 土	4層 褐色土基調でロームが多量に含まれる層が帯状に入り込む。		
柱 穴	—		
出土遺物	内耳土器、土師質土器		
備 考	床面はほぼ平坦である。		



- 1層 褐色土 バス、ローム粒子、直徑5mmの小石を含む。ややしまりあり。
- 2層 褐色土 バス、ローム粒子、直徑5mmの小石を含む。粘性なくサラッとしている。
- 3層 褐色土 バスを含む。白っぽいローム粒子および直徑2~25mmの小石を多量に含む。粘性。しまりなし。

第63図 Ta54号竪穴遺構実面図

第60表 Ta54号竪穴遺構計測・説明表

調査番号	検出区				平面形状		曲率風
	北壁側	東壁側	南壁側	西壁側	面	横	
壁長	194cm	188cm	208cm	192cm			
壁高	36.0~43.5cm	38.0~40.5cm	9.0~31.0cm	32.5~35.5cm	2.3m ² (0.7坪)		N-10°-E
張り出し長	—	—	—	—	3層	褐色土が基調で、白色のローム粒子が各層に含まれている。	
高さ	—	幅	—	深さ	—		
柱穴	1側のみ。						
出土遺物	常滑、内耳土器						
備考	床面はおおむね平坦である。						

大井城跡(黒岩城跡)櫻穴遺構一覧表

遺構	桜園番号	検出区	平面形態	規 則 長軸 短軸	深さ 短軸	面積 m ² /坪	長軸方向 より出した所	柱穴	主な出土遺物
Ta1	4-1	2-4・5	不整長方形	246	180	43.0	4.0 (1.2)	N-74.5-W	—
Ta2	—	2-4・5	不整長方形	188	140	27.0	2.4 (0.7)	N-16°-E	—
Ta3	4-2	3-5・7-1・2	方 形	174	130	53.0	1.7 (0.5)	N-22°-E	N-10°-E
Ta4	5-3・4	2-4・5	不整長方形	224	146	68.0	3.2 (1.0)	N-18.5-E	—
Ta5	4-3・5-1	7-6	方 形	180	180	45.5	3.0 (0.9)	N-15°-E	—
Ta6	4-1、5-2	7-6	不整方形	136	149	29.5	1.9 (0.6)	N-21°-E	—
Ta7	6-1	4-5・6	長 方 形	178	156	37.0	2.5 (0.8)	N-17°-E	—
Ta8	6-2・3・4	4-6・7	長 方 形	211	171	65.0	3.1 (1.0)	N-27°-E	N-66°-W
Ta9	7-1	8-6	不整長方形	203	138	41.0	2.6 (0.8)	N-72°-W	—
Ta10	7-2・3	3-5	長 方 形	273	240	51.0	5.5 (1.7)	N-15°-E	—
Ta11	8-1・2	4-5	方 形	169	166	89.0	2.8 (0.8)	N-19°-E	N-10°-E
Ta12	—	4-5, 4-5・6	長 方 形	167	110	85.0	1.8 (0.5)	N-6°-E	—
Ta13	8-3・9-1	3-7・L-3・4	長 方 形	296	139	70.0	2.5 (0.8)	N-76°-W	—
Ta14	—	17-5	方 形	184	206	53.5	3.6 (1.1)	N-74°-W	N-3.5°-E
Ta15	—	4-7・8-10	長 方 形?	—	—	59.0	—	N-97°-E	—
Ta16	9-2・3	4-1・8-4・5	方 形	318	297	60.0	8.6 (2.6)	N-83°-W	—
Ta17	10-1	4-5	方 形	126	120	73.0	1.4 (0.4)	N-14°-E	S-26°-W
Ta18	10-2	4-8・9	長 方 形	240	171	63.0	3.7 (1.1)	N-72°-W	—
Ta19	11-1	8-1・4-2	方 形	380	202	49.0	4.3 (1.3)	N-4°-E	—
Ta20	11-2・3	8-3・4	長 方 形	293	231	79.0	6.5 (2.0)	N-7°-E	W
Ta21	11-1	2-2・8-2	—	—	—	25.5	—	N-5°-E	—
Ta22	12-1	2-2	—	295	314	57.5	9.1 (2.8)	N-72.5°-W	—
Ta23	12-2・3・4・13-1	2-2・2-3・4	方 形	412	365	47.0	16.2 (4.9)	N-95.5°-E	N-93.5°-W
Ta24	13-2	4-1・8-1・2	不整方形	297	233	46.5	8.4 (2.5)	N-13°-E	N-71°-E
Ta25	14-1・2	2-2・8-4	長 方 形	236	216	45.0	5.6 (1.7)	N-15°-E	—
Ta26	15-1	2-4	長 方 形	450	294	58.0	12.7 (3.8)	N-20.5°-E	N-68.5°-E
Ta27	15-2	2-3	長 方 形	254	192	38.0	4.6 (1.4)	N-75°-W	—
Ta28	16-1	2-1・2-5・6	不 整 形	277	224	48.5	5.9 (1.8)	N-11°-E	—

遺 優	特 固 番 号	検 出 区	平 面 形	施 槽	深 度 (cm)	面 槽	長 軸 方 向	裏出し方 向	柱穴	生 な ら 出 土 遺 物
Ts29	16・2・3	二・4	万 形	178	162	77.0	2.9 (0.9)	N-11°-E	—	6 富士、内耳土器、土胎質土器、土板、鉛錠、鍵孔、墨字元宝、環柄
Ts30	17-1	（・）1-1	長 方 形	348	243	58.5	8.2 (2.5)	N-12°-E	—	6 内耳土器、土胎質土器、粘土、鉛錠、口子、环柄
Ts31	4-2	五・6-1, 8-1	万 形	241	200	53.5	4.7 (1.4)	N-19°-E	—	—
Ts32	17-4	本・0, 2-0・1	万 形	—	—	63.0	—	—	—	4 土胎質土器、朱口、刀子、萬字通宝
Ts33	—	（・）2	—	—	—	46.0	—	—	—	—
Ts34	18-1	五・1	—	—	—	54.5	—	—	S-20°-W	—
Ts35	18-2・3	五・3	万 形	16	202	73.0	4.2 (1.3)	N-73°-W	S-24°-W	—
Ts36	19-1・2, 20-1・2	五・4・5, 5-5 万	形	204	154	96.0	3.6 (1.1)	N-16.5°-E	S-16°-W	—
Ts37	—	五・8-1・2	—	—	—	15.5	—	—	—	3 内耳土器
Ts38	21-1・2・3, 22-1	五・4-10・11	万 形	210	182	73.0	3.6 (1.1)	N-75°-W	—	—
Ts39	21-3, 22-1	五-11-12, 8-11	万 形	456	432	64.0	19.4 (5.9)	N-15°-E	—	16 白磁、青磁、美濃鉢形、高倍火箱、内耳土器、土胎質土器、彩繪白、茶白
Ts40	22-2	五-12	万 形	206	144	80.0	9.0 (0.9)	N-28°-E	N-60°-W	—
Ts41	23-1	五-9	不整長方形	186	160	61.0	2.8 (0.8)	N-20°-E	—	3 内耳土器、土胎質土器、粘土口、培燒
Ts42	23-2, 24-1	か・9, き-9-10	長 方 形	294	264	77.0	7.7 (2.3)	N-74°-W	—	8 内耳土器、土胎質土器、粘土口、茶白
Ts43	24-2	き-9	—	—	—	35.0	—	—	—	—
Ts44	24-3	き-12	万 形	158	156	42.0	2.4 (0.7)	N-30°-E	—	1 内耳土器、土胎質土器
Ts45	—	か-8・9	長 方 形	286	212	31.5	5.8 (1.8)	N-18°-E	—	—
Ts46	25-2	し-7	万 形	142	126	38.0	1.8 (0.5)	N-70°-W	—	1 土胎質土器
Ts47	—	か-7・8, か-8	長 方 形	188	134	45.0	2.3 (0.7)	N-74°-W	—	—
Ts48	—	か・え-8	万 形	—	142	31.0	2.1 (0.6)	N-16°-E	—	—
Ts49	25-1	か・え-8	万 形	170	146	48.0	2.3 (0.7)	N-9°-E	—	6 内耳土器、土胎質土器
Ts50	25-3	か・え-4	長 方 形	240	156	60.0	3.8 (1.2)	N-74°-W	—	5 土胎質土器、鉛打
Ts51	25-4	か-5	長 方 形	370	284	44.0	12.8 (3.9)	N-79°-W	—	7 土胎質土器、鉛打
Ts52	26-1	ひ-6	万 形	140	144	59.5	1.8 (0.5)	N-20°-E	N-3.5°-W	—
Ts53	—	し-6	万 形	164	59.0	2.6 (0.8)	N-10°-E	—	—	
Ts54	—	じ・さ-5	曲 弓 月	166	174	43.5	2.3 (0.7)	N-10°-E	—	1 富士、内耳土器

堅穴状造構

- (1) 定義
- (2) 規模・形態の傾向
- (3) 床面の状況と柱穴及び付属施設
- (4) 出土遺物からの時代の推定
- (5) 挖立柱建物址との関係——占地の問題に関連して
- (6) 県内例との比較
- (7) 県外例との比較

(1) 定義

堅穴状造構あるいは堅穴造構なる名称は、中世においては建物址が想定される方形、長方形区画の堅穴で柱穴を内・外に有する造構に対して用いられる場合が多い。ここで用いる堅穴状造構も以下に記す諸要素から、建物址を想定できる造構に対して用いるものであり、他の方形土坑とは性格・機能上一線を画するものである。

中世の堅穴状造構の定義については、浪岡城跡調査報告書VII（註1）で工藤清泰氏が次のように述べられている。

- 1 方形が基調であること。
- 2 柱穴あるいはそれに相当するものの存在。
- 3 覆土、床面出土遺物が中世まで近世までは存在しない。
- 4 基本的に戸・カドをもたない。また出入口部分は張り出しを用いる。

本城跡から検出された堅穴状造構も、一部の例外を除きこれらの諸要素を具备しており、中世の建物址として想定できるものである。

尚、あらかじめおことわりしておかねばならないことがある。堅穴状造構の定義2に掲げた柱穴の存在についてである。挿図を見ればあきらかなこととおり、柱穴の存在しない堅穴状造構が相当数みられる。これは非常に恥ずべきことであるが、調査開始当初、壁下に存在するはずの柱穴に全く気づかないままに調査済みとして埋めもどしてしまったためである。平面図が不充分なまま掲載するはめになってしまった。御勘弁願いたい。

柱穴未検出のものを堅穴状造構に含めた根拠は次の通りである。

- ① 出入口様の張出し施設をもつこと。
- ② 覆土の堆積状況が、柱穴をもつものと同様、人為的であること。
- ③ 挖り込みが深いこと。

などである。②、③に関しては、本城跡から検出された中世造構の中で、堅穴状造構が一様に特に深い掘り込みをもち、特徴的な堆積状態を示すことによる。

(2) 規模・形態の傾向

検出された53棟のうち、竪穴状遺構相互の重複によって破壊されていたり調査区外までプランがあるため規模・形態が不明なものが、Ta15, 21, 32, 33, 34, 37, 43の7棟、また、その後の検討により建物址とは考えられないものが、Ta27, 48の2基あるため、計44棟の規模・形態が伺える。このうち、方形を呈するものが16棟、長方形（短軸長+短軸長の10%が長軸長を超えないこと）を呈するものが26棟、曲り屋風のものが2棟あり、方形・長方形のものに関しては、一覧表にまとめた。張り出し部を有するものは14棟、もたないものは28棟で、規模の大小、及び形態の差異によって、張り出し部の有無は決定されないようである。張り出し部の付設される位置は、北側2棟、南側5棟、東側2棟、西側4棟で、特に一定した方向性はみられない。北・南両側に有するものも1棟みられる。

規模は、方形を呈するもの16棟は一辺1.5m未満の超小型のものから一辺4.0m～5.0mの大型のものまでバラエティーに富むが、一辺1.5m未満の超小型のものと一辺1.5m～2.0mの小型のものが11棟で、比較的小規模なものが多い傾向がみられる。

一方、長方形を呈するものは、方形にみられた1.5m未満の超小型のものはみられないが、長軸1.5m～2.0mの小型のものから長軸4.0m～5.0mの大型のものまでやはりバラエティーに富む。数量では、長軸1.5m～2.0mが6棟、長軸2.0m～2.5mが12棟、長軸2.5m～3.0mが5棟で、計23棟となり、方形と同様小規模なものが多く、これらが一般的な規模であったと言える。

従って、方形のTa39や長方形のTa23, 26など一辺及び長軸が4.0m～5.0mの大規模なものは、小型のものと性格が異なることも考えられるが、遺跡内における遺構の位置関係、出土遺物の保有率などから明確にこれを判別することができず、ここでは一応、規模の大小を問わざ括して取り扱うこととした。

この他、曲り屋風のTa28, 54がみられる。

(3) 床面の状況と柱穴及び付属施設

床面の状況はすべての遺構がほぼ一様の傾向を示す。地山の黄褐色ローム層をそのまま利用し平坦に築かれたもので、貼床は認められない。また、特に堅密な状況は示さず、どちらかと言えば軟弱で、頻繁に踏みしめられた痕跡はほとんど残っていない。唯一の例外として、Ta26の西側張り出し部直下の床面上に、土間状に盛り上がった有機性の堆積土が認められている。

柱穴に関しては、先述したように調査が不充分のため、充実した資料呈示ができない。

柱穴を検出できたのは、Ta8, 11, 12, 23, 26, 39, 40, 42, 49, 50, 51の11棟のみという非常に情ない状況であるが、他の遺構にも柱穴は確實に伴っていたはずである。

柱穴の位置は、いずれも壁直下の四隅を基本として設けられ、大型のTa39のみが床面中央にも設けられる。柱穴自体は概して小規模で木柱も細かったことが想像され、竪穴状遺構の規模が大きくなる程、柱穴数、間数が増加する傾向がみられる。柱穴の太さについては、Ta39のセクション図が一つの目安となろう。

付属施設は極めて例外的な存在であるが、Ta30, 32に炉址が認められる。付設位置は、Ta30が中央南寄り、Ta32が北西コーナーにあり、方形・長方形を呈する地床炉である。両遺構は城郭の東端にあたる崖ぎわに並んでおり、他の竪穴状遺構とは異った役割を果していたことが想像できる。この他、長軸412cmを測る大型のTa23の北東コーナー部には、小型の方形の掘り込みがある。大型の竪穴内の一画を占めるこの掘り込みが、どのような役割を果したのであろうか。

(4) 出土遺物からの時代の推定

竪穴状遺構からは、舶載磁器・国産磁器・内耳土器・土師質土器小皿・貨幣・石臼・茶臼・石擂鉢・鉄製品・

銅製品などで、比較的多量の遺物が検出されているが、明らかに遺構に共存する遺物はほとんどなく、すべてが破損品で、大方が覆土中から出土しており、埋没土形成過程に投棄された遺物と做すことができる。このことは堅穴状遺構の覆土が一様にローム層・褐色土・ローム層・褐色土の繰り返しという人為的と理解される堆積状況に集約されることからも首肯できよう。つまり本調査区の堅穴状遺構群は、城の廃絶時期に併い、何らかの意図によって一勢に埋め立てられ、整地されたものと思われ、破損品ばかりの出土遺物もこの時同時に投棄されたと考えられるのである。従って、個々の遺構に対して明確な年代的位置づけを与えることは困難であるが、出土した多くの船載磁器・国産陶器から堅穴状遺構群の大雑把な年代を推定することは可能である。

出土陶磁器で最も古い陶磁器には、13世紀代の製品があり、龍泉窯の青磁碗がTa34, 39から、青白磁瓶子がTa43から出土している。次に14世紀代の製品は、白磁壺がTa1, 39から、常滑系の甕がTa13, 26, 54から、中津川系の甕がTa11, 14, 23から出土している。15世紀代の製品は、染付碗がTa1から、青磁碗がTa1から出土している。以上の如13～15世紀代の陶磁器は量が少ないが、16世紀代の製品は爆発的に増加する。白磁皿がTa11, 19, 36から、備前系播鉢がTa20から、美濃系灰釉小皿（16世紀前半）がTa6, 18から、美濃系灰釉碗（16世紀前半）がTa39から、美濃系茶碗がTa27から、美濃系利器がTa20, 26, 39から、美濃天目茶碗がTa12, 18, 20, 22, 47から、常滑系甕がTa8, 23, 26, 29, 38から出土している。特にTa23出土の常滑系甕は大型破片が25片にも及ぶ。

以上の出土陶磁器の年代傾向から推察すると、本堅穴状遺構群は16世紀前半に廃絶された可能性が強く、使用された時期もこれとほぼ近い時期と考えておきたい。

(5) 振立柱建物址との関係——占地の問題に關連して

本調査では、明瞭に年代が判定できる振立柱建物址は検出されなかつたが、調査区中央部の南北線上に並ぶF1～F3の3基の振立柱建物址の存在は、堅穴状遺構群と有機的な関連性をもって配地されているようにも看取され興味深い。すなわち、堅穴状遺構群は台地の外部を取り巻くように数次の建て換えを繰り返しながら、相互に重複し、密集して占地する傾向がみられ、台地中央部の南北線上、すなわち、振立柱建物址の占地する区域においては分布が薄く、重複関係も少ない。東北北部にみられる堅穴状遺構群は、振立柱建物址の周囲に存在する傾向が認められる。青森県淡路城跡（註2）、岩手県丸子館跡（註3）などで、この傾向がみられるが、本城跡の場合もこれと同様の傾向を示す可能性がある。しかし、今後更に当城跡の調査を拡大しなければ、この問題は解決しない。またこれに關連することとして、堅穴状遺構群が本調査区、すなわち黒岩城南端にのみ集中して分布するのか、それとも城郭全体に広域的な広がりをもつものなのかという問題もあげられる。

(6) 県内例との比較

県内においては、本調査で検出された堅穴状遺構と同様なもの検出例は聞かない。

最近、鈴柄俊夫氏が「長野県の中世集落遺跡について」（註4）と題して、飯田市猿島小島遺跡、松本市島立南粟遺跡、根羽村日影平遺跡、飯田市伊賀良宮ノ先遺跡、富士見町砂原遺跡などの出土遺構を中心として、県内の中世集落のあり方を概観された。それによると、県内の中世集落は、13～14世紀代では集落を構成する住居の大部分が堅穴住居で、振立柱建物址がほとんど一般化されていなかったこと、15～16世紀代では堅穴住居とともに振立柱建物址が増加することを指摘され、長野県では中世においても堅穴の建物が、一般的な居住区の中で大きな位置を占めていたことを浮きぼりにした。氏の論点は中世の武家・一般庶民の集落を対象としているため城跡は扱っていないが、大井城跡において16世紀代まで堅穴状遺構が存続し盛行している姿が、本調査で明らかとなつた。すなわち県内では、住居として機能したか否かはともかく、平安時代の堅穴住居址からの系譜をひくと考えられる堅穴の建物址が少なくとも中世全般に渡って連続と継承され、一般集落でも城郭でも盛んに用いられていたと

考えられるのである。

但し、本調査で認められた堅穴状遺構と他の一般集落でみられる堅穴状遺構とでは、内容に弱若干の差がみられる。まず、柱穴のあり方が決定的に違う。大井城の堅穴状遺構は、壁直下に規則性をもった配置がなされているのに対し、他の一般集落でみられる堅穴状遺構の柱穴は、御代田町野火付遺跡（註5）の例のように、壁外に柱穴をもち配置もあまり規則性がみられないことが多い。また堅穴状遺構相互の密集度、主軸のほぼ揃った規則的な配置なども、大井城跡例は他の例に比べて濃く整っているように思えるし、入口施設の付設も差異があるようと思われる。これは堅穴状遺構の城郭において果した役割と一般集落で果した役割の相違とも考えられる。

いざれにせよ長野県の中世遺跡では、つきものと言える程検出される堅穴状遺構については、その機能が遺跡の性格毎に多岐に渡っている可能性が強く、一概に位置づけることは困難な状況にある。本城跡の堅穴状遺構もその例外ではない。今後、同様な類例の増加を待って再検討したい。

(7) 県外例との比較

県外でも中世の堅穴状遺構の検出例は増加し、徐々にその分布範囲も拡大されているが、関西ではやはり少ない（註6）。関東では、鎌倉市長谷小路南遺跡、町田市小山田No1遺跡（註7）、海老名市上浜田遺跡（註8）など本資料と同様の堅穴状遺構の検出例が増加し、特に鎌倉市街地では極めて多く検出されているという。但し、その検出地は武家屋敷ではなく、道路沿いのスラム的なところに多く検出されており、庶民的のものとして位置づけられている。

堅穴状遺構が城あるいは館跡から密集して発見される例は、特に青森県、岩手県、秋田県などの東北北部や北海道に集中する。代表的なものを挙げておくと、青森県では八戸市根城跡（註9）、浪岡町浪岡城跡（註10）、岩手県では大瀬川館（大瀬川C遺跡）（註11）、北上市丸子館遺跡（註12）、一戸町一戸城跡（註13）、紫波町鶴田館遺跡（註14）、秋田県では鹿角市妻の神III遺跡（註15）、新斗館跡（註16）、北海道では上ノ国町上ノ国勝山館跡（註17）などがある。特に根城、浪岡城などは、史跡整備を前提とした調査が進行しており、巨大な中世城郭の実像が明らかになりつつある。これらの城・館跡から発見されている堅穴状遺構と大井城跡の堅穴状遺構は、規模・形態・柱穴の配置・表り出し部（出入口施設）の存在などで、極めて類似点が強い。唯一異なるのは、北海道、東北北部の堅穴状遺構の床面は堅歯で踏みしまっているのに対し、大井城のものは軟弱な点である。

性格については、掘立柱建物址と近接した区域で発見されることが多いため、掘立柱建物址の居住者に対して從属性的な階級の住居とする説、大瀬川館、一戸城では炭化した穀、ヒエなどが出土していることから、穀物の貯蔵庫であるという説、この他、作業場、兵事の簡易住居、集会場、季節的住居等々、諸説があり、結論は導かれていらない。

以上、概観した限りで、城館跡に堅穴状遺構が密集して検出される地域は、北海道、東北北部そして長野県佐久市の大井城となり、これらの地域の共通点は気候が冷涼なことである。案外この遺構は、寒い地域で必要に迫られたがために頻繁に造られたものではなかろうか。現状では大井城跡が唯一の例であるが、今後県内でも同様な堅穴状遺構の発見が期待されるところである。

註1 浪岡町教育委員会 1983 「浪岡城跡 VII」

註2 浪岡町教育委員会 1982~1984 「浪岡城跡VI~VII」

註3 北上市教育委員会 1983 「丸子館遺跡発掘調査報告書」「北上市立博物館研究報告第4号」

註4 動炳復夫 1986 「長野県の中世集落遺跡について」「長野県考古学会誌50号」

- 註5 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 註6 前掲註2
- 註7 貢達人 「地下の鍾乳」『仏教藝術』164増大号
- 註8 國平健三他 1979 「上浜田遺跡」 神奈川県教育委員会
- 註9 八戸市教育委員会 1983～1984 「史跡根城跡発掘調査報告書III～VII」
- 註10 前掲註2
- 註11 岩手県教育委員会 1981 『大瀬川C遺跡（大瀬川館）』
- 註12 前掲註3
- 註13 一戸町教育委員会 1983～1985 『一戸城跡昭和57・58・59年度発掘調査機報』
- 註14 岩手県教育委員会 1980 「御田松遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一IV一』
- 註15 秋田県教育委員会 1984 「妻の神田遺跡」『東北縦貫自動車道免掘調査報告書IX』
- 註16 岩手県北上市立博物館 1981 「東北地方北端の中世城郭免表資料」
- 註17 上ノ国町教育委員会 1985～1986 「史跡上ノ国鶴山城跡VI・VII」

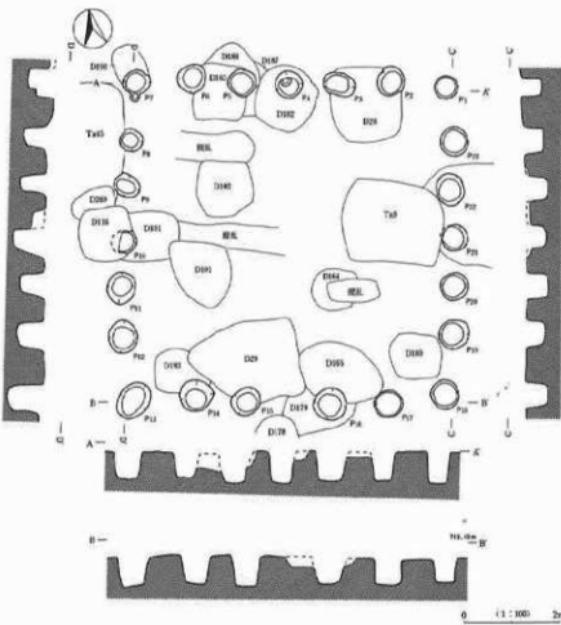
2 捩立柱建物址

1) F 1号擗立柱建物址 (第64図、図版77-1)

本址は、かへく—6・7グリッドより検出された。検出面は全体層序第II層上面である。H 3号住居址の西側を破壊し、Ta 7・9・45と多数の土坑 (D 7・28・29・116・165・179・180・182・183・187・188・190・191・192・193・194・269号土坑) に破壊されている。東西・南北ともほぼ6.6mを測る方形の建物であるため桁行方向は北あるいは東となる。他の2棟の擗立柱建物址がいずれも東西棟であることから、おそらく本址も東西棟かと思われる。柱穴は桁行・梁間とも同数の7個を数える。いざれの柱間寸法も約1.1mの中間である。柱穴の直径は50~60cmではほぼ円形を呈す。柱穴の深さは、50cm前後の深いものと40cm前後の浅いものとの両タイプがある。深い柱穴が構造柱とすれば桁行3間、梁間3間の建物址ということになり、その間の浅い柱穴には間柱があったということになるが定かでない。柱穴の埋土は、褐色土であったり、地山の黄褐色土であったり一定ではない。庇などが取りついていた可能性は検出された柱穴の配置から考えられない。

2) F 2号擗立柱建物址 (第65図、図版77-2)

本址は、さ・し—7・8グリッドより検出された。検出面は全体層序第II層の上面である。H 4号住居址の西側を破壊し、多数の土坑 (D 40・46・158・162・202・245・247・258・259・260号土坑) に破壊されている。南北6.2m、東西7.4mを測る東西棟である。桁行方向はN-80°-Eを測り、F 1号・F 3号擗立柱建物址とはほぼ一致する方向である。柱穴は桁行南・北列にそれぞれ9個、梁間東・西列にそれぞれ8個づつ配されている。柱間寸法は桁行北側柱列が0.8m~1.0mで0.9mが5柱間ありもっとも多い。南列は、中央がもっと幅広く1.1mを

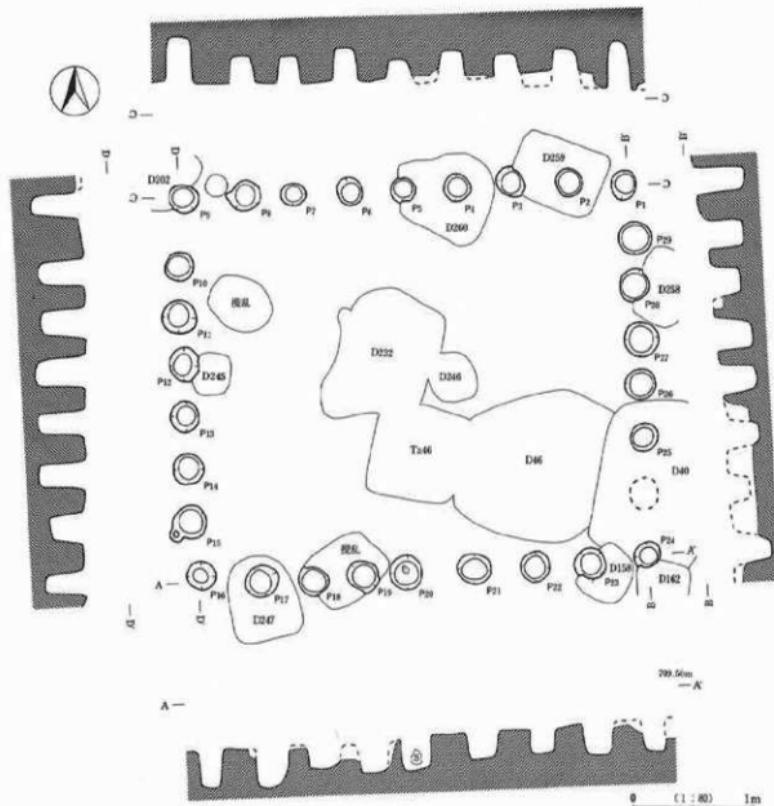


第64図 F 1号 掘立柱建物址実測図

測りその西隣が0.7mともっとも狭い。梁間東列は、南端が1.1mと広い他は0.9mと0.8mとなる。西列は反対に北端が1.1mともっとも広く他は東列と同様に0.8mと0.9mを測る。柱穴の直径は40cm内外と50cm内外のものが半々である。深さは深いもので80cm、浅いもので30cmを測るが、F 1号ほど配置の規則性はない。柱間は桁行・梁間とも半間であり、4間×3.5間の建物と考えられ、7.4m×6.2mを計測する。

3) F 3号掘立柱建物址 (第66図、図版77-3)

本址は、く・け・こ-7・8・9グリッドより検出された。F 1号掘立柱建物址とF 2号掘立柱建物址との間にあって、F 1号掘立柱建物址とは約6m、F 2号掘立柱建物址とは約5mの距離がある。H 2号住居址の東側とH 6号住居址の南側をそれぞれ一部分破壊している。D47・83・100・170・171・211・227・282・283号土坑に破壊されている。南北6.6m、東西8.0mの東西棟である。桁行方向は、N-85°-Eを測りF 2号掘立柱建物址とはほぼ一致し、F 1号掘立柱建物址とも近似する。柱穴は桁行南列に9個、北列に10個、梁間東列には9個がそれぞれ配されている。西列については、充分精査をせずまた作業中に点検を怠り検出できなかった。柱間寸法は、桁行北側柱列が東端が1.3mともっとも広く、他は0.9mと1.0mである。南列はやはり東端が1.2mともっとも広く、



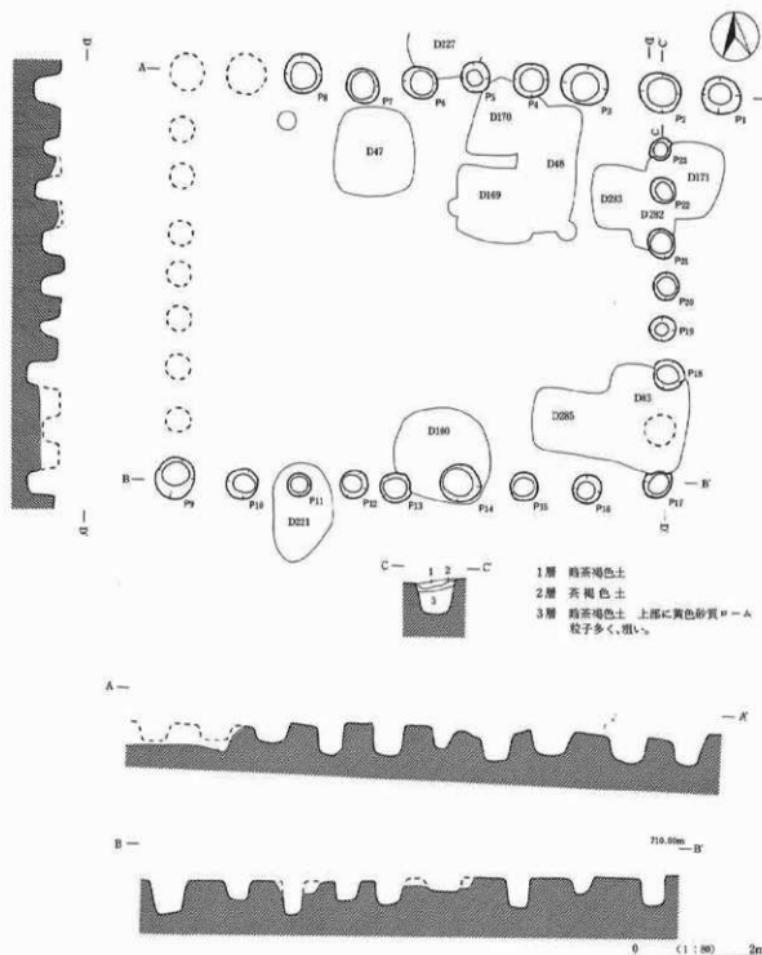
第66図 F 2号掘立柱建物址実測図

1.1m, 1.0m, 0.9mが2柱間あって、0.7mと狭いものもある。梁間東列は、0.7m, 0.8m, 0.9mとなってい る。

梁間東列のP₂東隣にあるP₁は、庇と関わるものであろうとも考えられる。

3 土坑(第67図～第350図、第61表～第345表、図版26～39)

大井城跡(黒岩城跡)の城郭平坦部より第345表に表記したとおり実に総数286基の土坑が検出された。その分

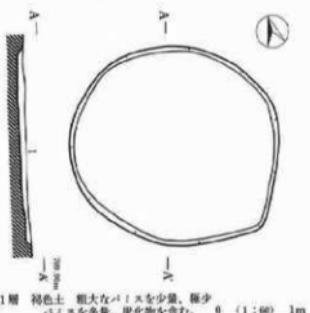


第66号 F3号掘立柱建物址実測図

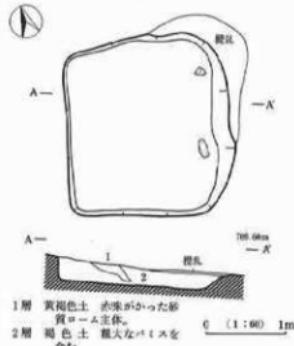
布は、ほぼ全面におよんでいるが、調査区の西・東側が若干薄いものの中央部では、多いものでは10基にのぼる土坑同様が複雑に重複しあっている。形状は、長方形、方形、円形、橢円形、不定形とさまざまであり、深さもまた、1m内外のものから10~15cmていどものものまである。注目されるのは、遺構内に灰を含むものや、石器とか石組のみられる土坑である。遺物は、ほとんどが投棄された状態であった。

主な出土遺物には、次のものがある。内容は堅穴状遺構に似る。時期的には、13~16世紀に比定されるが、15~16世紀が主体を占める。

舶載陶磁器（青磁・白磁・青白磁）、国産陶磁器（常滑・中津川・美濃鉄釉・美濃灰釉・備前）、内耳土器、土師質土器、石臼（粉粂臼・茶臼）、石擂鉢、砥石、磨石、鉄貨、鉱滓、馬骨、その他自然遺物があった。



第67図 D1号土坑実測図

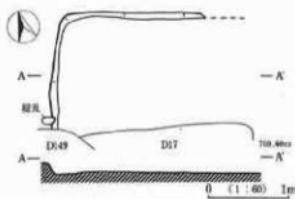


第68図 D2号土坑実測図

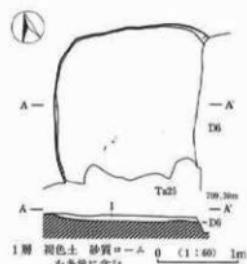
第61表 D1号土坑計測・説明表			
平面形態	円 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	274	短軸(m)	256
深さ(m)	6.0~15.0	長軸方向	N-27°-E

第61表 D1号土坑計測・説明表

第62表 D2号土坑計測・説明表			
平面形態	方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	222	短軸(m)	202
深さ(m)	42.0	長軸方向	N-21°-E



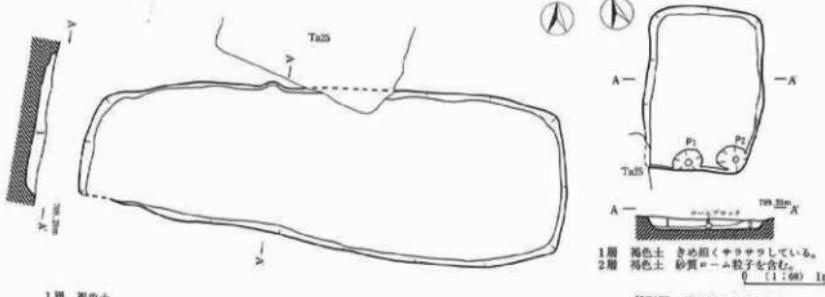
第69図 D3号土坑実測図



第70図 D4号土坑実測図

第63表 D3号土坑計測・説明表			
平面形態	—	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	31.0	長軸方向	—

第64表 D4号土坑計測・説明表			
平面形態	(方 形)	断面形状	舟 形
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	21.0	長軸方向	—



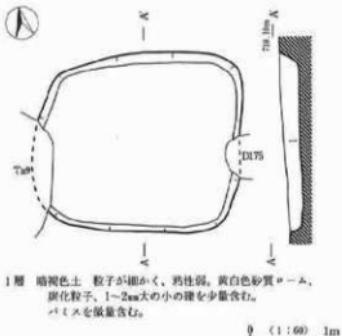
第72図 D 6号土坑実測図

第65表 D 5号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	進 台 形
長軸(m)	601	短軸(m)	186
深さ(m)	40.0	長軸方向	N-85-W

第66表 D 6号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	進 台 形
長軸(m)	203	短軸(m)	146
深さ(m)	22.0	長軸方向	N-36-E



第75図 D 9号土坑実測図

第67表 D 7号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	進 台 形
長軸(m)	250	短軸(m)	230
深さ(m)	34.0	長軸方向	N-78-W

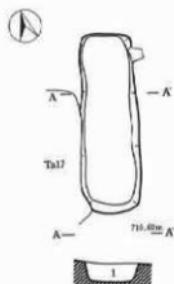
第68表 D 8号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	進 台 形
長軸(m)	68	短軸(m)	62
深さ(m)	49.5	長軸方向	N-77-W



第69表 D 9号土坑計測・説明表

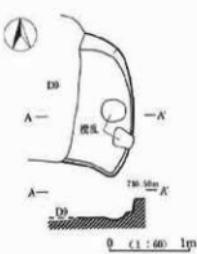
平面形態	方 形	断面形状	進 台 形
長軸(m)	184	短軸(m)	—
深さ(m)	34.5	長軸方向	N-10-E



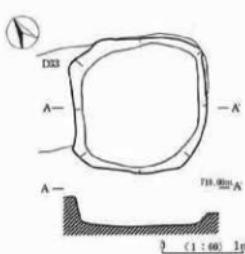
1層 茶褐色土(深) 黄色砂質ローム
粒子を多量に含み、粗い。
9~5mmの大粒化粒子を25%に
5個組合む。

0 (1 : 60) 1m

第76図 D10号土坑実測図



第77図 D11号土坑実測図



第78図 D12号土坑実測図

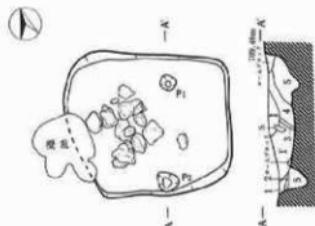
1層 茶褐色土(深) 黄色砂質ローム
粒子を多量に含み、粗い。
9~5mmの大粒化粒子を25%に
5個組合む。

0 (1 : 60) 1m

第76図 D10号土坑実測図

第70表 D10号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	223	短軸(cm)	72
深さ(cm)	37.5	長軸方向	N-14°-E



1層 茶色土 黄色砂質ローム粒子とバクスを含む。
1層より多く砂質ローム粒子が少ない。
2層 黒褐色土 バクスを少量含む。
3層 茶褐色土 バクスを少量含む。
4層 茶色土 灰と炭化物を含む。
5層 明褐色土 砂質ローム粒子を1層よりも多量に含む。

0 (1 : 60) 1m

第79図 D13号土坑実測図

第71表 D11号土坑計測・説明表

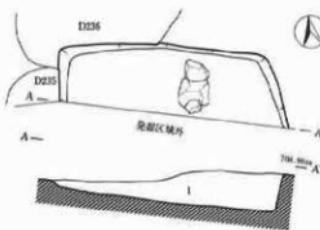
平面形態	一	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	161
深さ(cm)	35.0	長軸方向	—

第72表 D12号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	167	短軸(cm)	164
深さ(cm)	84.0	長軸方向	N-33°-E

第73表 D13号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	206	短軸(cm)	174
深さ(cm)	39.5	長軸方向	N-73°-W



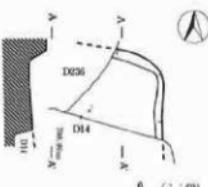
1層 暗茶褐色土 底面に灰土・炭化粒子を多く含む。

0 (1 : 60) 1m

第80図 D14号土坑実測図

第74表 D14号土坑計測・説明表

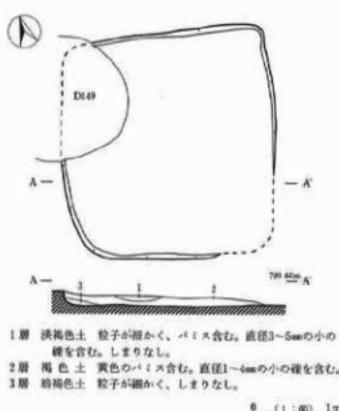
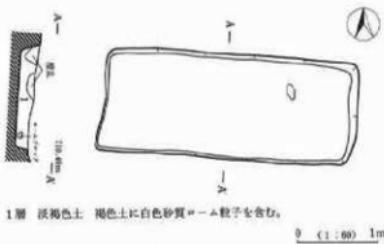
平面形態	一	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	287	短軸(cm)	—
深さ(cm)	66.5	長軸方向	—



第81図 D15号土坑実測図

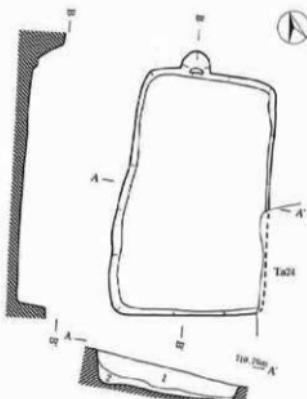
第75表 D15号土坑計測・説明表

平面形態	一	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	6.0	長軸方向	—



第76表 D16号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	313	短軸(cm)	128
深さ(cm)	30.5	長軸方向	N-86°-W

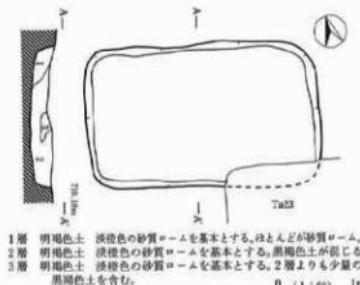


第79表 D19号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	382	短軸(cm)	383
深さ(cm)	50.5	長軸方向	N-20°-E

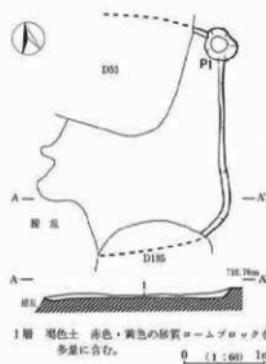
第77表 D17号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	280	短軸(cm)	266
深さ(cm)	21.5	長軸方向	N-15°-E



第78表 D18号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	290	短軸(cm)	167
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N-72°-W



第86図 D29号土坑実測図



第87図 D21号土坑実測図

第80表 D20号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(m)	19.0	方向	長軸方向



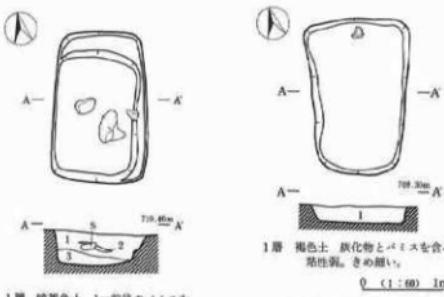
第88図 D22号土坑実測図

第82表 D22号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	183	短軸(cm)	175
深さ(m)	15.0	方向	N-82°-W

第81表 D21号土坑計測・説明表

平面形態	(楕円形)	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(m)	24.0	方向	長軸方向



第89図 D23号・D24号土坑実測図

第83表 D23号土坑計測・説明表

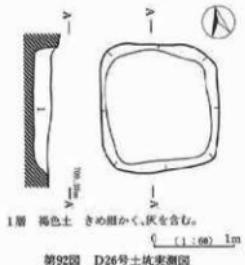
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	186	短軸(cm)	114
深さ(m)	44.5	方向	N-14°-E

第84表 D24号土坑計測・説明表

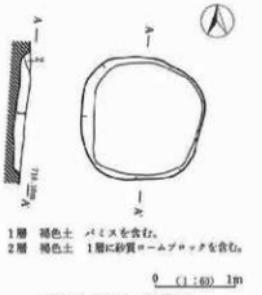
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	163	短軸(cm)	116
深さ(m)	29.0	方向	N-15°-E



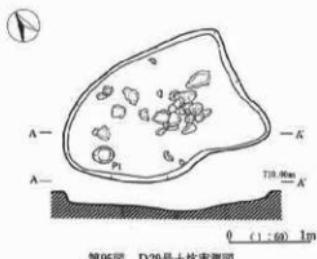
第91図 D25号土坑実測図



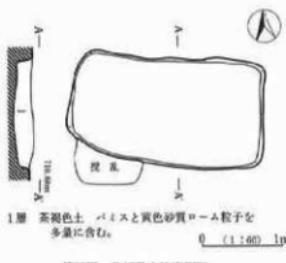
第92図 D26号土坑実測図



第94図 D28号土坑実測図



第95図 D29号土坑実測図



第93図 D27号土坑実測図

第85表 D25号土坑計測・説明表

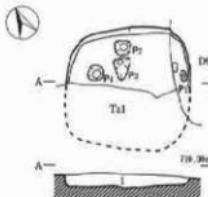
平面形態	方 形	断面形狀	逆 台 形
長軸(m)	178	短軸(m)	176
深さ(m)	37.0	長軸方向	N-13'-E

第87表 D27号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形狀	逆 台 形
長軸(m)	240	短軸(m)	132
深さ(m)	37.0	長軸方向	N-77'-W

第86表 D26号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形狀	逆 台 形
長軸(m)	160	短軸(m)	156
深さ(m)	33.0	長軸方向	N-12'-E



第96図 D39号土坑実測図

第88表 D28号土坑計測・説明表

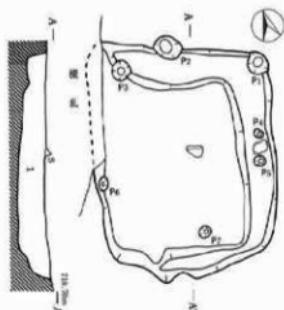
平面形態	円 形	断面形狀	逆 台 形
長軸(m)	150	短軸(m)	146
深さ(m)	29.5	長軸方向	N-7'-E

第89表 D29号土坑計測・説明表

平面形態	不 整 形	断面形狀	逆 台 形
長軸(m)	235	短軸(m)	158
深さ(m)	29.5	長軸方向	N-83'-W

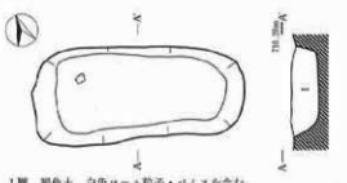
第90表 D30号土坑計測・説明表

平面形態	(楕大方形)	断面形狀	逆 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	154
深さ(m)	25.0	長軸方向	—



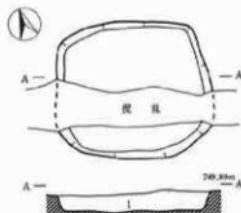
1層 明茶褐色土 黒色土、稍白色砂質ローム粒子を多量に、炭化粒子を少量含む。粘性・しまりが粗い。

第97図 D31号土坑実測図



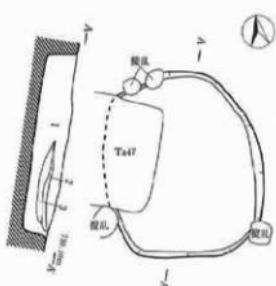
1層 浅褐色土 白色ローム粒子・ハミスを含む。
粘性・しまりが粗い。

第98図 D33号土坑実測図



1層 海色土 黄色砂質ローム・炭化物・焼土
塊を含む。粘性は弱い。

第99図 D32号土坑実測図



1層 明茶褐色土 ローム粒子・炭化物及びシスを
多量に含む。
2層 明茶褐色土 1層よりも大粒のロームを含む。
3層 晴茶褐色土 砂質ローム粒子と少量の炭化物を
含む。

第100図 D35号土坑実測図

第91表 D31号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(㎝)	294	短軸(㎝)	225
深さ(㎝)	45.6	長軸方向	N-12-E

第92表 D32号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(㎝)	188	短軸(㎝)	171
深さ(㎝)	27.5	長軸方向	N-72-W

第93表 D33号土坑計測・説明表

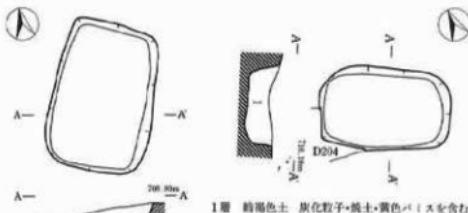
平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(㎝)	252	短軸(㎝)	112
深さ(㎝)	80.6	長軸方向	N-47-W

第94表 D34号土坑計測・説明表

平面形態	円 形	断面形状	連 台 形
長軸(㎝)	231	短軸(㎝)	196
深さ(㎝)	43.0	長軸方向	N

第95表 D35号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(㎝)	185	短軸(㎝)	124
深さ(㎝)	31.5	長軸方向	N-25-E



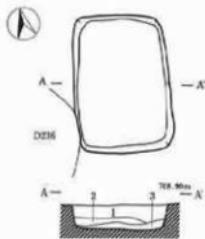
1層 晴褐色土 炭化粒子・燒土・黄色バクスを含む。

第102図 D36号土坑実測図

第101図 D35号土坑実測図

第96表 D36号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(㎝)	162	短軸(㎝)	102
深さ(㎝)	45.0	長軸方向	N-53-W



1層 淡茶褐色土 バイクス・砂質ローム粒子を含む。
2層 細茶褐色土 バイクス・砂質ローム粒子と
6cmに1層より多量に含む。
3層 黄褐色土 多量の砂質ローム粒子と少量
のバイクスを含む。 (1:60) 1m

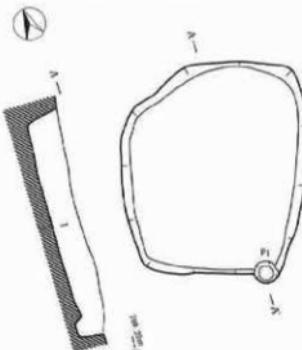
第103図 D37号土坑実測図



1層 黒褐色土 バイクス・砂質ローム粒子を少
量含む。粘性弱。

(1:60) 1m

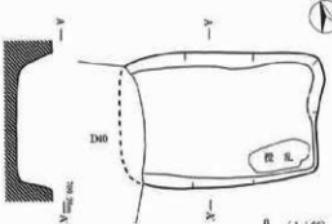
第104図 D38号土坑実測図



1層 茶褐色土 炭化物を含み、白模色の砂質ロームブロックを
多量に含む。さめが組い。

(1:60) 1m

第106図 D40号土坑実測図



第105図 D39号土坑実測図

第97表 D37号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	造 台 形
長軸(m)	174	短軸(m)	120
深さ(m)	42.5	長軸方向	N-11°-E

第98表 D38号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	造 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	135
深さ(m)	21.0	長軸方向	—

第99表 D39号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	造 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	156
深さ(m)	52.0	長軸方向	N-69°-W



1層 淡褐色土 砂段とバイクスを含む。
サツツリしている。

(1:60) 1m

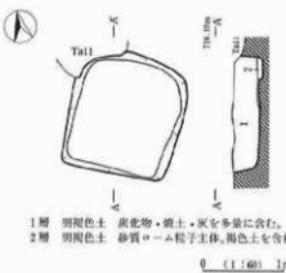
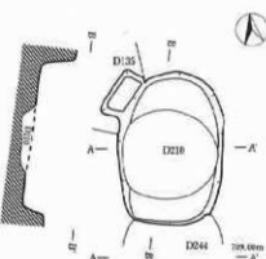
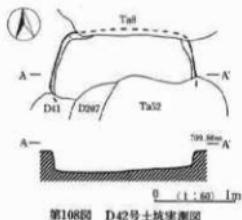
第107図 D41号土坑実測図

第100表 D40号土坑計測・説明表

平面形態	不規方形	断面形状	造 台 形
長軸(m)	261	短軸(m)	231
深さ(m)	52.0	長軸方向	N-24°-E

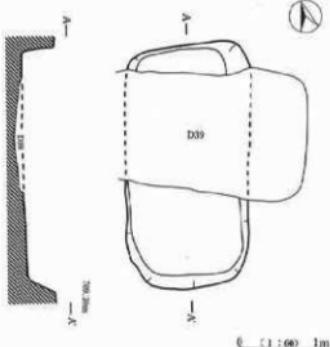
第101表 D41号土坑計測・説明表

平面形態	(長方形)	断面形状	造 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	143
深さ(m)	49.0	長軸方向	—



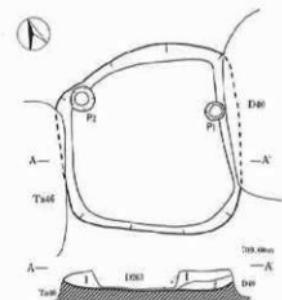
第104表 D44号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(m)	149	短軸(m)	149
深さ(m)	35.0	長軸方向	N-25-E



第105表 D45号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(m)	362	短軸(m)	154
深さ(m)	42.0	長軸方向	N-17-W



第106表 D46号土坑計測・説明表

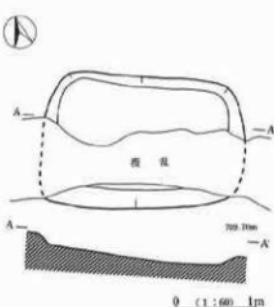
平面形態	不整方形	断面形状	連 台 形
長軸(m)	210	短軸(m)	—
深さ(m)	24.5	長軸方向	—



第113図 D47号土坑実測図



第114図 D48号土坑実測図



第115図 D49号土坑実測図

第107表 D47号土坑計測・説明表

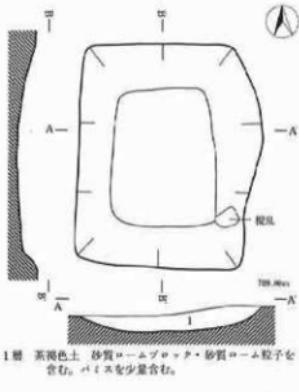
平面形態	方 形	断面形状	底 底 形
長軸(m)	156	短軸(m)	134
深さ(m)	26.5	長軸方向	N-5°-E

第108表 D48号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	底 底 形
長軸(m)	213	短軸(m)	106
深さ(m)	42.0	長軸方向	N-6.5°-E

第109表 D49号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	底 底 形
長軸(cm)	246	短軸(cm)	163
深さ(cm)	27.5	長軸方向	N-72°-W



第116図 D50号土坑実測図

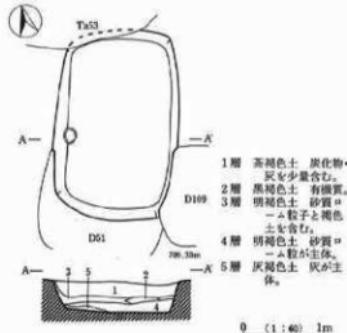
第110表 D56号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	底 底 形
長軸(m)	356	短軸(m)	224
深さ(m)	34.5	長軸方向	N

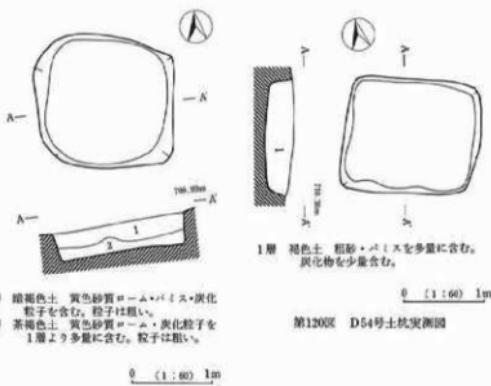
第117図 D51号土坑実測図

第111表 D51号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	底 底 形
長軸(m)	196	短軸(m)	156
深さ(m)	19.6	長軸方向	N-32°-E



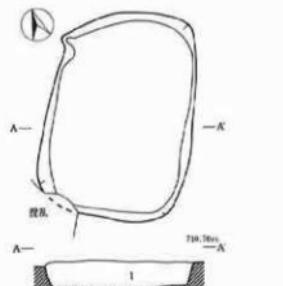
第1188 D52号土坑実測図



第1190 D54号土坑実測図

第1194 D53号土坑実測図

第112表 D52号土坑計測・説明表			
平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	228	短軸(cm)	153
深さ(cm)	47.0	長軸方向	N-13°-E



第1213 D55号土坑実測図

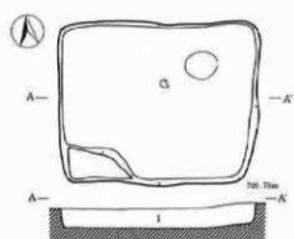
第115表 D55号土坑計測・説明表			
平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	257	短軸(cm)	186
深さ(cm)	39.5	長軸方向	N-31°-E

第113表 D53号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	169	短軸(cm)	167
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N-81°-W

第114表 D54号土坑計測・説明表

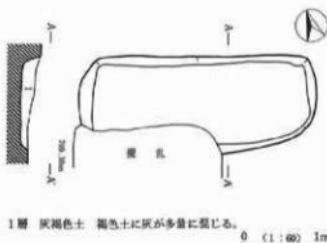
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	196	短軸(cm)	144
深さ(cm)	32.5	長軸方向	N-74°-W



第1222 D56号土坑実測図

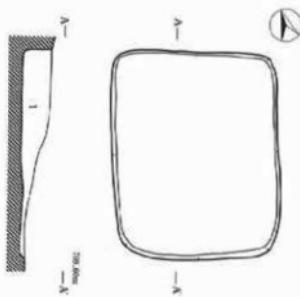
第116表 D56号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	245	短軸(cm)	209
深さ(cm)	39.0	長軸方向	N-5°-E



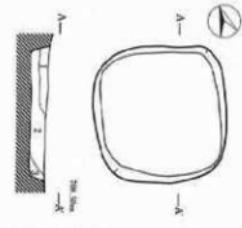
第123図 D57号土坑実測図

第117表 D57号土坑計測・説明表			
平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	294	短軸(m)	120
深さ(m)	51.5	長軸方向	N-18°-E

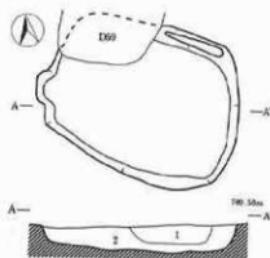


第124図 D58号土坑実測図

第118表 D58号土坑計測・説明表			
平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	247	短軸(m)	205
深さ(m)	52.5	長軸方向	N-19°-E



第125図 D59号土坑実測図

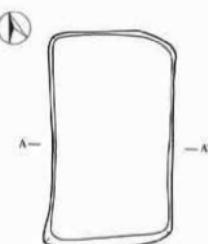


1層 黒色土 灰が多量に含まれる。
2層 黄褐色土 砂質ローム粒子・バクスを含む。

0 (1:60) 1m

第127図 D61号土坑実測図

第119表 D59号土坑計測・説明表			
平面形態	周大方形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	159	短軸(m)	151
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-18°-W



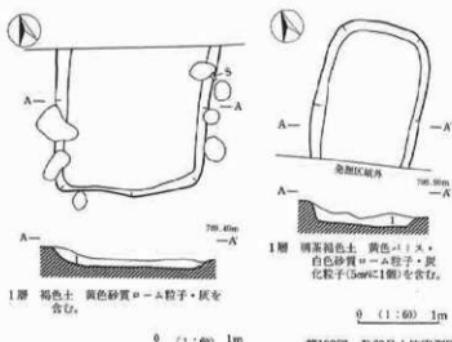
1層 黄褐色土 灰・塵小
バクスを含む。
0 (1:60) 1m

第128図 D61号土坑実測図

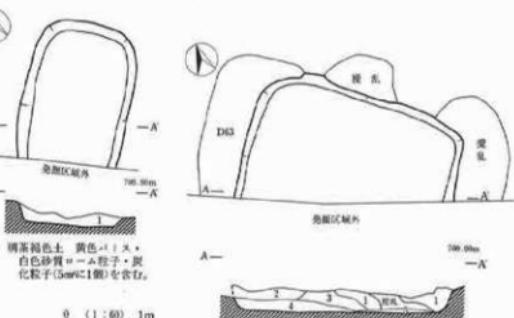
第120表 D60号土坑計測・説明表			
平面形態	周大方形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	268	短軸(m)	149
深さ(m)	44.5	長軸方向	N-16°-E

第121表 D61号土坑計測・説明表

平面形態	隅大方形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	245	短軸(m)	139
深さ(m)	28.5	長軸方向	N-67°-W



第128図 D62号土坑実測図



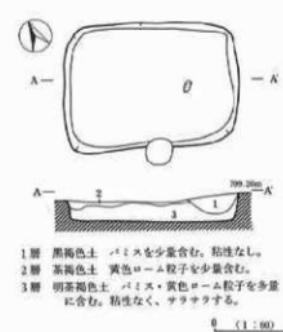
第129図 D63号土坑実測図

第122表 D62号土坑計測・説明表

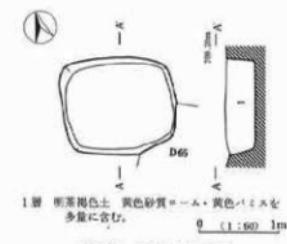
平面形態	長 方 形	断面形状	堆 積 形
長軸(m)	—	豎軸(m)	190
深さ(cm)	28.0	長軸方向	N-17-E

第123表 D63号土坑計測・説明表

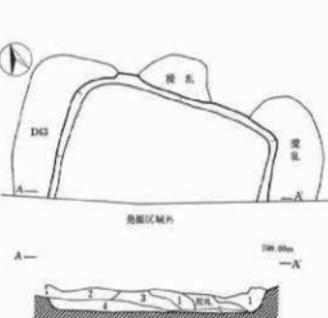
平面形態	長 方 形	断面形状	堆 積 形
長軸(m)	—	豎軸(m)	132
深さ(cm)	34.5	長軸方向	N-30-E



第131図 D65号土坑実測図



第132図 D66号土坑実測図



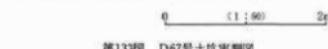
第130図 D64号土坑実測図

第124表 D64号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	堆 積 形
長軸(m)	—	豎軸(m)	264
深さ(cm)	65.5	長軸方向	—

1層 黄褐色土 パミス + 黄色砂質ローム粒子を少量含む。粘性なし。
2層 黄褐色土 黄色ローム粒子を少量含む。

3層 明茶褐色土 パミス、黄色ローム粒子を多量に含む。粘性なく。サラサラする。



第133図 D67号土坑実測図

第125表 D65号土坑計測・説明表

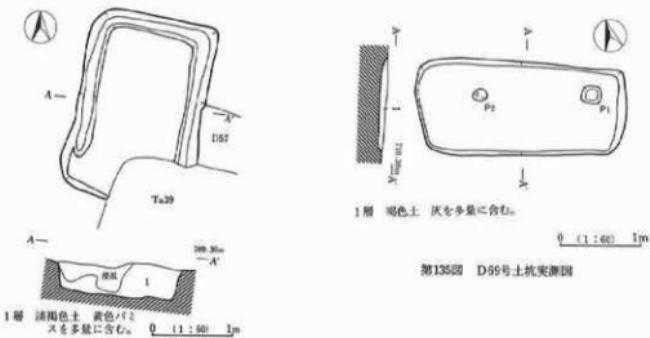
平面形態	長 方 形	断面形状	堆 積 形
長軸(m)	214	豎軸(m)	154
深さ(cm)	28.5	長軸方向	N-63-W

第126表 D66号土坑計測・説明表

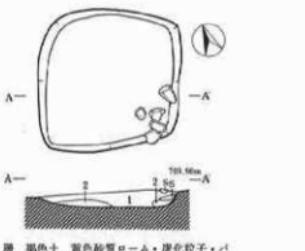
平面形態	長 方 形	断面形状	堆 積 形
長軸(m)	140	豎軸(m)	121
深さ(cm)	42.0	長軸方向	N-79-W

第127表 D67号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	堆 積 形
長軸(m)	—	豎軸(m)	200
深さ(cm)	33.5	長軸方向	N-77-W



第134図 D68号土坑実測図



第136図 D70号土坑実測図



第137図 D71号土坑実測図

第128表 D68号土坑計測・説明表

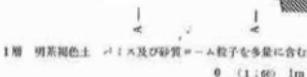
平面形態	方 形	断面形状	連合形
長軸(cm)	234	短軸(m)	155
深さ(cm)	51.0	長軸方向	N-14°-E

第129表 D69号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	角 地 形
長軸(cm)	260	短軸(m)	118
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N-7°-W

第130表 D70号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	舟 地 形
長軸(cm)	176	短軸(m)	174
深さ(cm)	28.5	長軸方向	N-67°-W



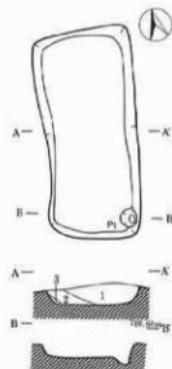
第138図 D72号土坑実測図

第131表 D71号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	173	短軸(m)	159
深さ(cm)	65.5	長軸方向	E

第132表 D72号土坑計測・説明表

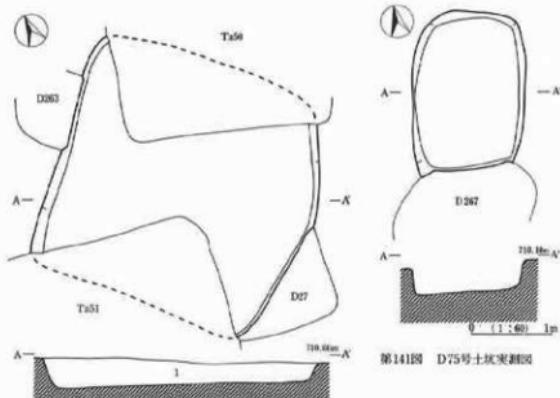
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	162	短軸(m)	131
深さ(cm)	27.5	長軸方向	N-5°-W



- 1層 暗褐色土・灰・炭化物を多量に含む。
- 2層 黄褐色土・砂質ローム粒子を多量に含む。
- 3層 黒褐色土・きめ細かい。

0 (1:60) 1m

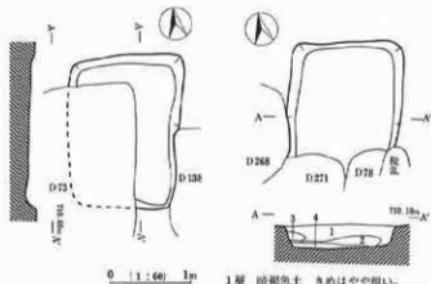
第139図 D73号土坑実測図



- 1層 明茶褐色土・小の礫・灰(10cmに1~2個)・黒色土ブロックを含む。
- 壁面において黄色砂質ロームを多く含む。

0 (1:60) 1m

第140図 D74号土坑実測図



第142図 D76号土坑実測図

- 1層 暗褐色土・きめはやや粗い。
- 2層 黄褐色土・砂質ロームを主堆とする。
- 3層 黄褐色土・黄褐色土に暗褐色土が混じる。
- 4層 暗褐色土・暗褐色土に黄褐色土が混じる。

0 (1:60) 1m

第143図 D77号土坑実測図

第133表 D73号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	259	短軸(m)	115
深さ(m)	24.0	長軸方向	N-8'-E

第134表 D74号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	321	短軸(m)	—
深さ(m)	43.0	長軸方向	—

第135表 D75号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	216	短軸(m)	140
深さ(m)	29.0-35.0	長軸方向	N-15'-E

第136表 D76号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	189	短軸(m)	130
深さ(m)	17.0	長軸方向	N-9'-E

第137表 D77号土坑計測・説明表

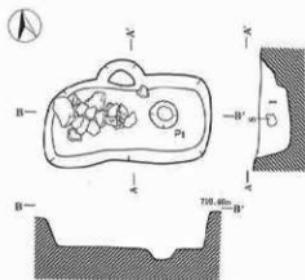
平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	36.0	長軸方向	N-15'-E

第138表 D78号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	82	短軸(m)	—
深さ(m)	35.5	長軸方向	N-11'-E

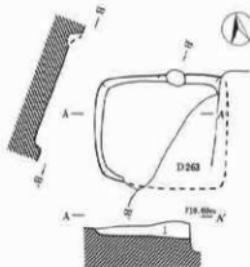
第144図 D78号土坑実測図





1層 明茶褐色土 砂の粗く、小の礫を少量含む。黒色土および白色砂質ロームがブロック状に含まれる。
0 (1:60) 1m

第145図 D79号土坑実測図



1層 明褐色土 白色砂質ローム粒子を多量に含む。

0 (1:60) 1m

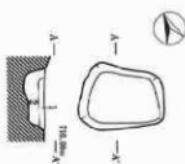
第146図 D80号土坑実測図

第139表 D79号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	205	短軸(m)	122
深さ(m)	48.0	長軸方向	N-82°-W

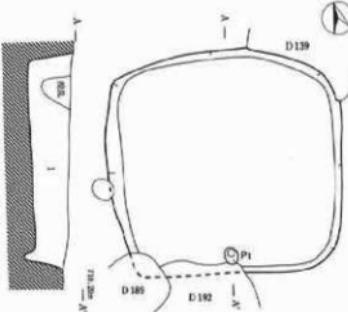
第140表 D80号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	—	短軸(m)	128
深さ(m)	14.0	長軸方向	N-81°-W



1層 黄褐色土 黄色砂質ローム粒子
と小の礫を含む。きめは粗い。
2層 時茶褐色土 硬化粒子を含む。
黄色砂質ロームがブロック状
に含まれる。きめは細かい。
0 (1:60) 1m

第147図 D81号土坑実測図



1層 明茶褐色土 黄色砂質ローム粒子を主体とする。

0 (1:60) 2m

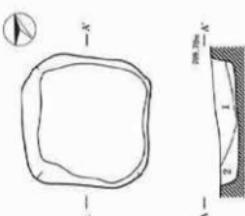
第148図 D82号土坑実測図

第141表 D81号土坑計測・説明表

平面形態	圓角長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	103	短軸(m)	75
深さ(m)	32.0	長軸方向	N-64°-W

第142表 D82号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	連台形
長軸(m)	288	短軸(m)	276
深さ(m)	62.5	長軸方向	N-73°-W

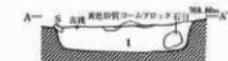


1層 褐色土 灰、炭化物を含む。
2層 明褐色土 1層に黄色砂質ロームが混じる。
0 (1:60) 1m

第149図 D83号土坑実測図

第143表 D83号土坑計測・説明表

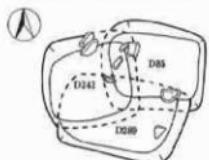
平面形態	方形	断面形状	連台形
長軸(m)	158	短軸(m)	135
深さ(m)	27.0	長軸方向	N-19°-E



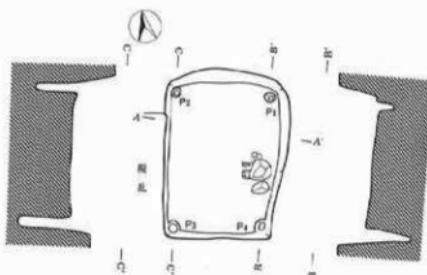
1層 黄褐色土 沙質ローム粒子・礫を含む。
2層 黄褐色土 沙質ローム粒子を主体とする。炭化物を含む。

0 (1:60) 1m

第150図 D84号土坑実測図



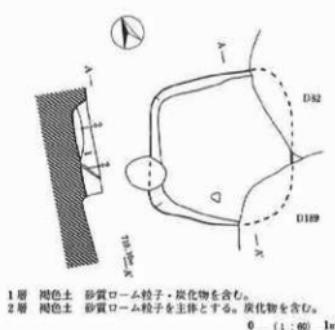
第151図 D85号・D242号・D289号土坑実測図



1層 黄褐色土 沙質ローム粒子を主体とする。
2層 黄褐色土 沙質ローム粒子・黒色土ブロックを多量に含む。

0 (1:60) 1m

第152図 D86号土坑実測図



1層 黄褐色土 沙質ローム粒子・炭化物を含む。
2層 黄褐色土 沙質ローム粒子を主体とする。炭化物を含む。

第153図 D87号土坑実測図

第144表 D84号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	邊台形
長軸(cm)	266	短軸(cm)	169
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N

第145表 D85号・D242号・D289号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	—
D	—	短軸(cm)	—
85	—	長軸方向	—
	38.5	—	—
平面形態	方形	断面形状	—
D	—	短軸(cm)	—
242	—	長軸方向	—
	40.0	—	—
平面形態	長方形	断面形状	—
D	—	短軸(cm)	—
289	—	長軸方向	—
	33.0	—	—

第146表 D86号土坑計測・説明表

平面形態	方形	断面形状	邊台形
長軸(cm)	185	短軸(cm)	173
深さ(cm)	36.0	長軸方向	N-23°-E



1層 明褐色土 炭化物・鐵土・灰土を含む。

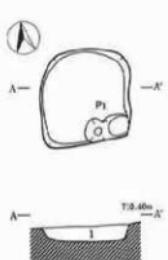
第154図 D88号土坑実測図

第147表 D87号土坑計測・説明表

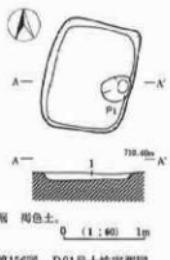
平面形態	長方形	断面形状	邊台形
長軸(cm)	210	短軸(cm)	76
深さ(cm)	52.0	長軸方向	N-11°-E

第148表 D88号土坑計測・説明表

平面形態	曲屋風	断面形状	邊台形
長軸(cm)	256・227	短軸(cm)	119・173
深さ(cm)	29.0・41.0	長軸方向	—



1層 暗褐色土 5mm前後のバシスを含む。粘性弱。



第156図 D91号土坑実測図



- 1層 暗褐色土 砂質ローム粒子を含む。
さめが粗い。
2層 暗褐色土 砂質ローム粒子を含む。
さめが細かい。
3層 暗褐色土 バシスを少量含む。
さめが細かい。

第157図 D92号土坑実測図

第158図 D90号土坑実測図

第149表 D90号土坑計測・説明表			
平面形態	方 形	断面形状	邊 台 形
長軸(cm)	116	短軸(cm)	109
深さ(cm)	25.5	長軸方向	N-7.5°-E

第150表 D91号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	邊 台 形
長軸(cm)	136	短軸(cm)	106
深さ(cm)	18.5	長軸方向	N-14°-E

第151表 D92号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	邊 台 形
長軸(cm)	86	短軸(cm)	46
深さ(cm)	46.5	長軸方向	N-77°-W

1層 暗褐色土 白色砂質ロームを多量に含む。

0 (1:60) 2m

第158図 D93号土坑実測図

第152表 D93号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	邊 台 形
長軸(cm)	226	短軸(cm)	156
深さ(cm)	15.5	長軸方向	N-76°-W

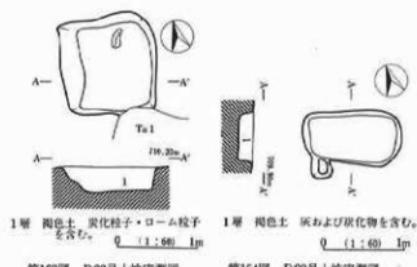
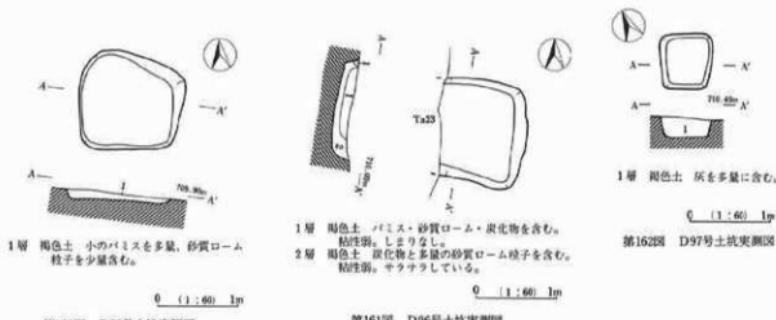
1層 暗褐色土 さめが細く、灰・バシス・砂質ロームを含む。

2層 暗褐色土 灰・バシスを含む。

0 (1:60) 1m

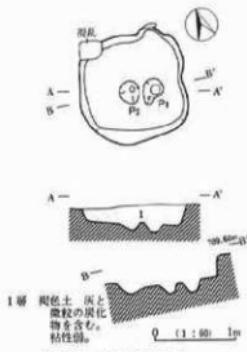
第159図 D94号土坑実測図

第153表 D94号土坑計測・説明表			
平面形態	長 方 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	217	短軸(cm)	123
深さ(cm)	38.0	長軸方向	N-8°-E



第157表 D98号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	123	短軸(cm)	120
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N-11°-E



第159表 D100号土坑計測・説明表

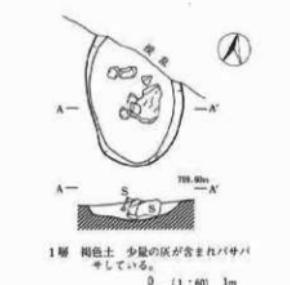
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	133	短軸(cm)	125
深さ(cm)	43.0	長軸方向	N-14°-E

第154表 D95号土坑計測・説明表			
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	127	短軸(cm)	121
深さ(cm)	10.0	長軸方向	N-79°-W

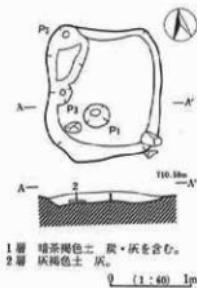
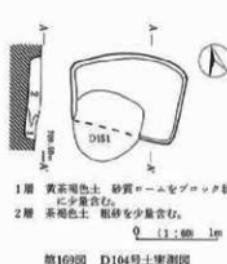
第155表 D96号土坑計測・説明表			
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	125
深さ(cm)	33.5	長軸方向	—

第156表 D97号土坑計測・説明表			
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	69	短軸(cm)	64
深さ(cm)	25.5	長軸方向	N-27°-E

第158表 D99号土坑計測・説明表			
平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	121	短軸(cm)	94
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N-68°-W



第160表 D101号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	117
深さ(cm)	24.5	長軸方向	—



第161表 D102号土坑計測・説明表

平面形態	横 円 形	断面形状	角 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	107
深さ(cm)	23.0	長軸方向	—

第162表 D103号土坑計測・説明表

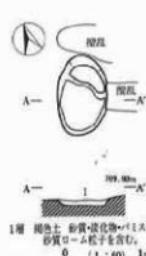
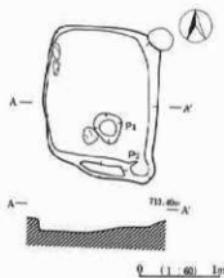
平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	125	短軸(cm)	75
深さ(cm)	23.0	長軸方向	N-18°-E

第163表 D104号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	137	短軸(cm)	101
深さ(cm)	26.0	長軸方向	N-65°-W

第164表 D105号土坑計測・説明表

平面形態	隅 久 長方 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	161	短軸(cm)	138
深さ(cm)	23.5	長軸方向	N-9°-E

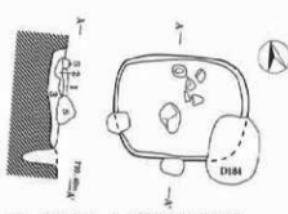


第165表 D106号土坑計測・説明表

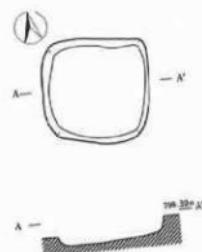
平面形態	長 方 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	184	短軸(cm)	142
深さ(cm)	35.5	長軸方向	N-9°-E

第166表 D107号土坑計測・説明表

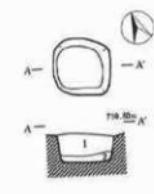
平面形態	横 円 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	97	短軸(cm)	63
深さ(cm)	7.0	長軸方向	N-21°-E



1層 茶褐色土 岩・瓦の粒子を多量に含む。
2層 黒褐色土 瓦の粒子
3層 喬葉褐色土 淡化粧子が 1cm^2 につき2個位
含まれる。

0 (1:60) 1m
第173図 D108号土坑実測図

0 (1:60) 1m
第174図 D109号土坑実測図



1層 茶褐色土 淡化粧子・砂
2層 喬葉褐色土 砂質ローム
3層 黒褐色土 瓦の粒子を多量に含む。
岩の粒子を含む。

0 (1:60) 1m
第175図 D110号土坑実測図

第167表 D108号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	167	短軸(cm)	129
深さ(cm)	20.0	長軸方向	N-76-W

第168表 D109号土坑計測・説明表

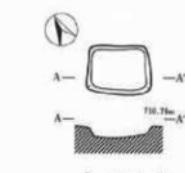
平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	130	短軸(cm)	125
深さ(cm)	30.5	長軸方向	N-80-W



1層 喬葉褐色土 粒子細かく粘性弱。
小の礫を少量含む。
2層 黒褐色土 粒子細かく粘性弱。
小の礫を少量含む。
3層 開 色 土 粒子粗かく粘性弱。
黄色沙質ロームを少量含む。

0 (1:60) 1m
第176図 D111号土坑実測図

1層 新鮮褐色土。
2層 淡褐色土。岩・焼土を多く含む。

0 (1:60) 1m
第177図 D112号土坑実測図

1層 淡褐色土。炭化粧子・炭化物を少量含む。
2層 淡褐色土。1層とはほぼ同一であるが、ローム粒子をより多く含む。

0 (1:60) 1m
第178図 D113号土坑実測図

第169表 D110号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	71	短軸(cm)	70
深さ(cm)	35.5	長軸方向	N-20-E

第170表 D111号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	125	短軸(cm)	115
深さ(cm)	28.0	長軸方向	N-28-E

第171表 D112号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	104	短軸(cm)	72
深さ(cm)	32.0	長軸方向	N-23-E

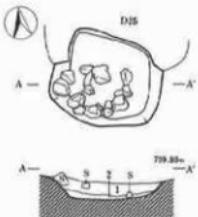
第172表 D113号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	77	短軸(cm)	58
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N-67-W

第173表 D114号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	116	短軸(cm)	103
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N-28-E

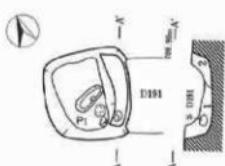
0 (1:60) 1m
第179図 D114号土坑実測図



1層 暗褐色土 稲が根深い。
2層 明褐色土、細白色砂質ロームを
多量に含む。

0 (1:60) 1m

第180図 D115号土坑実測図



1層 暗褐色土、稲子細かく粘性弱。小の磚・
黄色砂質ローム少量。灰を微量含む。
2層 暗色土、稲子細かく粘性弱。小の磚・
黄色砂質ローム多量。灰を微量含む。

0 (1:60) 1m

第181図 D116号土坑実測図



1層 暗色土、砂質ローム粒子を含む。
粘性弱。

0 (1:60) 1m

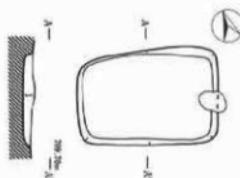
第182図 D117号土坑実測図



1層 暗褐色土、砂質ローム粒子を多量に含む。

0 (1:60) 1m

第183図 D118号土坑実測図



1層 暗褐色土、灰・炭化物・砂質ローム
粒子を含む。

0 (1:60) 1m

第184図 D119号土坑実測図



1層 暗茶褐色土、黄色砂質ロームブロック・
炭化粒子が、少量含まれる。

0 (1:60) 1m

第185図 D120号土坑実測図

第175表 D115号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	137	短軸(m)	111
深さ(m)	31.0	長軸方向	N-66°-W

第176表 D117号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	86	短軸(m)	84
深さ(m)	19.5	長軸方向	N-65°-W

第177表 D118号土坑計測・説明表

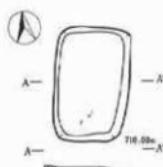
平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	149	短軸(m)	71
深さ(m)	23.0	長軸方向	N-75°-W

第178表 D119号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	175	短軸(m)	118
深さ(m)	12.0	長軸方向	N-71°-W

第179表 D120号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	102	短軸(m)	96
深さ(m)	18.0	長軸方向	N-25°-E



1層 暗褐色土、炭化粒子を含む。

0 (1:60) 1m

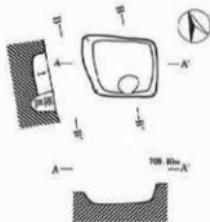
第186図 D121号土坑実測図

第180表 D121号土坑計測・説明表

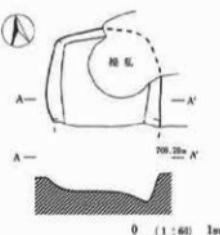
平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	142	短軸(m)	92
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-13°-E



第187図 D122号土坑実測図



第188図 D123号土坑実測図



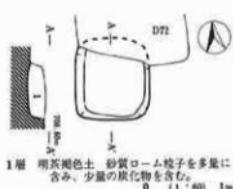
第189図 D124号土坑実測図



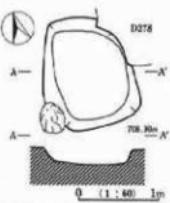
第190図 D125号土坑実測図

第181表 D122号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	連台形
長軸(m)	102	短軸(m)	98
深さ(m)	41.5	長軸方向	N-15°-W

第182表 D123号土坑計測・説明表			
平面形態	不整形形	断面形状	連台形
長軸(m)	89	短軸(m)	76
深さ(m)	27.0	長軸方向	N-66°-W



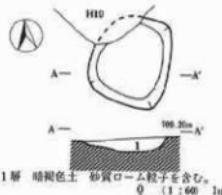
第191図 D127号土坑実測図



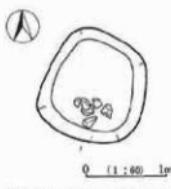
第192図 D128号土坑実測図

第183表 D124号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	連台形
長軸(m)	—	短軸(m)	140
深さ(m)	46.0	長軸方向	—

第184表 D126号土坑計測・説明表			
平面形態	—	断面形状	—
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	23.5	長軸方向	—



第193図 D129号土坑実測図



第194図 D130号土坑実測図

第185表 D127号土坑計測・説明表			
平面形態	方形	断面形状	連台形
長軸(m)	—	短軸(m)	92
深さ(m)	35.0	長軸方向	—

第186表 D128号土坑計測・説明表			
平面形態	不整長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	138	短軸(m)	111
深さ(m)	24.5	長軸方向	N-12°-E

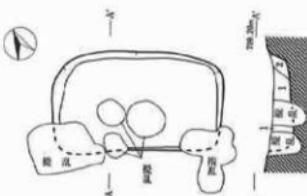
第187表 D129号土坑計測・説明表			
平面形態	不整方形	断面形状	角底形
長軸(m)	110	短軸(m)	95
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-22°-E

第188表 D130号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	—
長軸(m)	135	短軸(m)	125
深さ(m)	26.5	長軸方向	N-25°-E



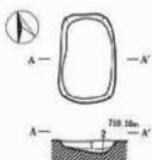
1層 暗色土
2層 暗色土
3層より明るい褐色土。
0 (1:60) 1m

第195図 D131号土坑実測図



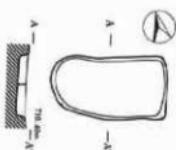
1層 暗色土
2層 暗色土
3層より明るい褐色土。
0 (1:60) 2m

第196図 D132号土坑実測図



1層 暗褐色土
2層 明褐色土
3層より褐色土。
0 (1:60) 1m

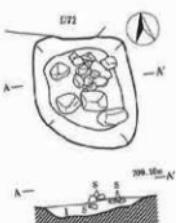
第197図 D133号土坑実測図



1層 暗色土
2層 灰を多量に含む。

0 (1:60) 1m

第198図 D134号土坑実測図



1層 暗褐色土
2層 灰を含む。

0 (1:60) 1m

第199図 D135号土坑実測図

第189表 D131号土坑計測・説明表

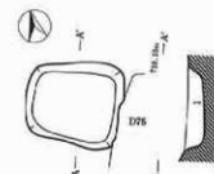
平面形態	長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	80	短軸(m)	62
深さ(m)	41.0	長軸方向	N-72°-W

第190表 D132号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	219	短軸(m)	121
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-22°-E

第191表 D133号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	110	短軸(m)	68
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-20°-E



1層 暗色土
2層 粗砂を多量に含む。

0 (1:60) 1m

第200図 D135号土坑実測図

第192表 D134号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	142	短軸(m)	76
深さ(m)	16.0	長軸方向	N-76°-W

第193表 D135号土坑計測・説明表

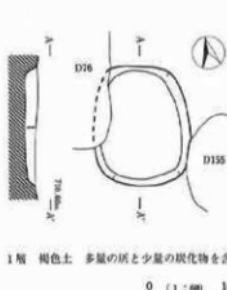
平面形態	不整長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	140	短軸(m)	126
深さ(m)	18.5	長軸方向	N-5°-W

第194表 D136号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	121	短軸(m)	105
深さ(m)	35.0	長軸方向	N-71°-W



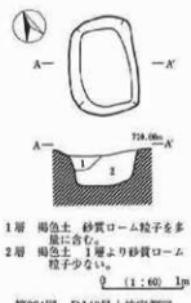
第201図 D137号土坑実測図



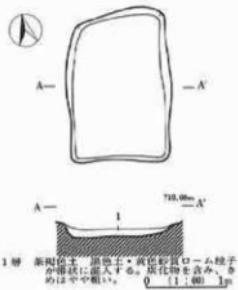
第202図 D138号土坑実測図



第203図 D139号土坑実測図



第204図 D140号土坑実測図



第205図 D141号土坑実測図

第199表 D141号土坑計測・説明表			
平面形態	長方形	断面形状	連合形
長軸(cm)	184	短軸(cm)	130
深さ(cm)	43.0	長軸方向	N-12°-E

第200表 D142号土坑計測・説明表

第200表 D142号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	連合形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	140
深さ(cm)	78.6	長軸方向	N-22°-E

第195表 D137号土坑計測・説明表

平面形態	長方形	断面形状	連合形
長軸(cm)	131	短軸(cm)	99
深さ(cm)	39.0	長軸方向	N-78°-W

第196表 D138号土坑・説明表

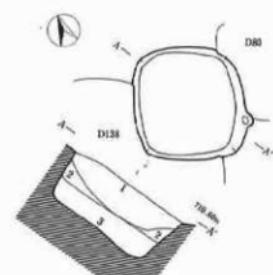
平面形態	楕丸形	断面形状	連合形
長軸(cm)	148	短軸(cm)	119
深さ(cm)	38.5	長軸方向	N-7°-E

第197表 D139号土坑計測・説明表

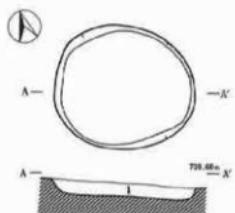
平面形態	不整方形	断面形状	連合形
長軸(cm)	123	短軸(cm)	115
深さ(cm)	37.0	長軸方向	N-8°-E

第198表 D140号土坑計測・説明表

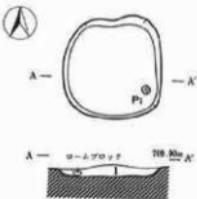
平面形態	長方形	断面形状	連合形
長軸(cm)	125	短軸(cm)	84
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N-16°-E



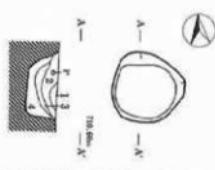
第206図 D142号土坑実測図



第213図 D149号土坑実測図



第214図 D150号土坑実測図



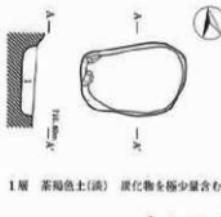
第215図 D151号土坑実測図

第207表 D149号土坑計測・説明表			
平面形態	円 形	断面形状	迷 台 形
長軸(cm)	162	短軸(cm)	156
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N=90°-E

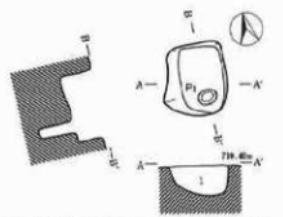
第208表 D150号土坑計測・説明表			
平面形態	円 形	断面形状	迷 台 形
長軸(cm)	123	短軸(cm)	121
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N

第209表 D151号土坑計測・説明表			
平面形態	円 形	断面形状	迷 台 形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	85
深さ(cm)	45.0	長軸方向	N=87°-W

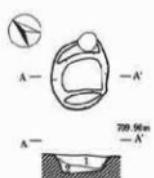
第210表 D152号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	迷 台 形
長軸(cm)	128	短軸(cm)	86
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N=84°-W



第216図 D152号土坑実測図



第217図 D154号土坑実測図



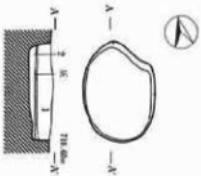
第218図 D153号土坑実測図

1層 開色土 黄褐色土(淡)を含む。
2層 開色土 1層に黄色ロームが混じる。

0 (1:40) 1m

第211表 D153号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	迷 台 形
長軸(cm)	56	短軸(cm)	68
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N=55°-E

第212表 D154号土坑計測・説明表			
平面形態	真 方 形	断面形状	迷 台 形
長軸(cm)	86	短軸(cm)	74
深さ(cm)	48.0	長軸方向	N=12°-E

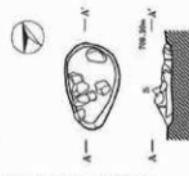


1層 深茶褐色土
2層 暗茶褐色土

炭化粒を含む。
底部に灰が混じる。

0 (1:60) 1m

第219図 D155号土坑実測図

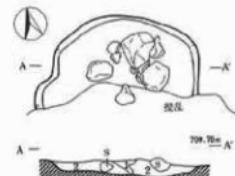


1層 褐色土
2層 淡白色土

炭化物を含む白色
の灰層。

0 (1:60) 1m

第220図 D156号土坑実測図

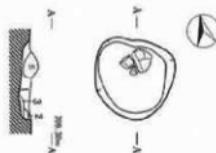


1層 黒灰色土
2層 褐色土

灰まじり。
炭化物を含む。

0 (1:60) 1m

第221図 D157号土坑実測図



1層 褐色土
2層 暗黒色土
3層 暗色土

灰が混じりやすくバキバキしている。
炭化物を含む。
1層にローム粒子が混じる。

0 (1:60) 1m

第222図 D158号土坑実測図

平面形態	円 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	163	短軸(m)	86
深さ(m)	14.0	長軸方向	N-37°-W



1層 暗褐色土
2層 黑色土

バクスを含み、きめ細
かく粘性、しまりなし。
炭化物を含む。

0 (1:60) 1m

第223図 D159号土坑実測図



1層 暗褐色土
2層 暗色土

ロームを含み、きめ細
かくサフサフしている。
3層の底に、しまりあり。

0 (1:60) 1m

第224図 D160号土坑実測図

第213図 D155号土坑計測・説明表

平面形態	不 壓 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	121	短軸(m)	88
深さ(m)	31.0	長軸方向	N-11°-E

第214図 D156号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	104	短軸(m)	65
深さ(m)	15.5	長軸方向	N-20°-E

第215図 D157号土坑計測・説明表

平面形態	不 壓 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	17.0	長軸方向	—



1層 暗褐色土
2層 暗色土

炭化物を含む。きめ細
かくしまりなし。
口づぶ・炭化物を含む。
しまりあり。

0 (1:60) 1m

第225図 D161号土坑実測図

第216表 D158号土坑計測・説明表

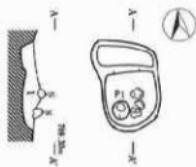
平面形態	楕円形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	78	短軸(m)	76
深さ(m)	95.0	長軸方向	N

第217表 D159号土坑計測・説明表

平面形態	楕円形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	96	短軸(m)	84
深さ(m)	26.5	長軸方向	N-87°-W

第218表 D160号土坑計測・説明表

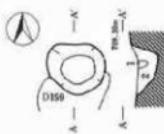
平面形態	椭 圆 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	107	短軸(m)	106
深さ(m)	30.0	長軸方向	N-86°-E



1層 褐色土 壁に灰が混じる。

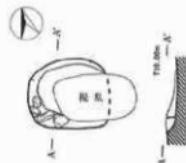
0 (1:60) 1m

第226図 D162号土坑実測図

1層 褐色土 きめ細かく粘性なし。
2層 褐色土 ロームを多量に含む。

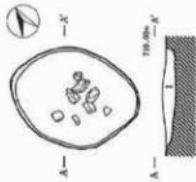
0 (1:60) 1m

第227図 D163号土坑実測図

1層 褐色土 灰を多量に含む。
色調はくすむ。

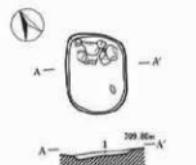
0 (1:60) 1m

第228図 D164号土坑実測図

1層 褐色土 灰を多量に含むため、
色調がくすむ。

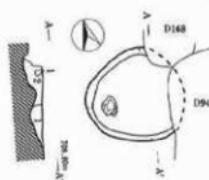
0 (1:60) 1m

第229図 D165号土坑実測図

1層 褐色土 灰を含み、色調が
くすむ。

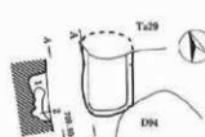
0 (1:60) 1m

第230図 D166号土坑実測図

1層 褐色土 パミス・ローム粒子を含む。
小の塊を多量に含む。炭化物を含む。
2層 よりローム粒子の量が多い。
粘性なし。2層 褐色土 パミス・ローム粒子を含む。
小の塊を含む。粘性なし。

0 (1:60) 1m

第231図 D167号土坑実測図

1層 茶褐色土 パミス・ローム粒子を含む。
粘性なし。しまりなし。
2層 茶褐色土 ローム段状・炭化物を含む。
きめ細かく粘性なし。1層上
りやく黒っぽい。

0 (1:60) 1m

第232図 D168号土坑実測図

第220表 D162号土坑計測・説明表

平面形態	横 円 形	断面形状	造 台 形
長軸(cm)	110	短軸(cm)	72
深さ(cm)	14.5	長軸方向	N-5°-E

第221表 D163号土坑計測・説明表

平面形態	円 形	断面形状	造 台 形
長軸(cm)	73	短軸(cm)	62
深さ(cm)	34.0	長軸方向	N

第222表 D164号土坑計測・説明表

平面形態	楕円長方形	断面形状	造 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	87
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N-73°-W

第223表 D165号土坑計測・説明表

平面形態	横 円 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	162	短軸(cm)	121
深さ(cm)	23.5	長軸方向	N-46°-W

第224表 D166号土坑計測・説明表

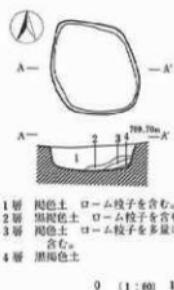
平面形態	楕円長方形	断面形状	造 台 形
長軸(cm)	100	短軸(cm)	75
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N-24°-E

第225表 D167号土坑計測・説明表

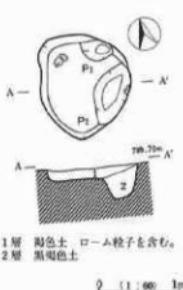
平面形態	円 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	114
深さ(cm)	12.5	長軸方向	—

第226表 D168号土坑計測・説明表

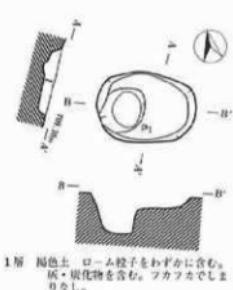
平面形態	方 形	断面形状	造 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	82
深さ(cm)	34.5	長軸方向	N-21°-E



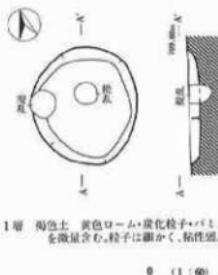
第233図 D159号土坑実測図



第234図 D170号土坑実測図

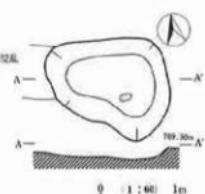


第235図 D171号土坑実測図

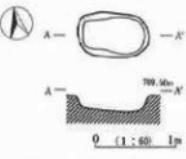


第236図 D172号土坑実測図

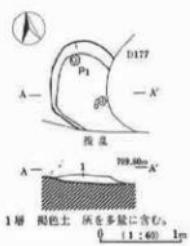
第230表 D172号土坑計測・説明表			
平面形態	円形	断面形状	舟底形
長軸(m)	146	短軸(m)	128
深さ(m)	25.0	長軸方向	N-6°-E



第237図 D173号土坑実測図



第238図 D175号土坑実測図



第239図 D176号土坑実測図

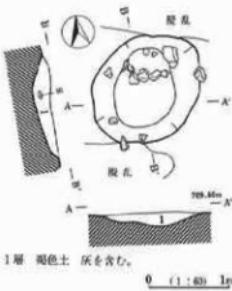
第231表 D173号土坑計測・説明表			
平面形態	不整形	断面形状	連台形
長軸(m)	144	短軸(m)	109
深さ(m)	23.0	長軸方向	N-85°-W

第232表 D175号土坑計測・説明表

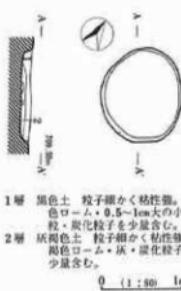
第232表 D175号土坑計測・説明表			
平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(m)	88	短軸(m)	54
深さ(m)	22.0	長軸方向	N-79°-W

第233表 D176号土坑計測・説明表

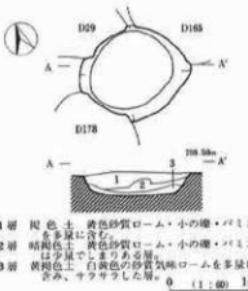
平面形態	—	断面形状	舟底形
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	20.0	長軸方向	—



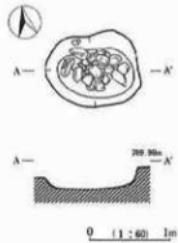
第246図 D177号土坑実測図



第247図 D178号土坑実測図



第248図 D179号土坑実測図



第249図 D180号土坑実測図



第250図 D181号土坑実測図

第234表 D177号土坑計測・説明表

平面形態	円 形	断面形状	角 底 形
長軸(cm)	133	豊軸(cm)	132
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N-13°-E

第235表 D178号土坑計測・説明表

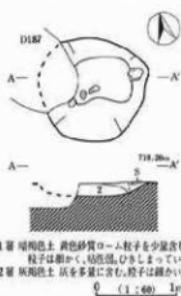
平面形態	円 形	断面形状	連合 形
長軸(cm)	135	豊軸(cm)	130
深さ(cm)	12.0	長軸方向	N-32°-W

第236表 D179号土坑計測・説明表

平面形態	円 形	断面形状	連合 形
長軸(cm)	138	豊軸(cm)	138
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N-62°-E

第237表 D180号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	114	豊軸(cm)	86
深さ(cm)	28.0	長軸方向	N-85°-W



第245図 D182号土坑実測図



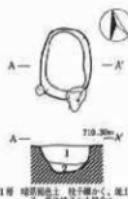
第246図 D183号土坑実測図

第238表 D181号土坑計測・説明表

平面形態	(椭圓形)	断面形状	角 底 形
長軸(cm)	—	豊軸(cm)	160
深さ(cm)	16.5	長軸方向	N-49°-E

第239表 D182号土坑計測・説明表

平面形態	不整円形	断面形状	角 底 形
長軸(cm)	—	豊軸(cm)	128
深さ(cm)	17.0	長軸方向	—

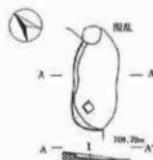


第247図 D182号土坑実測図

第240表 D183号土坑計測・説明表

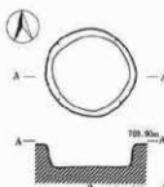
平面形態	椭 圆 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	141	豊軸(cm)	120
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N-5°-W

平面形態	椭 圆 形	断面形状	U 字 形
長軸(cm)	87	豊軸(cm)	61
深さ(cm)	43.5	長軸方向	N-15°-E

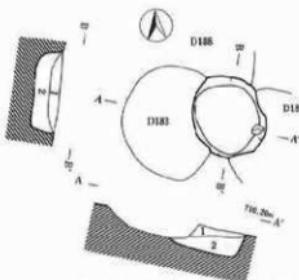


1層 棕色土 黄色砂質ローム・小の根を多量に含む。
粒子は細かく粘性弱。
0 (1:60) 1m

第248図 D185号土坑実測図



第249図 D186号土坑実測図



1層 棕褐色土 粗砂を少量と黄色砂質ローム微量を含む。
粒子は細かい。
2層 棕色土 粗砂・少量の炭化粒子を含む、黄色砂質ロームを
ブロック状に含む。粒子は細かい。 0 (1:60) 1m

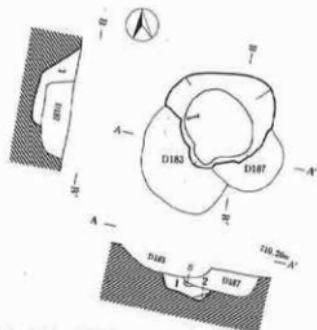
第250図 D187号土坑実測図

第242表 D185号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	9.0	長軸方向	—

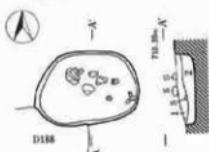
第243表 D186号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	111	短軸(cm)	108
深さ(cm)	29.5	長軸方向	N-88°-W



1層 棕色土 黄色砂質ローム・小の根を多量に含む。
粒子は細かく粘性弱。
2層 黒色土 黄色砂質ロームが混入する。粒子は細かい。
0 (1:60) 1m

第251図 D188号土坑実測図



1層 塔褐色土 黄色砂質ロームを少量、炭化粒子を微量含む。粒子は細かい。
2層 棕色土 黄色砂質ロームを多量に含む。粒子は細かい。
0 (1:60) 1m

第252図 D189号土坑実測図

第244表 D187号土坑計測・説明表

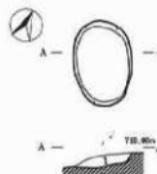
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	103	短軸(cm)	87
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N-23°-W

第245表 D188号土坑計測・説明表

平面形態	横円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	135	短軸(cm)	—
深さ(cm)	43.5	長軸方向	—

第246表 D189号土坑計測・説明表

平面形態	横円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	126	短軸(cm)	90
深さ(cm)	19.5	長軸方向	N-88°-E



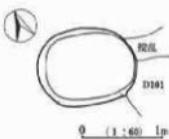
1層 棕褐色土 黄色砂質ローム・炭化粒子・粗砂を少量含む。
粒子は細かく粘性弱。

0 (1:60) 1m

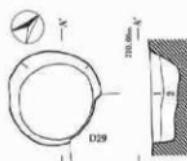
第253図 D190号土坑実測図

第247表 D190号土坑計測・説明表

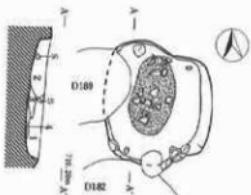
平面形態	横円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	105	短軸(cm)	72
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N-38°-W



第254図 D191号土坑実測図



第256図 D193号土坑実測図



1層 黄色土 黄色沙質ローム・炭化粒子を多量に含む。粒子は細かく、粘性弱。
2層 黑褐色土 黄色沙質ローム・炭化粒子を少量含む。粒子は細かく、粘性弱。
3層 黑褐色土 黑褐色土・炭化粒子を多量含む。粒子は細かい。
4層 黑色土 炭化粒子(1mm)・板状の石(厚さ5mm、長さ3~5cm)を多量に含む。

0 (1:60) 1m

第255図 D192号土坑実測図



第257図 D194号土坑実測図

第248表 D191号土坑計測・説明表

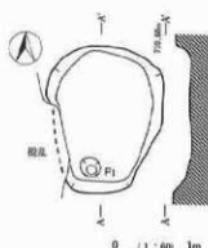
平面形態	稍凹形	断面形状	—
長軸(cm)	123	短軸(cm)	95
深さ(cm)	32.0	長軸方向	N-81°W

第249表 D192号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	連台形
長軸(cm)	154	短軸(cm)	128
深さ(cm)	32.0	長軸方向	N

第250表 D193号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	115	短軸(cm)	114
深さ(cm)	34.0	長軸方向	N-50°W



第258図 D195号土坑実測図

第251表 D194号土坑計測・説明表

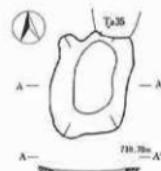
平面形態	椭円形	断面形状	—
長軸(cm)	124	短軸(cm)	103
深さ(cm)	29.5	長軸方向	N-12°-W

第252表 D195号土坑計測・説明表

平面形態	不整椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	182	短軸(cm)	—
深さ(cm)	22.8	長軸方向	N-6°-E

第253表 D196号土坑計測・説明表

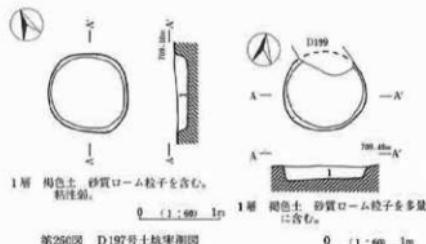
平面形態	不整形	断面形状	角底形
長軸(cm)	125	短軸(cm)	92
深さ(cm)	26.0	長軸方向	N-16°-E



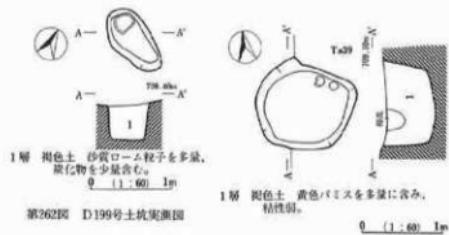
1層 黑褐色土 粗大なバクスと粒砂を少量含む。

0 (1:60) 1m

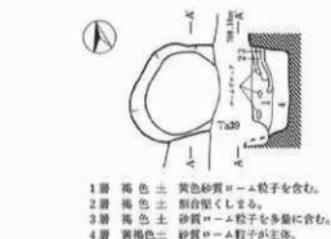
第259図 D196号土坑実測図



第261図 D198号土坑実測図



第253図 D200号土坑実測図



第258表 D231号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	73.0	長軸方向	N-56°-E

第259表 D232号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	168	短軸(cm)	118
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N-87°-W

第260表 D234号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	連台形
長軸(cm)	155	短軸(cm)	—
深さ(cm)	25.0	長軸方向	N-84°-W

第254表 D197号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	97	短軸(cm)	94
深さ(cm)	17.5	長軸方向	N-25°-E

第255表 D198号土坑計測・説明表

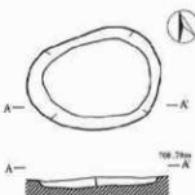
平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	103	短軸(cm)	98
深さ(cm)	22.5	長軸方向	N-83°-E

第256表 D199号土坑計測・説明表

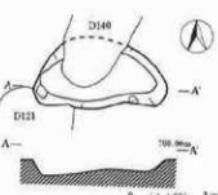
平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	47
深さ(cm)	56.0	長軸方向	N-60°-W

第257表 D200号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	117	短軸(cm)	105
深さ(cm)	68.0	長軸方向	N-57°-W



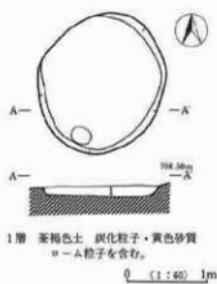
第266図 D204号土坑実測図



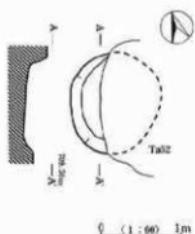
第268図 D204号土坑実測図



第267図 D205号土坑実測図



第268図 D206号土坑実測図



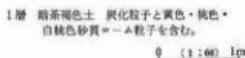
第269図 D207号土坑実測図



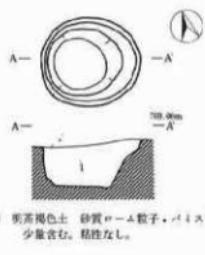
第270図 D208号土坑実測図

第261表 D205号土坑計測・説明表			
平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(m)	100	短軸(m)	98
深さ(m)	30.0	長軸方向	N-45°-W

第262表 D206号土坑計測・説明表			
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	176	短軸(m)	158
深さ(m)	17.5	長軸方向	N-5°-E



第271図 D209号土坑実測図



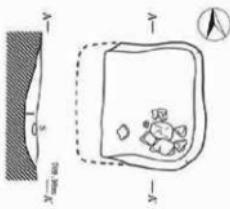
第272図 D210号土坑実測図

第263表 D207号土坑計測・説明表			
平面形態	(円形)	断面形状	逆台形
長軸(m)	—	短軸(m)	—
深さ(m)	31.6	長軸方向	—

第264表 D208号土坑計測・説明表			
平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(m)	—	短軸(m)	123
深さ(m)	62.6	長軸方向	N-58°-W

第265表 D209号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	122	短軸(m)	116
深さ(m)	18.0	長軸方向	N-74°-W

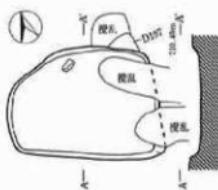
第266表 D210号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	122	短軸(m)	111
深さ(m)	57.0	長軸方向	N-75°-W



1層 黑褐色土 砂質ローム・粘土・炭化物を含む。

0 (1:60) 1m

第273図 D211号土坑実測図

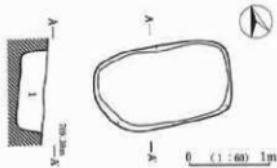


0 (1:60) 1m

第274図 D212号土坑実測図

第267表 D211号土坑計測・説明表

平面形態	方 形	断面形状	堆 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	148
深さ(m)	32.5	長軸方向	—



1層 明茶褐色土 ハイドセを少量、砂質ローム・粘土・炭化物を多量に含む。

第275図 D213号土坑実測図

第268表 D212号土坑計測・説明表

平面形態	不整長方形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	187	短軸(m)	137
深さ(m)	16.5	長軸方向	N-72°-W



1層 黒褐色土 砂質ローム・粘土・ハイドセを少量含む。

0 (1:60) 1m

第276図 D214号土坑実測図

第269表 D213号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	120	短軸(m)	100
深さ(m)	42.0	長軸方向	N-9°-E

1層 黑褐色土
2層 茶褐色土 砂質ローム・粘土・砂質ローム・ハイドセを含む。

0 (1:60) 1m

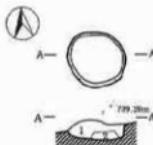
第277図 D215号土坑実測図

第271表 D215号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	堆 台 形
長軸(m)	88	短軸(m)	62
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-13°-E

第270表 D214号土坑計測・説明表

平面形態	長 方 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	149	短軸(m)	75
深さ(m)	27.0	長軸方向	N-20°-E

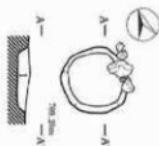
1層 黑褐色土 砂質ローム・粘土・ハイドセを微量に含む。
2層 黑褐色土

0 (1:60) 1m

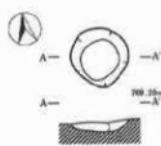
第278図 D216号土坑実測図

第272表 D216号土坑計測・説明表

平面形態	円 形	断面形状	逆 台 形
長軸(m)	74	短軸(m)	66
深さ(m)	18.0	長軸方向	N-50°-W

1層 黒褐色土 砂質ローム粒子・
炭化物を少量含む。

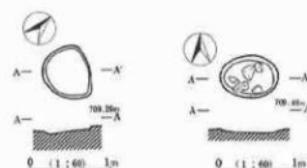
0 (1:60) 1m

1層 黒褐色土 砂質ローム粒子・
ハミスを少量含む。

0 (1:60) 1m

第279図 D217号土坑実測図

第280図 D218号土坑実測図



第281図 D219号土坑実測図

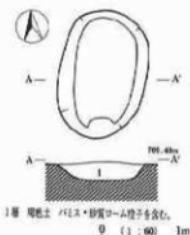
第282図 D220号土坑実測図

第273表 D217号土坑計測・説明表

平面形態	円 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	82	短軸(cm)	81
深さ(cm)	9.0	長軸方向	E

第274表 D218号土坑計測・説明表

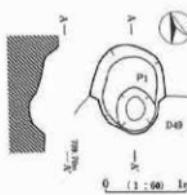
平面形態	円 形	断面形状	角 底 形
長軸(cm)	76	短軸(cm)	72
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N-9°-W



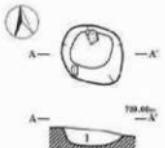
1層 黑褐色土 砂質ローム粒子・A付近を含む。

0 (1:60) 1m

第283図 D221号土坑実測図



第284図 D222号土坑実測図



1層 黑褐色土 砂質ローム粒子・A付近を含む。

第285図 D223号土坑実測図

第277表 D221号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	160	短軸(cm)	105
深さ(cm)	25.5	長軸方向	N-13°-E

第278表 D222号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	109	短軸(cm)	92
深さ(cm)	36.5	長軸方向	N-22°-E

第279表 D223号土坑計測・説明表

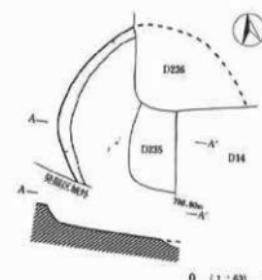
平面形態	楕丸形	断面形状	角 底 形
長軸(cm)	77	短軸(cm)	76
深さ(cm)	24.5	長軸方向	N-72°-W

第275表 D219号土坑計測・説明表

平面形態	椭 圆 形	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	78	短軸(cm)	56
深さ(cm)	9.0	長軸方向	N-85°-W

第276表 D220号土坑計測・説明表

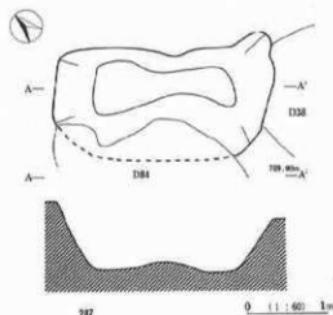
平面形態	椭 圆 形	断面形状	角 底 形
長軸(cm)	72	短軸(cm)	52
深さ(cm)	3.0	長軸方向	N-88°-E



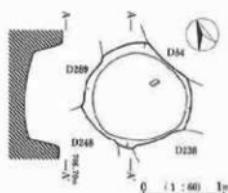
第286図 D224号土坑実測図

第280表 D224号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	連 台 形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	—
深さ(cm)	25.0	長軸方向	—



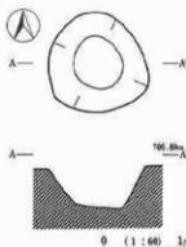
第287図 D225号土坑実測図



第288図 D226号土坑実測図

第281表 D225号土坑計測・説明表

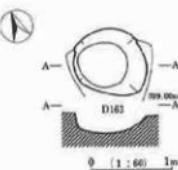
平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	268	短軸(cm)	—
深さ(cm)	84.0	長軸方向	N-45°-W



第289図 D227号土坑実測図

第282表 D226号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	138	短軸(cm)	130
深さ(cm)	48.0	長軸方向	N-69°-W



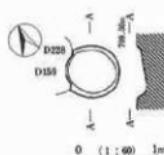
第290図 D228号土坑実測図

第283表 D227号土坑計測・説明表

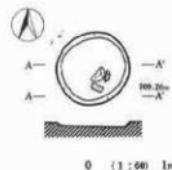
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	127	短軸(cm)	123
深さ(cm)	50.0	長軸方向	N-65°-W

第284表 D228号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	88	短軸(cm)	81
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N-77°-W



第291図 D229号土坑実測図



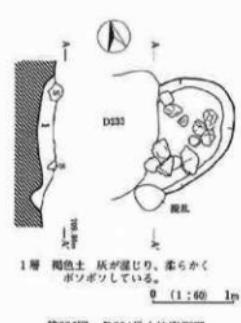
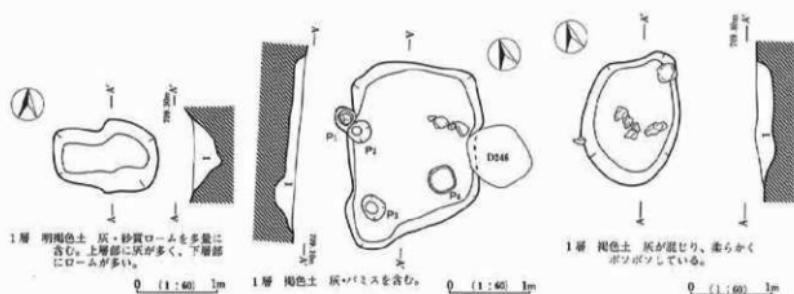
第292図 D230号土坑実測図

第285表 D229号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	69	短軸(cm)	65
深さ(cm)	13.0	長軸方向	N-35°-W

第286表 D230号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	91	短軸(cm)	87
深さ(cm)	6.0	長軸方向	N-53°-E



第287表 D231号土坑計測・説明表

平面形態	不規形	断面形状	細孔形
長軸(m)	130	短軸(m)	90
深さ(m)	29.0	長軸方向	N-78-W

第288表 D232号土坑計測・説明表

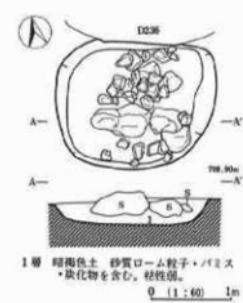
平面形態	不整長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	210	短軸(m)	180
深さ(m)	33.0	長軸方向	N-22-E

第289表 D233号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(m)	153	短軸(m)	120
深さ(m)	20.0	長軸方向	N-23-E

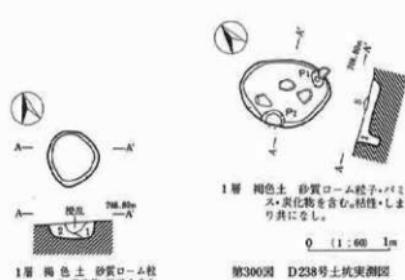
第290表 D234号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(m)	—	短軸(m)	122
深さ(m)	15.0	長軸方向	—



第291表 D235号土坑計測・説明表

平面形態	椭丸形	断面形状	連台形
長軸(m)	199	短軸(m)	157
深さ(m)	35.0	長軸方向	N-78-W



第292表 D236号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	243	短軸(cm)	180
深さ(cm)	29.0	長軸方向	N-74°-E

第293表 D237号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	77	短軸(cm)	63
深さ(cm)	20.0	長軸方向	N-19°-E

第294表 D238号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	109	短軸(cm)	82
深さ(cm)	22.0	長軸方向	N-44°-W

第295表 D239号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	68	短軸(cm)	-
深さ(cm)	13.5	長軸方向	N-50°-W

第296表 D240号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	101	短軸(cm)	65
深さ(cm)	39.0	長軸方向	N-58°-W

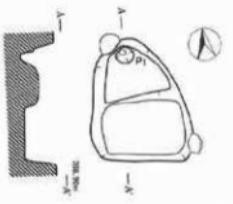
第297表 D241号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	61	短軸(cm)	48
深さ(cm)	11.0	長軸方向	N-8°-W



1層 褐色土 砂質ローム粘土・
バニス・炭化物を含む。
粘性・しまりなし。
0 (1:60) 1m

第304図 D243号土坑実測図



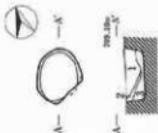
第305図 D244号土坑実測図

第298表 D243号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(m)	126	短軸(m)	—
深さ(m)	27.0	長軸方向	—

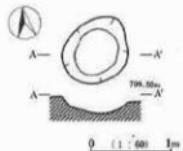
第299表 D244号土坑計測・説明表

平面形態	不整形	断面形状	逆台形
長軸(m)	152	短軸(m)	116
深さ(m)	41.0	長軸方向	N



1層 黄褐色土 砂質ローム粘土・炭化
物・1~5mmの礫を含む。
2層 黄褐色土 砂質ローム粘土・
3層 黄褐色土 砂質ローム粘土を主と
する。粘性弱・しまりなし。
0 (1:60) 1m

第306図 D245号土坑実測図



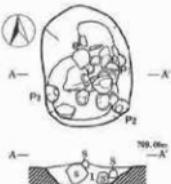
第307図 D246号土坑実測図

第300表 D245号土坑計測・説明表

平面形態	不整円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	68	短軸(m)	56
深さ(m)	25.0	長軸方向	N-22-E

第301表 D246号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	角底形
長軸(m)	90	短軸(m)	72
深さ(m)	19.0	長軸方向	N-54-E



1層 單殻色土 砂質ローム粘土・
炭化物を含む。粘性弱。
しまりなし。

第308図 D247号土坑実測図



1層 單殻色土 砂質ローム粘土・
炭化物を含む。粘性弱。
しまりなし。

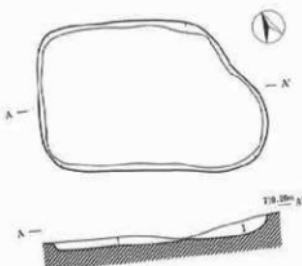
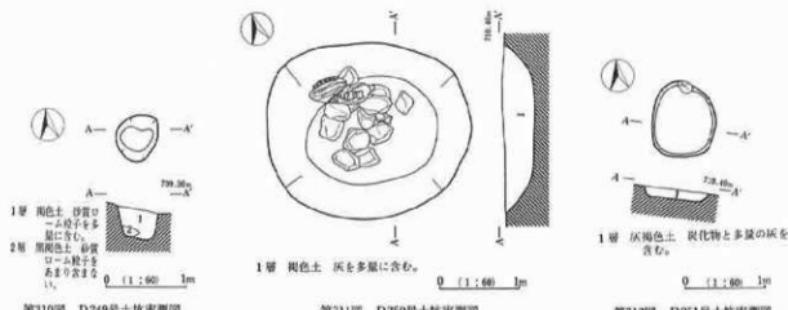
第309図 D248号土坑実測図

第302表 D247号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	角底形
長軸(m)	150	短軸(m)	107
深さ(m)	31.0	長軸方向	N

第303表 D248号土坑計測・説明表

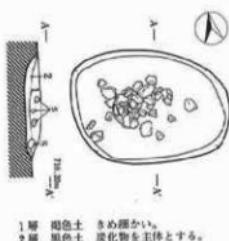
平面形態	椭円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	90	短軸(m)	—
深さ(m)	19.0	長軸方向	N-27-W



第304表 D249号土坑計測・説明表			
平面形態	円 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	60	短軸(cm)	50
深さ(cm)	47.0	長軸方向	N-13°-E

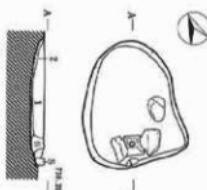
第305表 D250号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	252	短軸(cm)	215
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N-67°-W

第306表 D251号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	77
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N-14°-E



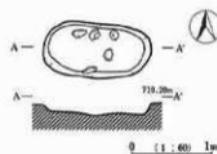
第307表 D252号土坑計測・説明表			
平面形態	不 规 形	断面形状	逆 台 形
長軸(cm)	274	短軸(cm)	184
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N-66°-W

第308表 D253号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	舟 底 形
長軸(cm)	197	短軸(cm)	139
深さ(cm)	21.0	長軸方向	N-74°-W



第315表 D254号土坑実測図
1層 地色土
2層 深褐色土 灰を主体とする。
0 (1:60) 1m

第315図 D254号土坑実測図

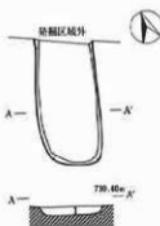


第316図 D255号土坑実測図

第310表 D255号土坑計測・説明表

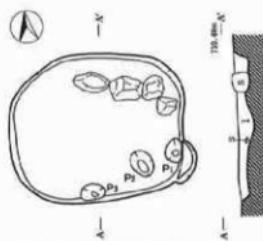
平面形態	長方形	断面形状	進台形
長軸(m)	131	短軸(m)	68
深さ(m)	18.5		N-85-W

第309表 D254号土坑計測・説明表			
平面形態	不規形	断面形状	角底形
長軸(m)	154	短軸(m)	116
深さ(m)	20.0	長軸方向	N-16'-E



1層 地色土 泥多量に含む。
0 (1:60) 1m

第317図 D256号土坑実測図



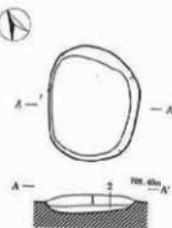
1層 暗褐色土 灰と炭化鉢を少量含む。
0 (1:60) 1m

第318図 D257号土坑実測図

第312表 D257号土坑計測・説明表

平面形態	隅丸方形	断面形状	進台形
長軸(m)	218	短軸(m)	182
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-87'-W

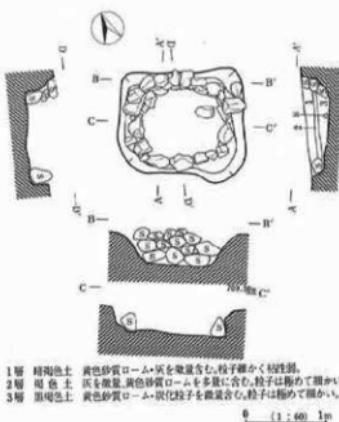
第311表 D256号土坑計測・説明表			
平面形態	長方形	断面形状	進台形
長軸(m)	—	短軸(m)	76
深さ(m)	15.0	長軸方向	N-18'-E



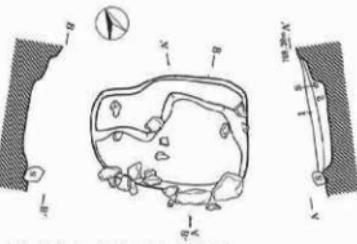
1層 地色土 バミク・炭化粒子を微量含む。粒子細く粘性弱。
2層 暗褐色土 バミク・炭化粒子を微量含む。粒子は細て粘かい。

第313表 D258号土坑計測・説明表			
平面形態	橢円形	断面形状	角底形
長軸(m)	148	短軸(m)	113
深さ(m)	23.0	長軸方向	N-31'-E

第319図 D258号土坑実測図



第320図 D259号土坑実測図



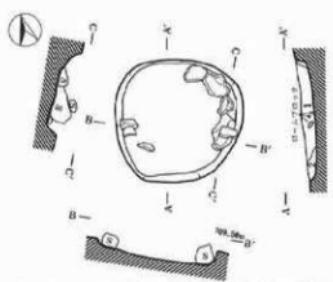
第321図 D260号土坑実測図

平面形態	方形	断面形状	連台形
長軸(m)	153	短軸(m)	124
深さ(m)	41.5	長軸方向	N-67°-W

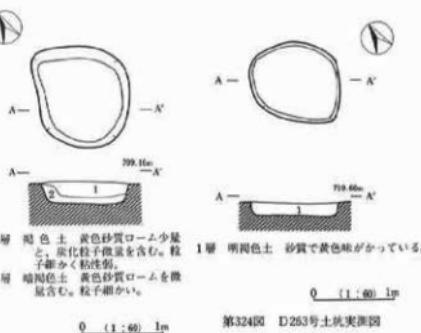
第314表 D259号土坑計測・説明表

平面形態	不規長方形	断面形状	連台形
長軸(m)	195	短軸(m)	139
深さ(m)	29.5	長軸方向	N-61°-W

第315表 D260号土坑計測・説明表



第322図 D261号土坑実測図



第324図 D263号土坑実測図

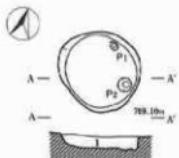
平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(m)	157	短軸(m)	152
深さ(m)	29.5	長軸方向	N-16°-E

第316表 D261号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(m)	124	短軸(m)	113
深さ(m)	34.0	長軸方向	N-18°-E

第317表 D262号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(m)	113	短軸(m)	96
深さ(m)	18.0	長軸方向	N-50°-W

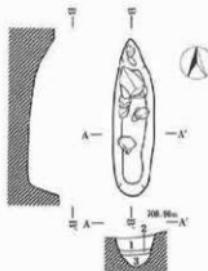


1層 塗覆色土 灰化物を含む。

0 (1:60) 1m

第325図 D264号土坑実測図

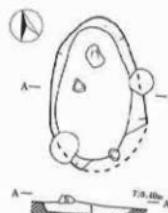
第319表 D264号土坑計測・説明表			
平面形態	円 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	104	短軸(m)	96
深さ(m)	27.0	長軸方向	N-77-W



1層 黒褐色土 灰化物を多量に含む。
2層 灰褐色土
3層 塗覆色土 灰化物を多量に含み、灰化物を少箇含む。灰化物の含有量は1層より少ない。

0 (1:60) 1m

第326図 D265号土坑実測図

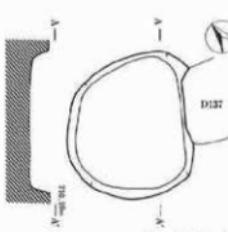


1層 塗覆色土 灰化物を含む。
サクラウチしている。

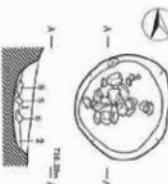
0 (1:60) 1m

第327図 D266号土坑実測図

第320表 D265号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	193	短軸(m)	56
深さ(m)	45.0	長軸方向	N



第328図 D267号土坑実測図



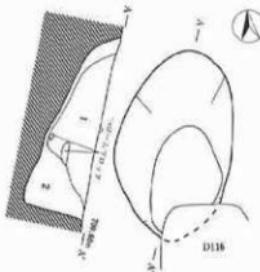
1層 塗覆色土 灰化物を多量に含む。
砂質ローム粒子を含む。

2層 塗覆色土 灰化物を少箇含む。

0 (1:60) 1m

第329図 D268号土坑実測図

第321表 D266号土坑計測・説明表			
平面形態	椭 圆 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	—	短軸(m)	11.0
深さ(m)	21.0	長軸方向	N-12-E



第322表 D267号土坑計測・説明表

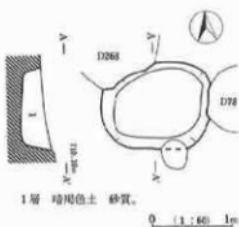
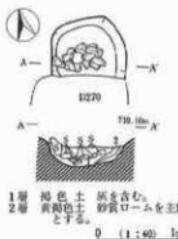
平面形態	円 形	断面形状	邊 台 形
長軸(m)	180	短軸(m)	155
深さ(m)	30.0	長軸方向	N-44-E

1層 塗覆色土 黄白色砂質ローム・小の礫・バーストを含む。柱状は極めて細かい。

2層 塗覆色土 黄白色砂質ローム・小の礫・バーストを多量に含む。柱状は頗る粗粒。

0 (1:60) 1m

第330図 D269号土坑実測図

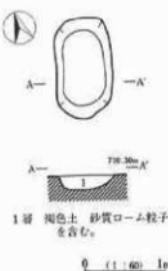
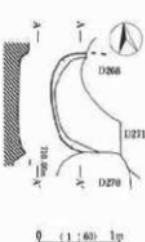


第325表 D270号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	舟底形
長軸(m)	—	短軸(m)	92
深さ(cm)	26.0	長軸方向	—

第326表 D271号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	134	短軸(m)	109
深さ(cm)	39.5	長軸方向	N-87-W

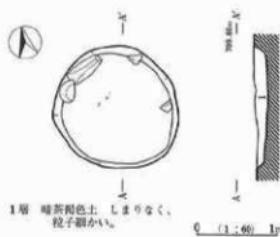


第327表 D272号土坑計測・説明表

平面形態	—	断面形状	逆台形
長軸(m)	—	短軸(m)	121
深さ(cm)	14.0	長軸方向	—

第328表 D273号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	舟底形
長軸(m)	124	短軸(m)	70
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N-17-E

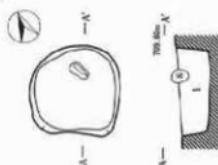


第329表 D274号土坑計測・説明表

平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	130	短軸(m)	120
深さ(cm)	11.0	長軸方向	N-8-E

第330表 D275号土坑計測・説明表

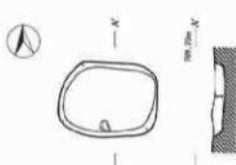
平面形態	円形	断面形状	逆台形
長軸(m)	156	短軸(m)	154
深さ(cm)	14.0	長軸方向	N-36-W



1層 明茶褐色土 黄色・赤色ロームブロック。
炭化稻子10cmに1個。稲子細かい。

0 (1:60) 1m

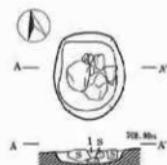
第337図 D276号土坑実測図



1層 明褐色土 灰・バニス・砂質ローム
稲子を含む。

0 (1:60) 1m

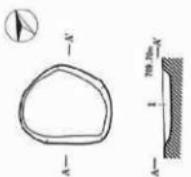
第338図 D277号土坑実測図



1層 暗褐色土 砂質ローム粒子・バニス
を含む。粘性弱。しまりなし。

0 (1:60) 1m

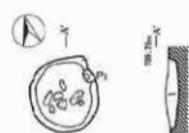
第339図 D278号土坑実測図



1層 淡褐色土 灰を含む。

0 (1:60) 1m

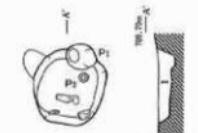
第340図 D279号土坑実測図



1層 淡褐色土 灰を多量に含む。

0 (1:60) 1m

第341図 D280号土坑実測図



1層 暗褐色土 砂質ローム粒子・炭化物・
灰を含む。

0 (1:60) 1m

第342図 D281号土坑実測図

第331表 D276号土坑計測・説明表

平面形態	不整円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	111	短軸(cm)	108
深さ(cm)	40.0	長軸方向	N-56°-W

第332表 D277号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	124	短軸(cm)	91
深さ(cm)	15.0	長軸方向	N-87°-W

第333表 D278号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	114	短軸(cm)	87
深さ(cm)	18.0	長軸方向	N-14°-E

第334表 D279号土坑計測・説明表

第334表 D279号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	134	短軸(cm)	98
深さ(cm)	10.0	長軸方向	N-57°-W

平面形態	円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	91	短軸(cm)	85
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N-13°-E

第335表 D280号土坑計測・説明表

第335表 D280号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	94	短軸(cm)	88
深さ(cm)	16.0	長軸方向	N-6°-E

平面形態	椭円形	断面形状	連台形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	58
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N-84°-W

第336表 D281号土坑計測・説明表

第336表 D281号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	120	短軸(cm)	83
深さ(cm)	17.0	長軸方向	N-18°-E

第337表 D282号土坑計測・説明表

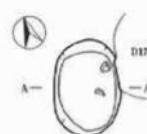
第337表 D282号土坑計測・説明表

平面形態	椭円形	断面形状	舟底形
長軸(cm)	90	短軸(cm)	58
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N-84°-W

1層 茶褐色土 黄色土ブロック含む。

0 (1:60) 1m

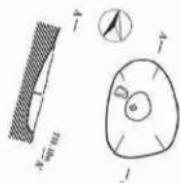
第343図 D282号土坑実測図



1層 暗褐色土 細かいがしまりがない。灰や焼土は全くない。

0 (1:60) 1m

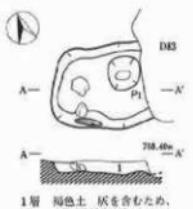
第344図 D283号土坑実測図



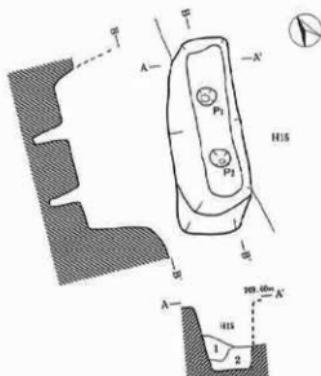
第345図 D284号土坑実測図

第339表 D284号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	角底形
長軸(cm)	121	短軸(cm)	88
深さ(cm)	19.0	長軸方向	N-21°-W

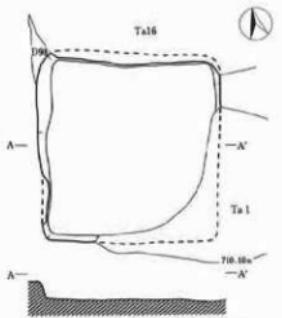
第340表 D285号土坑計測・説明表			
平面形態	楕円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	102
深さ(cm)	26.5	長軸方向	N-69°-W



第346図 D285号土坑実測図

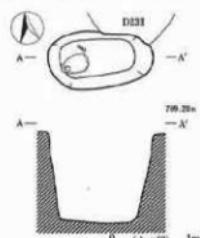


第347図 D286号土坑実測図



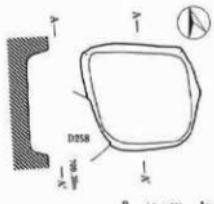
第348図 D287号土坑実測図

第341表 D286号土坑計測・説明表			
平面形態	長方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	243	短軸(cm)	91
深さ(cm)	95.0	長軸方向	N-24°-E



第349図 D288号土坑実測図

第342表 D287号土坑計測・説明表			
平面形態	方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	—	短軸(cm)	226
深さ(cm)	31.0	長軸方向	N-12°-E



第350図 D289号土坑実測図

第343表 D288号土坑計測・説明表			
平面形態	椭円形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	131	短軸(cm)	70
深さ(cm)	114.0	長軸方向	N-80°-W

第344表 D290号土坑計測・説明表			
平面形態	不整方形	断面形状	逆台形
長軸(cm)	140	短軸(cm)	132
深さ(cm)	30.0	長軸方向	N-75°-W

第345表 大井城跡(黒岩城跡)土坑一覧表

遺構	探査番号	検出区	平面形態			規 模 (cm)	長軸方向	備 考
			直角	短軸	深さ			
D 1	67	二-3・4	円 形	274	250	6.0~15.0	N-27°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器
D 2	68	三-3	方 形	222	202	42.0	N-21°-E	美濃灰陶片(15 C前)
D 3	69	三-3・4	—	—	31.0	—	内耳土器片	遺台形
D 4	70	寸-4	(方 形)	—	—	21.0	—	内耳土器片
D 5	71	せ-4・5	長方形	661	186	40.0	N-45°-W	土師質土器片
D 6	72	寸-4	長方形	263	146	22.0	N-30°-E	遺台形
D 7	73	き-6	方 形	250	230	34.0	N-78°-W	常滑麗片(14 C)、瀬戸片(14 C前)、美濃灰陶片(15 C前)、内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片
D 8	74	け-4	方 形	68	62	49.5	N-77°-W	表面6.0m位してゐる。
D 9	75	か-4	長方形	184	—	34.5	N-10°-E	土師質土器片
D 10	76	お・か-5	長方形	223	72	37.5	N-34°-E	土師質土器小皿
D 11	77	か-4・5	遺台形	—	161	35.0	—	土師質土器小皿、土師質土器片
D 12	78	き・く-2	方 形	167	164	84.0	N-30°-E	土師質土器片
D 13	79	う-11	長方形	296	174	39.5	N-73°-W	青磁碗片(15 C)、土師質土器小皿 2、内耳土器片
D 14	80	寸-8	遺台形	—	287	—	66.5	—
D 15	81	寸-8	遺台形	—	—	6.0	—	白磁皿(16 C)
D 16	82	く-2・3	長方形	313	128	36.5	N-86°-W	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 17	83	し-4	方 形	280	266	21.5	N-15°-E	土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片
D 18	84	け-4	長方形	290	167	25.0	N-72°-W	内耳土器片
D 19	85	か-2	長方形	302	183	56.5	N-20°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 20	86	お・か-3	—	—	19.0	—	—	遺台形
D 21	87	お-3	(鑄円形)	—	224	24.0	—	土師質土器小皿 1、内耳土器片、土師質土器片、高白 1
D 22	88	え-7・E	円 形	163	175	15.0	N-82°-W	土師丸玉
D 23	89	く-3	長方形	186	114	44.5	N-14°-E	内耳土器片 北壁、東壁下にテラスあり。
D 24	90	さ-4	長方形	193	116	29.0	N-15°-E	刀子
D 25	91	け-2	遺台形	178	176	37.0	N-13°-E	土師質土器小皿 1、土師質土器小皿片、土師質土器西壁下北側にテラスあり。
D 26	92	寸-5	方 形	160	156	33.0	N-12°-E	内耳土器片、土師質土器片、須恵器片
D 27	93	お-4・5	長方形	240	132	37.0	N-77°-W	内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片
D 28	94	か-6	円 形	150	148	26.5	N-7°-E	内耳土器片、弥生土器片、土師質土器片
D 29	95	く-3	遺台形	—	—	—	—	—

遺 務	探査番号	検出区	平面形態	規 模(cm)			長軸方向	備 考
				面積	周 長	深さ		
D 29	95	き-7	不整形	235	158	29.5	N-83'-W	土板 1、内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器粉残存上下 4、茎臼上口 1、石臼片、鉄錠 1、骨
			逆台形					
D 30	96	き-4	圓角方形	—	154	25.0	—	内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片石臼片、砾石
			逆台形					
D 31	97	え・38-3	長方形	294	225	45.0	N-12'-E	土師質土器小皿 1、内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、進跡口縁部 1
			逆台形					
D 32	98	<-7・8	方 形	188	171	27.5	N-72'-W	土師質土器小皿片、土師質土器片
			逆台形					
D 33	99	き-2	長方形	262	112	80.0	N-67'-W	土師質土器片
			逆台形					
D 34	100	お-7・8	円 形	231	195	43.0	N	
			逆台形					
D 35	101	お-9	長方形	185	124	31.5	N-25'-E	内耳土器片
			逆台形					
D 36	102	お-7・8	長方形	162	102	49.0	N-63'-W	土師質土器小皿 1
			逆台形					
D 37	103	丁-8	長方形	174	120	42.5	N-11'-E	石臼片
			逆台形					
D 38	104	丁-8	長方形	—	135	21.0	—	石臼片 北壁下にテラスあり。横にはとんびが載面直上より検出される。
			逆台形					
D 39	105	L-6	長方形	—	166	52.0	N-69'-W	鐵石、磨石
			逆台形					
D 40	106	L-6	不整方形	261	231	52.0	N-24'-E	窓戸折線小皿片(15 C)、内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片、土師質土器片
			逆台形					
D 41	107	け-6・7	(丸形)	—	143	49.0	—	青磁通透弁文片(16 C)、常滑壺片(16 C 四半) 窓戸折線鋸片(15 C 後)
			逆台形					
D 42	108	<-け-5・6	(丸形)	—	—	28.0	—	
			逆台形					
D 43	109	さ・L-9	椭円形	192	130	52.0	N-8'-E	西壁北隣に長さ 27 cm、幅 60 cm、没差 16 cm のテラスあり。
			逆台形					
D 44	110	<-け-5・6	方 形	149	149	35.0	N-25'-E	
			逆台形					
D 45	111	L-5	長方形	302	154	42.0	N-17'-W	
			逆台形					
D 46	112	L-7	不整方形	210	—	24.5	—	
			逆台形					
D 47	113	け-8	方 形	256	134	26.5	N-6.5'-E	内耳土器片
			逆台形					
D 48	114	け-8	長方形	213	106	42.0	N-6.5'-E	
			逆台形					
D 49	115	<-8	長方形	246	163	27.5	N-72'-W	
			逆台形					
D 50	116	す-7	長方形	356	224	34.5	N	土師質土器小皿 2、土師質土器片
			逆台形					
D 51	117	す-8	方 形	194	154	19.0	N-22'-E	
			逆台形					
D 52	118	す-5	長方形	228	153	47.0	N-13'-E	内耳土器片、土師質土器片、不明貨幣 1
			逆台形					
D 53	119	お-8・9	不整方形	169	167	52.0	N-81'-W	石臼片
			逆台形					
D 54	120	き-4	方 形	166	144	32.5	N-74'-W	
			逆台形					
D 55	121	お-3	長方形	257	186	39.5	N-31'-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
			逆台形					
D 56	122	お-3	長方形	245	206	39.0	N-5'-E	内耳土器片 1、内耳土器片、土師質土器片、須恵器片化石 1
			逆台形					
D 57	123	き-11	長方形	294	120	51.5	N-18'-E	内耳土器片、土師質土器小皿片
			逆台形					

遺構	件番号	発出区	平面形態	渠幅(cm)			長軸方向	備考	
				断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 58	124	ウ-11	丸方形 逆台形		247	295	52.5	N-13°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 59	125	イ-ウ-11+12	隅丸方形 逆台形		159	151	21.0	N-15°-W	内耳土器片、土師質土器片
D 60	126	ウ-10	丸方形 逆台形		268	149	44.5	N-15°-E	美濃灰釉小皿片(16C前)、内耳土器片、土師質土器片 土師質土器小皿片、瓦石 1
D 61	127	ウ-12	隅丸方形 逆台形		245	190	26.5	N-67°-W	土師質土器小皿 2、内耳土器片、土師質土器片
D 62	128	イ-12	丸方形 舟底形		-	190	28.0	N-17°-E	内耳土器片
D 63	129	カ-12	丸方形 逆台形		-	132	24.5	N-30°-E	
D 64	130	カ-12	逆台形		-	264	65.5	-	
D 65	131	カ-12	丸方形 逆台形		214	154	28.5	N-63°-W	常滑燒片(16C前)、内耳土器片
D 66	132	オ-12	丸方形 逆台形		140	121	42.0	N-79°-W	内耳土器片、土師質土器片
D 67	133	カ-9・10	丸方形 逆台形		-	200	33.5	N-77°-W	内耳土器片、土師質土器片、須彌器片
D 68	134	ウ・エ-11	丸方形 逆台形		234	155	51.0	N-14°-E	土師質土器小皿 1、内耳土器片、土師質土器小皿片
D 69	135	エ-6・7 オ-6	丸方形 舟底形		260	118	18.5	N-71°-W	内耳土器片、土師質土器片、鏡片
D 70	136	カ-7・8	方 形 舟底形		176	174	28.5	N-67°-W	土師質土器片 礎はすべて底面より浮いた状態で検出される。
D 71	137	キ-8	方 形 逆台形		173	159	65.5	E	鏡石 2、粉陶器曰下臼 1、骨
D 72	138	キ-9	丸方形 逆台形		162	131	27.5	N-6°-W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 粉陶器曰上臼 1、石臼片
D 73	139	エ-5	逆台形		259	115	24.0	N-8°-E	
D 74	140	エ・オ-4・5	方 形 逆台形		321	-	43.0	-	美濃灰釉小皿(16C前)、美濃灰釉小皿片(16C前)、土師質土器小皿 2、内耳土器片、土師質土器小皿片、舟底 底面は平底であるが、西に傾斜する。
D 75	141	ウ・エ-8	丸方形 逆台形		216	140	20.0- 35.0	N-15°-E	青磁碗片(15C)、内耳土器片、土師質土器小皿片 土師質土器
D 76	142	エ-5	丸方形 逆台形		189	130	17.0	N-9°-E	美濃灰釉小皿(16C前)、内耳土器片、土師質土器片
D 77	143	ウ-8	丸方形 逆台形		-	140	36.0	N-15°-E	内耳土器片、土師質土器片
D 78	144	ウ-8	椭円形 逆台形		82	-	35.5	N-11°-E	遺構の一部を複数によって記述されている。
D 79	145	オ-6	逆台形		295	122	48.0	N-82°-W	北壁中央に小さな張り出しあり。西半分に多量の礎があり、全て底面より 10cm 以上浮いた状態で検出される。
D 80	146	エ-4・5	丸方形 舟底形		-	138	14.0	N-81°-W	
D 81	147	オ-8	隅丸方形 逆台形		183	75	32.0	N-64°-W	鉄鋤 1 底面が凸凹している。
D 82	148	オ・カ-6	方 形 逆台形		288	276	62.5	N-73°-W	内耳土器片、鉄鋤、銅鋤 1 底面は北に傾斜する。
D 83	149	ニ-7	逆台形		158	135	27.0	N-19°-E	
D 84	150	シ・オ-8・9	椭円形 逆台形		266	169	31.0	N	青磁碗(15C)、美濃灰釉日茶碗(16C)、土師質土器小皿 2、内耳土器片、 土師質土器底片、土師質土器片、粉陶器曰上臼 4、粉陶器曰下臼 1、石臼片、骨、 瓦石、金銀葉、金銀葉、金銀葉、金銀葉、金銀葉
D 85	151	シ・オ-9	丸方形 —		-	-	38.5	-	美濃灰釉小皿(16C前)、内耳土器片、土師質土器片、 粉陶器底片、石臼片、瓦石片、雨傘、チャート
D 86	152	カ-6・7	方 形 逆台形		185	173	36.0	N-23°-E	美濃灰釉日茶碗(16C)、土師質土器小皿片 北壁東隅底面はやかに陥没する。

造 橋	神田番号	検出区	平面形状	規 格(cm)			長軸方向	備 考	
				断面形状	長軸	短軸	深さ		
D 87	153	か・き-8・9	長方形 邊台形		210	76	52.0	N-11°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、粉挽き臼上臼 1、石臼片、角鉗 2、鉄釘 6
D 88	154	け-5・6	曲屈形 邊台形		256	119	29.0	—	内耳土器片、土師質土器小皿片、陶生土器片、土師質土器片
D 90	155	き-4	方 形		116	109	25.5	N-7.5°-E	
D 91	156	き-4	長方形 邊台形		136	106	18.5	N-14°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 92	157	こ-4	楕円形 邊台形		80	46	46.5	N-77°-W	内耳土器片、土師質土器片
D 93	158	き-5	楕円形 邊台形		226	156	15.5	N-76°-W	
D 94	159	こ・き-5	長方形 舟底形		217	123	38.0	N-8°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 西壁南隅に小さなテラスあり。
D 95	160	こ-5	方 形 (方 形) 邊台形		127	121	10.0	N-29°-W	
D 96	161	け-3	方 形 邊台形		—	125	33.5	—	内耳土器片
D 97	162	か-5	方 形 邊台形		69	64	25.5	N-27°-E	
D 98	163	か-5	方 形 邊台形		123	120	30.0	N-11°-E	骨
D 99	164	け-5・6	長方形 邊台形		121	64	19.0	N-68°-W	
D 100	165	こ-8	方 形 邊台形		133	125	43.0	N-14°-E	土師質土器小皿片、土師質土器片、石臼片
D 101	166	き-7	楕円形 舟底形		—	117	24.5	—	茶臼上臼 1、石臼片
D 102	167	き-7	楕円形 舟底形		—	107	23.0	—	石臼片
D 103	168	こ-5・6	長方形 邊台形		25	75	23.0	N-18°-E	正隆元宝
D 104	169	こ-5	長方形 邊台形		137	101	26.0	N-65°-W	
D 105	170	こ-5	隅丸化方 形 舟底形		161	136	23.5	N-9°-E	美濃鉄助天日茶碗(16 C) 西壁北半分にテラスあり。壁は底面直上より突出される。
D 106	171	こ-4	長方形 舟底形		184	142	35.5	N-9°-E	土師質土器片
D 107	172	け-4	楕円形 邊台形		97	63	7.0	N-21°-E	内耳土器片
D 108	173	こ-4・5	長方形 邊台形		167	129	20.0	N-76°-W	青磁鏡邊舟文片(16 C)、内耳土器片、土師質土器片、指輪片口座 1、石臼片、凹石 1
D 109	174	す-5・6	方 形 邊台形		130	125	30.5	N-80°-W	
D 110	175	こ-2	方 形 邊台形		71	70	35.5	N-26°-E	土師質土器片
D 111	176	く-7	方 形 邊台形		125	115	28.0	N-38°-E	内耳土器片
D 112	177	き-0	長方形 邊台形		104	72	32.0	N-29°-E	内耳土器片、土師質土器片、粉挽き臼上臼 1、石臼片
D 113	178	こ-3	長方形 邊台形		77	58	21.0	N-60°-W	
D 114	179	こ-3	方 形 邊台形		116	103	31.0	N-26°-E	
D 115	180	け-2	方 形 邊台形		137	111	31.0	N-66°-W	礫を多量に含む。
D 116	181	き-7	方 形 邊台形		114	110	72.0	N-11°-E	土師質土器片

遺 墓	辨認番号	検出区	平面形状	規 模(cm)			長軸方向	備 考
				断面形状	長軸	短軸	深さ	
D 117	182	北-12	方形 邊台形		86	84	19.5	N-65°-W
D 118	183	北-7	長方形 邊台形		149	71	23.0	N-75°-W
D 119	184	北-9	不整長方形 邊台形		175	118	12.0	N-71°-W
D 120	185	北-9	方形 邊台形		102	96	18.0	N-25°-E
D 121	186	北-8	長方形 邊台形		142	92	21.0	N-13°-E
D 122	187	北-8	隅丸方形 邊台形		102	98	41.5	N-15°-W
D 123	188	北-8	不整方形 邊台形		89	76	27.0	N-66°-W
D 124	189	北-9	隅丸方形 邊台形	-	140	40.0	-	土師質土器片、縄跡把手部 1。石臼片 東壁底面傾斜する。
D 126	190	北-6	- -	-	-	23.5	-	青磁蓮弁文(14C) 1
D 127	191	北-9	方形 邊台形	-	92	35.0	-	内耳土器片
D 128	192	北-8	不整長方形 邊台形		138	111	24.5	N-12°-E
D 129	193	北-12	不整方形 舟底型		110	95	21.0	N-22°-E
D 130	194	北-10	隅丸方形 -		135	125	26.5	N-25°-E
D 131	195	北-12	長方形 邊台形		89	62	41.0	N-72°-W
D 132	196	北-12	長方形 邊台形		210	121	21.0	N-52°-E
D 133	197	北-8	長方形 邊台形		110	68	21.0	N-26°-E
D 134	198	北-6	不整長方形 邊台形		142	76	16.0	N-76°-W
D 135	199	北-9	不整方形 邊台形		140	126	18.5	N-5°-W
D 136	200	北-8	不整長方形 邊台形		121	105	35.0	N-71°-W
D 137	201	北-8	長方形 邊台形		131	99	30.0	N-78°-W
D 138	202	北-5	隅丸方形 邊台形		148	119	18.5	N-7°-E
D 139	203	北-6	不整方形 邊台形		123	115	17.0	N-8°-E
D 140	204	北-8	長方形 邊台形		129	84	40.0	N-16°-E
D 141	205	北-8	不整長方形 邊台形		184	130	43.0	N-12°-E
D 142	206	北-5	隅丸方形 邊台形		140	140	78.0	N-22°-E
D 143	207	北-8 + 9	不整長方形 邊台形		168	108	39.0	N-4°-E
D 144	208	北-7	長方形 邊台形		129	90	18.0	N-5°-E
D 145	209	北-8	長方形 (長方形) 邊台形		164	104	48.5	N-26°-E
D 146	210	北-7	-		60	15.5	-	

遺構	辨別番号	検出区	平面形状	規 格(cm)			長軸方向	備 考
				断面形状	長軸	短軸		
D 147	211	け・こ-7	方形 邊台形		117	115	19.0	N-86°-W 石臼片
D 148	212	き-4	不整形 —		129	106	—	N-3°-W 内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 149	213	し-3・4	円形 邊台形		162	156	26.5	N-90°-E 土師質土器片
D 150	214	け-5・6	円形 邊台形		123	212	14.0	N 中津川窯(14 C)、土師質土器小皿 1、内耳土器片 土師質土器片
D 151	215	け-5	円形 邊台形		88	85	45.0	N-82°-W —
D 152	216	け-5	橢円形 邊台形		128	86	26.0	N-84°-W —
D 153	217	け-6	橢円形 邊台形		96	68	21.0	N-55°-E —
D 154	218	け-6	長方形 邊台形		86	74	48.0	N-12°-E —
D 155	219	え-5	長方形 邊台形		121	88	31.0	N-11°-E 内耳土器片、土師質土器片
D 156	220	し-6	橢円形 邊台形		104	65	15.5	N-28°-E 土師質土器片
D 157	221	き-5	不整形 邊台形		—	—	17.0	— 内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片 破を多量に含む。
D 158	222	き-7	円形 邊台形		103	86	14.0	N-37°-W 内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 159	223	す-7	隅丸形 邊台形		78	70	95.0	N —
D 160	224	す-7	橢円形 邊台形		90	84	26.5	N-87°-W —
D 161	225	す-7	不動円形 邊台形		107	106	30.0	N-86°-E 内耳土器
D 162	226	し-7	橢円形 邊台形		115	72	14.5	N-6°-E —
D 163	227	す-7	円形 邊台形		73	62	34.0	N 内耳土器
D 164	228	き-6	隅丸長方形 邊台形		—	87	15.0	N-73°-W 石臼片
D 165	229	き-6	橢円形 舟底形		162	121	23.5	N-45°-W 青磁碗片(14 C)、内耳土器片、弥生土器片、土師質土器片 茶臼上口 1
D 166	230	く・け-7	隅丸長方形 邊台形		160	75	15.0	N-24°-E 青磁碗 1、粉挽き臼上口 1、粉挽き臼下口 1、擂钵 1 石臼片
D 167	231	こ・さ-5	円形 舟底形		—	114	12.5	— 底面は凸凹している。
D 168	232	こ-5	長方形 邊台形		—	62	24.5	N-21°-E 内耳土器片、不明石製品 底面は凸凹している。
D 169	233	け-8	橢円形 邊台形		115	109	40.5	N-7°-W 石臼片
D 170	234	け-8	円形 邊台形		129	110	23.0	N-17°-E —
D 171	235	け-7	橢円形 邊台形		134	88	18.0	N-75°-W —
D 172	236	き-8	円形 舟底形		146	128	25.0	N-6°-E 内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
D 173	237	き-7	不整形 邊台形		144	109	23.0	N-85°-W 磨石(加工)
D 174	238	き-5	橢円形 邊台形		88	54	22.0	N-79°-W 土師質土器片
D 175	239	く-7	舟底形		—	—	20.6	— 内耳土器片

遺 務	辨認番号	検出区	平面形態	廣 機(cm)			長軸方向	備 考
				断面形状	長軸	短軸		
D 177	240	く—7	円 形 舟底形		133	132	16.0	N—16°—E 内耳土器片、土師質土器小皿片、弥生土器片 土師質土器片、茎臼下臼 1、石臼片
D 178	241	く—7	円 形 造台形		116	100	12.0	N—32°—W 土師質土器小皿片、石臼片
D 179	242	く—7	椭円形 造台形		138	118	25.0	N—62°—E 土師質土器片
D 180	243	き—6	椭円形 造台形		114	86	28.0	N—85°—W 土師質土器小皿片、土師質土器片、棒焼き臼上臼 1 棒焼き臼下臼 2、焼き臼 1、茎臼上臼 1、石臼片、四石 網を多量に含む。
D 181	244	く—7	(椭円形) 舟底型	—	100	16.5	N—48°—E	焼き臼 1
D 182	245	か—7	不整円形 舟底形	—	128	17.0	—	内耳土器片、土師質土器片、不明質物
D 183	246	か—7	椭円形 造台形		141	120	24.5	N—5°—W 内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、骨
D 184	247	か—4	U字形		87	61	43.5	N—15°—E 内耳土器片、土師質土器片
D 185	248	き—2	—	—	—	9.0	—	土師質土器小皿 1、内耳土器片
D 186	249	く—3	円 形 造台形		111	108	29.5	N—88°—W 土師質土器小皿 1
D 187	250	か—6・7	造台形		103	87	31.0	N—23°—W —
D 188	251	か—6・7	椭円形 造台形		135	—	43.5	— 土師質土器小皿 1
D 189	252	か—6・7	造台形		126	90	19.5	N—88°—E 土師質土器小皿片、茎臼下臼 1、石臼片
D 190	253	か—7	椭円形 造台形		105	72	15.0	N—38°—W —
D 191	254	き—7	椭円形 —		123	95	32.0	N—81°—W 土師質土器小皿 1、土師質土器片
D 192	255	か—6	不整形 造台形		154	128	32.0	N 土師質土器小皿 1、内耳土器片、土師質土器小皿片 棒焼き臼下臼 1
D 193	256	き—7	円 形 造台形		115	114	34.0	N—58°—W 土師質土器片
D 194	257	く—8	椭円形 —		124	103	20.5	N—12°—W —
D 195	258	か—3	不整椭円形 造台形		182	—	27.0	N—6°—E —
D 196	259	か—3	不整形 舟底形		125	92	26.0	N—10°—E —
D 197	260	か—12	円 形 造台形		97	94	17.5	N—25°—E —
D 198	261	う—13	円 形 造台形		103	98	22.5	N—88°—E —
D 199	262	う—13	椭円形 造台形		88	47	50.0	N—60°—W —
D 200	263	か—11	椭円形 造台形		117	105	68.0	N—57°—W 内耳土器片、不明石製品
D 201	264	か—12	椭円形 造台形	—	—	73.0	N—56°—E 土師質土器片	
D 202	265	さ—8	椭円形 造台形		168	118	15.0	N—87°—W —
D 203	266	か—10	長方形 造台形		92	55	63.0	N—89°—W 弥生土器片、土師質土器片
D 204	266	か—8	不整形 造台形		155	—	25.0	N—84°—W 西壁底面接觸する。
D 205	267	さ—9	不整形 造台形		100	98	30.0	N—45°—W —

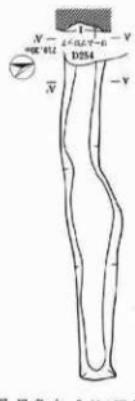
遺 墓	添記番号	検出区	平面形態	規 模(cm)			長軸方向	備 考
				長軸	短軸	深さ		
D 205	268	L-8+9	円 形 （内 口形）	176	158	17.5	N-6°-E	青銅鏡邊弁文(14C) 1、内耳土器片
D 207	269	H-6	不整方形 連台形	-	-	31.0	-	
D 208	270	H-7	圓角方形 連台形	-	123	62.0	N-58°-W	
D 209	271	L-6	圓角方形 連台形	122	116	18.0	N-74°-W	
D 210	272	L-9	椭円形 連台形	22	111	57.0	N-75°-W	円形のテラスあり。
D 211	273	H-9	方 形 角底形	-	148	32.5	-	内耳土器片、土師質土器片
D 212	274	H-5	不整長方形 連台形	187	137	16.5	N-72°-W	
D 213	275	S-8	椭円形 連台形	179	190	42.0	N-9°-E	
D 214	276	L-8	長方形 連台形	140	75	27.0	N-20°-E	
D 215	277	L-9	長方形 角底形	88	62	21.0	N-13°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片
D 216	278	S-9	円 形 連台形	74	66	18.0	N-50°-W	
D 217	279	L-9	円 形 連台形	82	81	9.0	E	内耳土器片、粉粧き臼上臼 2、石臼片
D 218	280	S-9	角底形	74	72	29.0	N-9°-W	
D 219	281	S-9	椭円形 連台形	76	56	9.0	N-83°-W	
D 220	282	S-9	椭円形 角底形	72	52	3.0	N-88°-E	石臼 1
D 221	283	S-8	椭円形 連台形	150	106	25.5	N-13°-E	
D 222	284	K-8	椭円形 連台形	109	92	30.5	N-22°-E	内耳土器片
D 223	285	T-7	圓角方形 角底形	77	76	24.5	N-72°-W	
D 224	286	T-8+9	— 連台形	-	-	25.0	-	
D 225	287	L-8+9 T-8	不整形 連台形	258	-	84.0	N-45°-W	
D 226	288	T-9	円 形 連台形	138	130	48.0	N-69°-W	
D 227	289	K-8	円 形 連台形	127	123	50.0	N-65°-W	
D 228	290	T-7	円 形 連台形	88	81	29.0	N-77°-W	
D 229	291	T-7	円 形 連台形	69	65	13.0	N-35°-W	
D 230	292	T-2	円 形 連台形	91	87	6.0	N-53°-E	
D 231	293	T-5	不整形 羅鉢形	138	96	29.0	N-78°-W	
D 232	294	S+L-7+8	不整長方形 連台形	218	186	33.0	N-22°-E	土師質土器小皿 1、土師質土器片 （横はすべて底面より浮いた状態で検出される。）
D 233	295	9-9	椭円形 連台形	153	126	20.0	N-23°-E	土師質土器片、石臼片、不明石製品、網堅元宝 鏡を含む。
D 234	296	9-9	椭円形 角底形	-	122	15.0	-	美濃灰陶鏡(16C前) 1、土師質土器片 鏡を含む。

遺 構	博認番号	検出区	平面形態	横 機(cm)			長軸方向	備 考
				長軸	短軸	深さ		
D 235	297	寸-8	圓丸形	195	157	35.0	N-78°-W	内耳土器片、石臼 1 礫はほとんどが底面より浮いた状態で検出される。
			逆台形					
D 236	298	寸-8	圓内形	243	186	29.0	N-74°-E	美濃灰陶輪(16 C前) 1、内耳土器片、土師質土器片 粉挽き臼下臼 2、粉挽き臼下臼 1、茶臼下臼 1、石臼片 礫を含む。
D 237	299	寸-8・9	円 形					
			逆台形	77	63	25.0	N-19°-E	不明鉱製品
D 238	300	寸-9	輪内形					
			逆台形	109	82	22.0	N-44°-W	内耳土器片、土師質土器片
D 239	301	寸-9	円 形	68	—	13.5	N-50°-E	
			角底形					
D 240	302	寸-9	輪内形	101	65	39.0	N-50°-W	内耳土器片、茶臼下臼 1、石臼片
D 241	303	寸-9	圓内形	61	48	11.0	N-8°-W	石臼片
D 242	304	寸-寸-9	方 形	—	—	49.0	—	石臼片
			—	—	—	—	—	
D 243	304	寸-9	—	126	—	27.0	—	内耳土器片、土師質土器片、鐵鉗 1、鉄釘、角底 1 礫は底面より浮いた状態で検出される。
D 244	305	寸-9	不整形	152	116	41.0	N	土師質土器小皿 1 北半面は、テラス状を呈する。
			逆台形					
D 245	306	寸-8	圓内形	68	56	25.0	N-22°-E	
			逆台形					
D 246	307	寸-8	円 形	90	72	19.0	N-54°-E	
			角底形					
D 247	308	寸-8	輪内形	150	107	31.0	N	内耳土器片、土師質土器片、粉挽き臼下臼 2、挽き臼 1、 石臼片 磚を含む。
			角底形					
D 248	309	寸-9	圓内形	60	—	19.0	N-27°-W	
			逆台形					
D 249	310	丈-11・12	円 形	60	56	47.0	N-13°-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片
			逆台形					
D 250	311	丈-6	輪内形	252	215	46.0	N-67°-W	土師質土器片、骨 礫を含む。
			逆台形					
D 251	312	丈-6	輪内形	90	77	14.0	N-34°-E	
			逆台形					
D 252	313	丈-7	不整形	274	184	21.0	N-66°-W	内耳土器片、土師質土器小皿片
			逆台形					
D 253	314	丈-7・8	輪内形	197	139	21.0	N-74°-W	青磁碗(16 C) 1、内耳土器片、土師質土器片、石臼片 石製鋸歯 2
			角底形					
D 254	315	丈-8・9-7	不整形	154	116	26.0	N-36°-E	五輪塔
			角底形					
D 255	316	丈-7	長楕円形	131	68	18.5	N-85°-W	印石 1
			垂台形					
D 256	317	丈-6	長方形	—	76	15.0	N-18°-E	
			垂台形					
D 257	318	丈-7	輪丸形	218	182	21.0	N-87°-W	拂き臼 1、石臼片
			逆台形					
D 258	319	丈-7	輪内形	140	113	23.0	N-31°-E	土師質土器片
			角底形					
D 259	320	丈-7	方 形	133	124	41.5	N-67°-W	凹石 1、飼石 1、直方体石、不明石製品 1
			逆台形					
D 260	321	丈-7・8	不整長方形	195	139	29.5	N-61°-W	青磁盤片(14 C)、土師質土器小皿 1、内耳土器片、土師質 土器片、骨、鐵釘 1、鐵石 1、礫石、不明石製品 水平部に、カッコ状の凹凸状を呈する。海螺貝より角底多面に検出さ れる。(石製五輪塔か?)
			逆台形					
D 261	322	丈-7	円 形	157	132	29.5	N-36°-E	東壁に石組みあり。
			逆台形					
D 262	323	丈-7	円 形	124	113	34.0	N-18°-E	美濃灰陶輪小皿(16 C前) 1、土師質土器小皿 1 内耳土器片、土師質土器片、石臼片
			逆台形					
D 263	324	丈-5	円 形	113	96	18.0	N-50°-W	
			逆台形					

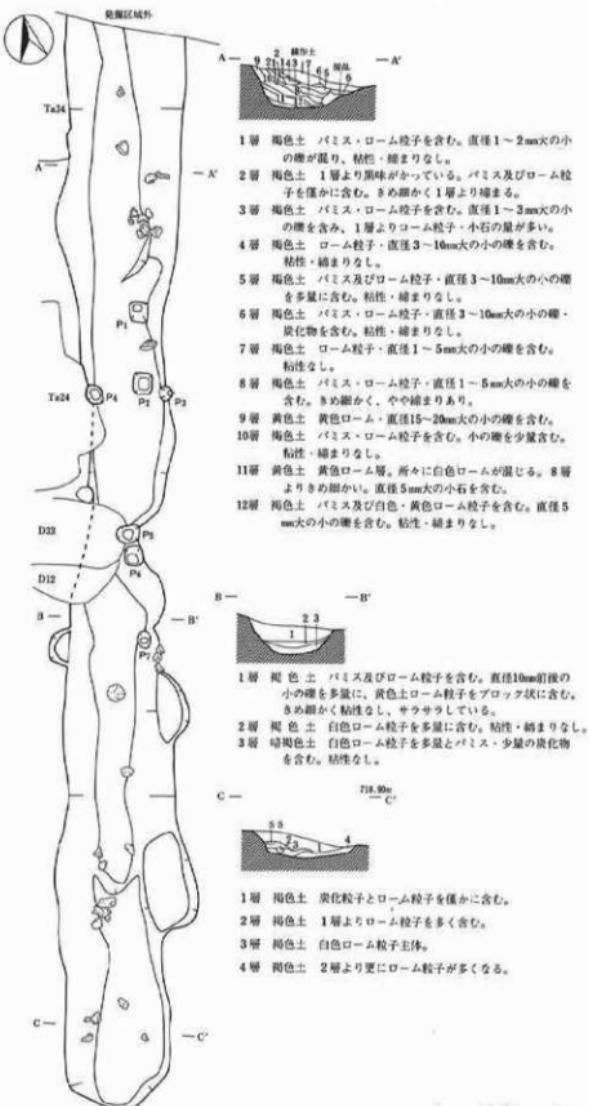
遺 墓	碑田番号	検出区	平面形態	規 模(cm)			長軸方向	考
			断面形	長軸	短軸	深さ		
D 264	325	3-9	円 形 逆台形	104	96	27.0	N-77-W	内耳土器片
D 265	326	3・し-9	長楕円形 U字形	193	50	45.0	N	内耳土器片、土師質土器小皿片、粉粧き臼下臼 1、石臼片
D 266	327	え・お-6・7	椭円形 逆台形	-	113	21.0	N-12-E	内耳土器片、土師質土器片 碗は底面より浮いた状態で検出される。
D 267	328	え-8	円 形 逆台形	180	155	30.0	N-44-E	光背蓮宝 1
D 268	329	う-8	円 形 舟底形	128	117	37.0	N-7-W	内耳土器片、土師質土器小皿片、土師質土器片、石臼片 底面を多量に含む。底面より浮いた状態で検出される。
D 269	330	か-8	椭円形 逆台形	233	143	72.0	N-15-E	
D 270	331	う-8	- 舟底形	-	92	28.0	-	内耳土器片 底(主に角窓)を多量に含む。底面より浮いた状態で検出される。
D 271	332	う-8	椭円形 逆台形	134	109	39.5	N-87-W	内耳土器片、土師質土器小皿片、照寧元宝 1、不明貨幣 1
D 272	333	う-8	逆台形	-	121	14.0	-	土師質土器小皿片
D 273	334	お-6	椭円形 舟底形	124	70	19.0	N-17-E	内耳土器片
D 274	335	こ-6	円 形 逆台形	130	120	11.0	N-8-E	内耳土器片
D 275	336	こ・さ-6	円 形 逆台形	156	154	14.0	N-36-W	青磁碗(15C) 1、内耳土器片、土師質土器片
D 276	337	こ-6・7	不整円形 逆台形	111	108	40.0	N-56-W	内耳土器片
D 277	338	う-10	椭円形 逆台形	124	91	15.0	N-87-W	
D 278	339	す-7・8	椭円形 逆台形	114	87	18.0	N-14-E	内耳土器片、粉粧き臼下臼 1、茶臼下臼 1、石臼片
D 279	340	さ-6	椭円形 逆台形	134	98	10.0	N-57-W	
D 280	341	こ-6・7	円 形 逆台形	91	85	16.0	N-13-E	礎を含む。
D 281	342	こ-7	円 形 逆台形	94	88	16.0	N-6-E	内耳土器片、土師質土器小皿片、粉粧き臼 1、石臼片 礎を含む。
D 282	343	け-7	椭円形 逆台形	96	58	19.0	N-84-W	
D 283	344	け-7	椭円形 舟底形	128	83	17.0	N-18-E	
D 284	345	お-7	椭円形 舟底形	121	88	19.0	N-21-W	碗は底面より浮いた状態で検出される。
D 285	346	こ-7・8	椭丸舟形 逆台形	-	102	26.5	N-69-W	内耳土器片、石臼片、小網 1
D 286	347	お-9	舟形 逆台形	243	91	95.0	N-24-E	土師質土器小皿片、土師質土器片
D 287	348	き-4・5	方 形 逆台形	-	226	31.0	N-13-E	
D 288	349	う-9	椭円形 逆台形	131	70	114.0	N-80-W	土師質土器片、骨
D 289	151	し・す-9	舟方形 -	-	-	33.0	-	
D 290	350	3-7・8	不整方形 逆台形	140	132	30.0	N-75-W	

4 溝状遺構

本城郭から溝状遺構は2基検出された。M1号溝状遺構は、城郭の東端おへーー1・2グリッドより検出され、南北に走っている。幅は最長で2m、最短で1m、深さは0.7mがもっとも深い。覆土は、耕作土下に10層まで分けられた。他の遺構と同様に地山の崩落流れ込みが激しい。溝の外側つまり、断崖寄りには円形・方形のピットが5個みられ、柱などの施設が想定される。



第351図 M2号溝状遺構実測図



第352図 M1号溝状遺構実測図

第2節 中世の遺物

1. 土師質土器小皿

本調査区遺構内、耕作土中からは多量の土師質土器小皿が出土した。完存品は少なく、破損品が主体を占めるが、その量は陶磁器、内耳土器等の他の種類に比べてもはるかに多い。土師質土器小皿も他の種別と同様、遺構との共伴性を首肯できるものはほとんどなく、大方が同時期に投棄されたものと理解される。出土した土師質土器のうち概ね形状を把握でき、図化し得たものは72点にのぼる。これらは、形態・法量などに差があり、分類することが可能である。

まず、以下に形態・法量を中心とした本調査区出土の土師質土器小皿の分類を行ったのち、分析を加えることにする。尚、ここで用いる土師質土器小皿とは、中世から近世にかけて日本の各地域で焼かれた、通称「かわらけ」と呼ばれる⁽²¹⁾最も安価な素焼きの供膳形態（皿型）の土器に対して用いる。「かわらけ」に対する認識は研究者毎に異なり、古代平安時代の土器から系統が連なると考えて土師器とする見解（小林 1977）や、形態的にも胎土・製作技法的にも土器と素焼の土器とは異質であり、共伴遺物も違いをみせることから、「かわらけ」を土師器の系統から分離する見解⁽²²⁾（本沢 1983）など様々である。当佐久地域では、古代末期から中世に至る土器の編年研究は全く白紙の状態であり、前述した「かわらけ」の系統に対する検討などはなすすべもない。従って、ここではとりあえず土師質土器なる曖昧な名称を用いることにした訳である。

土師質土器小皿の分類

本調査で出土した小皿は、いずれもロクロ成形で回転糸切り痕を残し、丸底の手捏成形の小皿ではなく、技法はおむね共通する。また、ほとんどの底部から口辺下部にかけて、指か布で撫でられた擦痕が残る。⁽²³⁾

A型 口辺部が直線的に大きく開くか、口辺下部でやや丸味をもって開く。口辺端部は一様に短く、引き出されるように外反する。法量の相違から、大・中・小型の3タイプに細分できる。器肉はいずれも分厚い。

A ₁ 大型品	口径11.8~15.9cm、器高2.6~3.7cm	15点
A ₂ 中型品	口径9.0~11.5cm、器高2.0~3.3cm	17点
A ₃ 小型品	口径6.7~8.6cm、器高1.6~2.6cm 例外あり	27点

B型 いずれもロクロ成形で回転糸切り痕を残す、平底の小皿である。口辺部は内窵して開くが、A型ほど大きく開かない。法量の相違から4タイプに細分したが、分類の基準にまだ検討の余地がある。器肉はB₁・B₂・B₃は厚いが、B₄は薄く、11は特に薄く胎土も他と明らかに異なる。

B ₁ 大型品	口径12.6cm、器高2.1cm、口径に対して器高が低く偏平である。	1点
B ₂ 中型品	口径9.6~11.4cm、器高2.3~2.7cm、B ₁ に比べ器高が高い。	6点
B ₃ 小型品	口径8.3~9.8cm、器高1.8~2.1cm、器厚が薄い。	3点
B ₄ 小型品	口径8.8cm、器高3.5cm、口径に対し器高が極めて高い。	1点

C型 1点のみ。口辺部が内窵して大きく開いたのち、端部で強く外反する。胎土は他に比べ、細かく緻密で灰白色を呈する。B₃型の11の胎土と共に測定。口径15.8cm、器高3.1cmを測る。

D型 1点のみ。口辺部に円形と考えられる焼成前の3孔を有する。器肉は厚い。

以上の如く、本調査区から出土した土師質土器小皿は、口縁端部が引き伸ばされるように外反する、共通の特徴をもったA型が合計59点あり、全体の82%を占めることから、A型が当城郭で一般的に用いられた形態であったことが伺える。また、これらが大・中・小の3形態をもつことは、小皿の大きさに応じて用途に違いがあったことも想定できる。B₁・B₂は形態上の相違はあるものの、器肉の厚い点はA型と一致するところであり、同じ形式内における形態のバラエティーと考えておきたい。B₃の2・15についても、A₃の55などの器肉がやや薄いものと

類似する形態を示すことから、B₁・B₂と同様の理解を与えておきたい。すなわち、A型及びB型のB₁・B₂・B₃の7・15については、ほぼ同じ時期に同じ場所で製作されたものと考えられる。これらは、個体毎に若干の相違はみられるが、大方がきめの粗い胎土を有し、在地性の強い製品であることからも裏づけられよう。胎土の面からみれば、B₁やDもこれらに含められる。但し、B₄については、用途の基本的な相違も考えられ、後述する香炉型製品362-90・91との関連も考えられよう。これらと全く異なるのが、CとB₃のIIである。胎土は他に比べ緻密で灰白色を呈する。これらは一見して在地性の強い他の胎土とは、見分けることができる。当時、赤かわらけに比べて高価であったと伝えられる白かわらけ⁽³⁾とも考えられる。いずれにせよ、C・B₃のIIとともに、在地性の強い他の小皿とは別目的で購入されたものとし、他形式と同時期に使用されていたと考えておきたい。

以上のことから、第353図に掲示した土師質土器小皿を同一型式と考え、年代的位置づけを行うこととする。本調査区からは、土師質土器小皿とともに中国産磁器、国産陶器が多量に出土した。これらは、土師質土器との一括性が肯定できるものと考えられ、陶磁器の年代を土師質土器小皿の時間位置付けに対する一応の目安とすることが可能である。但し、中国産磁器は国産陶器の年代のピークに比べると一世紀程古い状況を示しているため、国産陶器の年代から土師質土器小皿の年代を推定することにする。国産陶器は常滑・中津川・美濃・瀬戸・備前系の製品がみられ、年代は16世紀の製品が最も多く、他を圧倒する。次いで、15世紀、14世紀の順序で出土しているが、量は少ない。以上の国産陶器のあり方から、土師質土器小皿の年代は、16世紀代と推定される。

他地域との比較

本調査区出土の土師質土器小皿の年代を16世紀に位置づけたが、佐久地方では比較的資料に恵まれない。本年3月調査中の佐久市安原下川原・光明寺遺跡において、寺社に関するとされる遺構から、多量の土師質土器小皿が出土している。これらは、出土陶磁器から15世紀以前の年代を考えられそうであるが、資料化されていないため、本資料との詳細な比較はできない。但し、大小2タイプあり、本遺跡資料よりも薄手のつくりであることから、本資料よりも若干先行する形式と考えて良いかもしれない。いずれにしても佐久地方では大井城跡出土資料の位置づけを検証する材料に乏しい。そこで、地方差が激しく、遠隔地との比較は困難という指摘が常々なされているのを承知の上で、編年が整備された鎌倉⁽⁴⁾（服部 1984）との比較を行っておきたい。大井城出土の土師質土器小皿が、器肉の著しく厚いものが主体を占めるることは前述したとおりであるが、このような器肉の厚い「かわらけ」は、鎌倉では、服部氏の編年のVI期（15世紀後半～16世紀代）に出現する。また器形は、若干の異なりをもつが、服部氏分類のVI期のII群Aが本資料のA₁、II群BがA₂、II群CがA₃、III群BがB₃と共通するように思われる。つまり、年代観及び形態上の特徴において、両者は一致を見ている部分が多いわけである。

以上、漠然とではあるが、大井城跡の土師質土器小皿の年代が16世紀代であることがわかつてきた。今後はこれを土台として、地域内における資料を用いて比較検討し、編年を組みたてゆく必要があろう。

註1 大橋康二 1979 「中世における赤土器・白土器考」「白木」No.7

註2 小林秀夫 1977 「御社宮司遺跡」「長野県中央道理藏文化財包蔵地発掘調査報告書——茅野市その5——」

註3 本沢根輔 1978 「御・御跡発掘調査報告書」平泉町教育委員会

註4 通常、スノコ板と呼ばれるようであるが、本資料の場合、どうしても木目とはみられないため、このような表現をした。

註5 勘定註

註6 郷谷 博 1984 「本町小学校遺跡」小田原市教育委員会

註7 服部実喜 1984 「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置について」「神奈川考古第19号」

A1	大型種 口幅11.8~15.9mm・頭高6~3.7mm (口辺縁が複数個の外反し、頭部でわずかに外反する。)	A2 (中型種) 口幅9.0~11.0mm・頭高2.0~2.5mm (口辺縁は内側をもって引き、頭部で外反する。)	A3 (小型種) 口幅8.0~10.5mm・頭高1.6~2.0mm (口辺縁は内側をもって引き、頭部で外反する。)
65	66	5	3
6	78	64	65
22	48	62	37
73	49	74	32
77	50	44	78
68	51	53	1
65	52	55	49
20	54	56	36
32	57	58	81
62	59	59	12
33	60	60	51
23	71		
54			
C	(a)頭部が複数個の外反する (b)頭部が複数個の内反する	B1 (口辺縁は内側で頭へ) (口辺縁が内側で頭へ)	B2 (口辺縁は内側で頭へ) (口辺縁が外側で頭へ)
57	17	77	47
58	14	76	16
59	34		11
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76			
77			
78			
79			
80			
81			
82			
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94			
95			
96			
97			
98			
99			
100			
101			
102			
103			
104			
105			
106			
107			
108			
109			
110			
111			
112			
113			
114			
115			
116			
117			
118			
119			
120			
121			
122			
123			
124			
125			
126			
127			
128			
129			
130			
131			
132			
133			
134			
135			
136			
137			
138			
139			
140			
141			
142			
143			
144			
145			
146			
147			
148			
149			
150			
151			
152			
153			
154			
155			
156			
157			
158			
159			
160			
161			
162			
163			
164			
165			
166			
167			
168			
169			
170			
171			
172			
173			
174			
175			
176			
177			
178			
179			
180			
181			
182			
183			
184			
185			
186			
187			
188			
189			
190			
191			
192			
193			
194			
195			
196			
197			
198			
199			
200			
201			
202			
203			
204			
205			
206			
207			
208			
209			
210			
211			
212			
213			
214			
215			
216			
217			
218			
219			
220			
221			
222			
223			
224			
225			
226			
227			
228			
229			
230			
231			
232			
233			
234			
235			
236			
237			
238			
239			
240			
241			
242			
243			
244			
245			
246			
247			
248			
249			
250			
251			
252			
253			
254			
255			
256			
257			
258			
259			
260			
261			
262			
263			
264			
265			
266			
267			
268			
269			
270			
271			
272			
273			
274			
275			
276			
277			
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295			
296			
297			
298			
299			
300			
301			
302			
303			
304			
305			
306			
307			
308			
309			
310			
311			
312			
313			
314			
315			
316			
317			
318			
319			
320			
321			
322			
323			
324			
325			
326			
327			
328			
329			
330			
331			
332			
333			
334			
335			
336			
337			
338			
339			
340			
341			
342			
343			
344			
345			
346			
347			
348			
349			
350			
351			
352			
353			
354			
355			
356			
357			
358			
359			
360			
361			
362			
363			
364			
365			
366			
367			
368			
369			
370			
371			
372			
373			
374			
375			
376			
377			
378			
379			
380			
381			
382			
383			
384			
385			
386			
387			
388			
389			
390			
391			
392			
393			
394			
395			
396			
397			
398			
399			
400			
401			
402			
403			
404			
405			
406			
407			
408			
409			
410			
411			
412			
413			
414			
415			
416			
417			
418			
419			
420			
421			
422			
423			
424			
425			
426			
427			
428			
429			
430			
431			
432			
433			
434			
435			
436			
437			
438			
439			
440			
441			
442			
443			
444			
445			
446			
447			
448			
449			
450			
451			
452			
453			
454			
455			
456			
457			
458			
459			
460			
461			
462			
463			
464			
465			
466			
467			
468			
469			
470			
471			
472			
473			
474			
475			
476			
477			
478			
479			
480			
481			
482			
483			
484			
485			
486			
487			
488			
489			
490			
491			
492			
493			
494			
495			
496			
497			
498			
499			
500			
501			
502			
503			
504			
505			
506			
507			
508			
509			
510			
511			
512			
513			
514			
515			
516			
517			
518			
519			
520			
521			
522			
523			
524			
525			
526			
527			
528		</	

圖353 大井城跡出土土師質小皿分類圖

2. 内耳土器

本調査区からは、遺構内・耕作土中より多量の内耳土器が出土した。これらはすべてが破損品である。これは当地方の中世において、一般的な煮沸具として利用頻度の高かった内耳土器の性格を考えれば、当然のことと言える。多量に出土した内耳土器のうち、辛うじて図上で復原されたものは総数で12点のみであるが、形態の特徴からみて大区分で二形態、小区分で三形態に分類することが可能である。これは、茅野市御社宮司遺跡の報告（1977）において小林秀夫氏によってなされた内耳土器の鍋型（A型）の分類とおおむね対応できるものと考えられる。従ってここでは、小林氏の分類及び編年観を軸に、本調査で伴出した陶磁器等の年代も勘案して、本調査区出土の内耳土器に対して検討を加えることとする。尚、ここで用いる内耳土器とは、口縁部付近の内側に柄状の把手を有する器で瓦質のものに対して用いる。⁽²¹⁾ また、小林氏の分類による、浅鉢型（B型）は本調査では、全くみられず、C型（ほうろく型）についても、A III型と明確に分離されるものがみられないため、ここでは検討を加えることができない。

小林氏の鍋型（A型）に関する3分類の基準（I～III）は以下の通りである。（全文報告書より転載）⁽²²⁾

A I型 「く」の字状に屈曲しながら外反する口縁部で、口縁部内側にも稜を残す特色がある。ロクロ成形で、口縁部外面はロクロ成形痕が顕著である。胴部は成形後、刷毛状工具による縱方向のナデ調整が行われている。耳の接合されている資料はない。外面には媒が付着している。器厚は、0.8～1.2cmと薄く、特に底面は薄く調整されている。口径は35.0～32.0cm、器高28.8～26.8cmである。

A II型 A I型に比べると、口縁部の外反が小さく直立気味で、肩部に小さな稜を残している。成形・整形ともにA I型と同じである。耳部は1対で、縦位につけられ、口縁端部の數mm下からつけられているものと、口縁端部に連続してつけられるものの2通り存在するようであるが、後者の器形は明確でない。器厚はA I型に比べると1.2～1.4cmと厚く、口径36.2～32.3cm、器高19.7cm前後、底径28.2～27.2cmである。

A III型 口縁部は直立し、外反はなくなる。器高が低くなるのが特色である。成形はA I・A II型と同様であるが、整形段階で、胴部に縱方向のナデ、底部下端部に刷毛状工具による横方向のナデ、耳部にヘラ状工具による縱方向のナデが行われている違いがある。口径31.0～30.5cm、器高16.0～14.5cmである。

小林氏はこれらの分類に基づいて、器形変遷の過程を伴出土器などから15世紀・16世紀代ととらえ、I～VI期に分けて検討されている。それによると、A I・A II型をI～III期15世紀代、A III型をIV・V期16世紀代に比定している。また、A I型の口縁部の外反傾向に注目し、14世紀代の鐵鍋にA I型と類似する口縁部が外反する形態が認められることから、内耳土器鍋の口縁部の外反する器形は古い様相を示していることを裏付けられている。

以上のような分類基準に則って、本調査出土の内耳土器を当てはめてみよう。A I型には355-4・5・6、356-7・10・11などの6点があてられよう。器高はいずれも不明であるが、口径は355-4・5・6、356-7・11が32.0～31.6cmを測り、御社宮司例とおおむね一致する。356-10は内側に柄を有するが、口径は28.8cmとやや小型である。御社宮司例には耳の付けられている資料はみられなかったが、本資料には耳のつけられたものが多いという差異もみられる。A II型には355-1・2があてられるが、口径は355-1が26.4cm、355-2が23.6cmと御社宮司例に比べてはるかに小さい。A III型には355-3、356-9の2例があり、口径はいずれも36.6cm、器高は355-3が14cm、356-9が16cmを測り、御社宮司例と大方の一致をみる。

以上のように、本調査で出土した内耳土器の鍋型のものは、法量に若干のバラエティーを含むものの、御社宮司の資料と大方が一致しており、三形態に分類することができた。小林氏はこの形態変化を時間差として把えたことは前述した如くであり、この年代観に従えば、大井城址出土の内耳土器は15～16世紀の年代幅をもつことになる。本調査で出土した遺物の大半が、一括投棄された破損品であり、各種別毎に相当の年代幅を有している

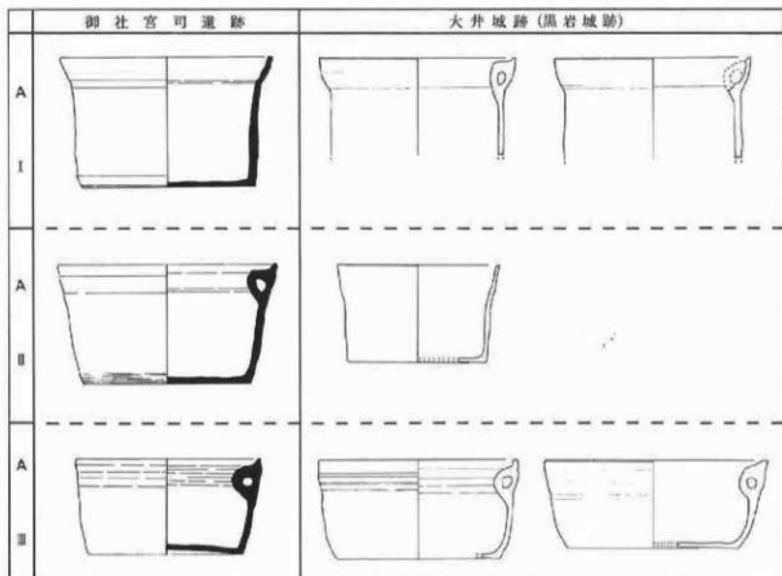
(例えば、中国磁器は13~16世紀、国産陶器は14~16世紀の年代幅をもつ)ことを考えれば、小林氏の分類規準に従って行った大井城の内耳土器鍋型の年代15~16世紀の変遷過程はおおむね肯定できるものと言える。但し、現段階では全く推測の域を脱しないが、本調査で出土した国産陶器は16世紀代の製品が圧倒的に多く、検出された造群もこれに近い時期に形成された可能性が強いことを考え合わせると、A I・A II・A III型と分類したこれらの内耳土器も16世紀代に同時に共存していたことも考えられる。形態の相違を時間差としてとらえるか、同時期の同じ器種内におけるバラエティーとして把えるかは、今後の検討課題として提起しておきたい。いずれにせよ、本調査出土の内耳土器は15~16世紀の範囲でおさえられることはほぼ確実である。御社宮司報告でも小林氏が触れておられるが、中村倉司氏が1979年に発表された論文「内耳土器の編年とその問題」^(註1)において行われた編年の中で、第Ⅰ期14世紀前に比定した長野県の資料は、大井城出土資料と同形態を有するものと考えられ、その年代観は大きな矛盾を内包しているように思われる。

362~93も、ほうろくと考えられる。焼成前に口縁部に孔を穿っており、鉄環を装着し、耳の代りとしている。器高が極めて低く、江戸時代でも末期のものと考えられる。

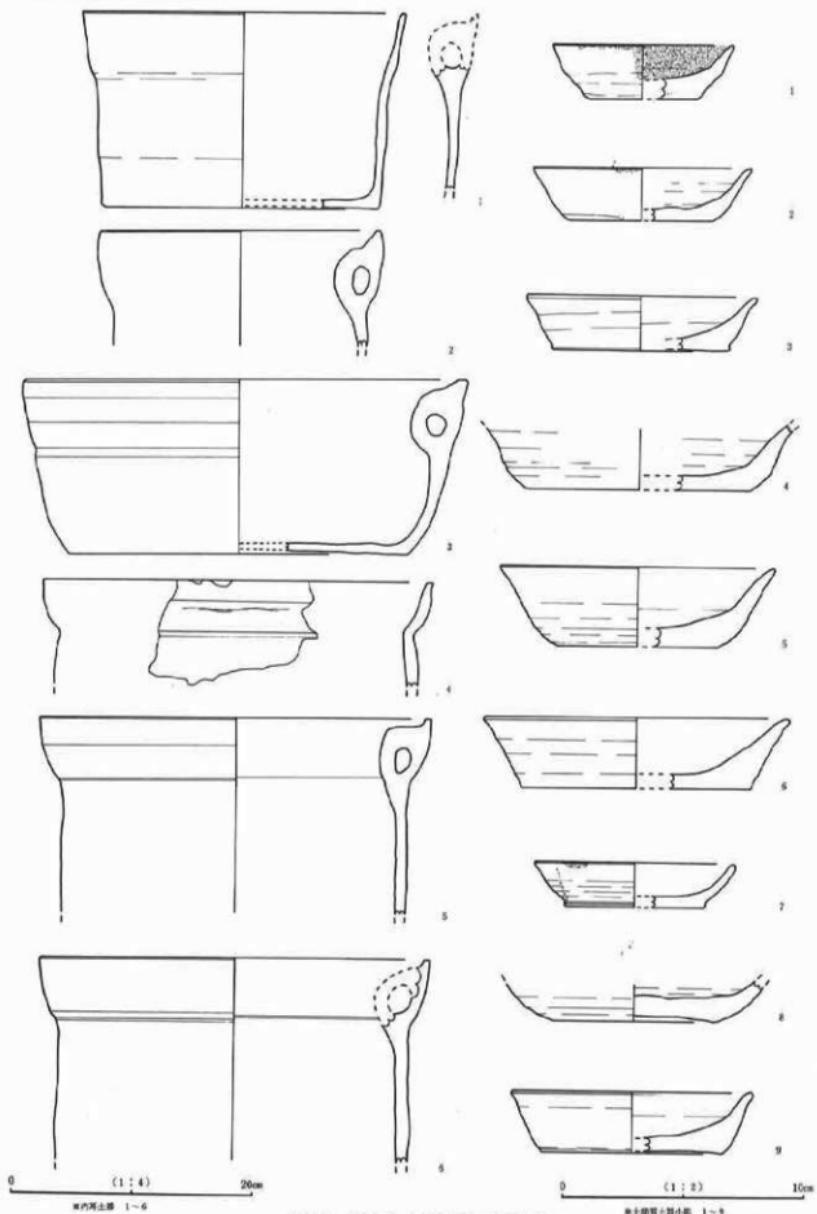
註1 中村倉司 1979 「内耳土器の編年とその問題」『土蔵考古』創刊号

註2 小林秀夫 1977 「御社宮司遺跡」『長野県中央道理歴文化財保護地発掘調査報告書——茅野市その5——』

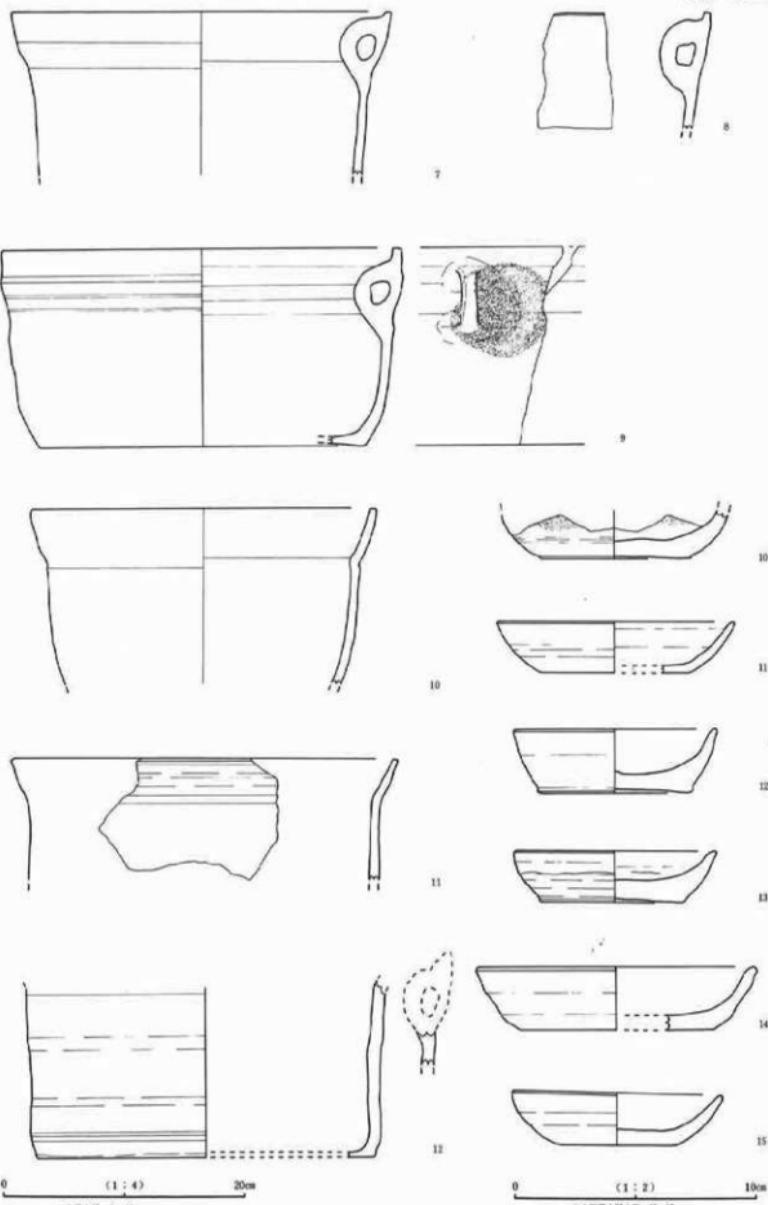
註3 術掲註1

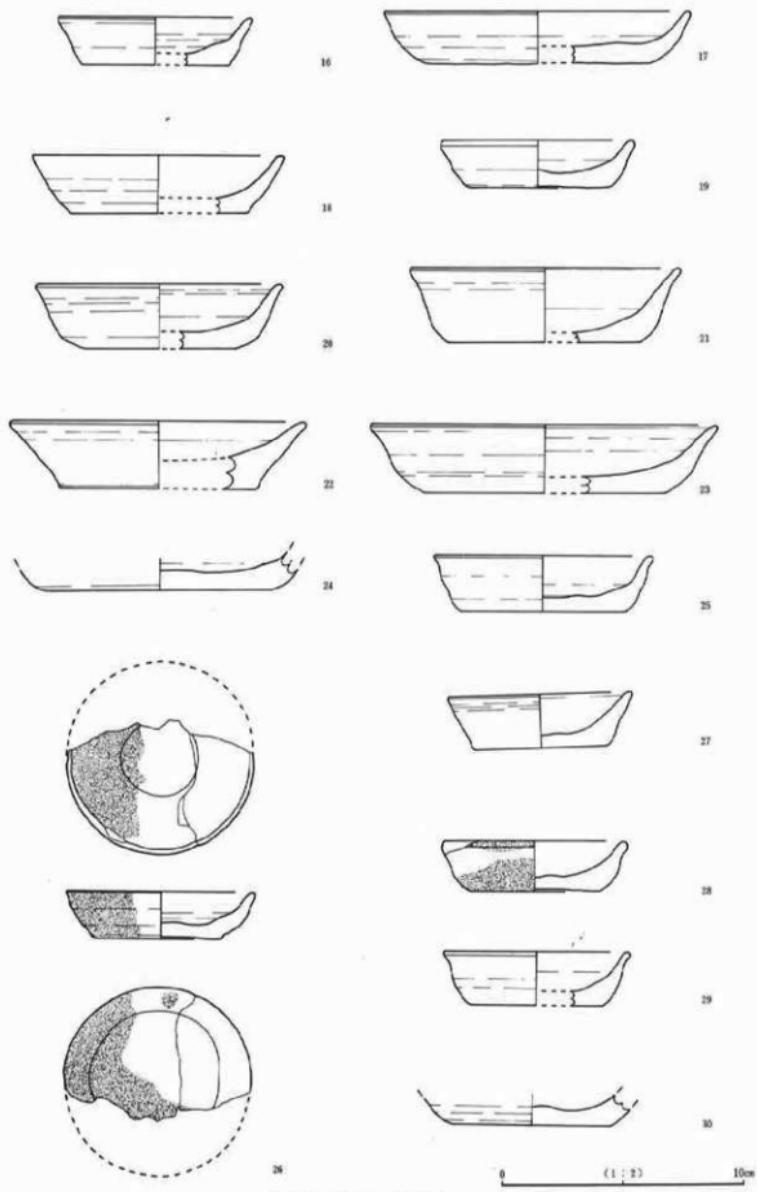


第354図 御社宮司遺跡、大井城跡出土内耳土器の比較(1:8)

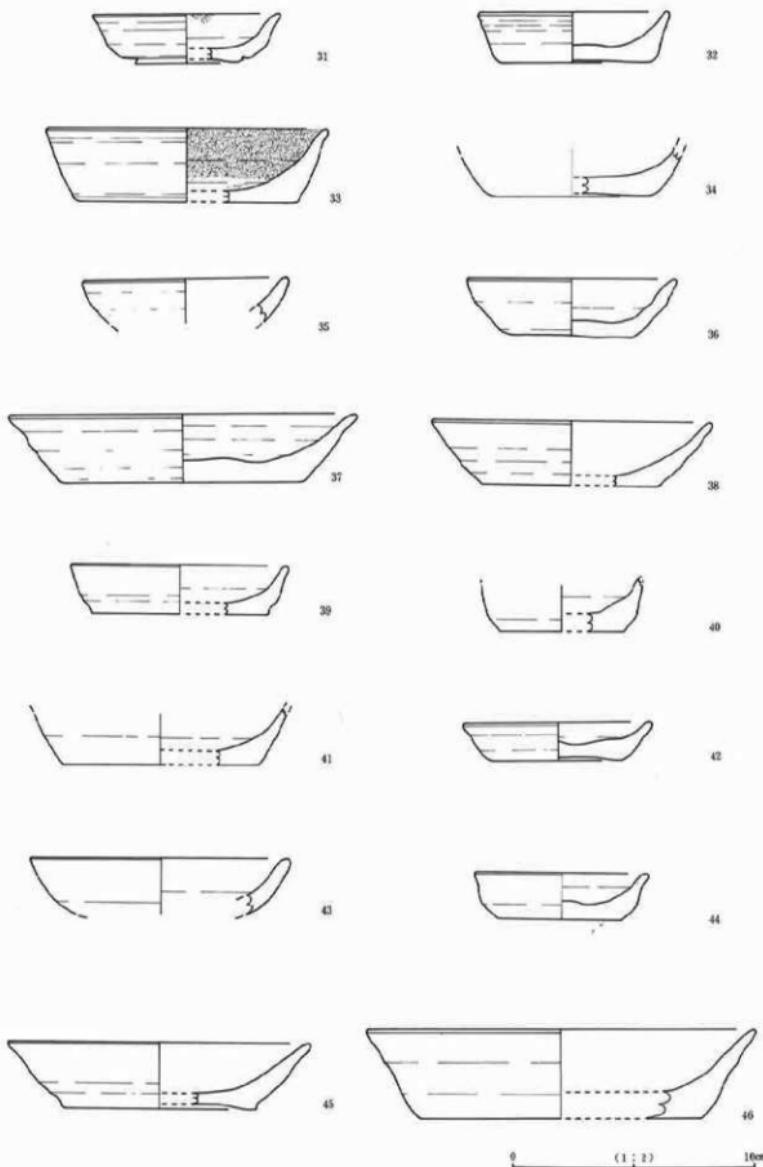


第355図 内耳土器・土師質土器小皿実測図(1)

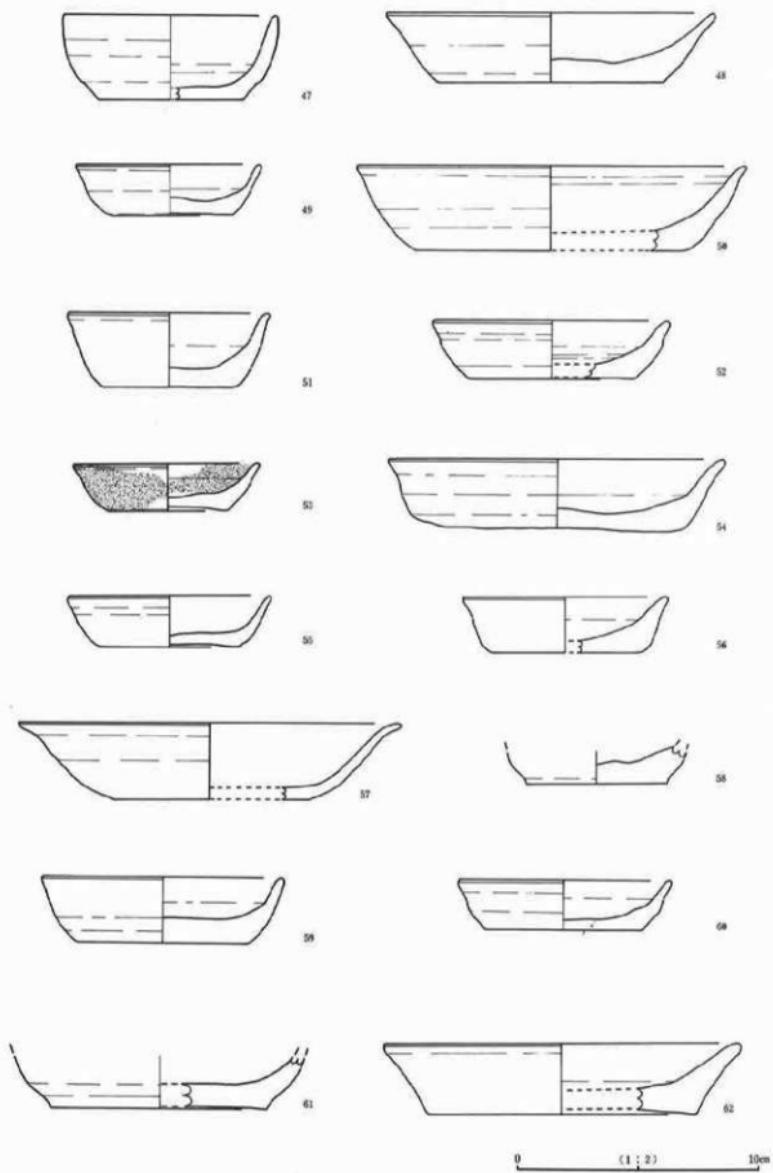




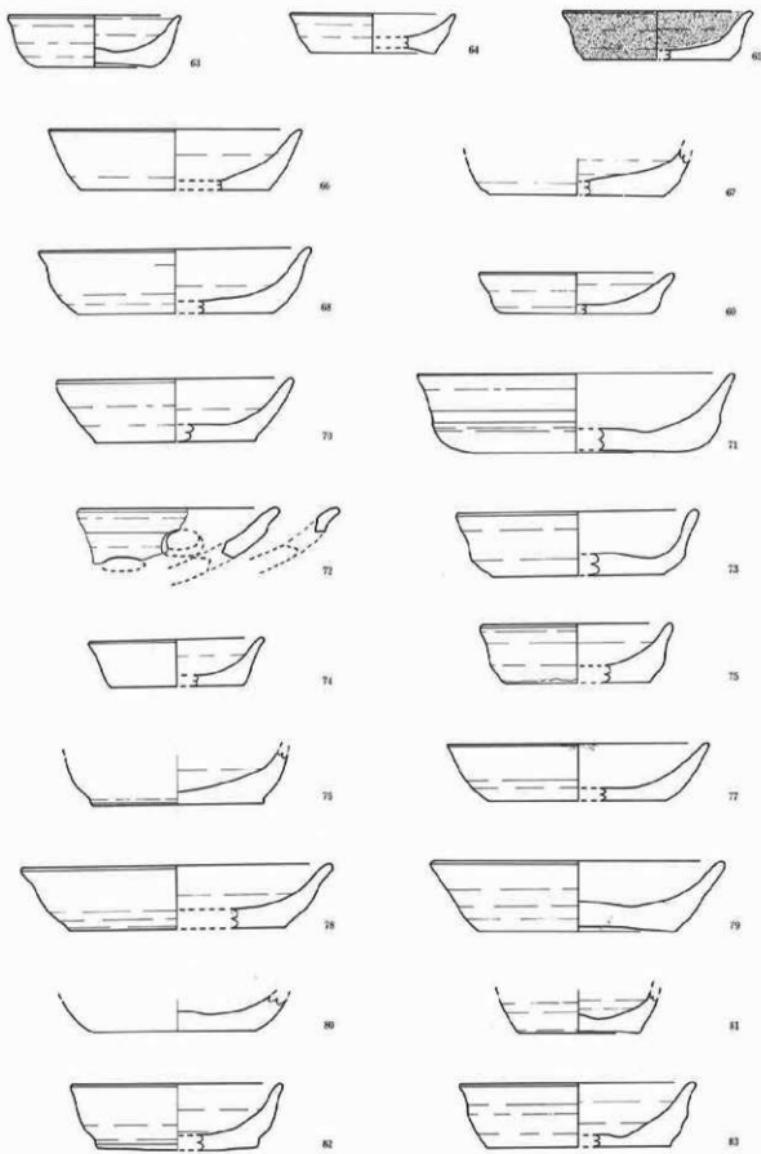
第357図 土器質土器小形実測図(3)



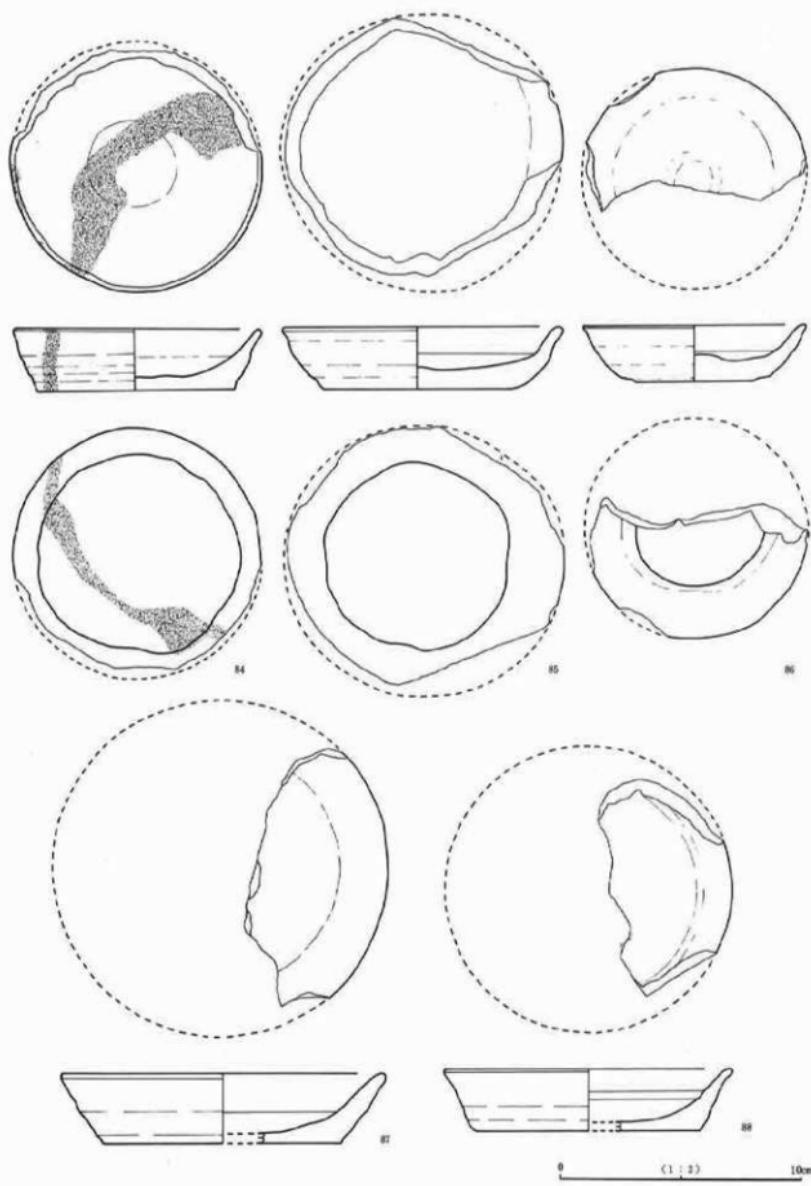
第358図 土器質土器小皿実測図(4)



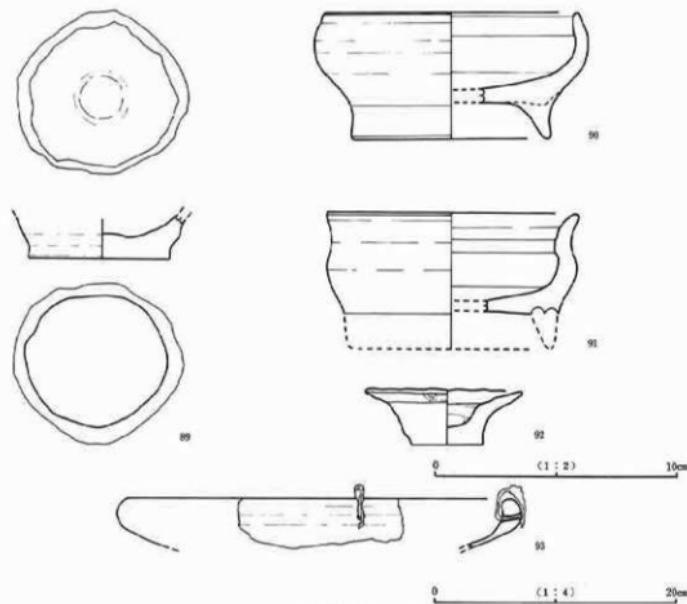
第359図 土器窯小皿測図(5)



0 (1 : 2) 10cm



第361図 土師質土器小皿実測図 (7)



第362図 土器質土器小皿・香炉等実測図(8)

第346表 土師質土器小皿一覽表(1)

件 番 号	遺 跡 名	地 点 名	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
355-1	T*4 II区 覆土	土師質土器小皿	(7.4) 2.2 (4.4)	扇いの邊は、内面気泡に外傾する。	外面 口辺部ヨコリコナデ 内面 黒色泥彩 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好 その他 内面に油漬けの跡が見られる。	
355-2	T*4 覆土 さー6枚	土師質土器小皿	(9.0) 2.2 (5.8)	口辺はやや内側気泡に外傾し、底部で少しだけ外反する。	外面 口辺部ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好 その他 口縁部に糊付着	
355-3	T*8 I区 覆土	土師質土器小皿	(9.4) 2.2 (7.2)	器高極く、扇いの邊は内側気泡に外傾し、底部でわずかに外反する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好	
355-4	T*12 覆土	土師質土器小皿	(12.5) (9.5)	口辺は、内側気泡に外傾する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好	
355-5	T*12 覆土	土師質土器小皿	(11.4) 3.3 (6.6)	口辺は直線的に外傾し、底部でわずかに外反する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/1 焼成 良好	
355-6	T*14 覆土	土師質土器小皿	(12.6) 2.9 9.4	口辺は直線的に広く外傾し、底部は外反する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好	
355-7	T*19 覆土	土師質土器小皿	(8.3) 1.8 (5.8)	口辺は内側気泡に外傾する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好 その他 口辺部に油漬けの跡	
355-8	T*21 No11	土師質土器小皿	(1.5) 6.6	底部は上直型。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好	
355-9	T*23 No10 No24	土師質土器小皿	(9.3) 2.5 (7.6)	口辺は内側気泡に外傾し、底部でレバーカに外反する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好	
356-10	T*23 No17	土師質土器小皿	(2.0) (2.2)	器厚が薄めで、口辺は内側気泡に外傾すると思われる。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好 その他 内外面に油漬けの跡	
356-11	T*25 覆土	土師質土器小皿	(9.3) 2.1 (6.0)	口辺は内側気泡に外傾する。 口辺天井部は平ら。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 白色を呈し、きめ細かい 色調 1.5YR8/2 焼成 良好	
356-12	T*26 I. III. IV区 覆土	土師質土器小皿	8.2 2.6 (6.4)	口辺は内側気泡に外傾する。	外面 ヨコリコナデ。ナデ 内面 ヨコリコナデ。ナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好	
356-13	T*28 No11	土師質土器小皿	8.2 2.1 5.9	底部の壁厚が大きく、 口辺部は短く内側気泡に外傾する。 底部平底。	外面 ヨコリコナデ。ナデ 内面 ヨコリコナデ。ナデ 底部 回転み切り	-	
356-14	T*32 覆土	土師質土器小皿	(11.4) 2.6 (8.0)	器厚は薄め、口辺部は内側気泡に外傾し、 上半部でやや肥厚する。	外面 ヨコリコナデ。ナデ 内面 ヨコリコナデ。ナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好	
356-15	T*32 No1	土師質土器小皿	8.6 2.2 4.8	器高は低く、口辺部は内側気泡に外傾する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好	
357-16	T*35 覆土	土師質土器小皿	(8.0) 1.96 8.0	器高は低く、短い口辺部が内側気泡に外傾し、底部でわずかに外反する。	外面 ヨコリコナデ 内面 ヨコリコナデ 底部 未切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好	

第347表 土師質土器小皿一覧表(2)

登録番号	出土地	種類	出量	器形の特徴	調査	備考
357-17	Ta 26 No.6	土師質土器小皿	(12.6) (2.1) (9.6)	口辺はやや内済気泡に外傾する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ	胎土 やや粗 色調 14Y R8/4 焼成 良好
357-18	Ta 26 便土内	土師質土器小皿	(16.4) (2.4) (7.2)	口辺はやや内済気泡に外傾する。 口辺周縁取扱いが施される。	外面 ロクロココナデ 内面 刷毛著しくよくひびかないが、残存部分から判断するとロクロココナデ。 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/4 焼成 良好 その他、内面は磨付着
357-19	Ta 29 1区 便土	土師質土器小皿	7.8 2.6 5.6	口辺は直線的に広く外傾する。 全体に厚い器壁。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/4 焼成 良好
357-20	Ta 29 1区 便土	土師質土器小皿	(16.6) 2.7 (6.2)	口辺は内済気泡に外傾し、口辺端部で 強く外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/3 焼成 良好
357-21	Ta 40 便土	土師質土器小皿	(11.1) 3.1 (8.6)	器高はやや薄く、口辺は内済気泡に外 傾し、底部でわざかに外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 7.5Y R8/6 焼成 良好
357-22	Ta 40 便土	土師質土器小皿	(12.6) 2.8 (8.6)	口辺は直線的に広く外傾し、底部でわざ かに外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/2 焼成 良好
357-23	Ta 47 便土	土師質土器小皿	14.6 19.6	口辺内済気泡に外傾し、底部でわざか に外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 7.5Y R8/4 焼成 良好
357-24	Ta 42 1区 便土	土師質土器小皿	— (1.5) (9.2)		外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/3 焼成 良好
357-25	Ta 44 便土	土師質土器小皿	(9.6) 2.2 (6.8)	器高低く、細い口辺が内済気泡に外傾し、 口辺はやや外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R7/2 焼成 良好
357-26	Ta 43	土師質土器小皿	(7.6) 1.9 (5.2)	口辺は、内傾して外傾する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	色調 16Y R8/2 焼成 良好 その他、内外面とも磨付着
357-27	Ta 49 便土	土師質土器小皿	(2.5) 2.5 5.4	口辺は幅く、直線的に外傾する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/3 焼成 良好
357-28	Ta 49 便土	土師質土器小皿	(2.4) 2.45 (5.4)	口辺は内済気泡に外傾し、底部でわざ かに外反する。	外側 雪刷毛著しく調査不規だが、表面に 刷毛切が認められ、ロクロコ コナデ箇所によろものと考えられ る。	胎土 粗 色調 14Y R8/2 焼成 良 その他、外面上に墨付着
357-29	H13 1区 便土	土師質土器小皿	G.80 2.2 (5.4)	器高低く、細い口辺が内済気泡に外傾し、 口辺部で外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/3 焼成 良好
357-30	実様	土師質土器小皿	— (1.6) 6.6		外部 底部み切り 底部ロクロココナデ	胎土 きめ細かい 焼成 良好
358-31	D11 No.7	土師質土器小皿	(7.4) 2.4 (4.6)	口辺は内済気泡に外傾し、底部でわざか に外反する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り(途中で乱れが見られる)	胎土 やや粗 色調 14Y R8/4 焼成 良好 その他、内面に墨付着
358-32	D11 No.4	土師質土器小皿	7.1 2.1 6.3	口辺は外反気泡に外傾する。	外面 ロクロココナデ 内面 ロクロココナデ 底部 回転み切り	胎土 やや粗 色調 16Y R8/4 焼成 良好

第348表 土師質土器小部一覧表(3)

井 国 番 号	出 現 場 所	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
358-33	D13 No.1	土師質土器小部	(11.0) 3.0 (9.0)	口辺内面気泡に外縁し、瓶底でわずかに外反する。 厚壁。口縁・底部中央が薄くなっている。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 16YR8/4 焼成 良好 その他 内面に油墨付着
358-34	D13 覆土	土師質土器小部	— (1.9) (6.4)	口辺部は内面気泡に上がると思われる。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 16YR7/2 焼成 良好
358-35	D25 覆土	土師質土器小部	(8.4) (1.8) —	口辺部は内面気泡に外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ	粘土 やや粗 色調 16YR8/2 焼成 良好
358-36	D31 覆土	土師質土器小部	8.6 2.3 5.0	口辺はやや内面気泡に外縁し、瓶底でわずかに外反する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 16YR8/2 焼成 良好
358-37	D36 覆土	土師質土器小部	(14.3) 2.8 (16.0)	口辺部は直線的に広く外縁し、瓶底で内反する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 16YR8/3 焼成 良好
358-38	D50 覆土	土師質土器小部	(11.4) 2.6 (7.2)	口辺部は内面気泡に広く外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 16YR8/3 焼成 良好 その他 粘付着
358-39	D50 覆土	土師質土器小部	(9.0) 2.0 (7.2)	器高低く、口辺部は内面気泡に外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 16YR8/2 焼成 良好
358-40	D61 覆土	土師質土器小部	— (2.2) (5.1)	口辺部は内面気泡に外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 2.5YR6/1 焼成 良好
358-41	D61 覆土	土師質土器小部	— (2.4) (8.0)	口辺部は内面気泡に外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 中や粗 色調 16YR6/1 焼成 良好
358-42	D68 覆土	土師質土器小部	(7.6) 1.55 (5.4)	口辺部は直線的に外縁する。 底部は多少上昇気味。 器高も極めて低く小型。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好
358-43	D74 覆土	土師質土器小部	(10.8) (2.3) —	口辺部はやや内面気泡に外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ	粘土 やや粗 色調 16YR8/3 焼成 良好
358-44	D74 No.1	土師質土器小部	7.2 1.9 5.1	口辺は内面気泡に外縁し、瓶底で外反する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好
358-45	D84 覆土	土師質土器小部	(12.4) 2.7 (7.9)	口辺部は直線的に広く外縁する。 底部上重。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好
358-46	D84 覆土	土師質土器小部	(15.8) 3.65 (11.5)	口辺部は直線的に広く外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好
359-47	D136 覆土	土師質土器小部	(8.8) 3.5 (6.0)	口辺部は内面して外縁する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好
359-48	D140 覆土	土師質土器小部	(13.6) 2.85 (9.2)	口辺部は直線的に外縁し、瓶底でわずかに外反する。	外面 ロクヨンコナザ 内面 ロクヨンコナザ 底部 回転赤切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好

第349表 土師質土器小集一覧表(4)

件 号 種 号	地 区 名	器 种	法 量	器 形 の 特 徴	内 面	外 面	備 考
359-49	D115 覆土	土師質土器小皿	7.6 2.1 5.8	口辺部は内面気味に立ち上がる。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR7/4 焼成 良好	
359-50	D125 覆土	土師質土器小皿	(15.9) 3.5 (11.0)	口辺部は外傾し、底部で外反する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好	
359-51	D125 覆土	土師質土器小皿	(8.2) 3.1 (5.4)	器底が深く、口辺部は内面気味で底部で外反する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 2.5YR5/8 焼成 良好	
359-52	D150 No.2	土師質土器小皿	(9.6) 2.4 (6.8)	口辺部は内面気味に外傾し、底部で外反する。	外面 ロクロ成型 内面 ロクロ成型 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 2.5YR7/2 焼成 良好	
359-53	D185 No.2	土師質土器小皿	7.6 1.95 4.9	口辺部は内面気味で底部で外反する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 2.5YR8/2 焼成 良好 その他 内外面に縦付着帯	
359-54	D186 No.1	土師質土器小皿	(13.6) 2.8 (11.0)	口辺部は外反気味に外傾する。底部は広い。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR6/4 焼成 二段火焼成	
359-55	D188 No.1	土師質土器小皿	(8.2) 2.1 (5.6)	器底は薄く、口辺部は内面気味に外傾する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR7/3 焼成 良好 その他 内外面所々に剥落	
359-56	D191 覆土	土師質土器小皿	(8.4) 2.3 (6.0)	口辺部は鋭かく直線的に外傾して、底部でわずかに外反する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/1 焼成 良好	
359-57	D192 覆土	土師質土器小皿	(15.8) 3.1 (8.0)	口辺部は内面して広く外傾し、口唇部で外反する。全体的に内傾。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ	粘土 きめ細かい 色調 2.5YR8/2 焼成 良好	
359-58	D232 覆土	土師質土器小皿	— (1.7) (5.8)	口辺部は内面気味と考えられる。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 砂粒混ざりに剥落 底部偏めで少し 色調 10YR8/2 焼成 良好	
359-59	D260 覆土	土師質土器小皿	(9.6) 2.7 (6.9)	口辺部はやや内面気味に外傾する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 きめ細かい 焼成 良好	
359-60	D282	土師質土器小皿	(8.6) 2.05 (6.4)	口辺部は内面気味に外傾する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	色調 10YR8/2 焼成 良好	
359-61	う-9 耕作土	土師質土器小皿	— (2.1) (8.9)	口辺部は内面気味に外傾する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 7.5YR8/4 焼成 良好	
359-62	う-13 耕作土	土師質土器小皿	(14.6) 2.9 (11.2)	口辺部は外反気味に外傾する。(口辺部や外反気味) 底部は底気味。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 2.5YR6/6 焼成 良好	
360-63	う-10	土師質土器小皿	(7.0) 2.1 (4.8)	口辺部内面気味に外傾する。 口唇部や外反気味。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好	
360-64	う-12	土師質土器小皿	(6.7) 1.6 (5.1)	口辺部内面気味に外傾する。	外面 ロクヨコナダ 内面 ロクヨコナダ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 7.5YR8/4 焼成 良好	

第350表 土器質土器小皿一覧表(5)

件 番 号	名 称 用 意 区 域	器 種	直 径	形 状	特 徴	質 感	備 考
360-45	丸-7	土器質土器小皿	(7.5) 2.3 (5.3)	口辺部は内側に凹曲し、底部は外反する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中 色調 3.5Y 7/1 焼成 良好 その他 口沿付着(内底)	
360-46	丸-10	土器質土器小皿	(19.4) 2.5 (7.8)	口辺部は内側に凹曲し外傾する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 7/2 焼成 良好	
360-47	丸-11	土器質土器小皿	— (1.5) (7.2)	—	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 二次焼成	
360-48	丸-11	土器質土器小皿	(11.5) 2.5 (8.3)	口辺部は内側に凹曲し外傾し、底部は外反する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 7/1 焼成 二次焼成	
360-49	丸-10	土器質土器小皿	(8.5) 1.7 (5.4)	口辺部は直線的に外傾し外反する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 二次焼成	
360-50	丸-12	土器質土器小皿	(9.5) 2.5 (5.4)	口辺部は内側に凹曲し外傾する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 良好	
360-51	丸-6	土器質土器小皿	(12.0) 3.2 (8.5)	口辺部は直線的に外傾する。 底部やや丸ら。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/4 焼成 良好	
360-52	丸-7	—	— — —	穿孔が2ヶ所にある。			胎土 中や粗 色調 10 Y R 7/2 焼成 良好
360-53	丸-3	土器質土器小皿	(9.5) 2.5 (7.5)	口辺部は内側に凹曲し外傾する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 良好	
360-54	丸・丸-5	土器質土器小皿	(7.5) 1.9 (5.4)	口辺部は直線的にやや外反し、底部は外反する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 2.5Y R 6/8 焼成 良好	
360-55	丸-6	土器質土器小皿	(7.7) 2.4 (5.3)	口辺部は内側に凹曲し外傾する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 良好	
360-56	丸-9	土器質土器小皿	— (2.5) (7.3)	—	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り		
360-57	L-5	土器質土器小皿	(19.0) 2.3 (7.2)	口辺部は内側に凹曲し外傾する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 やや不良 その他 口沿部腐食	
360-58	表板	土器質土器小皿	(12.5) 2.5 (8.5)	口辺部は内側に凹曲し、底部は外反する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 8/3 焼成 良好	
360-59	表板	土器質土器小皿	(12.2) 2.9 (8.3)	口辺部は直線的にやや内曲する。	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 7/2 焼成 良好	
360-60	表板	土器質土器小皿	— (1.0) 9.5	—	外底 ロクロココナツ 内底 ロクロココナツ 底部 回転み切り	胎土 中や粗 色調 10 Y R 7/1 焼成 良好	

第351表 土師質土器小皿一覧表(6)

件 號 番 号	出 處 地 區 層 位	形 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 査 量	備 考
361-91	表層	土師質土器小皿	— (1.7) 5.8	—	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好
361-92	H15	土師質土器小皿	(8.6) 2.2 (6.4)	口沿部は内側突起で底部は外反する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	
361-93	H15	土師質土器小皿	(9.4) 2.5 7.5	口沿部は内側突起で底部は外反する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	
361-94	H 8	土師質土器小皿	(10.0) 2.6 8.1	口沿部は直線的にやや内湾する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好 その他 内外面保有者
361-95	表層	土師質土器小皿	(11.5) 2.6 (7.6)	口沿部は内側突起に外傾し、底部は外反する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/2 焼成 良好 その他 内外面保有者
361-96	3-2	土師質土器小皿	(9.2) 2.3 (4.8)	口沿部は内側突起に外傾し、底部は外反する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR7/2 焼成 良好
361-97	3-2	土師質土器小皿	(12.2) 2.9 (9.8)	口沿部は直線的に外傾する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	色調 暗褐色
361-98	L-8	土師質土器小皿	(11.4) 2.6 9.2	口沿部は外反する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/4 焼成 良好
361-99	表層	土師質土器小皿	— (1.0) 5.8	—	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好
361-100	表層	土師質土器小皿	— — —	口沿部は内湾し、内傾する。 3ヶ所に斜面を有する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	
361-101	3-11	土師質土器小皿	(10.2) (4.2) (8.8)	口沿部は外反し、斜面は張る。 3ヶ所に斜面を有する。	外側 ロクロココナツ 内側 ロクロココナツ 底部 回転み切り	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好
361-102	T 9 Se.1	?	6.4 2.2 2.8	口沿部は強く外反する。	ヘリテ	粘土 やや粗 色調 10YR8/3 焼成 良好
361-103	3-2	ようろく	(31.2) (4.1) —	—		

表中に記載する色調は、岩谷水道市長作木産技術会議多種監修の新色標準土色和に基づいて行った。

3 陶磁器

本調査区3,605m²の区域内の遺構・耕作土から出土した陶磁器は、中国産（大方が龍泉窯製品と考えられる）磁器が52点、国産陶器が193点の計245点を数えるが、完存品は一点もなくすべてが破片である。このうち、近世18世紀の製品366-1・2・3（美濃片口鉢・灯明皿）及び美濃鉄釉土瓶の4点を除く241点が、中世13世紀～16世紀代の製品と考えられる。耕作土の除去は人力によるものであり、この際にエラーした陶磁器は極僅かと考えられるので、241点という数を城郭内における当エリアの陶磁器の絶保有数と考えられても大過ない。そしてこの総数は決して多いものとは言えないようである。尚、以下に述べる陶磁器の系統・年代観は、赤羽一郎氏の御教示によるものであることを了めお断りしておく。

中国產磁器には青磁・白磁・青白磁・染付がある。青磁の器種には碗・皿がある。碗は13世紀代の製品が2点、14世紀代の製品が15点、15世紀代の製品が14点、16世紀代の製品が2点あり、皿は15世紀代の製品が1点あり、14・15世紀代に、多くの製品が認められる。白磁の器種には皿・壺がある。皿は15世紀代の製品が3点、16世紀代の製品が8点あり、壺は14世紀代の製品が2点、15世紀代の製品が3点ある。青白磁は13世紀代の瓶子・染付は15世紀代の碗が各々1点のみられ、染付の製品は、本調査ではこれ以外一点も検出されていない。このことから本城郭全体において、染付製品の保有率が極めて少なかったことが想起される。年代は13世紀代の製品は極少なく、14・15世紀代の製品でピークを迎え16世紀代ではやや減少する。器種には碗・皿・瓶子・壺がみられるが、碗・皿などの供膳具が全体の88%を占めており、中国產磁器の供膳具としての利用頻度が極めて高かったことを示している。図化できたものは364-1～9まで9点あり、青磁碗364-1～5のうち、364-2に蓮弁文、364-5に蓮弁文が施されている。364-6～9はすべて白磁皿の底部片で、16世紀代の製品である。

国産陶器は常滑系、中津川系、美濃系、瀬戸系、備前系等、5系統に渡る窯の製品がみられる。

常滑系製品の器種には甕がある。甕は14世紀代の製品が6点、15世紀代の製品が6点、16世紀前半の製品が70点あり、16世紀に入ると爆発的に増加する傾向が顯著である。また大型の破片が多く、363-1・2の2点が図化できた。363-1の口縁部は貼付による幅の広い口縁帯をもつ。口縁上端には接合による沈線帯があぐっており、胴部は大きく脹らむ。363-2は363-1と同様貼付による幅広い口縁帯をもち、断面はN字状を呈する。胴部は363-1程大きさは脹らまないと考えられる。以上、常滑系製品の器種は甕のみに限られ、貯蔵用具としてのみ利用されたと理解される。

中津川窯系の製品の器種には甕・片口鉢がある。絶破片数12点のみで、同じ貯蔵用具でも常滑系製品に比べると利用頻度が低い。年代は14世紀代に比定される。片口鉢は1点のみの出土で、年代はわからない。

美濃系製品には鉄釉が施釉される製品と灰釉が施釉される製品がある。

鉄釉が施釉される製品の器種には天目茶碗・折縁小皿・瓶・徳利・広口短頸壺・茶入れ・擂鉢などがある。天目茶碗はいずれも16世紀代に限定され、総数で32点と多量に出土している。図化できたものも365-1～5の計5点にのぼる。これに関連する製品として、茶入れ365-15が1点みられ、これも16世紀代の製品である。多量の天目茶碗と茶入れのような茶器の存在は、本調査で併に多量に出土している茶臼とも強く関連するものであり、16世紀代に至って本城郭内において、茶の湯が流行していたことも十分想像できる。この他、内面にヒダ状の削りが入る折縁小皿365-13が1点、瓶が2点、徳利が3点、広口短頸壺が1点、外面に段を有して直角状に立ち上がる擂鉢363-3が1点出土している。擂鉢363-3の卸し目は不明である。以上美濃鉄釉陶器を概括すれば、擂鉢363-3のような実質的な調理用具・生活用品は少なく、天目茶碗・茶入れ・徳利などに代表される嗜好目的の器が多い傾向がみられる。年代はすべてが16世紀代の製品である。

美濃灰釉製品の器種には碗・小皿・香炉がある。碗は16世紀前半代の製品が15点、16世紀後半代の製品が2点あり、圧倒的に16世紀前半が多い。16世紀前半の製品は365-6が図化された。小皿はいずれも16世紀前半代の製品であり、18点と量も多い。365-7～12が図化されており、365-7・8・9・12は断面三角形の小さな削り出

し高台、365-11は断面短形の小さな削り出し高台を有する。また365-12の内面中央には、菊花状の削り込みが施されている。香炉は1点のみで16世紀代の製品である。以上、美濃灰釉は、香炉のような嗜好目的の製品も僅かに認められるが、概して、碗・小皿などの供膳具が多い。但し、これらも多くのものは小型のものであり、その使用目的を単純に日常食器として良いものかと戸惑いを感じる。

瀬戸系の製品はいずれも灰釉が施された製品である。器種には折縁鉢・片口鉢・片口壺・瓶子・小鉢・卸し皿・三足盤などがある。折縁鉢は3点あり、いずれも15世紀後半の製品である。片口鉢は1点のみで14世紀前半の製品である。片口壺365-14は15世紀代、瓶子も15世紀代で、各々1点ずつ出土している。小鉢は3点、卸し皿は1点、三足盤は5点あり、これらはいずれも15世紀代の製品である。總じて瀬戸系製品は15点と少なく、時代性はおおむね15世紀に集約されるが、器種はバラエティーに富む。

備前系製品の器種には播鉢があり、1点のみ出土している。

この他、14世紀代の山茶碗の破片も3点出土している。

これらをとりまとめると、本調査区出土の陶磁器には次のような傾向が指摘できる。

1. 時代性は中国産磁器が14~15世紀にそのピークを迎えており、国産陶器は16世紀(特に前半)に主体を占めていること。また、国産陶器の年代幅が14~16世紀であるのに対し、中国産磁器は13~16世紀と、より大きな年代幅をもつこと。
2. 中国産磁器は供膳具としての役割がおおむね一致していること。
3. 国産陶器の中で常滑系窯は実生活に密着した貯蔵具として位置づけられており、中津川系の窯は從属的であること。
4. 美濃、瀬戸系の製品は器種構成がバラエティーに富み、概して小型品が多く、実生活に即した調理具は少なく、嗜好目的とした製品が多いこと。
5. 総じて、調理具が少ないと。これは当時の一般集落では生活必需品と言われる程に当り前に出土するという埋跡が出土していないことからも伺える。また、陶磁器に限らず、土師質土器にも、石製品にも、調理具に該当する器種がほとんどみられないこと。

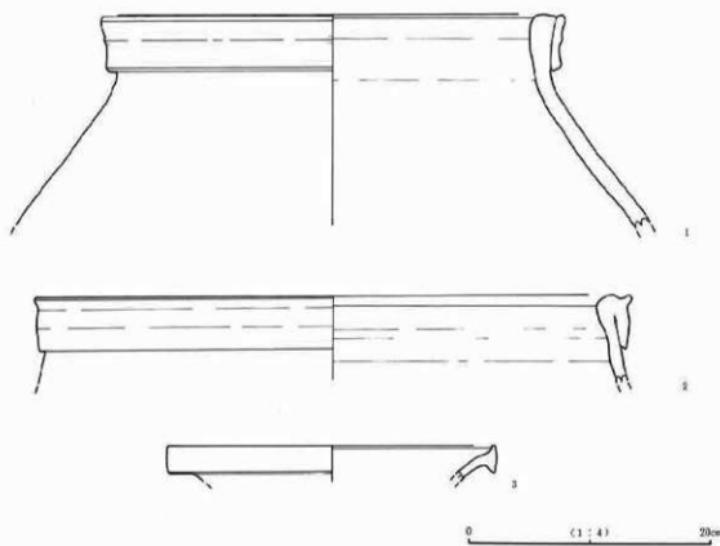
これらの傾向から、大井城跡の本調査地区における生活の実態を想像することも可能なのであろうが、筆者は力不足でその能力をもっていない。後日、再考したい。

4 瓦器

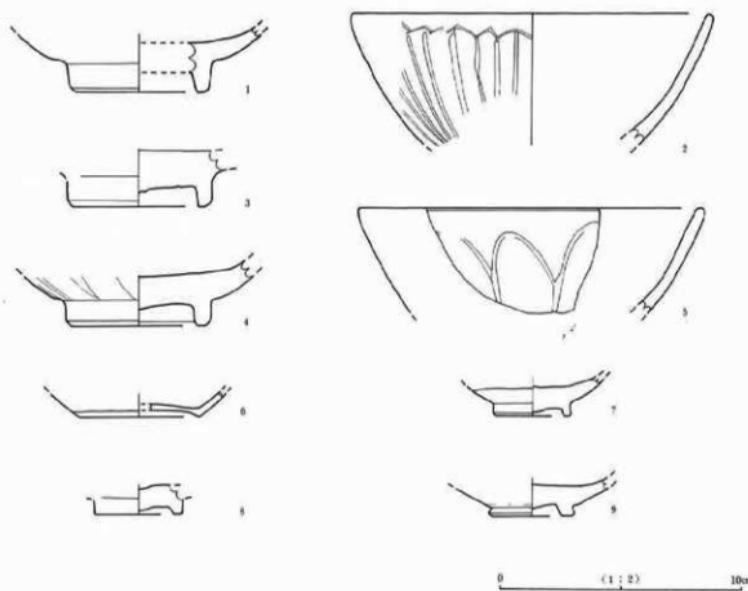
大井城跡(黒岩城跡)から出土した瓦器の器種には火鉢と考えられるものと、小型で用途が不明確なものがある。いずれも細片であるため、全形態は知り得ない。

火鉢と考えられるものには367-1・2がある。それぞれ口径41cm、37cmをはかる大型の製品で、平面形は円形を呈する。脚がつくかどうかは不明である。367-1は内面の口縁端部直下に断面「H」字状の突帯が廻っており、その直下にも上段のものよりは小型の突帯が廻っている。口縁部外面には一条の沈線がめぐり、体部はディンプル状の文様が施されている。367-2は口縁端部が平坦でやや肥厚している。外面上端に円形と七弁花状のスタンプ文を交互に廻らせていている。367-1・2いずれの外面も黒色処理が施され、367-1の内面は2次焼成が著しい。

367-3・4は用途が不明確である。いずれも椀状の形態を呈しており、口径は367-3が21cm、367-4が11cmをはかる。367-3の口縁部には四瓣状のスタンプ文、367-4の口縁部には菊花状のスタンプ文が廻っている。



第363図 常滑塗・美濃指揮実測図



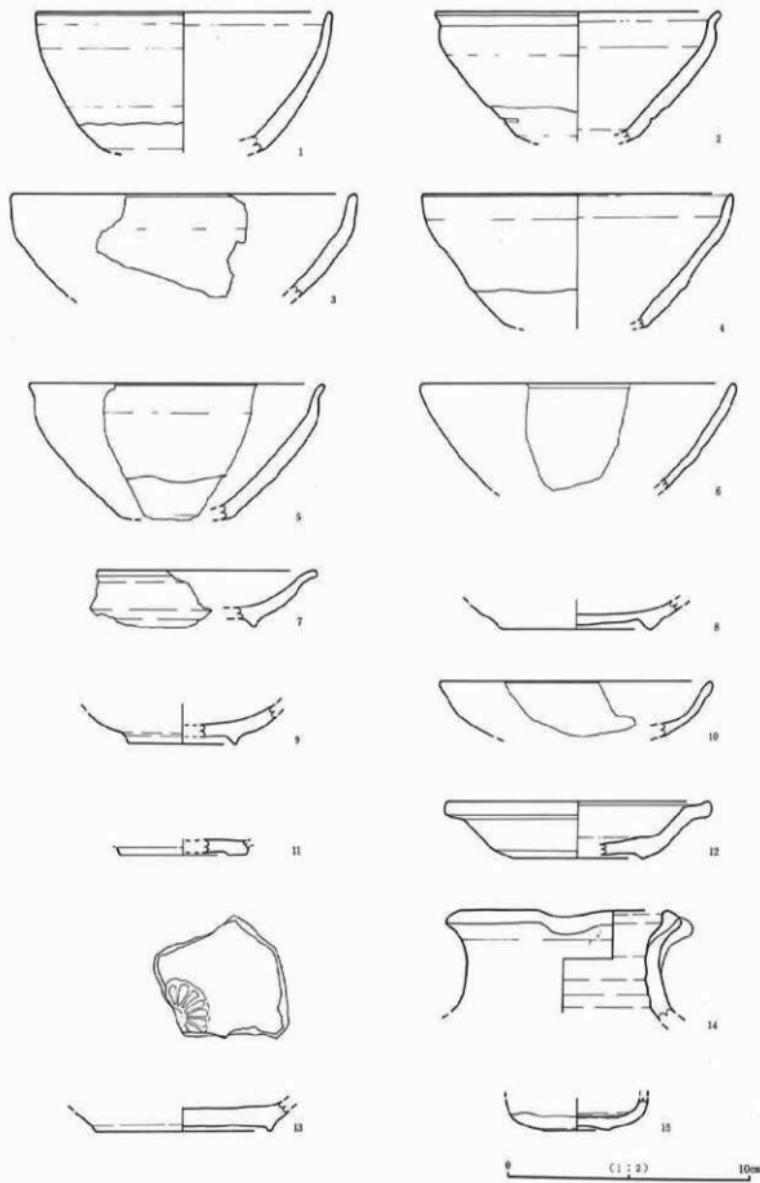
第364図 青磁・白磁実測図

第352表 常滑・大器・美濃部一覧表

登録番号	出土地(区町番)	器種	法量	器形の特徴	施調	備考(年代)
363-1	T-23 No.13-18 I(瓦土)	常滑 器	(37.3) (38.3)	口縁部は斜行けによる幅広い口縁部がある 裏面は「N」字紋を有する。 口縁上端には接合による界隈が現る。腹部は大きくふくらむ。	内外面ともにナガが施された内面には巻き上げ底(笠)が施されている。	16世纪前半
363-2	く-6	常滑 器	(48.4) (3.1)	口縁部は幅の広い口縁部を有し、裏面は「N」字紋を有する。		16世纪前半
363-3	く-8 耕作土	美濃 抹地 抹拂	(26.6) (2.6)	マツロ使用。 外縁部を有して底角に立ち上る。 跡目は不明。		16世纪

第353表 青組・白組一覧表

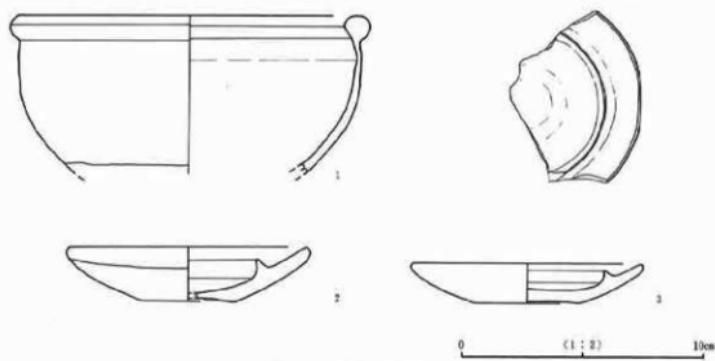
登録番号	出土地(区町番)	器種	法量	器形の特徴	施調	備考(年代)
364-1	D64 瓦土	青組碗	(2.7)	削り出しによる高台部を有する。	青みがかった緑色に施釉されている。	16世纪
364-2	D126 No.7・8・12	青組碗	(14.6) (4.5)	口縁部は内凸する。	外面に蓮弁文を有する。 緑色に施釉されている。	14世纪
364-3	D166	青組碗	(2.3) 5.4	高台は削り出しによるものと考えられ裏面に立ちあがる。	明るい緑色に施釉されている。	15世纪前
364-4	く-9 耕作土	青組碗	(2.6)	削り出しによる高台を有する。	緑色に施釉されている。	14世纪
364-5	M.1 No.5	青組碗	(14.2) (4.3)		蓮弁文を有する。 淡緑色に施釉されている。	時代不明
364-6	T-19 No.6	白組碗	(1.2) 3.6	高台部のみ。 削り出しによる高台部を有する。	黄色を帯びる白色に施釉されている。	16世纪
364-7	T-26 No.2	白組碗	(1.0) 3.1	削り出しによる高台を有する。	黄色を帯びる白色に施釉されている。	16世纪
364-8	D14 瓦土	白組碗	(1.0) 4.8	削り出しによる小さな高台を有する。	黄色を帯びる白色に施釉されている。	16世纪
364-9	オ-15	白組碗	(1.0) 3.2	削り出しによる高台部を有する。		16世纪



第365図 美濃・瀬戸陶器実測図

第354表 美濃・瀬戸陶器一覧表

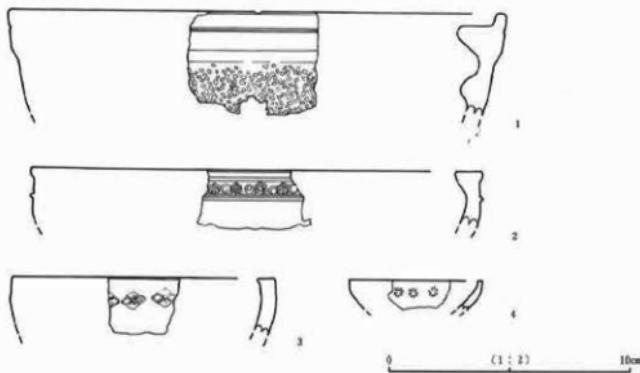
番 号	道 墓 横 査 地 区 名	器 种	法 量	器 形 の 特 徴	種 調	備 考 (年代)
365-1	T 12 N.2	美濃 灰釉 天日茶碗	(12.8) (3.0) —	口邊部土瘤部で窪みに外反する。	内外面に鉄物が施釉されているが、外面の口辺部下部には施釉されていない。	16世紀
365-2	T 18 C-8 耕作土	美濃 灰釉 天日茶碗	(11.5) (3.0) —	口邊部は周部で「く」の字状にくびれる。	内外面に鉄物が施釉されているが、外面の口辺部下部には施釉されていない。	16世紀
365-3	D84	美濃 灰釉 天日茶碗	(14.0) (4.2) —	口辺部で内凹する。		16世紀
365-4	D86 覆土：井内	美濃 灰釉 天日茶碗	(12.6) (5.0) 12.6	口辺部はやや内凹する。	内外面に施釉されているが、内外面は口辺下部で止まっている。	16世紀
365-5	D105 覆土	美濃 灰釉 天日茶碗	(12.6) (3.0) —	口辺部は周部で「く」の字状にくびれる。	内外面に施釉されているが、外面は口辺下部で止まっている。	16世紀
365-6	D234 覆土	美濃 灰釉 碗	(12.6) (4.4) —	口辺部はわずかに内凹気味に外反する。	淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前半
365-7	T 6 N.1	美濃 灰釉 小皿	— (2.4) —	口辺部は外反する。 割り出しによる断面連合部の高台を有する。	内外面に淡緑色の灰釉がうすく施釉されている。	16世紀前半 大室一期
365-8	D34 覆土	美濃 灰釉 小皿	(9.2) — —	割り出しによる断面連合部の高台を有する。	底面にトチ瓶が残る。(淡緑色の灰釉が全面に施釉されている。)	16世紀前半
365-9	D76	美濃 灰釉 小皿	— (1.5) (4.4)	割り出しによる断面三角形の小さな高台を有する。	内外面に淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前半
365-10	D85 覆土	美濃 灰釉 小皿	(11.3) (2.3) —	口辺部は周部でわずかにふくらむ。	内外面にくすんだ淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前半
365-11	C-8 耕作土	美濃 灰釉 小皿	— (0.5) —	割り出しによる高台を有する。	淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前半
365-12	D262 覆土	美濃 灰釉 小皿	— — (7.2)	内面中央に動型状の割り込みを有する。 割り出しによる三角形を有する小さな高台を有する。	白みがかった淡緑色の灰釉が施釉されている。	16世紀前半
365-13	C-13 耕作土	美濃 灰釉 折腰小皿	(10.7) (2.3) (5.2)	割り出しによる小さな高台を有する。 内面にヒゲ状のケメリを有している。 見込み部と底に白地ち底を残す。	茶褐色の灰釉が全面にねよんでいる。	16世紀前半
365-14	N-3	瀬戸 灰釉 片口盤	(8.4) (4.2) —	口辺部外側ではなく、口縁で外反し、端部で内傾する。	内外面くすんだ淡緑色の灰釉が施釉されている。	15世紀 陶器
365-15	T 27 N.4	美濃 灰釉 茶入丸	— (1.3) (2.7)	上皿。	上皿に鉄物がかかるっている。(底盤は回転未切り。)	16世紀



第366図 近世美濃陶器実測図

第355表 近世美濃陶器一覧表

編 目 番 号	出 典 地 区 名	器 種	法 量	部 分 の 特 徴	輪 調	備 考 (年代)
366-1	3-1 新作土	美濃 片口鉢	(14.0) (6.5) —	口沿部に最大径をもつ。 底部は玉筋状を呈する。	—	—
366-2	3-4 新作土	美濃 灯明皿	(9.0)口径 (2.2)高径 (4.0)底径	やや上底気味。	—	—
366-3	3-2	美濃 灯明皿	(9.4)口径 (1.6)高径 4.4 底径	上底気味。	—	—



第367図 瓦器・火鉢等実測図

第356表 大井城跡(黒岩城跡)陶器一覧表

産地	種	器形	時代	道 器 名	
美濃	自然釉	瓶	14C	T*13 (1点), T*26 (1点), T*54 (1点), D7 (1点), D136 (1点), D269 (1点)	計6点
美濃	自然釉	瓶	14C	丸-12G (1点), 丸-9G (1点), 丸-8G (1点), 丸-7G (1点)	計4点
美濃	自然釉	瓶	14C	T*13 (1点), T*23 (1点), T*26 (2点), T*29 (1点), T*30 (1点), D1 (1点), D18 (1点), D27 (1点), D29 (1点), D41 (1点), D45 (1点), D87 (1点), D109 (1点), D115 (1点), D165 (1点), 丸-7G (1点), 丸-9G (2点), 丸-3G (1点), 丸-4G (1点), 丸-6G (1点), 丸-7G (2点), 丸-9G (1点), 丸-5G (1点), 丸-8G (1点), 丸-5G (1点), 丸-6G (4点), 丸-7G (1点), 丸-8G (2点), 丸-9G (1点), 丸-1G (1点), 丸-5G (3点), 丸-4G (4点), 丸-7G (3点), 丸-8G (1点), 丸-2G (2点), 丸-3G (6点), 丸-5G (1点), 丸-6G (1点), 丸-3G (4点), 丸-4G (6点), 丸-5G (2点), 丸-7G (1点), 丸-4G (1点), 丸-6G (1点), 丸-8G (1点), 丸-9G (1点), 丸-8G (1点), 丸-9G (1点), 表模 (1点) (T*42+3)-3 G + 丸-3G, 丸-2G, 丸-4G, 丸-6G + 丸-6G, 丸-8G, 表模は複合陶器あり	計126点
美濃	自然釉	瓶	14C 桶半	丸-5G (1点)	計1点
中津川尾	自然釉	瓶	14C	T*11 (3点), T*14 (4点), T*22 (1点), D150 (1点), 丸-8G (1点), 丸-7G (1点), 丸-5G (1点), 丸-5G (1点), 丸-6G (1点), 表模 (1点)	計15点
中津川尾	自然釉	片口瓶	14C	丸-5G (1点)	計1点
美濃	鉄釉 (伝口鉄釉)	瓶	14C	丸-7G (1点)	計1点
美濃	鉄釉	瓦口茶碗	14C	T*12 (1点), T*18 (1点), T*20 (1点), T*22 (1点), T*47 (1点), D84 (1点), D86 (1点), D165 (1点), 丸-8G (1点), 丸-9G (1点), 丸-10G (1点), 丸-4G (1点), 丸-8G (1点), 丸-9G (1点), 丸-10G (1点), 丸-12G (1点), 丸-5G (1点), 丸-6G (2点), 丸-7G (1点), 丸-5G (2点), 丸-6G (1点), 丸-8G (1点), 丸-9G (1点), 丸-6G (3点), 丸-4G (3点), 丸-8G (1点), 丸-6G (2点), 丸-3G (1点), 丸-9G (1点), 丸-4G (1点), 丸-8G (1点), 表模 (1点) (T*8 32 + 丸-5G, T*18 + 丸-9Gは複合陶器あり)	計94点
美濃	鉄釉	折被小瓶	14C	丸-13G (1点)	計1点
美濃	鉄釉	瓶	14C	丸-4G (1点), 丸-6G (1点)	計2点
美濃	鉄釉	土瓶	14C	丸-11G (1点), 丸-12G (1点)	計2点
美濃	鉄釉	酒瓶	14C	T*20 (1点), T*26 (1点), T*39 (1点)	計3点
美濃	鉄釉	茶入舟	14C	T*27 (1点)	計1点
美濃	鉄釉	船形	14C	丸-8G (1点), 丸-4G (1点)	計2点
美濃	灰釉	瓶	14C 桶半	T*39 (1点), D2 (1点), D7 (1点), D23 (1点), D74 (2点), D24 (1点), D26 (1点), 丸-8G (1点), 丸-8G (1点), 丸-5G (1点), 丸-8G (3点), 丸-3G (1点), 丸-8G (1点), 丸-5G (1点), 丸-8G (1点), L-7G (1点), L-9G (1点)	計26点
美濃	灰釉	瓶	14C 桶半	丸-11G (1点), 丸-5G (1点), 丸-9G (1点)	計3点

地名	種類	器形	時代	遺 墓 名	計点数
美濃	灰陶	山茶碗	14C	丸-9G (1点), 土-31G (1点), き-8G (1点), 8-6G (1点), 17-4G (1点)	計5点
美濃	灰陶	小壺	15C 前半	T-6 (1点), T-18 (1点), D-66 (1点), D-74 (1点), D-75 (1点), D-85 (1点), D-282 (1点), 土-10G (1点), 8-4G (1点), 8-5G (1点), 8-2G (1点), き-4G (1点), 8-4G (1点), 17-3G (1点), 17-8G (1点), 2-8G (1点), 8-4G (1点), 美濃 (1点)	計18点
美濃	灰陶	壺	15C	L-4G (1点)	計1点
越後	灰陶	片口壺	15C	8-3G (1点)	計1点
越後	灰陶	おろし皿	15C	き-5G (1点)	計1点
越後	灰陶	丸子	15C	8-3G (1点)	計1点
越後	灰陶	片口杯	14C 前半	D-7 (1点)	計1点
越後	灰陶	折縁盆	15C 前半	T-65 (1点), D-40 (1点), D-41 (1点)	計3点
越後	灰陶	小鉢	15C	8-11G (1点), 8-9G (1点), L-18G (1点)	計3点
越後	灰陶	三足盤	15C	8-12G (1点), 8-7G (1点), 8-10G (1点), 8-5G (1点), H-6G (1点), 美濃 (1点)	計6点
越後	灰陶	壺	16C	T-28 (1点)	計1点

第357表 大井城跡（黒岩城跡）副器（鉢器）一覧表

器種	器形	時代	遺 墓 名	計点数
青磁	壺	13C	T-234 (1点), T-239 (1点)	計2点
青磁	壺	14C	D-41 (1点), D-108 (1点), D-128 (1点), D-165 (1点), D-206 (1点), 8-7G (1点), 8-10G (1点), 8-8G (1点), 8-9G (1点), 8-3G (1点), 8-7G (1点), 8-6G (2点), 8-4G (2点), 8-5G (2点), L-5G (1点)	計18点
青磁	壺	15C	T-1 (1点), P-2 (1点), D-13 (1点), D-75 (1点), D-166 (1点), D-225 (1点), 8-3G (1点), 8-2G (1点), 8-2G (1点), 8-6G (1点), 8-8G (1点), 8-5G (1点), 美濃 (1点)	計13点
青磁	壺	16C	T-1 (1点), D-84 (1点), D-253 (1点)	計3点
青磁	壺	15C	8-5G (1点)	計1点
青白磁	瓶子	13C	T-43 (1点)	計1点
白磁	壺	14C	T-1 (1点), T-239 (1点)	計2点
白磁	壺	15C	8-3G (1点), 8-5G (1点), 8-5G (1点)	計3点
白磁	壺	15C	T-28 (1点), 8-8G (1点), 8-3G (1点), 8-5G (1点)	計4点
白磁	壺	16C	T-21 (1点), T-29 (1点), T-36 (1点), D-14 (1点), 8-11G (1点), 8-5G (1点), 8-9G (1点), 8-9G (1点)	計8点
染付	壺	15C	T-21 (1点)	計1点

5 石臼（第368図～第430図、図版51～62）

現在、私達が生活する中でテレビ、冷蔵庫、洗濯機等は欠くことのできない生活用具の必需品であろう。その意味において、原始、古代よりつい最近に至るまで生活用具の中心をなしてきた一つに「臼」が挙げられる。かつて、どこの家でも臼は生活する上で切り離すことのできなかったものであり、ときには水車のように集落の共同体の中にまで深く浸透していた。（水車も機能面から臼に属する）

しかし昭和30年代に入るとい急激な工業の機械化、そして生活様式の変化、更には食性の移行等により、臼はその姿を消して行った。こうした臼はかつてあまりに人間と深くかかわりを持っていたためであろうか、社寺等に奉納される例も数多いようである。埼玉県川本村にある「村社稻荷神社」は、通称「石臼稻荷」と言われ、約320～330個の石臼（完形品が大半を占める）が参道に敷かれており、又、山梨県東八代郡一宮町田中の「瑞蓮寺」には、^(註1)その数実に1000個をこえる石臼がやはり参道に敷きつめられているという。こうしたことからも臼の文化は、長い歲月私達の生活の上で大きな役割を果してきたことは如実である。

こうした臼が今回の大井城跡の調査により、多量に検出されたため、その概略を記してみたいが、本項の前文である「臼の種類」、「臼の初現」等は、臼の研究家である三輪茂雄氏の「臼」1978を引用してまとめてみた。

数多い臼の種類 臼には多くの種類がある（第368図、石臼の種類）。1粉挽き臼、2茶臼、3搗き臼（石擂鉢）、4木擂臼（木製のもので主に粉挽き用の臼）、5土臼（大型の臼で作業効率の拡大を計ったもの）、6胴臼（餅つき臼）、7手杵臼、8踏み臼（水車の原理の元となった臼）、更には9碾砕（薬研も含む）等がある。本城跡からは1～3が出土した。これらは木製品と石製品とに大別できるが、近世になると金属製、陶磁器製のものも出現するようである。機能面では、「挽き臼」と「搗き臼」とに大別ができる、前者は振りつぶすことによって物を碎粉化し、後者は杵による打撃からその用途をなすはたらきをもつものである。このようにひと口に臼といっても各用途により、機能面、及び、形態の相異を見ることができる。又、近世においては前述したように磁器による茶臼が出現し、この種のものは主に貴重品として取扱われた臼であるように思われる。

臼の初現 ではこうした石臼の初現は一体いつごろであろう。その形態の元、つまりルーツは繩文、若しくはそれ以前の遺跡から出土する石製の凹石、滑り石にその機能の元を見ることができるとされ、弥生時代に入ると木製の杵と臼が出現し、静岡県登呂遺跡からはその出土例が見られるようであり、更に、香川県高松市瀬戸内歴史民族資料館に展示されている銅鑄（弥生後期）の写真には、人が杵と臼で物を扱く様子がはっきりと描かれていることが紹介されている。このように弥生時代にはすでに現在の粉挽き臼の元である「手杵臼」が使用されており、その背景には大陸から伝わった稻作文化の大きな影響があることが推察される。ではこのように杵を扱うことによりその機能をはたした臼から、最近まで見られた石に溝（目）を刻んだ回転式の「臼」が初現するのはいつ頃であろうか。三輪氏の諸見によると、臼の伝来は推古天皇18年（610年）高麗の僧義敬によりもたらされたとされる「日本書紀」の、次の文献が注目されるとしている。

『推古天皇の18年春三月高麗の僧二人を献じ名を義敬

はじめて碾砕を造る。けだし碾砕を造るはこのときが始めるなり。』

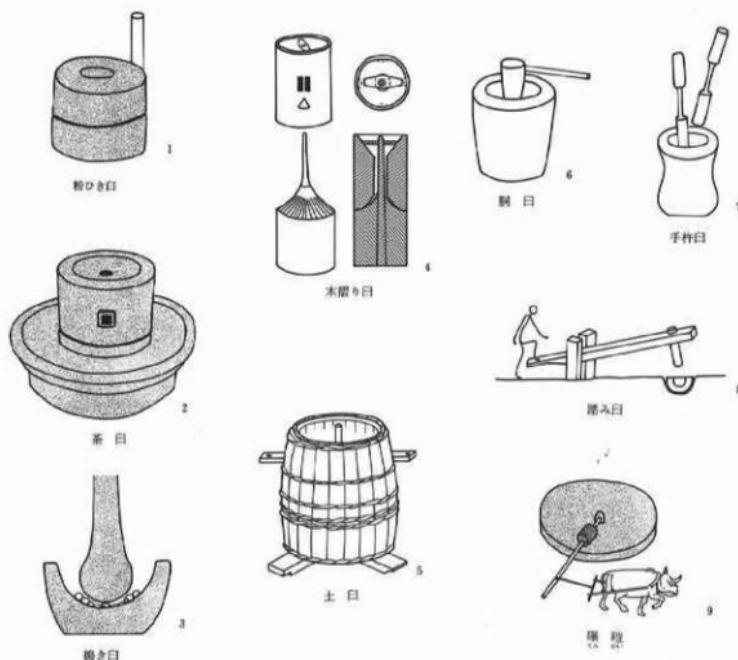
碾砕とは主に畜力により大型の臼を挽かせるものであり（第368図9）、この碾砕は太宰府觀世音の境内に安置されるものとされ、直径93cm、8分画11溝からなる花崗岩製のものであることが認められるようである。このことから回転式の臼は7世紀前半にわが国に渡來したことが推察できうるとされ、それ以前の文献には「粉挽き臼」の存在を明確に示す記述は確認されていないようである。

そこで、「臼」に記されている各地の遺跡からの出土例を見ると「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書」からは、平安時代に比定されると思われる上臼片1点が報告されている。しかし、一般的には中世遺跡に代表され

る一乗谷朝倉氏遺跡(福井市城戸ノ内町)を始め、南蜜寺跡(京都市中京区)、同志社女子大学校地内(京都市上京区)より出土した室町期と推定されるものが最も上限とされるようである。そして出土する多くの石臼は本遺跡を含めた、中世における城郭址等からの出土例が大半であり、15~16世紀より城郭、社寺等を中心に普及はじめ、広く一般庶民に使用され盛行するようになるのは更にそれ以後のことであろうと指摘している。⁽¹²⁾

さて今回調査した大井城跡より出土した石臼の年代観であるが、他の中世遺跡と同様に、本遺跡の性格、伴出遺物の相対年代から15世紀後半より16世紀まで遡り得ることは、ほぼ間違いないものと推察される。又、本遺跡からは146点という多量の石臼類(石擂鉢を含む)が出土したことは注目にあたいすべきことと思われる。

ちなみに御代田町に所在する「野火付遺跡」においても、中世における堅穴状遺構、土坑が検出されている。大井城跡の事例と比較すると石臼の出土量は少ないものの、搗き臼(擂鉢)、内耳土器も出土しており検出された遺構の形態も近似する点が興味深い。そして報告によれば、堅穴状遺構より伴出した青磁、白磁等の遺物と、主に石臼が出土した土坑(集石遺構)とを有機的に考えたとき、その年代観は14世紀まで遡ることが想定されるとしている。又、長楽寺遺跡(群馬県新田郡)の報告においても遺物相互の年代観から15世紀代まで遡り得ることはほぼ間違いないとされている。このように從来までは16世紀が石臼の上限とされていたが、近年の各地調査報告書によると15世紀、若しくはそれ以上まで遡ることが指摘されつつある。⁽¹³⁾



第368図 王の種類 三輪茂雄「臼」1978より転載

本遺跡からの出土臼 本遺跡から出土した臼はその總てが石臼であり、これらは各形態の特徴から「粉挽き臼」、「茶臼」、「石擂鉢」、「搗き臼」であった。

出土総数は146点が確認され、粉挽き臼75点（上臼39点、下臼36点）、茶臼36点（上臼14点、下臼22点）、石擂鉢（24点）、搗き臼（11点）である。これらは總てが破損しており、接合復原による完形品も皆無であった。個体数についても石材の類似、及び小破片の混入から実際の数は不明であり、146点を上回る数量が考えられる。

各石臼の遺構別出土状況は第358・359表に掲載した通りであった。

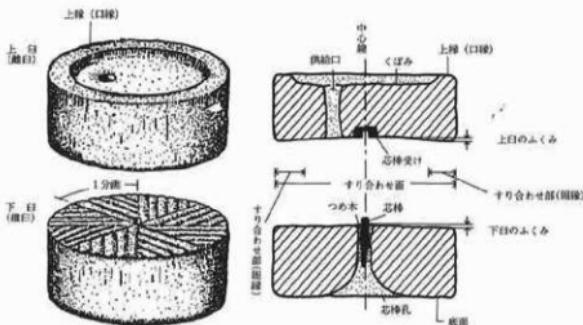
のことから本遺跡における石臼の出土は、1. 壓穴遺構、2. 土坑、3. 遺構確認作業時、4. 溝の頭であることが判明した（遺構の検出割合から）。

以下出土した臼について概略を述べてみたい。尚、「搗き臼」、「石擂鉢」については機能面、及び形態上の相違が認められるため、別記して述べることにした。

(1) 粉挽き臼 上臼

39点のうち完形のものは一点も認められず、その破片の形状を見ると、 $\frac{1}{2}$ 近い残存率を有するものが3点、 $\frac{1}{2}$ 近いものが3点、 $\frac{1}{2}$ 近いものは10点であった。他23点は $\frac{1}{2}$ に順ずるもの、若しくはそれ以下の破片であった。これら大半の割れ口には、芯棒穴、供給穴、更には挽き手穴の一部が認められるもの、その原形を留めているものは数点のみであった。従って、此等の石臼片については当部を中心に意図的に割られた可能性があるものと推察される。又、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{2}$ 片についてはそのすべてが「扇型」に近い形狀を呈しており、その割れ口はほぼ直線的であり一分画に等しい大きさを持って割れている点（第381図12、図版57）更には第375図1、図版57-3で見ることができるよう $\frac{1}{2}$ 近い破片などは、一つの特徴をもった破片形状であると観察できよう。つまり、此等の破片については先ず器用に意図的に割られた後、施薬された可能性もありうると推察されるのである。

直径は図上復原により24.3-36cmが計測される。大別すると30cm以上が21点、25-30cmが4点であり、25cm以下はわずかに1点のみであった。よって出土した上臼の約半数は30cm前後の大きさであることが確認された。この中で24.3cmと粉挽き臼の中では極めて小型に属する臼については「物くばり」と「供給口」の残存、更には溝（目）の大きさ等から茶臼とは考え難く、特異な粉挽き臼と思われる。しかし、その性格、用途などは判然としなかった（第378図6）。



第369図 粉挽臼各部の名称 三輪茂雄「臼」1978より転載

高さ(厚さ)は5.8~16.2cmであった。このうち10cm前後のものが大半を占め、磨滅によるものなのか、最近まで使用された臼に比べ全体に器薄であるように思われる。

すり合わせ面の分画数、溝(目)については完形する臼が検出されていないことから正確な数値を把握することはできなかった。39点のうち図上復原によりほぼ分画数を推測できたものは6点であり、これらはいずれも6分画、若しくは8分画のものと思われる。分画内に刻まれる溝(目)の数は、不均等に配分されたものが多いことが認められた。これは施される分画が一定の大きさを持って均等に配分されていないためであろう。

「目なし臼」と思われるものについては6点確認されている(第371図 特殊な目のパターン)。これは製作の当初より溝を刻み込まないタイプの臼であり、溝を有する臼との相違は「すり合わせ部」、及び「ふくみ」にその主な特徴を見ることができよう。つまり、目なし臼の「ふくみ」は、他の石臼に比べてはるかに大きい(深い)ことが認められ、更に、周辺部に施される平坦な「すり合わせ部」をほとんど有していないことである(第376図-2他)。このほど平坦に施された「すり合わせ部」は、石臼の機能の中で大きな役割を果す箇所である。つまり供給口より下臼のすり合わせ面に落ちた原料は、ここで上臼の回転により、ほぼ大まかに碎かれ、上臼、下臼に刻まれる溝の働きによって外側へ移行する。ここで、両者のすり合わせ面の外周に施される「すり合わせ部」で、更に緻密に細分化される仕組になっている。こうした点よりほとんどの目なし臼はすり合わせ部を有しておらず、原料の粉碎化に際し特異な用途に使用された異質な臼であることが推察される。

「こぼれ目」をもつものは一点確認されている。これは前述のことから回転時におけるすり合わせ部は大きな力が加わると共に、使用度の激しい部位であることが認められる。従って此の部位は欠損しやすく、又、剝離しやすい箇所と言え、此を防ぐ方法として平行する副溝の最初に、逆目的溝を入れる方法が施されている(第378図7、図版54-10)。又、図版56-5は出土した下臼片であるが、これを見るとすり合わせ部の一部に欠損箇所が認められる。このことは上記したすり合わせ部の縁部は破損しやすいことを示す事例と言え、欠損した当部には粘土を充填し焼きつけて補修されている。

「放射型」と思われる上臼片は1点確認される(第377図4、図版55-1)。石質は黒色安山岩であり、目なし臼と同様に、ふくみが大きく、又、「凹み」の面は皿状を呈し上縁にゆるやかに立ち上がる点は、他の粉挽き臼とは若干の違いが認められる。

以上が出土した石臼の中で特殊な溝(目)を有するものであったが、次に、此等一分画内に施される溝のパターンを観察して見ると、次の2種類の形態に大別できると思われる。

- 1、副溝が主溝に対しほぼ平行に刻まれているもの(第379図8、図版55-3)
- 2、副溝が放射状を呈していると思われるもの(第380図9、図版55-5)

(主溝のパターンが第371図 特殊な目のパターンでの「切線主溝型」を呈すると考えられる)

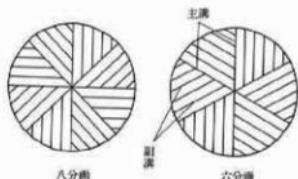
此等の溝は太く刻まれるもの、或いは、細く刻まれるもの等があり(図版57)、この配される溝の太さ、細さにより各石臼の「供給口」、「もの配り」等も比例した大きさとなって施されているものと推考される。又、此等配される溝の間隔も巾の広いもの、狭く配されるもの等ありその形態は多様である。この様なことから原料の粉碎化に際しては、その粉碎される原料の大きさ、並びに、精粉されるべき製品の細かさを想定し粉挽き臼が選択され、使用されたことが伺われる。

目たて直しが行なわれたと思われる臼(第382図14)がある。此は使用により磨滅した溝を新たに刻み込んだ痕跡が認められるものである。又、第385図18は統一性のない溝が配せられており、目たて直しが行なわれた臼であろうと思われる。

片減りが著しい上臼は7点が確認され(第374図石臼・茶臼の器形の歪むもの)、最もそれが顕著に認められるものは第374図3の最大高11.1cm、最小高8.6cmであった。こうしたいわば器形の歪む石臼は群馬県「浜松屋敷内遺跡C地点」からも出土しているが、この片減りについては2つの見解ができるものと思われる。一つには長期

間の使用などにより、すり合わせ部の片側が磨滅し歪んだと考えられるものであり、一方は、製作の当初より高低差（厚い、うすい）を設け、臼をたやすく回転させるための力学的根拠を応用し、あえて歪みをもたせたと考えられるものである。つまり、前者においては、回転時における力の加わり様で片側のみが片減りしたものと推考されるのである。このことは、いわば片側の磨滅したと考えられる「すり合わせ面」に残存する溝は、当然片減りのしない面に残された溝よりも、はるかに磨滅度が大きくなると思われるのである。しかし、出土した臼を見るとその磨滅度は、ほぼ均等であり片面にだけ片寄った磨滅の仕方ではなかった（第379図、図版54—6）。よって回転時における力の加わり方のみで片減り（歪み）が生じるとは考え難く、むしろ製作の当初より意図的に高低差（厚さ、うすさ）を設けたものであるとも推察されるのである。だが此の後者についても、当初よりあえて歪みをもたせたとするならば、回転の際に原料が「凹み面」からこぼれ易いことも考えられ、不自然な点があると言えよう。こうしたことからこの「歪み」については今後の課題としたい。

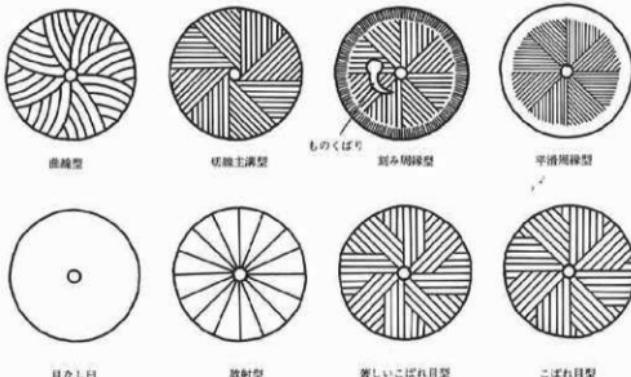
上縁の断面形状は大別して三種類が認められる。1. 凹み面から極めて緩やかに立ち上がるもの（第377図5、図版54—4）。2. 凹み面からほぼ垂直に立ち上がるもの（第382図13、図版54—2）。3. 全体に丸みをおびるもの（第384図17、図版54—7）が認められ、その深さ（高さ）は第395図34が最もあり、3.5cmであった。



第370図 基本的な八分画と六分画のパターン
三輪茂雄「臼」1978より転載

凹み面は大別して2種類の形態をもつことが認められる。1. 断面形状が皿状を呈し上縁がゆるやかに立ち上がるもの（第377図4）。2. ほぼ平坦な面を呈するもの等である（第375図1）。

供給口の形状が検討できる資料は16例あり、隅丸長方形を呈するもの9例、長方形6例、円形1例であった。この点、佐久地方において近年まで使用された石臼の供給口は、比較的円形を呈するものが多いと思われるが、本調査より出土した臼で円形を呈するものは1例のみであった。



第371図 特殊な目のパターン 三輪茂雄「臼」1978より転載

挽き手穴が認められるものは2例あり、うち1例の第395図34、図版55-10は同じ位置に挽き手穴が2個認められる。一つの穴はすり合わせ面の直上部にあり、その原形の大きさ等は破碎によりほとんどが残存しておらず計測できないが、一方の穴は残存する側面のはば中央部に位置し、縦4.4cm、横5.4cmの長方形を呈するものである。このほぼ同一箇所に2つの挽き手穴が設けられていることについては、次のことが考えられる。すり合わせ面の直上に一部残存する挽き手穴については、長期間の使用によりすり合わせ面が著しく磨耗し、機能上に支障をきたし使用が不能となったものと思われる。そこではば中央部に認められる挽き手穴は、新たに設けられたものであり、再機能を促すための穴であったことが考えられる。では、なぜ新たに施された挽き手穴を、旧状の穴のはば同一部に設けたのか、この点については次のことが考えられよう。石臼の機能上、挽き手穴と供給口とは共通した一連の関連動作が必要とされる。つまり、回転時における右手(挽き手穴)の動作と、原料を供給口に運ぶための左手の動作とは、よりプライマリーな一体的動作が必要とされるであろうし、そこには当然、供給穴と挽き手穴との重要な「位置関係」が保たれなければ円滑な機能は促されなかつたと考えられる。こうしたことから本残存部に確認される2つの挽き手穴の内、新たに施されたと思われる中央部の挽き手穴は、旧挽き手穴が残存する位置とはば同一箇所にあえて配置せざるを得なかつたものと考えられる。

ふくみ巾を計測できるものは19例ある。約2~4.6cmを測るもののが16点と多く、最大ふくみ巾を呈するものは4.6cm(第392図27、図版53-6)であり、最も小さなふくみを呈するものは第381図12の0.7cmであった。

下臼

36点のうち%近くを残存するものが1点、%近いものが7点、%片は6点であった。他22点は%に順ずるもの、若しくはそれ以下のものであった。

径は図上復原により27~33cmが計測される。30~33cmが13点と最も多く、全体の約50%を占め、上臼の径の数値ともほぼ一致している。出土した上臼、下臼の残存形状を見ると下臼は%片が1点認められるのに対し、上臼は0であり、%片については下臼7点に対し、上臼は3点と少なく、%片は下臼6点、上臼10点であった。この結果%以上の残存片に関しては下臼の方が上臼よりも数多く残存していたことが確認され、いかえれば下臼の方が上臼よりも大きな割れ方を呈しているようにも推察された。

断面形状は2種類が認められ、内1点は中央部にふくらみをもち、すり合わせ面が平坦であるもの(第403図51、図版53-5)、と中央部よりすり合わせ面が施され(溝を有し)、周端部に向かって緩やかで直線的な傾斜をもつものとが観察された(第400図45、図版53-2)。

此等のすり合わせ面に施される溝(目)の分画についても、上臼と同様に6分画、若しくは8分画が多いことが認められる。しかし、その中で5分画と考えられるものが1点確認され、こうした類例の報告は比較的少なく、稀な分画のパターンを呈する一例と言えよう(第401図47、図版56-2)。この石臼に施される副溝は1分画内に5本が確認でき、その溝と溝との間隔はきわめて巾広く施されている。又、底部のえぐりの面にはノミ痕が顕著に観察され、この敲打痕を見ると左側方向に成形された跡がうかがわれる。更に、この敲打痕はほぼ4単位に分割されながら向きが急反していることが分かる。このことから底部のえぐり面を成形する際には、%回転ずつ回しながら成形された様子をうかがい知ることができよう。尚、当えぐり面には、径6cm、深さ1.5cmの円形を呈する凹みが施されている。この凹みは石臼との機能面で共通する関連性があったものなのかなは不明である。しかし、凹み面に残存するノミ痕から、若干の時間的な隔たりが感じられ、後に新たに施された痕跡がうかがわれる。このことから石臼との機能的な関連性は考え難く、何らかの意味で2次的な利用がなされたものと考えたい。

分画内に刻まれる溝のパターンは、上臼と同様に主溝に対し、副溝がほぼ平行に施されるものと、放射状を呈して施される2種類の形態が認められる。その中で第403図51は放射状と思われるが、目たてなおしが著しく行なわれており規則性をもった溝の刻みは認められない(図版55-8)。尚、目たて直しが行われたと思われる下臼は他に1例のみであった(第400図45)。

目なし臼と思われるものは、1点が確認された(第399図42)。断面形状は先の類からは、中央部に若干のふくらみを有するものである。

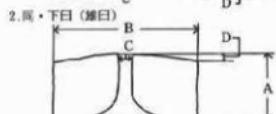
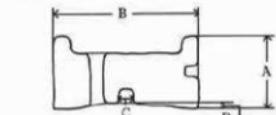
芯棒穴はえぐり面に貫通しているもの(第400図45、図版53-8)と、ないもの(第397図38、図版53-7)との2形態に大別できる。そして、貫通している芯棒穴の形状は、えぐり面に大きくラッパ状に広がっているもの(第400図45)と、やや直線的に末広がりをもつもの(第404図52)とに分けることができる。尚、貫通していないものは1~2cmと比較的浅い面に芯棒穴が施されており、その断面形状は「U」字形を呈するものと(第398図40)、矩形を呈するものとに分けることができよう(第403図50)。

尚、上臼における芯棒穴の断面形状は段状を呈する例が第375図1の他に5点確認される。この芯棒穴に差し込まれる「つめ木」には木製のもの、或いは、金属性のものが使用されたことが考えられるが、段状を呈する芯棒穴については、主に金属性のつめ木が使用されたことが推察される。つまり、上臼の回転の際に、此の上臼の芯棒受けに差し込まれたつめ木が、板に木製のものであったと仮定するならば、その磨滅度は石臼に施された芯棒穴よりも当然木製であるつめ木が磨滅してしまうであろうし、逆に金属性のものであったとするならば臼に施される芯棒受けの方が磨滅してしまい、段状となりえることが考えられる。こうした点から此の6例の芯棒穴を見ると、いずれの有段部にも著しい磨滅痕が認められ、その頂部はやや細くなっている。従ってこの金属性のつめ木の先端部は円錐形を呈するものであったことが推考される。

ふくみの巾を計測できるものは、36例中12点が確認され、最も大きいものが2.2cm、最も少ない(小さい)ものは0.5cmであった。このことから下臼のふくみ巾は、上臼に比べ極端に少ないことが認められる。

底部のえぐり面は、半月状にえぐられているもの(第404図52)と、ほぼ平坦面を呈するもの(第399図41)との形態があり、半月状のえぐりにはノミ痕が多く残存し、一方、ほぼ平坦面を呈するものはその大半が自然面であり、若干の成形痕が残存している。又、側面にノミ状工具による成形痕が残るものとしては第405図56が好例であり、平ノミ加工によるものと考えられる。

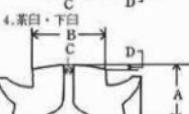
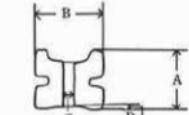
1. 粉挽き臼・上臼(雄臼)



5. 不正に走む臼の形状



3. 茶臼・上臼



- A. 高さ
- B. 直径
- C. 芯棒孔直径
- D. ふくみ幅
- E. 最大高
- F. 最小高
- G. 底部直径
- H. 台部直径

第372図 石臼・茶臼の計測箇所

器形の歪む(片減り)下臼は2点が確認され、第396図35、図版54-9は下臼の中では最大高6.3cm、最小高3.2cmを測り、歪みの著しいものである。

粉挽き臼(上臼、下臼)の石質は75点の内41点は「他の安山岩」であり半数以上を占め、次に黒色多孔質安山岩の13点である。

(2) 茶臼 上臼
茶臼は上下臼片を合わせて36点出土した。その内、上臼は14点が確認され接合

復原による完形品は全く認められなかった。破片の形状は約 $\frac{1}{2}$ の残存率を有するもの1点(第409図2、図版58-1)、約 $\frac{1}{2}$ を有するもの4点(第410図4、図版58-4他)、約 $\frac{1}{2}$ のもの1点(第411図7)であった。他2点は $\frac{1}{2}$ に近いものであり、他の6点は小片であった。石質は14点のうち細粒安山岩が8点と約 $\frac{1}{2}$ を占め、多用使されている。

図上復原により径を割り出せたものは10点あり、17~20.7cmであった。高さは、10.2~14.6cmが計測され、その総てが径の比率が高さを上まわる形態を示すものであった。

くぼみ面は粉挽き臼と同様に、ほぼ平坦を呈しているものと、中央に向かってやや深くなり皿状を呈するもの(第410図5)との2形態がある。

上縁の形状は、その縁が凹み面から緩やかに立ち上がる形態を呈しており、前述した粉挽き臼のようにいくつもの形態を示す形状は観察できなかった。

回転方向は溝の刻み方から左回転がそのほとんどである。しかし、右回転と思われるものが1点確認される(第408図1)。尚、第409図2の溝は不規則であり、「目たて直し」が加えられ回転方向は判然としない。

分画は6~8分画が認められ、1分画に刻まれる副溝の形状は粉挽き臼と同様に、主溝に対し平行に施されるものと、やや放射状を呈するものがある。しかし、粉挽き臼で認められたような分画を持たず、中心部に向かって主溝のみ放射状に刻まれるいわゆる「放射型」のもの、及び「目なし臼」等は皆無であった。

以下粉挽き臼とを比較しながら機能面における茶臼の主な特徴を観察してみたい。

石質 茶臼は36例中、19点が細粒安山岩であり約半数以上を占めるが、粉挽き臼はその他の安山岩が多用使されている。

直径・高さ 径17~20.7cmであり、高さは10.2~14.6cmと全体に小規模な形態である。

ふくみ巾 粉挽き臼の最大数値は4.6cmを割るのに対し、茶臼は1cmと極めて少なく平坦面を呈する。

分画・溝 粉挽き臼に比べ、分画内に刻まれる副溝は非常に細く約0.1~0.3cmであり、一分画内に配される数は十数本が施され、粉挽き臼よりは数多く配されている。

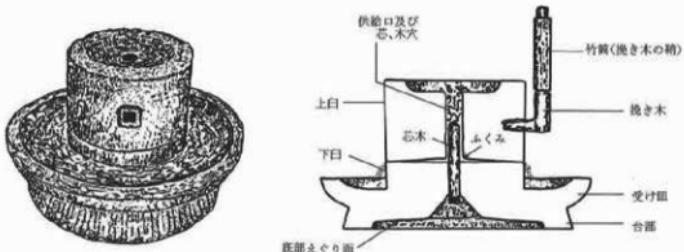
芯棒穴 及び 供給穴 粉挽き臼の上臼は芯棒穴がくぼみ面(供給面)まで貫通していないが、茶臼の場合総ての芯棒穴は、凹み面まで達しており、「供給口」の機能を兼ねている(第414図12)。従ってこの供給穴へ芯棒となる「つめ木」が差し込まれ、上下臼が固定される仕組となっている。そして供給口より入った原料は、つめ木との隙間より下臼のすり合わせ面に落ち、粉碎されるのである(第373図 茶臼各部の名称を参照)。このことを示す事例としては第411図6、7の断面形状が明瞭にものがたっていると言えよう。

ものくばり 粉挽き臼には「ものくばり」があるが、茶臼には全くない。

此のことから、茶臼は本来の機能である「碾茶」を粉末にし、「抹茶」にすることが、その主たる用途であったと考えられ、粉砕されるべき原料そのものが極めて小さい(細かい)ものでなければ、その機能ははたらかなかったと言え、細粒粉を促すための臼であったと言える。又、各部位における成形度からもその違いは顕著であり、粉挽き臼は全体に粗野な仕上げが観察されるが、茶臼は上縁を始め、凹み面、その他各部において非常に丁寧な仕上げが施され、全体に滑らかな様子を呈している。

他には挽き手穴の飾り模様にその特徴を見ることができよう(第408図1、図版59-7)。茶臼の場合、側面部に相対して2箇所に挽き手穴があるが、その周縁部に装飾効果を兼ねて縦6cm、横6.7cm、厚さ2cmとほぼ正方形を呈する有段の刻みが施されている。しかし、粉挽き臼にはこのような装飾的効果が施されている事例は皆無であった。

この装飾形態には、菱形模様を始め、連弁模様、二重正方形、更には二重菱形等の模様を有する出土例がある



第273図 茶臼各部の名称 三輪茂雄「臼」1978より転載

が、今回の大井城跡からは、正方形を有するもののが4点検出された（第408図他3点）。

下臼

22点のうち約 $\frac{1}{2}$ の残存率を有するものが1点、 $\frac{1}{2}$ のものが1点、 $\frac{1}{2}$ のものが3点、 $\frac{1}{2}$ のものが1点であり、その内の第419図20、図版59—3は受皿部の一部、及び台部の側面のみが $\frac{1}{2}$ 残存する。他11点は受皿部の破片並びにその他の部位に関する小破片であった。石質は細粒安山岩が8点使用され、下臼22点の内の約半数を占めている。

図上復原により径が計測できたものは3点あり、18.8~20cmであった。この径は上臼の径とほぼ同じ数値であることが認められる。又、分画をほぼ割り出せたものは3例あるが（第416図14他2点）、その中で7分画と思われるものが1点あり、1分画内に施される副溝は8~9条と思われるものである（第414図12、図版59—1）。他の3例はいずれも8分画と思われ、分画内に施される副溝は、いずれも不規則に配されている。

すり合わせ面の磨滅は、上下臼に共通して言えるが、粉挽き臼のようにすり合わせ部（周縁部）にあまり関係なく、すり合わせ面の全体に磨耗痕が認められ、中には光沢をおびて、すべすべとした感じを呈しているものもある。この点については次のことが考えられる。茶臼は粉挽き臼に比べ「ふくみ巾」が極端に少なく（小さく）、ほぼ平坦なすり合わせ面を呈していることが起因とされ、それだけ回転時における摩擦度が大きいと言えよう。

芯棒穴はその全てが底部のえぐり面に貫通しており、その形状は小さなラッパ状を呈しているものがその大半である（第416図14）。しかし、粉挽き臼に施されているような大きくラッパ状を呈する穴は確認されなかった。

台部えぐり面の形状は、その全てが半月状を呈しており、これは上臼の回転時における震動などから下臼の安定度をより保つために施されたいわば機能的構造と言えよう。

台部の径を計測できたものは6点あり、24~38cmであった。此の台部の断面形状は、底面よりやや内傾しながら受皿部に達する「ハ」の字状のもの（第414図12、図版59—2）と、底面より受皿部にほぼ垂直に立ち上がるものの（第416図14）との2形態が認められる。

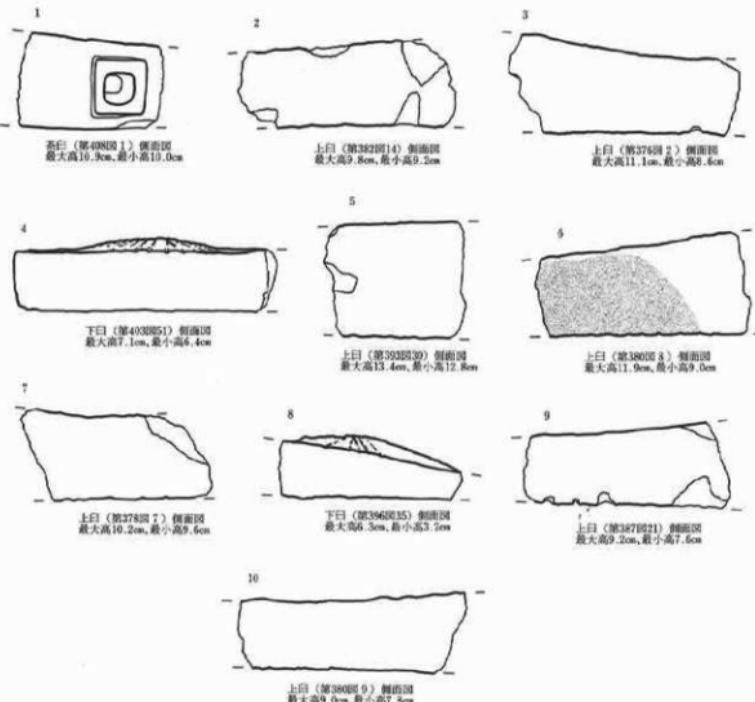
受皿（粉末化された製品を受ける部分）の径は5点が計測でき、28.4~39.6cmであった。此の受皿の内面加工は、極めて丁寧な仕上げが施されるものがその大多数である。此は、当部分が仮に粗野な仕上面（凹凸の著しい面）であったなら、粉末化された製品がこの凹凸に入り込みその機能が半減するためであろう。

その意味では受皿の内面に漆が塗布された破片が1例検出されていることは、上記の点を防ぐための好事例と言え、又装飾的な効果も十分兼ねていることが考えられるものである（第420図21、図版59—5）。本片は受皿の一部分しか残存しておらず、そこに付随する台部の形態及びすり合わせ面の形態等は明らかではないが、受皿の

径を計測できた5点の中では39.6cmを測るものであり、最も大きな径を有するものであった。ところで、こうした漆が塗布された茶臼の出土例としては、開善寺境内(飯田市川上路)より受皿の上縁部が1片出土しているようであるが、あまり出土例がないものと思われ出土品としては貴重な事例と言えるであろう。しかし、寺院等の所蔵品として保管されている例は大泉寺(甲府市^{やまと}館)の外、数例あるようである。

出土した茶臼下白の中で極めて小型に属するものが1例観察される(第416図15、図版58—9)。図上復原により台部径24.0cm、すり合わせ面の径18.8cmを測り、台部の底面はほぼ平坦を呈し、台部高も約2.3cmと他の茶臼に比べ極端に低いことが認められる。仕上げも他の類例とを比較すると全体にきめこまかに仕上げが施され、特に受皿部、そして台部の側面等は研磨による丁寧な仕上げが観察される。又、この茶臼は他の類よりもはるかに濃い黒色の染み込みが観察され、形態上の相違、並びに仕上加工の緻密さなどから何か特別な用途に使用された茶臼であろうと推察される。

下臼の台部側面及び上臼の胴部側面の仕上げはノミ状の工具による「たたき模様」が顕著に施されている(図版59—4)。これは丁寧な研磨が当部に施された後、更に、装飾効果を兼ねて行なわれるものである。



第374図 石臼・茶臼の器形の並むもの

6 石擂鉢、搗き臼

本遺跡からの出土総数は35点であり、内3点の種別は小破片で不明である。

破片の残存形態は $\frac{1}{2}$ を有しているもの1点、 $\frac{1}{4}$ のもの10点、 $\frac{1}{4}$ のもの4点、他に台部の破片 $\frac{1}{2}$ を有しているものの3点であり、他は胴部～口縁部に至る破片17点であった。従って $\frac{1}{2}$ の残存率を有するものが約 $\frac{1}{2}$ を占め比較的多く残存していることが判明した。そして又、此等の破片、特に内面の形態から対象物となる原料を、杵を回転させることによって粉碎する「擂鉢」と、一方、杵による打撃力から原料を粉碎する「搗き臼」との2種類に分類できると思われた。従って、この2つを分けてその概略を記してみたい。尚、出土した破片の中に「シデ鉢」⁽²⁰⁰⁾と思われるものがあり、灯明用に使用されたと思われるものがある（第426図14、図版62-6）。

(1) 石擂鉢

石擂鉢と思われるものは24点が認められる。

図上復原により径を測れたものは9点あり、23～33.2cmであった。このうち最大径を計測できたものは把手が造り出しえているものである（第424図5、図版62-3）。高さは8点が確認でき、11～14.2cmであった。

内部のすり面（使用面）の深さを計測できたものは8点であり、6.8～8.8cmが認められる。又、全体の外表面形態で台部を有するもの（第427図16、図版61-1）と、当部を有していないもの（第426図15、図版62-2）との2形態が認められる。

外面の側面部形状は、やや丸みを呈するもの（第426図15）と、底部からの立ち上がりがほぼ直線的に外傾して口縁部に接するもの（第427図18、図版62-10）の2形態が観察される。

此等の中で台部を有するものは6点が認められ、その厚さはいずれも約5～6cmと非常に厚い台部を有している。台部の断面形状は、底部よりほぼ垂直に立ち上るもの（第428図21）を除き、他は全て内傾気味に成形してある（第429図22）。この点については次のことが推察されよう。つまり、外見からの見え方の良さを想定し、あえて内傾気味に成形したと言うよりは、むしろ擂鉢として杵を回転させるための機能を考えると、より安定度のある大きな台部が必要とされたのであろう。そこには当然、前記した5～6cmという厚い台部が要求され、又、台部の側面を内傾させることにより、より安定度を増すための工夫がなされたものと言える。又、第424図5、図版62-3の把手が作り出されるものについても、残存する破片の形態より台部の形態は、やや内傾を呈するものであったことが考えられる。

外面底部は平底を呈するものと、やや半月状に浅くえぐられているもの（第429図23）とがあり、後者の例は4点であった。又、台部を有するものでは、その總てが平坦な面であることが観察された。

外面の成形は、その總てが金属工具による粗い仕上である。しかし台部を有するものに関しては、当部に若干の研磨が施されていることが伺われる。

口縁部の形状は平底を呈するもの（第429図24）と、丸みをおびるもの（第423図3）とが観察でき、此の部位の仕上げは軽い研磨がなされており、外面の粗い仕上げ方法とは対照的な様子がうかがわれる。

内部使用面（すり面）の断面形状は、口縁部より急な角度をもって底部に達し、その底部の形態は平底を呈するもの（第426図15）と、緩やかに底部に達し、その底部の形態が丸みをおびているもの（第429図24）とがある。そして、この内部使用面の形態から前者は「搗き臼」に属する部類と思われ、後者は「石擂鉢」に属すると思われるるのである。つまり、石擂鉢と定義付けした点には、その使用面より次の2点が看取されると思われた。

- 1 上記した石擂鉢の内部使用面を更に観察すると、底部径及び口縁部径（上縁部径）が大きく、広く施され石擂鉢としての機能面に適する。
- 2 石擂鉢の機能面から、使用面には「磨擦痕」が顕著に認められ、その内面形態は全体になめらかであり、一部には光沢をおびる箇所がある。

以上の点から内部使用面に石擂鉢としての機能上の特徴があるものと思われた。そして又、「光沢」については、石擂鉢の機能をより促すために、内部使用面の成形の際に若干の「磨き」が施され、更に、そこへ杵による回転が加わったためでもあるように推察された。こうした点に対し、一方の掲き臼の使用面には凹凸が著しく残存しており、掲き臼としての機能上の特徴がやはり内部使用面に認められた。つまり、擂鉢24点に使用される石質は細粒安山岩が最も多く13点であり、次にその他の安山岩が5点使用されている。一方、掲き臼11点に使用される石質はその他の安山岩1点を除き、他は總て黒色多孔質安山岩である点に大きな違いが認められる。この石質の違いは、掲き臼と石擂鉢との機能上の相違、並びに上記した内部使用面の相違にも大いに関係し、あえて掲き臼には多孔質の石材を選び、その使用面は当初より磨きを施さなかったものと推察され、一方の擂鉢にはその機能面から細粒安山岩が適しており、若干の磨きが使用面に施されたものと考えられる。

さて、出土した擂鉢の中に造り出しひ「片口」を有するものが2点確認される。このうちの1点は、約½の残存が認められ、出土した擂鉢及び掲き臼の中では、最も重量感のあるものである(第427図16、図版61-5)。

この片口の形態は、口縁部からやや張り出し気味に造り出されており、縦4.4cm、巾2.4cm、深さ0.8cmを測り、器形全体の大きさからはきわめて浅く施されている。内部の使用部断面形状は、緩やかな半月状を呈し、その内面はゆるやかに外傾して口縁部に達している。又、当部には使用時と思われる杵の回転による磨擦痕が顕著に認められ、かなりの使用度が伺われる。そして、他の擂鉢、掲き臼に比べ底部面が著しく黒色に変化している点が注目され、その範囲は片口にまで及んでいる。このことは、かなり主体的に「そそぎ口」としての機能が果されていたと言えるであろう。又、本擂鉢の台部は、高さ(厚さ)5cmを有し、その断面形状はやや丸みを呈しており、他の台部とは若干の相違が認められる。

他の1点は、主に片口の部分のみが残存する破片であり(第427図17、図版62-8)、器形及びその形態等は判別できなかった。しかし、片口の規模は縦4.0cm、横2.4cmと上記したものよりは小さなものであることが認められ、器形全体も上記のものよりは若干、小規模なものであることが推測される。

把手を有する破片が一点確認されており(第424図5、図版62-3)、図上復原から径は33.2cmと、擂鉢、掲き臼の中では最大径を測るものである。把手の平面形態はほぼ正方形を呈しており、当部は側面の最上部に施されている。尚、本遺物は回転実測により図上復原をしたため、把手は相対する位置にあるが、前橋市「下東遺跡」⁽²⁰¹¹⁾からも同様な擂鉢が完形品で出土していることが指摘されており、この遺物には、造り出しどなる把手の相対部に「片口」が施されていることが報告されている。こうした事例から、本擂鉢においても、把手に相対する位置には、片口が施されていた可能性も有り得ると考えられる。

(2) 掲き臼

出土した中で掲き臼と思われるものは第423図1の他10点である。擂鉢との形態上の違いは前述したように、内部使用面の形状に最もよく観察できる。つまり、掲き臼の使用面は口径と底径の差が極めて小さく、狭い点が認められ、それは擂鉢との機能上の相違点からおのずとこうした作りが施されたものと考えられる。

外面の形状は丸みを帯び、高さも擂鉢に比べ全体に低いことが特徴と思われる。又、出土した掲き臼と思われる類のものには、台部が施されておらず、外面の底部面が浅く掘りくぼめられていることも一つの特徴と言えよう(第423図3、図版60-5)。石質は11点の内、その他の安山岩1点を除く他の10点総てが黒色多孔質安山岩である。

これらの外に特殊な形態を示すものがあり、第428図20、図版62-11は出土した石擂鉢類の中で最も小規模なものである。高さは11.2cmと極めて低いことが認められる。しかし、器形は総じて厚く、底部は約4.6cmの厚さを測り、著しく肥厚している。その反面、使用面は非常に浅く残存形状から内部底部(使用面)は「皿状」を呈するものと考えられる。

他に、そそぎ口が施されていると思われる例として第423図3、図版60—6がある。本遺物は前述した擂鉢の「片口」とは違い、丸みを帯びる口縁部に三条の溝が刻み込まれている。その形状は規則性がなく、いわば粗悪な作り方とも言える。従って、粉挽物をそそぐための機能が果せたものなのか疑問であり、又、仮にそそぎ口としての機能をもつ溝であったならば、此の三本のそそぎ口は機能上にどのような効果をもつものであったのか不明であり、その性格は判然としない点が多い。

「シデ鉢」と思われるものが一点確認される（第426図14、図版62—6）。此は灯明用の鉢とも考えられ、内面の底部断面形状から皿状を呈していることが確認できる。そして当部には、著しく煤状のものが付着し、真黒に変色している点が注目される。尚、台部は他の石擂鉢類には観察できない丁寧な磨きが施されている。石質は細粒安山岩である。

まとめ

本調査により検出された粉挽き臼、茶臼、石擂鉢（搗き臼）等の破片総数は146点を数えた。此等の石臼に用いられた石質は、黒色多孔質安山岩、細粒安山岩、その他の安山岩、玻璃質安山岩であった。此の内、粉挽き臼は75点が確認され、その内の41点が「その他の安山岩」であり半数以上を占めている。一方、茶臼は36点中の19点が「細粒安山岩」であり、その他の安山岩は6点と極めて使用数が少ないことが伺われる。これは石臼のもつ機能面及び用途の違いからであろうか、使用される石材に明らかな相違が認められる。このことは、石擂鉢類にも同様なことが言え、搗き臼のほとんどは黒色多孔質安山岩が使用されるのに対し、擂鉢は大半が細粒安山岩である。そして、その石材の相違は、粒挽き臼、茶臼よりはむしろ「搗き臼」と「石擂鉢」とに壓然とした違いが観察される。これは、前述したように両者における機能上の違いに大きな要因があるものと思われる。つまり、搗き臼は主に杵を擱いて原料を碎くため、その内部使用面はザザザとした面を有する多孔質系の安山岩がより適し、効果的に粉砕できるものと考えられる。その一方、石擂鉢は杵を回転して物を碎くという機能面から、若干のザザザとした使用面を用するものの、ある程度の滑らかさが必要とされよう。このような点から擂鉢には多孔質系の石質よりは、むしろ細粒安山岩が多く使用されているものと思われる。

こうした石臼類は、前述したように完形品は一点もなく、その總てが破片であった。此の中で粉挽き臼、茶臼に関する破片を、その残存する形状別に大別すると次の3種類に分けることができる。

- 1 ほぼ丸の残存率を有し、その割れ口が直線的であるもの（第400図45、図版56—1他）。
- 2 ほぼ一分画の大きさで破損され、その形状が「皿型」を呈しているもの（第396図35、図版57—1他）。
- 3 不規則な破損形状を呈するもの。

この内、1、2の残存片と、3とに観察される相違点は、煤の付着と思われる黒色に変色している状態が対照的である。つまり、1、2に認められるその大半の破片については火を受けたことによって生ずる黒色の変色は認められず、一方、3の破片には、そのほとんどが側面部まで変色していることが確認される（図版56—6）。このことは、いわば1、2の様に規則的な残存形状を呈する破片にあっては火を受けた可能性が少ないとと言え、3の不規則な破片形状を残すものについては、火を受けたことによる煤の付着が顕著であるとも言えよう。¹⁰¹²

そして、此の煤の付着について考えられることは、大井城はたびたび兵火にあい焼失したことが伝えられていることから、その際に生じたことも推察される。

又、1、2における破片の形状からは、使用に堪えなくなった臼を単に割って廃棄したものなのか、それとも、その「割る」ということ自体に何らかの意味が意図的に含まれていたのか、その正確な位置付けはできなかった。しかし、茶臼片36例中の14点は、ほぼ規則的な破損形状を呈していること、更には粉挽臼の下臼¹⁰¹³片（第400図45外2例）などの残存形状からは、単に割って廃棄しただけのものとは考え難いことが伺われる。

この点について三輪茂雄氏「臼」によると「各地の臼にまつわる民間伝承からうかがわれることは、過去の日常生活の中で臼が果す役割はきわめて大きく、特に食物を扱う道具ゆえに神仏が宿るとされる風習があった」とされ、その廻棄処分の方法も多種であった様である。中でも「靈ぬき」と称し、石臼を二つ割りにすることによって普通の石と同じように処理したとされる伝承、更には、木の搗き臼に関しては同様な例として、割った臼片を近隣に分配した風習が各地に残されているようである。このように「割る」ということ、或いは「割って」処分するということのもつ意味は、長く親しみだ物に対する敬虔な念が込められた素朴な信仰形態的一面とも言えるであろう。

こうした石臼類146点の中で、粉挽き臼の上臼39例に関しては、その大半が薄い器形でありかなりの使用度が認められる。それは「目たて直し」の痕跡を顕著にとどめているもの或いは、磨滅によりすり合わせ面が挽き手穴に接してしまい、新たに挽き手穴を設けているもの等から類推することができよう。

機能面における粉挽き臼と、茶臼との各部の特徴、相違点等は前述したが、両者を外観すると、その仕上げ加工にも大きな違いが認められる。即ち、粉挽き臼は全体に粗野な作りが観察されるのに対し、茶臼は側面を始め各部に研磨が施され、非常に丁寧な仕上げが認められる。特に側面部における仕上げにはその傾向が顕著であり、茶臼には研磨が施されるか、若しくは、その研磨がなされた後、当部にはノミ状工具による丁寧な「たたき仕上」が施されている（図版59-4）。

此のたたき模様は、茶臼上臼の引き手穴同部に施される正方形の刻み（第408図1、図版59-7）、更には下臼の受皿部で認めることができた漆の塗布と同様に装饰的効果を兼ねているとも言えるであろう。この様に粉挽き臼には認めることのできない各部における仕上げの施し方等から、茶臼は特別な階層の中でのみ使用された貴重なものであると共に、至高品的な価値をも兼ねていたことが伺われる。

ところで、此の茶臼は火薬製造のために流用されたとする説がある。つまり火薬を製造するに当っては、「木炭粉」、「硝石」等を細粒しなければならず、その際に茶臼が用いられたようである。その1例として「東京都世田谷区立郷土資料館」には、火薬製造用の茶臼が保管されており、又、福島県郡山市「中村鉱跡」における報告からは、石臼が使用された可能性が十分考えられるとしている。この点について本遺跡から検出された石臼類及び遺構等からはそのことを直接に推察できる資料は認められなかった。しかし、火薬を製造するまでの過程を思考した場合、そこには必ず、木炭や硝石、更には硫黄等を粉碎化する必要性がある。その際には当然、粉挽き臼、茶臼のみならず「石擂鉢」、「搗き臼」等の流用も考えられると思われる。つまり、仮に木炭を粉碎化するならば、先ず、搗き臼などで粗く碎き、その後細かれた木炭を粉挽き臼等により細粒化し、更にはそれを茶臼、石擂鉢、或いは、薬研等で微粉化する行程が考えられよう。その意味からすると、本城跡から出土した石擂鉢（第429図23、図版61-4）、搗き臼（第425図11、図版60-2）、そして粉挽き臼（第382図14、図版51-3）などの使用面には炭素の付着及び浸透などが顕著に認められるものもあり、此の様な点からは「火薬製造説」を推考でき得る一類例とも言えるのではないかだろうか。

そして又、石臼類によって硝石、硫黄等を細粒化したとするならば、当然、その原料別に石臼を分けて取り扱う必要があろう。でなければその原料の性格からして危険性が生じ、同一臼での粉碎は憂慮されるものと考えられる。しかしながら本土中の臼類には、それらしきことを推考できる資料は認められなかった。

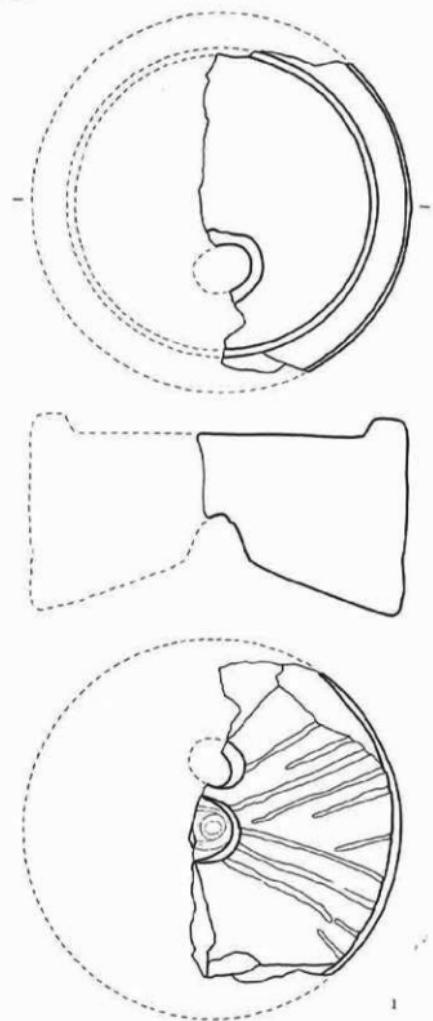
さて、検出された石臼と遺構との共伴性であるが、冒頭にも述べたように堅穴道構54基、土坑286基、溝2基等が検出された。しかし、此等各遺構における覆土層の堆積状況は、第36図Ta-29号堅穴道構で確認されるように、そのほとんどが自然堆積ではなく、むしろ、人為的な覆土層で形成されていることが取扱われた。このことは同遺構内より多量に検出された石臼からも推考でき得ることと思われる。つまり、城郭の攻略者が落城させた後、各施設の再構築の目的のために、あるいは城郭の使用者が各施設の再構築の際に埋め戻し、整地した時点で石臼及び石臼などが遺構内に廻棄されたものと思われる。それは又、出土した石臼片からも推察され、全く

の別遺構より出土した破片が接合されることからも理解できよう。こうしたことからも本石臼と遺構との共伴性は少ないものと考えたい。

以上のことを踏まえて、今回大井城跡より検出された石臼類を概観するならば、146点という数量は、一般的な生活に伴なう装備品からは多量な出土と言わざるを得ないであろう。こうした多量の石臼、石擂鉢等が本址より検出されたその背景を思考すると、本址は北側より石並城、王城、黒岩城の三城を合せて通称大井城と呼ばれている。今回発掘調査が行われた区域は、その中に主に「黒岩城」と称される最南端の舌状地であった。よって発掘した区域は本址の規模からすると一部の狭い範囲であり、又、上記した点から、石臼が装備されていたであろうその種の遺構を看取することはできなかった。このことから検出された石臼類は、本城郭址のいざれかの地に石臼の機能を装備しうるある種の空間をもつエリヤがあったものと想定される。それは、例え精粉をするための「場」をもった施設が装備されていたことも考えられるのである。

註

- 三輪茂雄 1978 「第5章 精粉臼の歴史」(『臼』)
- 愛知県陶器資料館 1984 「主な樹脂製陶器」の表紙カラー図版に掲載される茶臼。同様によると、559.7-109まで出展された。
- 福島県教育委員会 1981 「二ノ丸土塁発掘調査報告書」(『須川城跡』)
- 上尾市教育委員会 1985 「〔第22集 西藩土道跡〕
- 浪岡町教育委員会 1966 「昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書」(『浪岡城跡』)
- 一戸町教育委員会 1983 「昭和58年度発掘調査報告書」(『一戸城跡』)
- 1984 「昭和59年度発掘調査報告書」(『一戸城跡』)
- 八戸市教育委員会 1982 「八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集」(『史跡根城跡発掘調査報告書』)
- 1983 「八戸市埋蔵文化財調査報告書第14集」(『史跡根城跡発掘調査報告書』)
- 朽木原教育委員会 1981 「根木原埋蔵文化財調査報告書第36集」(『赤堀道跡』)
- 葛西城跡調査会 1975 「青戸、葛西城跡調査報告書 III」
- 御代田町教育委員会 1985 「長野県佐久郡御代田町野大付道跡発掘調査報告書」(『野大付道跡』)
- 尾寺町教育委員会 1978 「世良田小学校改築工事に伴う発掘調査」(『世界寺道跡』)
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 「〔浜町屋敷内道跡C地点〕」
- 三輪茂雄 1978 「〔第6章 茶臼〕」
- 註7と同じ。
- 註7と同じ 武田信玄が愛用したと伝わられる通称「いば丸」といわれる茶臼の空形品が収蔵されている。
- 浪岡町教育委員会 1986 「昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書」(『浪岡城跡』)
- 註6と同じ。
- 佐久郡教育委員会 1984 「大井城開基年表」によると『龍藏寺文書』、『大田山史録』、『新撰と漢松園』に見られるという(『大井城』)
- 三輪茂雄 1978 「第7章臼の民俗」(『臼』)の中で、山口県大島郡久賀町立歴史民俗資料館長、松田国雄氏によると「げんのうなどで二つ割りにして捨てた」と記されている。
- 註3と同じ章で(『民間伝承』2巻8号、S11)によると、開拓の山腹地方は一般にこの様な風習があったようである。
- 世田谷立民俗資料館、稻木氏の御教示によると石臼(茶臼)は、付近の家から寄贈されたもので、同様に提供の際「代々墓前の火薬貯蔵庫を務めた家であり、火薬を製造する際に使用した日であった」と当家人が語ったことで、本文での火薬製造のために石臼を流用した可能性もあり得るであろうとのことであった。
- 註1と同じ。

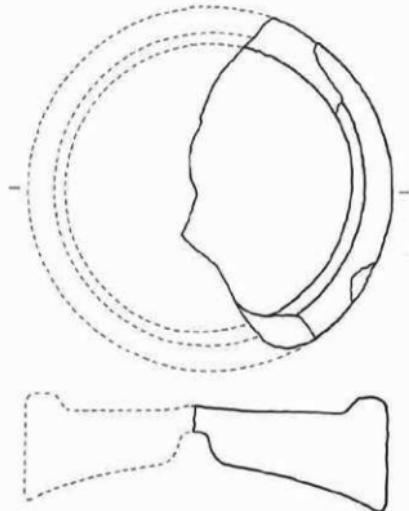


1

調査番号	出土日	出土地点・遺構	直 径	高 S	ふくみ	(mm)
			(310)	162	44	
375 1	上臼1/2片	D265				
	分画×溝 芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状		
	(6)×不明	(50)	黒色多孔質安山岩	左	—	
備考	側面に縦が付着し、火熱によるものと思われる。本遺跡より出土した上臼の中では約160mmの器高を測り、最も高いものである。ふくみは比較的大きい。すり面に磨滅が著しく、割れは判別し難い。					

0 (1:4) 10cm

第375図 石臼 上臼実測図



2

番号		出 土 日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ	(mm)
376	2	上臼1/2片	D84	(300)	94	40	
		分面×薄 芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状		
		(29)	その他安山岩	(左)	—		

備考 側面一部に微次の付着が認められ、火熱によるものと思われる。上歯の形状に不整に歪み最大高11mm、最小高86mmである。すり合わせ面(目なし臼)の形状(1407-61)に近似した。



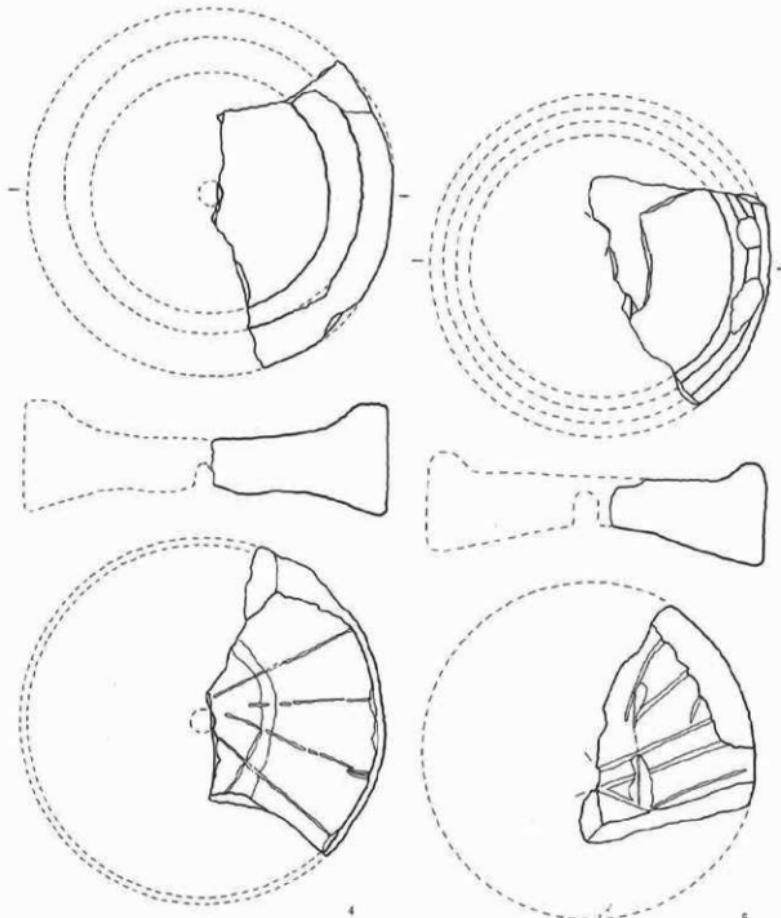
3

番号		出 土 日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ	(mm)
376	3	上臼鏡片	Tall	—	(58)	—	
		分面×薄 芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状		
		—	その他安山岩	—	—		

備考 すり合わせ面及び側面は黒色に変色している(有機質の浸透によるものと思われる。特にすり合わせ面には著しく認められる)。

0 (1:4) 10mm

第376図 石臼 上臼鏡片

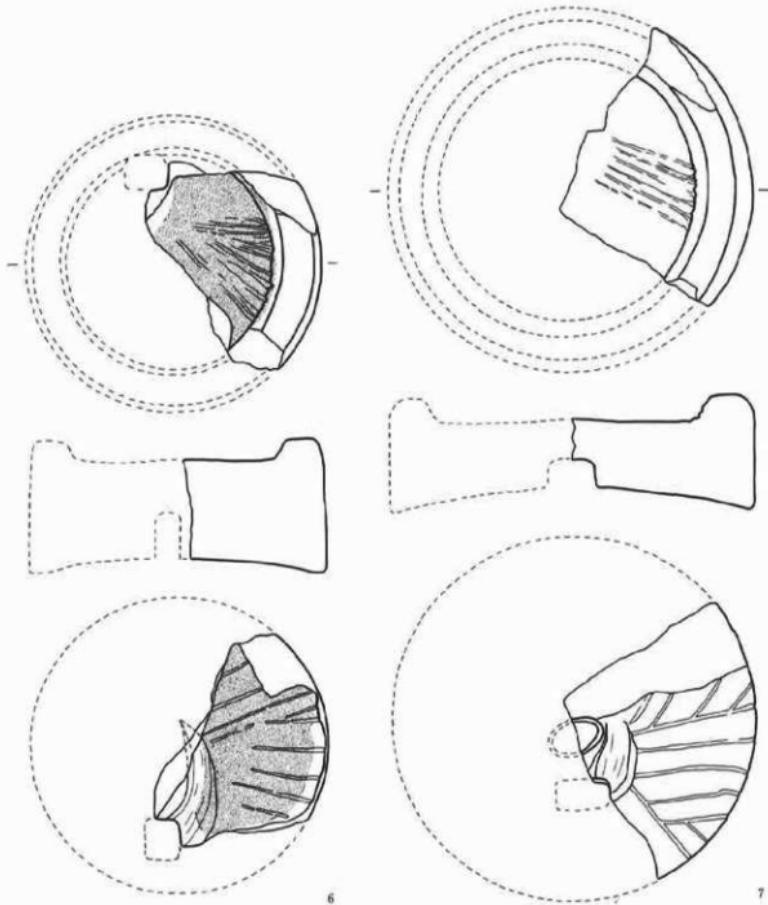


番号	出土日	出土地点・遺構	(mm)		
			直径	高さ	ふくみ
377 4	上曰1/3片	D29 芯棒孔直径 石 質	(300)	90	(20)
		分画×溝	面板方向	洪鉗口形状	
	不明 (焼缺け)	(20)	黒色多孔質安山岩	(左)	—
×面から上縁への立ち上がりは、ほぼ17mmと浅い。すり面の断続は稀しく、副溝はまったく認められない。しかし主溝の残存状況は良好であり容易に認められる。このことから副溝は製作時より削られなかったものと思われる。削り止めと思われる溝がすり面に認められる。全体の底形は粗野である。表面の形状は不整に並み、高低差は最大98mm、最小92mmである。					

番号	出土日	出土地点・遺構	(mm)		
			直径	高さ	ふくみ
377 5	上曰1/4片	か→き-11グリット 芯棒孔直径 石 質	(280)	82	(30)
		分画×溝	面板方向	洪鉗口形状	
	—	—	細粒安山岩	左	(場丸長方形)
口縁断面の形は丸みを呈する。すり面の周縁部は欠損しているものの残存する溝の状況から、周縁部まで達していたものと思われる。					

第377図 石臼 上曰実測図

9 (1:4) 10m

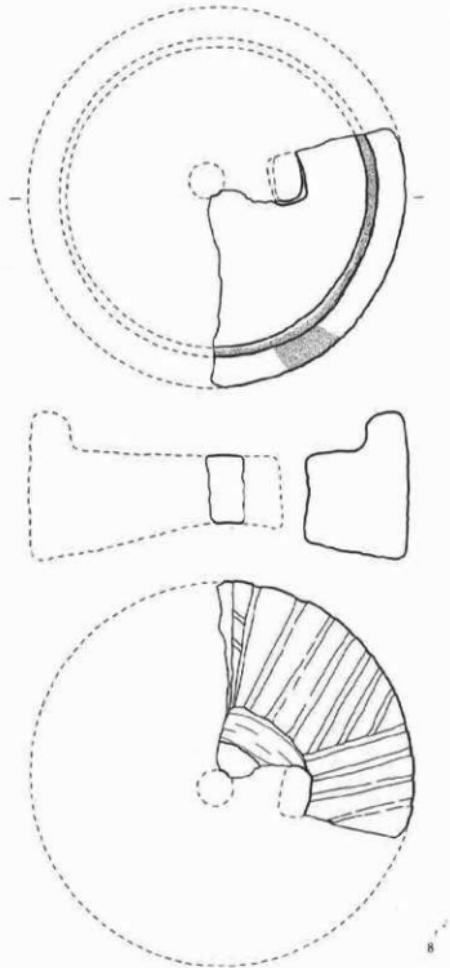


(mm)					
番号	出土日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
378 6	上曰1/4片	D166	(243)	119	(12)
	分画×溝	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状
	—	—	その他	—	(鴨丸貝方形)
備考	供給面は、黒色に変色している(有機質の浸透によるものと思われる)。すり合わせ部は著しく研減し、光沢をおびている。よって溝は判別しがたい。				

(mm)					
番号	出土日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
378 7	上曰1/4片	D84	(300)	94	(20)
	分画×溝	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状
	(6×4)	(39)	黒色多孔質安山岩	左	(鴨丸貝方形)
備考	目立つ研磨跡が認められる。すり面は比較的研減が少なく、溝及びもののくぼりはほぼ旧状を保するものと思われる。器形は不整に至る。最大高102mm、最小高96mmである。				

0 (1:4) 10cm

第378-8 石臼 上曰実測図



8

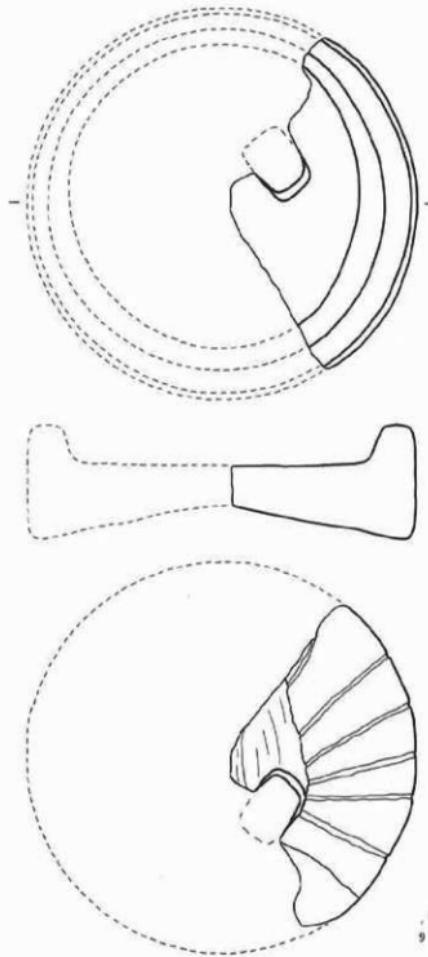
器名	出 土 日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
379	上臼1/3井	T a 16	(316)	124	32
8	分画×溝 芯棒丸直徑	石 質	回転方向	供給口形状	
(回)×(?)	——	その他の安山岩	左	(無)	(無)

備考

側面には縫が付着し、一部赤褐色に変色している。よって推いだところ、このものは土器である。ぐく段面は圓錐形の立ち上がりはほぼ垂直であり(27mm), 腹部はやや膨らむ。Rは25mmほどであり一部は黒色に変色している。(「有機質物の浸透によるものと思われる」)。すり面の脛底は著しいものの、頭は深く彎曲あり、要然とした跡みが施されている。周縁の形状は不整に歪み、高底差(厚い・高い)は、最大高119mmで、最小高は90mmを測る。

0 (1:4) 10m

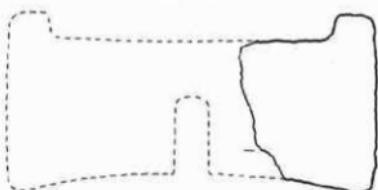
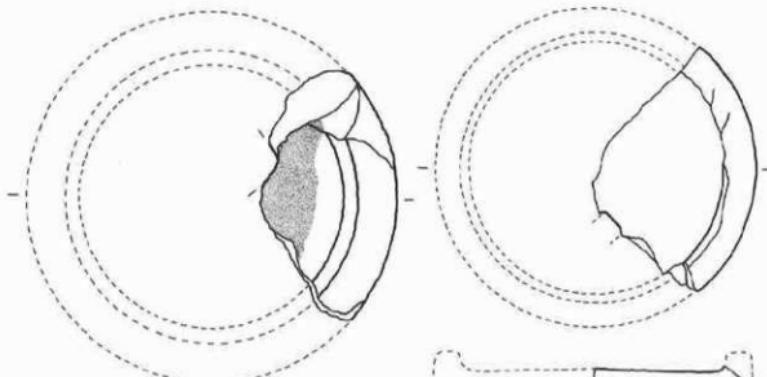
第379図 石臼 上臼実測図



		(mm)			
番号	出土日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
380 9	上白1/3月	D84	(320) 94	—	—
	分画×溝	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状
— — — その他の甕山岩 左 (長方形)					9
備考 くぼみ面から上縁への立ち上がりはほぼ垂直であり、28mm程度。すり合わせ面は磨滅が著しく、すり合わせ部は光沢を帯びている。供給口の形状は、不整長方形で大きい。口縁部から側面にかけ赤褐色に変色し、火を受けたものと思われる。形状は不整に底み最大高90mm、最小高78mmである。					

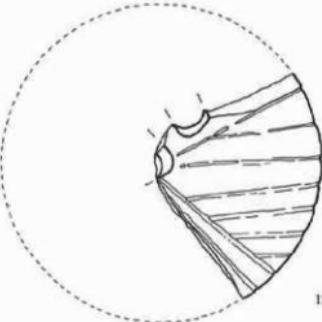
6 (1:4) 19cm

第380図 石臼 上白1号窯

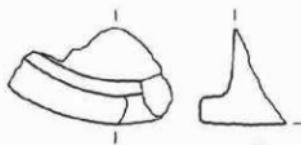


10

標品 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)	
			直 径	高 さ ふくみ
381 10	上曰1/4片	表掛	(304)	146
	分面×裏 芯棒孔直徑	石 質	回転方向	供給口形状
(引ちだし部 のみ)				
— 黒色多孔質安山岩 (左) (正・反)方形 くぼみ面の一部は黑色に変色している。(有機質の侵食か?) すり合わせ部の削減が若しく、溝は我別に無い。				
備考				



12



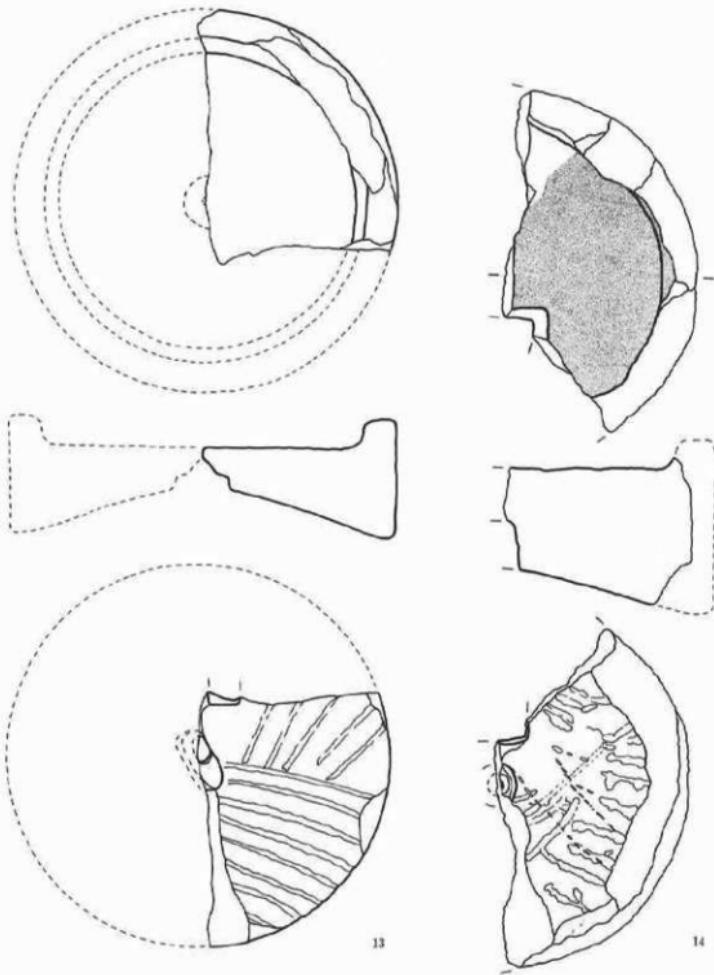
11

標品 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)	
			直 径	高 さ ふくみ
381 11	上曰破片	T a 11	不明	<72>
	分面×裏 芯棒孔直徑	石 質	回転方向	供給口形状
— — その他の安山岩 — —				
備考 上縁の高さ(深さ)は約23mmと高く、ほぼ垂直にくぼみ面に連する。側面、及びくぼみ面に「痕が認められる。				

標品 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)	
			直 径	高 さ ふくみ
381 12	上曰1/4片	D 29	(268)	(94)
	分面×裏 芯棒孔直徑	石 質	回転方向	供給口形状
(6×6) (30) その他の安山岩 左 (長方形)				
上縁の剖面からくぼみ面及びすり面にかけて痕の付着が著しく、赤褐色に変色している。よって、火を受けたものと思われる。				
備考				

0 (1:4) 10cm

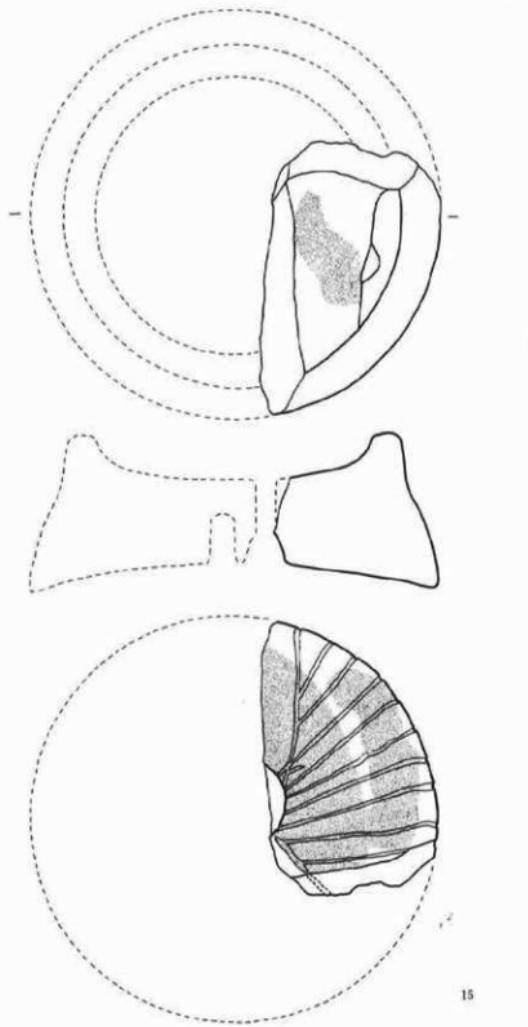
第381図 石臼 上臼実測図



(cm)						
番号	出	土	曰	出土地點・遺物	直 径 高さ ふくみ	
382	上曰1/4片			D236	(31.6) 98 40	
13	分面×溝	芯	孔直徑	石 質	回転方向	供給口形状
	—	—	—	細粒安山岩	左	—
参考						
上級の高さは、25~30mm位では比較直に立ち上がり度い。よく みは若しく大きい。側面一部、及びドリッパーセ面上に傷が付着して おり、火熱によるものと思われる。						
(cm)						
番号	出	土	曰	出土地點・遺物	直 径 高さ ふくみ	
382	上曰破片			M 1	(12.1) —	
14	分面×溝	芯	孔直徑	石 質	回転方向	供給口形状
	—	—	—	その他の安山岩	—	最大直角切削
参考						
くぼみ面及び供給口は、黒色に変色している。(有機質の浸透か?)。すり合わせ面は磨滅が著しいものの、溝はすり合わせ部の一部に確認される。						

0 (1:4) 10cm

第382図 石臼 上曰実測図

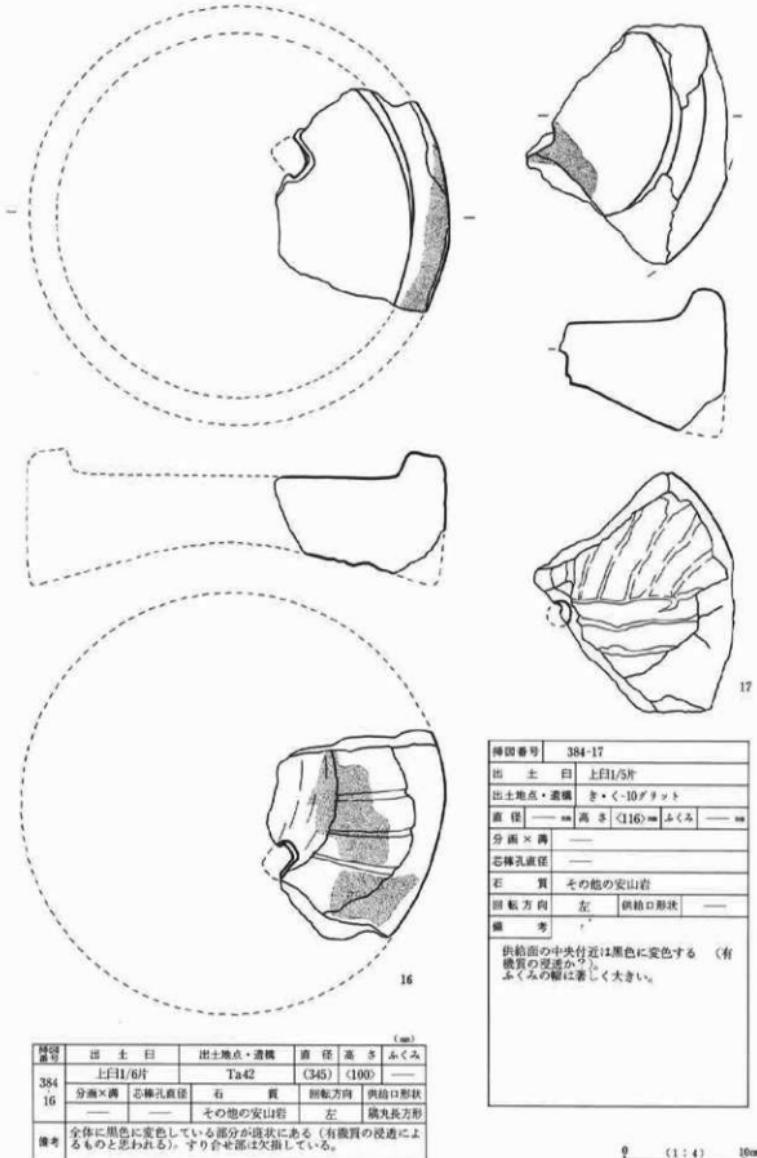


種類	出土目	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくらみ	(mm)
383 15	上臼1/4片	D72	(337)	130	(23)	
	分画×溝 (4)×(4) (8面計32)	芯棒孔直徑 (21)	石 質	回転方向	供給口形状	
			その他の安山岩	(右)	—	

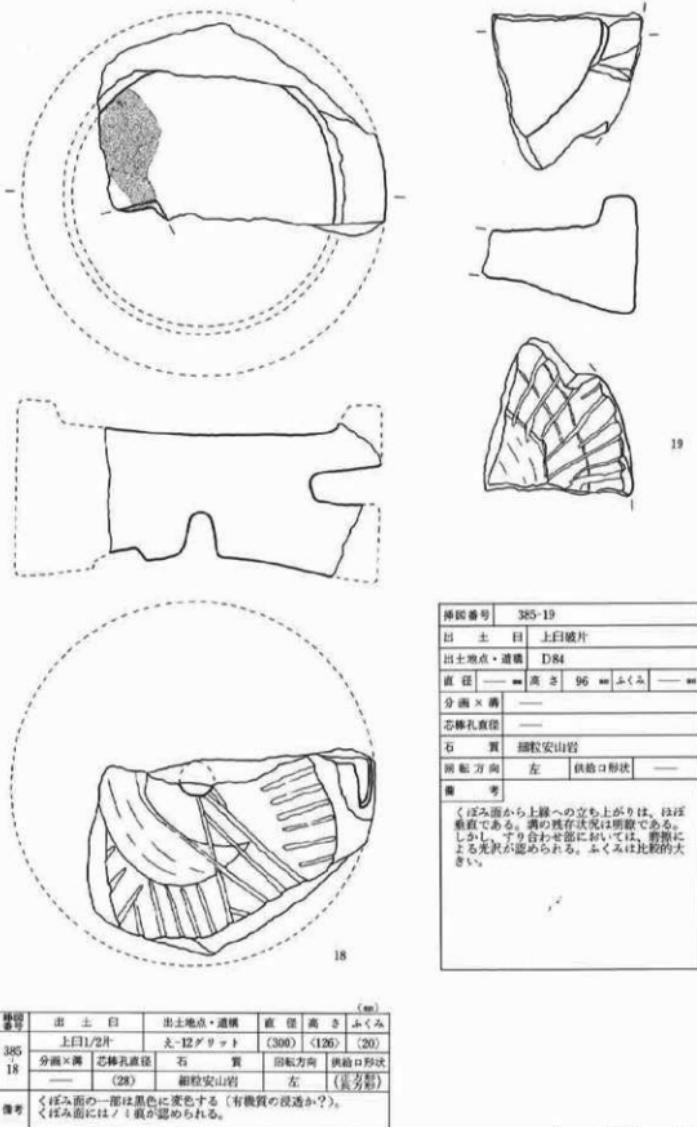
備考 くぼみ面及びすり合つせ面は黒色に着色している（有機質が埋
造しているものと思われる）。溝は底盤形まで達している。

0 (1:4) 10cm

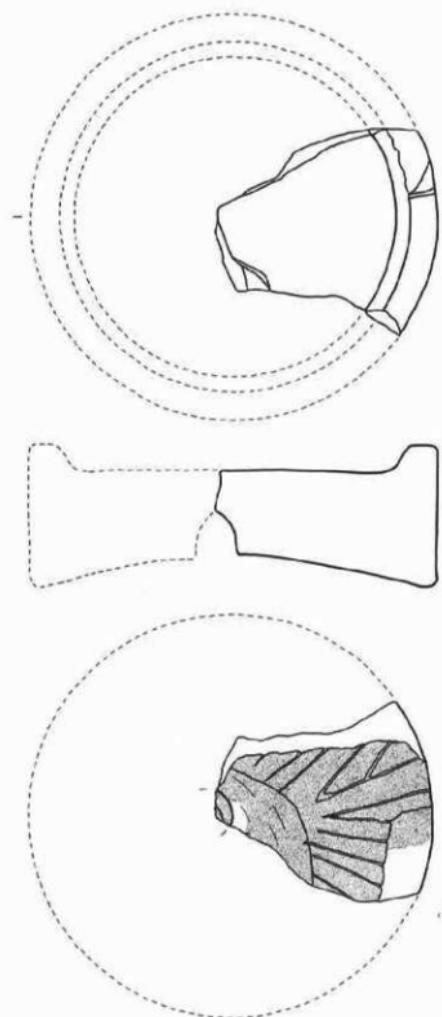
第383図 石臼 上臼実測図



第384図 石臼 上臼実測図



第385図 石臼 上臼実測図

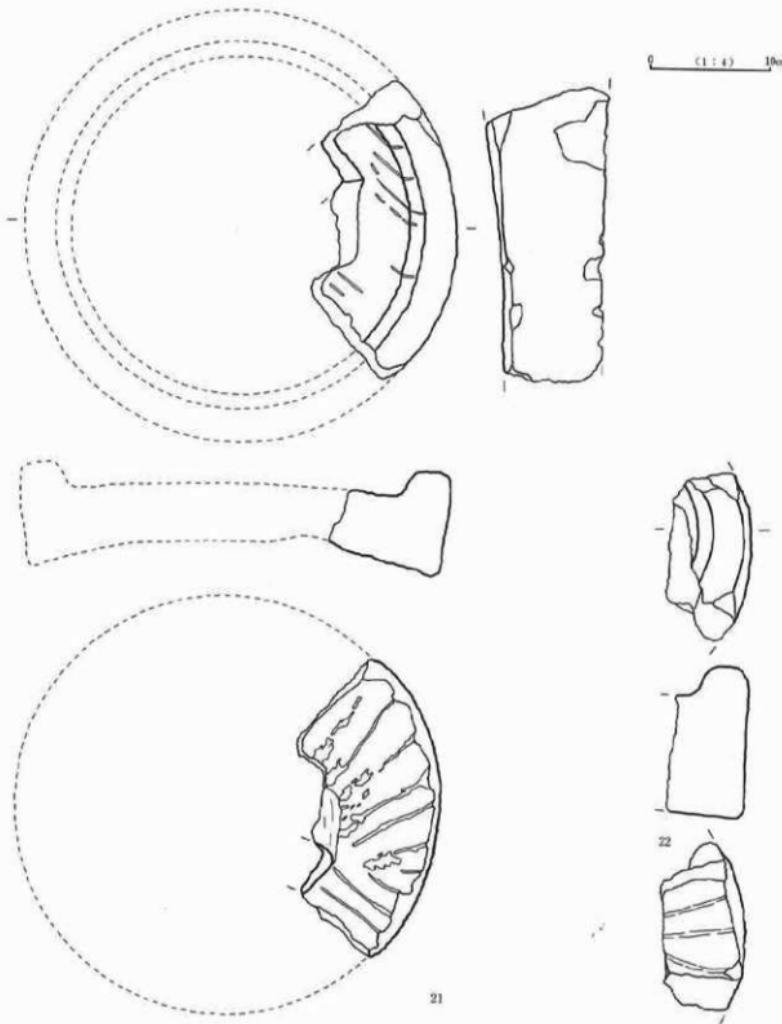


26

種類 番号	出 土 日	出土地点・遺物	直 径	高 S	ふくみ	(mm)
386 20	上臼1/4片	T a 31	(328)	120	28	
	分面×溝 芯棒孔直径	石 箔		回転方向	供給口形状	
	—	(37)		黑色多孔質安山岩	左	—
備考	すり合わせ面は黒色に変色している。(有機質の浸透によるものと思われる)。ふくみは比較的大きい。					

第386図 石臼 上臼実測図

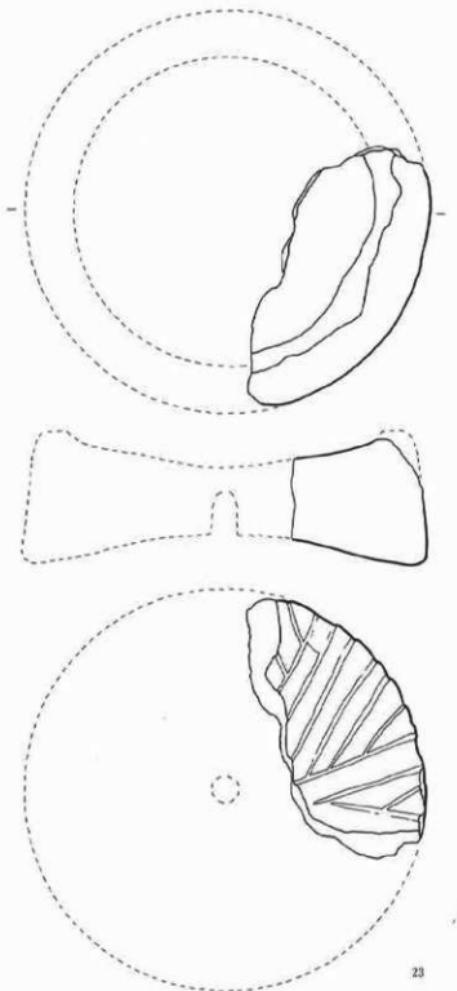
(1 : 4) 10cm



(mm)					
編號 番号	出 土 日 日	出土地点・遺構 遺構	直 径 径	高さ 高さ	ふくみ ふくみ
387	上臼1/5片	え・9グリット	(356)	85~100	—
21	分画×溝 芯棒孔直徑	石 質	回転方向	鉄鋸口形状	(正方形)
	玻璃質安山岩	左			
備考	上臼の形状は不整に芯み、最大高92mm、最小高76mmである。 上斜部の幅は30~35mmを有し傾仄である。くぼみ面にノミ痕が認められる。				

(mm)					
編號 番号	出 土 日 日	出土地点・遺構 遺構	直 径 径	高さ 高さ	ふくみ ふくみ
387	上臼破片	か・き-10グリット	—	125	—
22	分画×溝 芯棒孔直徑	石 質	回転方向	鉄鋸口形状	(正方形)
		黒色多孔質安山岩	—	—	
備考	くぼみ面から上斜への立ち上りはゆるくえみをおびて両曲する。 ふくみの面は磨滅が著しく、一部光沢をおびている。				

第387図 石臼 上臼実測図

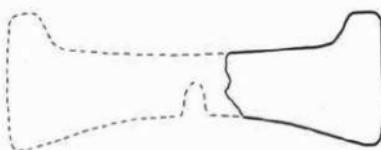
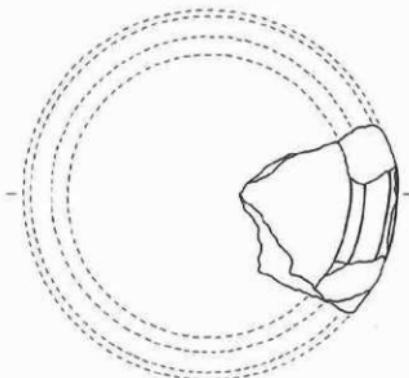


23

番号	出土日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
388	上臼1/4片	D180 (332)	〈104〉	—	—
23	分画×奥 (3)×6~7	芯棒孔直径 石 質	回転方向	供給口形状	—
	—	その他の中山岩	左	—	—
備考					
すり合わせ面の溝は比較的削減が少なく、挫絞状を呈するものと想われる。すり合わせ面の周縁部溝は深く、「V」字形に刻まれる。					

0 (1:4) 10cm

第388図 石臼 上臼実測図

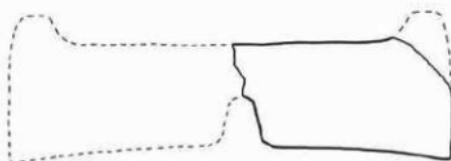
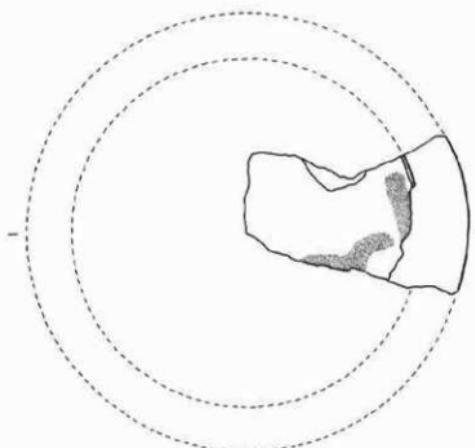


24

遺物 番号	出 土 日	出土地点・遺構	直 径	高 さ	ふくみ
389	上臼1/6片	D29	(306)	110	(26)
24	分画×溝 目なし日	芯棒孔直径 —	石 質	回転方向 （左）	供給口形状 —
備考 くぼみ面から上縁への立ち上がりは、ほぼ直角であり、27mmと深 い。ふくみは大きい。側面及びすり面に墨が付着しており、火 熱によるものと思われる。					

0 (1 : 4) 10cm

第389図 石臼 上臼実測図

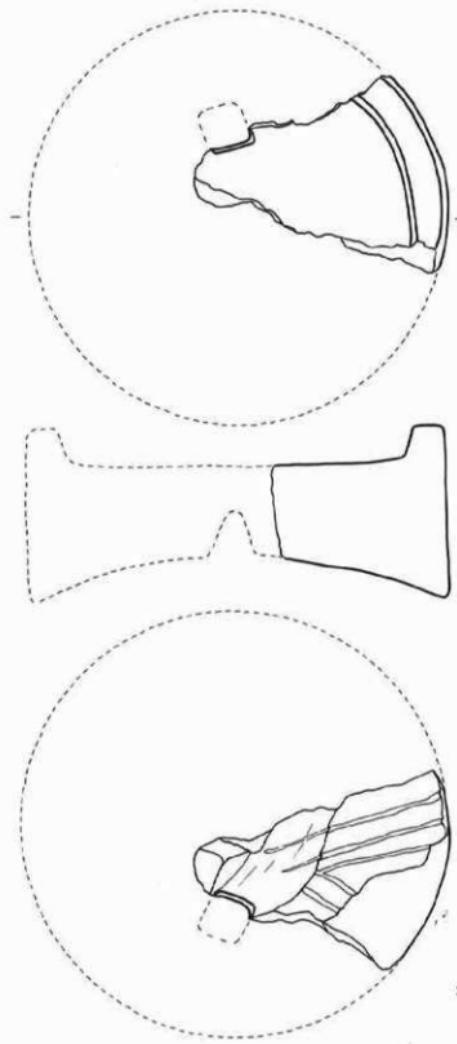


25

番号	出土臼	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
399	上臼1/8片	T a 35	(360)	<102	(10)
25	分画×裏 芯棒孔直徑	石 質	回転方向	供給口形状	
	目なし臼 (35)	その他の安山岩	(左)	(長方形)	
備考					
溝の痕跡は見られず、目なし臼と思われる。くぼみ面、及びすり合わせ部端部は、黒色に変色している。(有機質の浸透によるものと思われる)。					

— (1 : 4) — 10cm

第39088 石臼 上臼実測図



26

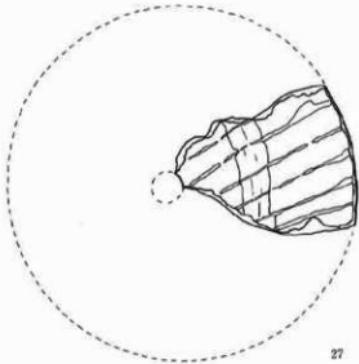
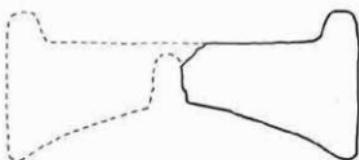
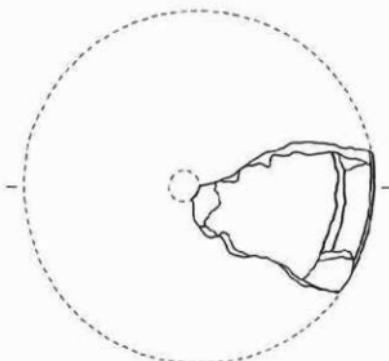
0 (1:4) 10cm

番号	出土日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ	(cm)
391	上臼1/6片	T a 46	(346)	143	(39)	
26	分画×露 心棒孔直徑	石 貫	回転方向	供給口形状		
	—	—	鹿鳴質安山岩	左	(圓丸直方)	

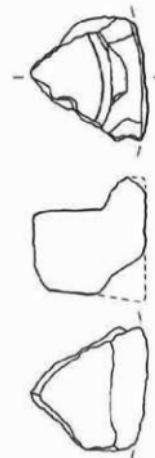
参考

上縁の高さ(厚さ)は約25mmと高く、くぼみ面に溝がある。すり面及び供給口下部に様が付着し、火薬によるものと思われる。すり面の肥満は薄く、一部光沢を帶びている。すり合わせ部の溝は深く、浅浮き状を呈するものと思われる。ふくみは薄しく大きい。

第391図 石臼 上臼実測図



27



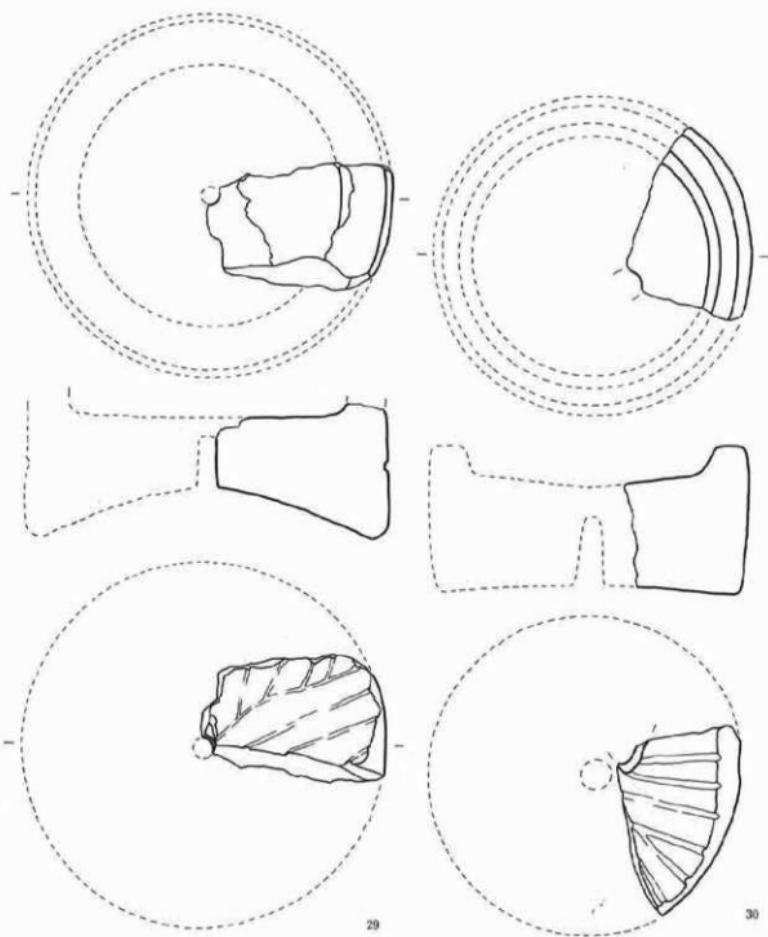
28

標識番号		392-28	
出 土 日	白	上臼破片	
出土地点・遺構	D236	D217	
直 径	—	高さ (97)	ふくみ —
分類 × 舞	目なし臼と思われる		
芯棒孔直径	—		
石 質	黒色多孔質安山岩		
回転方向	—	供給口形状	—
備 考	上臼の深さが約28mmと深い。		

標識 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)		
			直 径	高さ	ふくみ
392 27	上臼1/6片	D236	(288)	122	46
	分類 × 舞	芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状
	—	(26)	その他	左	(深九直方形) (深九直方形)
備考	すり面及び割れ口の一部には墨が付着し、火熱によるものと思われる。すり合わせ部の溝は深く、V字型を呈す。ふくみの端は著しく大きい。				

↑ (1:4) 10mm

図392図 石臼 上臼実測図



標題 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(回)		
			直 径	高さ	ふくら
393	上曰繩片	D217	(300) (111)	41	
	分画×溝 茅棒孔直徑	石質	回転方向	供給ロ形状	
29 (不明×5) 傷跡	(18)	黒色多孔質安山岩	左		
	上縁の割離面よりくぼみ間にかけ、葉の着生が認められる(火を受けていたものと思われる)。すり合わせ面及びすり合わせ部は崩落が著しい。よくくろい色で、大きさは約1.5cm。				

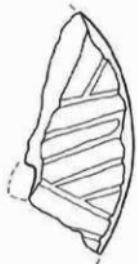
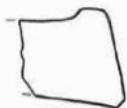
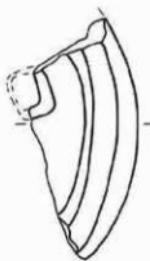
器物 番号	出 土 日	出土地点・遺構	直 径	高	さ んくす	(mm)
						上日(4月)
393						表裏 (260)
39	分離×彌補	石磚道路	石	貫	回転方向	供給口形狀 (左)
	(これまで)	——	その他の安山岩	(左)	(円)	
参考	上記は、既に廻らぐうちに通す、長さ1.25mと幅1.4mの、やり 合わせた面の断面形状を示す。大きさを説いてあるが、その形状 は不整に歪み、最高134mm、最小92mmを測る。					

29	(不明×5)	(18)	黒色多孔質安山岩	左	—
備考	上緑の剥離面よりくぼみ面にかけ、葉の付着が認められる(火を受けていたものと思われる)。すり合わせ面、及びすり合わせ部は崩落が著しい。ふくらみの様は、著しく大きい。				

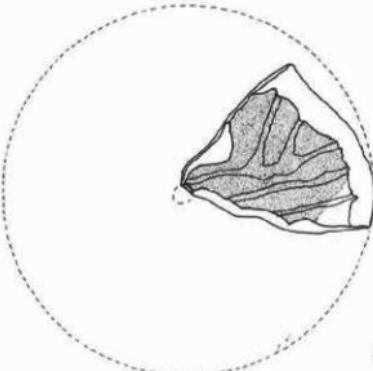
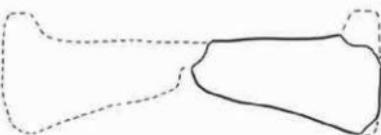
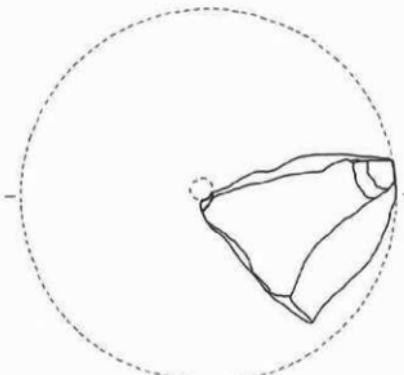
30 本筋 (二重筋)	—	その他の安山岩 (左) (円)
上線は、ほぼ直线上にくぼみ面に達し、25mmと深い(高い)。すり合わせ面の磨滅感が著しく、一部光がをびていて、上線の形状は不整に溝を、最大高134mm、最小高128mmを測る。		

(1 : 4) 10cm

第393圖 右曰 上曰實測圖



31



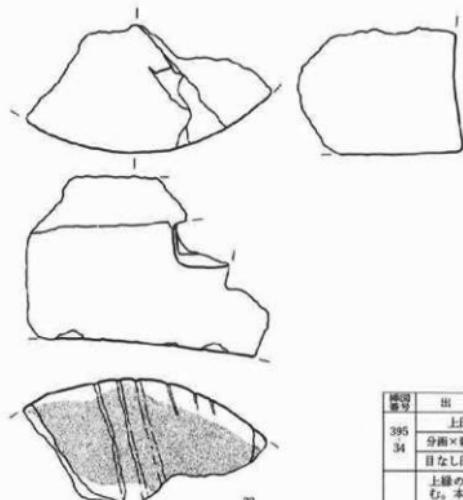
32

検査番号		394-31
出 土 日		上日破片
出土地点・遺構		き・く・10グリット
直 径	— mm	高さ 82 mm ふくみ — mm
分面×脊		不明×5
芯棒孔直径		—
石 質	細粒安山岩	
回転方向	左	供給口形状 (灌入式)
備 考		
上端の高さ(深さ)は5~8mmと深い。 くぼみ面にノコ痕が認められる。		

検査番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)	
			直 径	高さ ふくみ
394	上日1/6片	T a 42	(306)	(32) (40)
32	分面×脊 芯棒孔直径	石 質	回転方向	供給口形状
	—	(15)	その他安山岩	左
備 考				
すり面の一部は、黒色に変色している。(有機質の浸透によるものと思われる)。深の断面は「U」字形を呈し、幅広く側面に刻みを有する。				

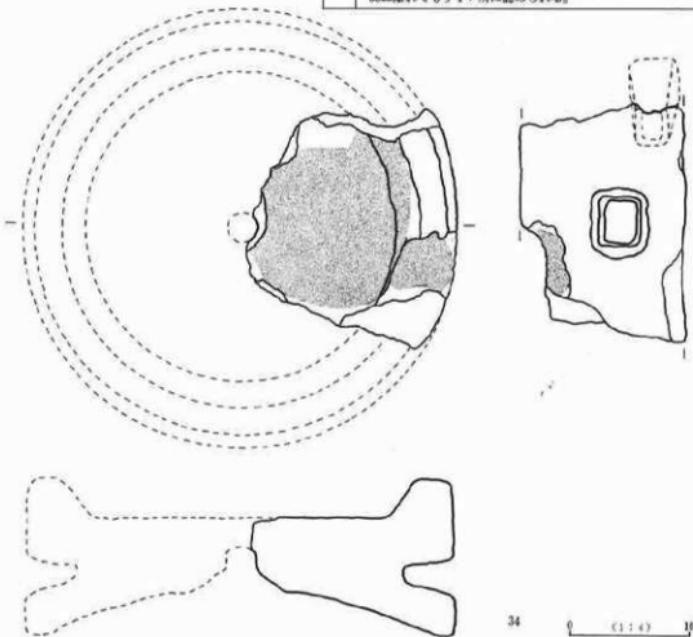
0 (1:4) 10mm

第394図 石臼 上日破片



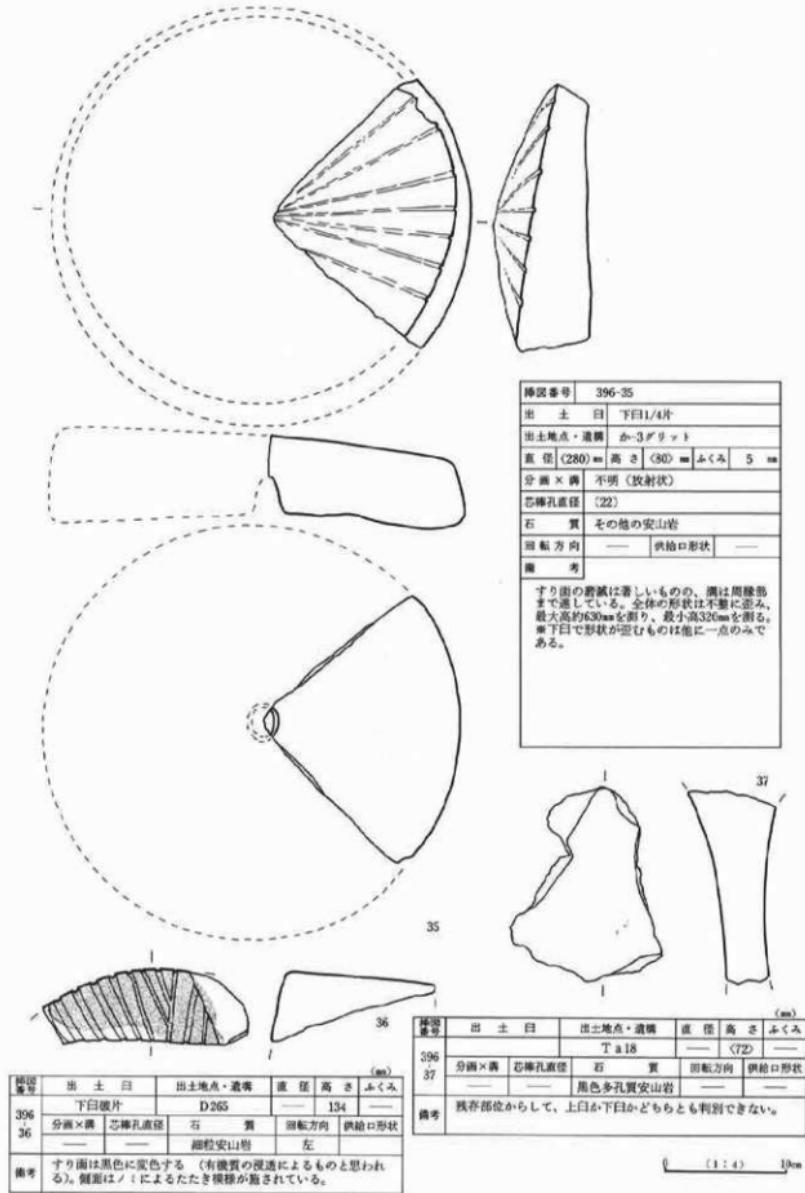
標因番号	395-33
出 土 日	上日破片
出土地点・遺構	T a 8
直 径	— mm 高さ (142) mm ふくみ — mm
分画×構	—
芯縫孔直径	—
石 質	その他の安山岩
回転方向	— 供給口形状 —
備 考	すり合わせ面は深く黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。すり合わせ面は磨耗が著しく、溝の旧状は判別し難い。側面は、／＼痕が著しく認められる。なお、側面部は一部赤褐色に変色し、火を受けているものと思われる。

(回)					
標因番号	出 土 日	出土地点・遺構	直 径	高さ	ふくみ
395	上日1/4片	T a 39	(356)	128	(34)
34	分画×構 芯縫孔直径	石 質	回転方向	供給口形状	
	(25)	その他の安山岩	(左)	—	
備 考	上縁の高さ(厚さ)は約3mmと高く、細やかにくぼみ面に打ち込む。本遺跡出土の石臼においては最も高い(厚い)上縁を有するものである。くぼみ面及びすり面は黑色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。溝の痕跡は認められず、目なし臼と思われる。引手穴は残存する側面中央部に1つ、更に約65mm離れてもう1ヶ所認められる。				

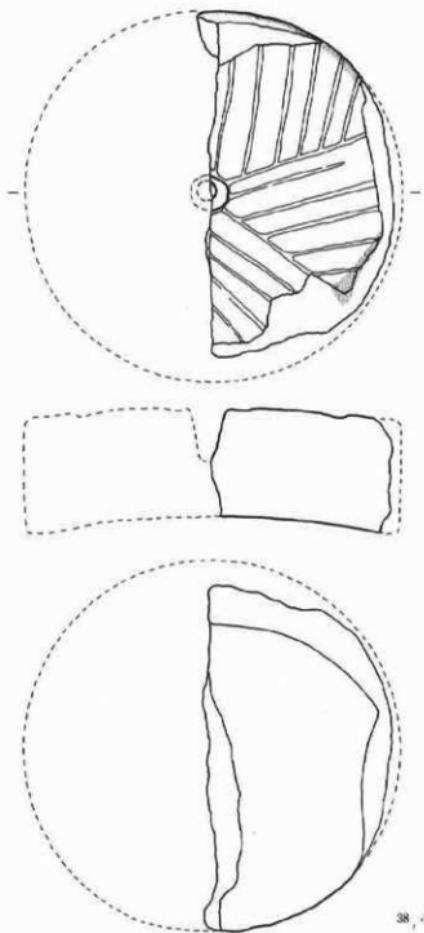


第395図 石臼 上日実測図

34 1 (1 : 4) 10cm



第396図 石臼 下臼実例図



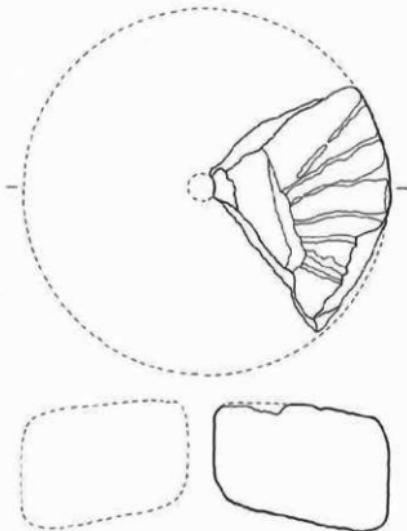
38 ✓

編 號 號	出 土 日	出 土 地 點 ・ 遺 構	直 径	高 さ	ふくみ	(mm)
						397
38	分離×裏 (6×7~8)	芯棒孔直徑 (28)	石	質	回転方向 供給口形状	左
その他の安山岩						

すり合わせ面、周縁部は一部を残し欠損している。すり面の断滅は著しく、溝は一部を残し観察するこ上がができる。すり面、周縁部の一部は黒色に変色している（有機質の浸透によるものと思われる）。底部の底面形状は半月状に浅くえぐられている。

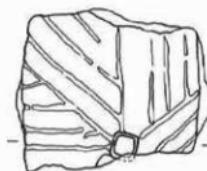
0 (1:4) 10cm

第397図 石臼 下臼実測図

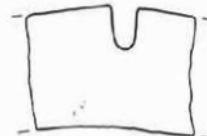


39

図版 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)		
			直 径	高 底	ふくみ
398	下臼1/4片	T a 42	(300)	195	(11)
39	分面×溝 心棒孔直径	石 貫	回転方向	供給口形状	
	—	—	その他の安山岩	左	—
備考	底面は深いえぐりを呈する。				



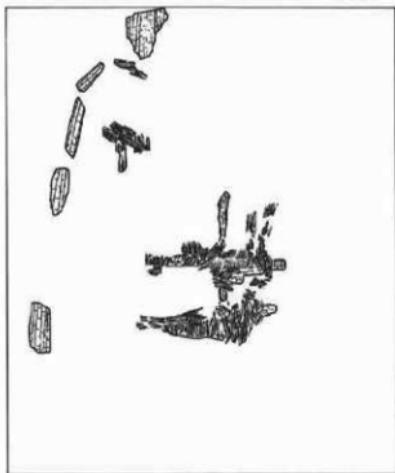
40



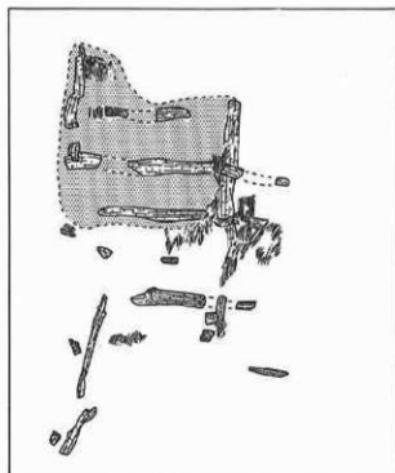
0 1:4 10mm

図版 番号	出 土 日	出土地点・遺構	(mm)		
			直 径	高 底	ふくみ
398	下臼破片	D112	—	(106)	—
40	分面×溝 心棒孔直径	石 貫	回転方向	供給口形状	
	(8)×不明	29	その他の安山岩	左	—
備考	ナリ面は磨滅が著しく一部先端を欠いている。上って溝は磨滅し、全体に丸みを帯びている。心棒孔は底部まで達していない。なお、平面の形状は陽丸正方形と思われる。				

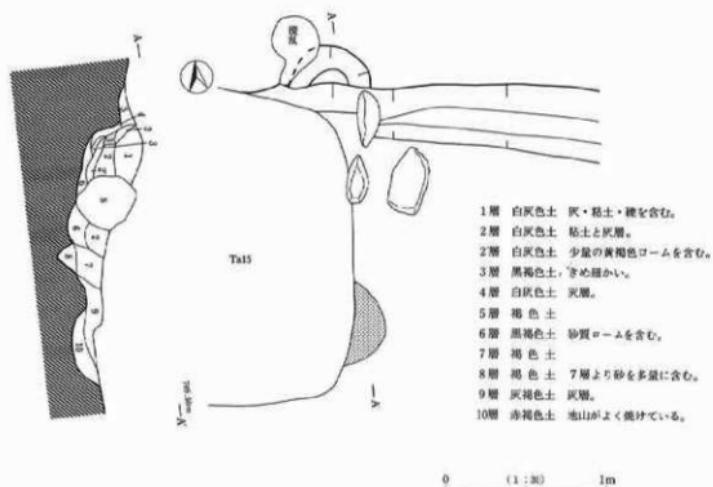
第398図 石臼 下臼実測図



第473図 H2号住居址第1地点実測図



第474図 H2号住居址第2地点実測図



第475図 H2号住居址カマド実測図

覆土は5層に分割された。1層は耕作土で粘性なく粒子が粗い。2層は茶褐色土層で炭化物を多量に含む。3層は茶褐色土層で粒子細かく、全体層序第II層白色ブロック・粒子を含む。4層は黒褐色土層で粒子細かく堅くしめる。5層は暗茶褐色土層で床面直上に2~6cmの厚さで堆積しており、やや粘性を有する。確認面からの壁高は37~66cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁体は、黄褐色ローム層を利用して構築され、比較的堅固な状態である。壁脚は南壁中央付近で一部断絶するが、ほぼ全周すると考えられる。壁脚幅は12~32cmを測り、3~13.5cmの深さを有する。断面形は「U」字状を呈する。床面は黄褐色ローム層を踏み固めて堅硬な状態であり、全体にはほぼ平坦である。ピットは総数で6個検出された。 $P_1 \sim P_3$ は主柱穴で、 $P_1 \sim P_2$ 間320cm、 $P_1 \sim P_3$ 間336cmを測り、南西の主柱穴は破壊されているがほぼ方形に配されると考えられる。平面形態はいずれも径50~56cmの円形を呈し、深さは各々55cm・82cm・57cmを測る。 P_4 は南壁中央部に位置する張り出しピットで、残存部で92×54cmの椭円形を呈し、70cmの深さを有する貯蔵穴である。 $P_5 \sim P_6$ は中央付近北寄りに位置し、性格は不明である。 P_5 は38×52cmの椭円形を呈し深さは15.5cmを測り、 P_6 は径26cmの円形で深さは7cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、Ta15号竪穴遺構に西半部を破壊され残存状態は不良である。焚口から煙道部までの長さは200cmを測り、袖部の幅は不明である。煙道部は壁体を長さ24cm、幅50cm（推定）の半円状に緩い傾斜で掘り込んで構築する。火床部は壁から105cm離れた床面を径50cmの円形に掘り窪み、焼土が約10cmの厚さで堆積していた。天井部・袖部は既に崩壊しているため旧状は不明である。尚、東側袖部付近より礫が出土しており、カマドの構築材と考えられる。

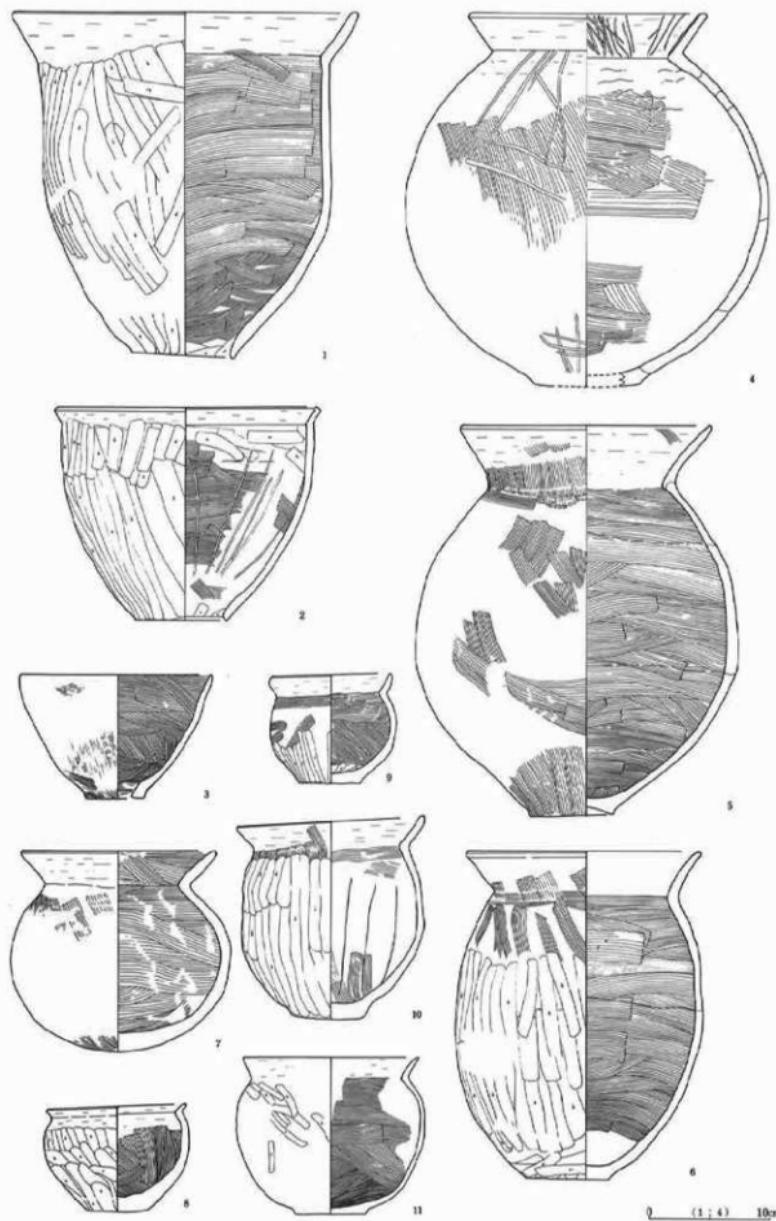
東壁中央付近には母屋桁とそれに直交する材及びカヤ状の炭化材が検出され屋根の一部と思われるが、壁の可能性も考えられる。さらに P_3 付近には垂木と考えられる炭化材が多量に出土している。

遺物の出土状況は、本住居址からは多量の土器・石器が出土しており、カマドの東側中央付近に集中する傾向が認められ、いずれも床面直上からの出土である。

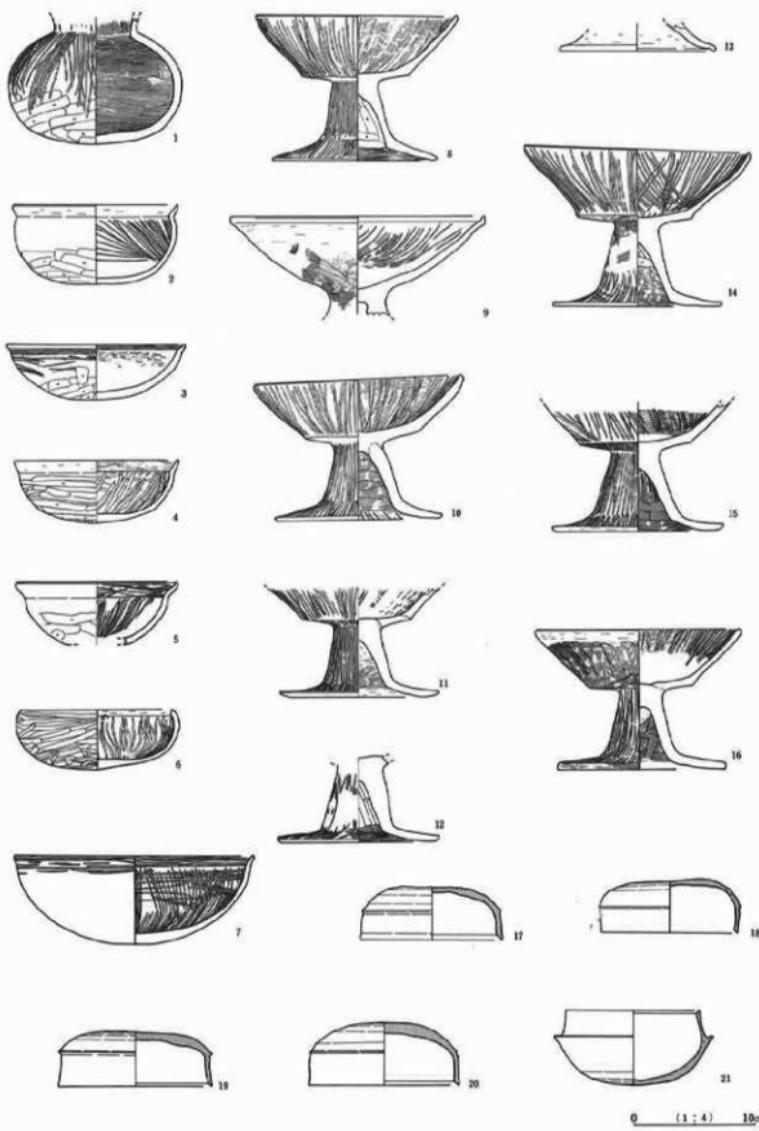
476図1は北東隅の床面より土庄で潰れた状態で出土した。476図4・7・10、477図1・6・17・19・21はカマドの東側より出土し、 P_1 上面より476図8と476図3が重なり横転した状態で出土した。東壁中央付近からは476図9、477図8・9・10・11・13・14が床面より出土した。さらに石器類は、編物石（479図1~14）が P_1 付近よりまとまって出土し、他に砥石が3点、石製模造品が1点出土した。

第369表 H2号住居址出土遺物一覧表（1）

拂団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
476-1	瓶	口径 27.5 胸径 23.7 孔径 8.5 器高 28.5	孔部はやや外反し、直線的に胴中央部に至る。胴部上半は垂直に頸部に立上がり、口縁は鋭く外反する。	内外面口縁部はヨコナデ 外面胴部は上→下への笠削り 内外面孔部は下→上への笠削り 内面胴部は右→左への刷毛目	完全実測
476-2	瓶	口径 21.5 孔径 7.6 器高 17.5	孔部から頸部へやや内壁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	内外面口縁部はヨコナデ 外面胴部は上→下への笠削り 内面胴上半は横位の笠削り 内面胴部は横位の刷毛目の後、窓の笠削り 内面孔部は笠削り	完全実測
476-3	瓶	口径 15.9 孔径 2.6 底径 4.7	孔部から口縁部までやや内壁気味に立ち上がる。	外面は刷毛次工具によるナデ 内面は刷毛目	完全実測



第476図 H2号住居跡出土遺物実測図



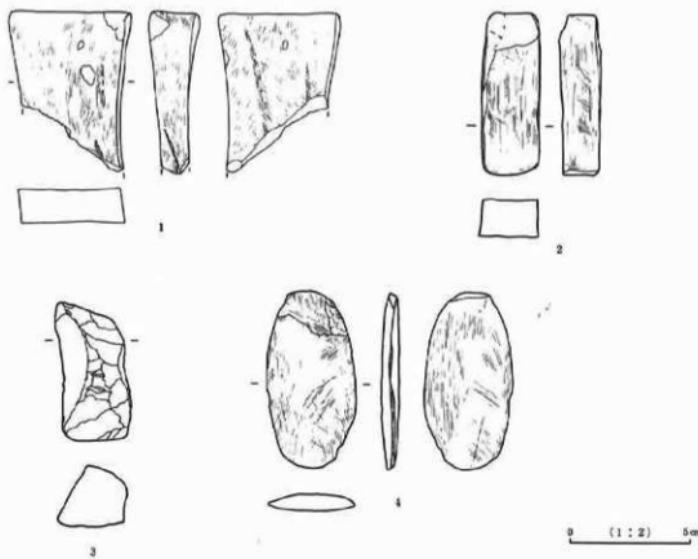
第477図 H2号住居址出土遺物実測図

第369表 H2号住居址出土遺物一覧表(2)

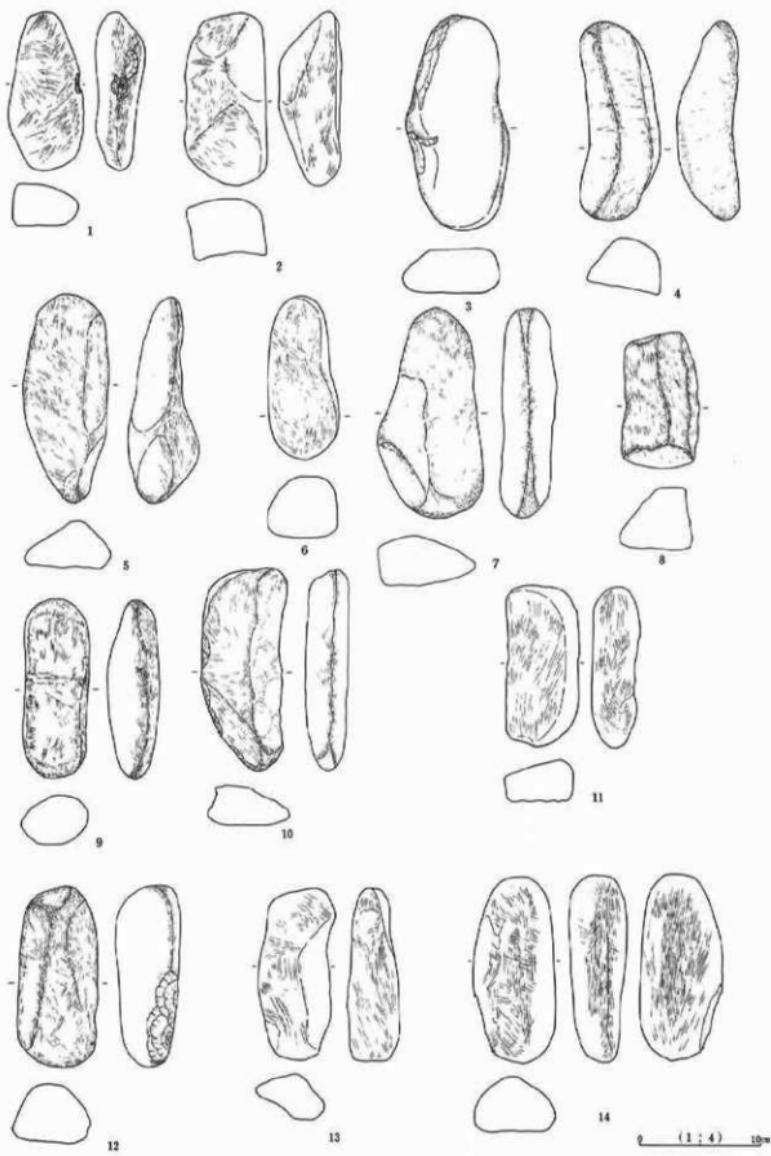
標団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
476-4	甕	口径 19.2 胴径 29.8 底径 (8.8) 器高 37.0	やや丸味を持った平底から球胴に至る。口縁部は「く」の字に外反する。	外面口縁部・胴上部ヨコナデ 外面胴部刷毛目以後、笠ミガキ 内面口縁部ヨコナデの後、笠ミガキ 内面胴部刷毛目	回転実測
476-5	甕	口径 20.1 胴径 26.3 底径 6.8 器高 32.1	底部から球胴に至る。 口縁部は「く」の字に外反する。	外面頂部下→上への刷毛目 外面胴部刷毛目 内面胴部横位の刷毛目 内外面口縁部ヨコナデ	完全実測
476-6	甕	口径 19.4 胴径 23.0 底径 6.7 器高 27.2	やや長胴で、口縁部は「く」の字に外反する。	内外面口縁部ヨコナデ 外面胴部・頸部刷毛目 外面胴部上→下への笠削り 内面横位の刷毛目	完全実測
476-7	小形甕	口径 16.1 胴径 18.1 底径 11.9 器高 16.5	底部丸底で球胴部に至り、口縁部は「く」の字に外反する。	外面胴部磨耗により調査不明 外面口縁部ヨコナデ 内面刷毛目	完全実測
476-8	小形甕	口径 11.5 胴径 11.9 底径 4.9 器高 8.6	やや丸味を持つた底部から、内側気味に最大径を持つ胴上半部に至り、口縁は小さく外反する。	内外面口縁部・頸部ヨコナデ 外面胴部上→下への笠削り 内面胴部刷毛目	完全実測
476-9	小形甕	口径 10.1 胴径 10.3 底径 5.1 器高 8.9	口縁部「く」の字に内側気味に外反する。	内外面口縁部ヨコナデ 外面底下半部下→上への笠削り 外面胴部刷毛目 内面底部笠削り 内面胴部刷毛目	完全実測
476-10	小形甕	口径 15.3 胴径 15.1 底径 5.8 器高 16.3	やや丸味を持つた底部から胴部に至り、内側気味に外反する口縁部を持つ。	外面口縁部ヨコナデ 外面胴部上→下への笠削り 外面底半部刷毛目 内面底部笠削り 内面胴部刷毛目 内面胴部横位の刷毛目	完全実測
476-11	小形甕	口径 14.2 胴径 15.4 底径 5.6 器高 12.9	口縁部外側気味に外反する。	内外面口縁部ヨコナデ 外面胴部下→上への笠削り 内面胴部横位の刷毛目	回転実測
477-1	小形甕	頭部 6.8 胴径 14.2 現高 10.4	底部丸底で球胴部を持つ。	外面口縁部底位の笠ミガキ 外面胴上半部底位の笠ミガキ 外面胴下半横位の笠削り 内面底半部笠削り 内面口縁部底位の刷毛目 内面胴部横位の刷毛目	回転実測
477-2	杯	口径 (13.4) 器高 (6.5)	底部丸底で口辺部内側気味に外反し、内縁を有す。	口辺部ヨコナデ 外面体部下半横位の笠削り 内面体部笠ミガキ	回転実測
477-3	杯	口径 14.4 器高 4.6	底部丸底で短く外反する口辺部を持つ。	外面体部上半笠ミガキ 外面体部下半笠削り 内面笠ミガキ(磨耗著しい)	完全実測
477-4	杯	口径 13.4 器高 5.1	底部丸底で口辺部内側気味に外反する。 口縁円を屋する。	外面口辺部ヨコナデ 外面体部横位の笠削り 内面笠ミガキ	回転実測
477-5	杯	口径 13.3 現高 5.1	口辺部内側気味に外反する。	外面口辺部ヨコナデ 外面体部笠削り 内面口辺部横位の笠ミガキ 内面体部放射状の笠ミガキ	回転実測

検査番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
477-6	杯	口径 12.4 器高 5.1	底部丸底で、体内部気泡に立ち上がり、口辺に至る。	外面削り 内面部口辺部ココナデ 内面部放射状の窪みガキ	完全実測
477-7	杯	口径 19.7 器高 7.4	底部丸底で、短く外反する口辺部を持つ。 口辺横円を呈する。	内外面部横位の窪みガキ 内面部横位・窪位の窪みガキ	回転実測
477-8	高杯	口径 16.6 脚径 3.8 ～ 5.8 器高 13.6 現高 11.9	脚部は直線的に開き、円筒状の脚部を経て底部に至る。底部は内壁気泡に外傾し、口辺部に至る。	底部外面窪位の窪みガキ(暗文風) 底部内面横位の脚毛目後、放射状の暗文風窪みガキ 脚部外面窪位の窪みガキ 脚部内面削り 脚部外面放射状の暗文風窪みガキ 脚部内面横位の脚毛目	完全実測
477-9	高杯	口径 21.0 脚径 4.5 現高 8.1	底部はやや内傾しながら口辺部に至り、一度外反した後短く直立する。	杯上部外面ヨコナデ 杯下部外面脚毛目 杯前面内面放射状の暗文風窪みガキ	回転実測 脚部欠損
477-10	高脚	口径 17.2 脚径 4.1 ～ 7.5 器高 13.7 現高 11.5	脚部は直線的に開き、脚部は内壁気泡に杯部へ集約される。 底部は内壁気泡に外傾し、口辺部に至る。	底部外面窪位の暗文風窪みガキ 底部内面横位の脚毛目調整の後、放射状の暗文風窪みガキ 脚部外面窪位の脚毛目 脚部内面横位の脚毛目 脚部外表面放射状の暗文風窪みガキ 脚部内面ナデの後、放射状の暗文風窪みガキ	完全実測
477-11	高杯	脚径 3.9 ～ 5.3 器高 13.0 現高 9.1	脚部は短く外反し、脚部は直線的に立ち上がる。 杯下部に外縁を持つ。	杯部外面窪位の窪みガキ 杯部内面窪みガキ 脚部外面窪位の窪みガキ 脚部内面横位の脚毛目 脚部外表面放射状の窪みガキ 脚部内面ナデ	完全実測 口辺部欠損
477-12	高杯	脚径 3.7 ～ 6.1 器高 13.3 現高 7.1	脚部は直線的に短く外反し、脚部は直線的に立ち上がる。	脚部外面窪みガキ 脚部内面窪み 脚部外表面窪みガキ 脚部内面脚毛目	完全実測 脚部欠損
477-13	高杯	器高 12.9 現高 2.3	底部は外傾気泡に開き、端部で短く内傾する。	底部外面ヨコナデ	回転実測 杯脚部欠損
477-14	高杯	口径 18.6 脚径 3.6 ～ 6.5 器高 14.8 現高 13.2	脚部は短く外反し、脚部は直線的に立ち上がる。 底部は下半に長い棱を持ち、内壁気泡に口辺部に至る。	底部内面窪位の窪みガキ 脚部外表面脚毛目調整の後、窪位の窪みガキ 脚部内面脚毛目調整の後、窪耐り 脚部外表面窪みガキ 脚部内面脚毛目工具によるナデ	完全実測
477-15	高杯	脚径 3.9 ～ 7.4 器高 14.2 現高 10.6	底部外傾気泡に開き、脚部は直線的に立ち上がる。 底部は下半に棱を持ち内壁気泡に外傾する。	杯部外面窪位の窪みガキ 杯部内面脚毛目調整の後、主として窪位の暗文風窪みガキ 脚部外面窪位の窪みガキ 脚部内面脚毛目調整及びナデ 脚部外表面窪みガキ 脚部内面脚毛目調整とヨコナデ	回転実測 口辺部欠損

博団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
477-16	高 环	口径 17.2 側径 3.9 ~ 8.0 側高 13.8 器高 11.4	縁部は直線的に開き、脚部は直線的に立ち上がる。 本部は下半に強い棱を持ち直線的に外傾し口辺部に至る。	环部外面縦稜の肩毛目 环部口辺部ヨコナデ 环部下半部横毛の刷毛目 环部内面刷毛目調整の後、縦文風籠ミガキ 脚部外面縦稜の肩毛目 脚部内面刷毛目 脚部内面肩毛目 脚部内面肩毛目、内面ナデ	回転実測
477-17	环 盖 (鏡)	口径 12.4 器高 4.3	やや外反する縁部から垂直に立ち上がり、平らな天井部に至る。 本部中央に棱を持つ。	天井部右回転箝削り 天井頂部右回転箝削りナデ 体部外面ヨコナデ 内面ヨコナデ	完全実測
477-18	环 盖 (鏡)	口径 11.2 器高 4.4	やや外反する縁部から内窓気味に立ち上がり、丸珠を持つ天井部に至る。	天井部外面右回転箝削り 体部外面ヨコナデ 体部・天井部内面ヨコナデ	完全実測
477-19	环 盖 (鏡)	口径 12.6 器高 4.5	やや外反する縁部から直線的に立ち上がり、やや平らな天井部に至る。 本部中央や上半に棱を持つ。	天井部外面右回転箝削り 体部外面ヨコナデ 体部・天井部内面ヨコナデ 外面上暗灰色の粒をかぶる	完全実測
477-20	环 盖 (鏡)	口径 12.4 器高 5.2	やや外反する縁部から丸珠を持つ天井部に至る。 本部中央に棱を持つ。	天井部外面右回転箝削り 体部外面ヨコナデ 体部・天井部内面ヨコナデ	完全実測
477-21	环 盖 (鏡)	口径 11.0 器高 6.1	丸底から内窓気味に立ち上がり、やや外反する口辺部に至る。	外面本部下半・底部右回転箝削り 外面本部上半・口辺部ヨコナデ 内面ヨコナデ	完全実測 470-20と セント関係か



第478図 第2号住居址出土石器実測図



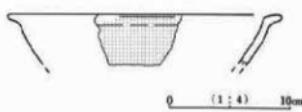
第479図 H2号住居址出土石器実測図

第370表 H2号住居址出土石器一覧表

拂因番号	器種	石質	法 量 (cm. g.)				備 考
			長さ	幅	外周	重量	
479-1	圓物石	安山岩	13.0	5.2	15.8	427.3	加工痕を有し、表面に使用擦過痕
479-2	圓物石	安山岩	14.3	6.2	20.1	749.4	表面に使用擦過痕
479-3	圓物石	ホルンヘルス	17.7	8.5	18.4	737.0	使用時の欠損が数ヶ所有り
479-4	圓物石	角閃石 安山岩	16.3	5.9	16.0	628.6	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479-5	圓物石	安山岩	17.1	7.1	17.0	643.8	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479-6	圓物石	安山岩	13.4	5.8	16.5	592.3	表面に使用擦過痕
479-7	圓物石	安山岩	17.3	8.5	17.0	709.0	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479-8	圓物石	安山岩	11.1	6.2	18.4	534.3	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479-9	圓物石	安山岩	14.7	5.3	15.2	416.9	表面に使用擦過痕
479-10	圓物石	安山岩	16.6	6.7	15.8	560.7	表面に使用擦過痕及び敲打痕
479-11	圓物石	輝石 安山岩	13.2	5.9	16.1	486.7	表面に使用擦過痕
479-12	圓物石	安山岩	14.9	6.5	18.0	696.5	表面に使用擦過痕、使用時の欠損部有り
479-13	圓物石	安山岩	13.9	5.8	14.1	399.1	表面に使用擦過痕
479-14	砥石	安山岩	15.3	6.7	厚さ 4.8	668.1	砥石としての使用頻度は低い
478-1	砥石	砂岩 (6.55)	5.0	厚さ 2.1	58.6	扁平四面砥、荒砾	
478-2	砥石	流紋岩	6.65	2.35	厚さ 1.7	45.1	四面砥、仕上砥
478-3	砥石	流紋岩	5.5	2.8	厚さ 2.6	39.4	未成品
478-4	石製 模造品	粘板岩	7.3	3.6	厚さ 0.75	27.4	表面及び外周に研磨痕

第371表 H2号住居址出土弁生土器一覧表

拂因番号	器種	法 量 (cm.)	形態及び手法の特徴	
			口径	現高
480-1	环	(22.6) 4.1	体部は内輪気孔に立ち上がり、口縁部は外輪気孔に強く外反する。 内外面赤色彫彩。	



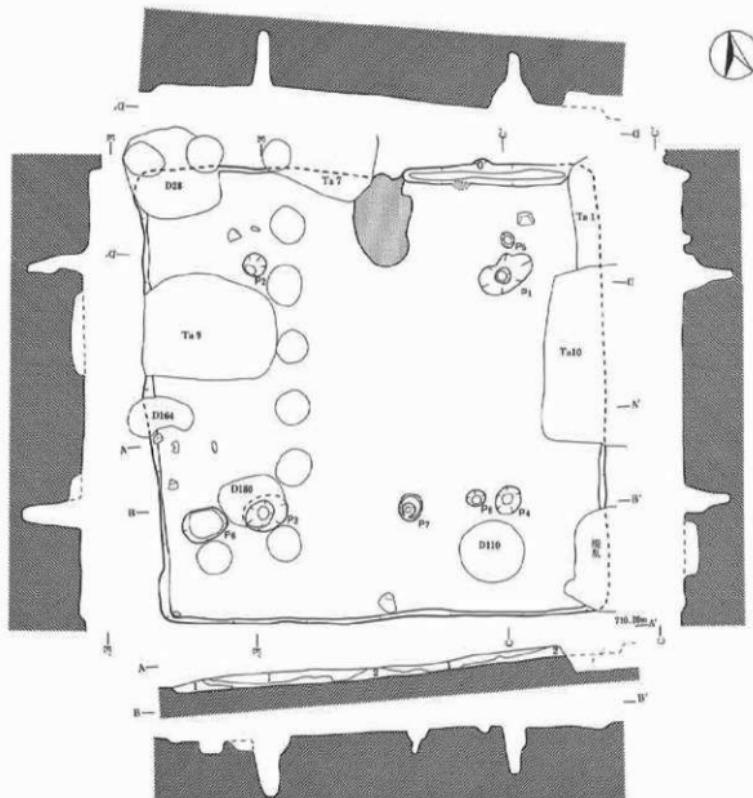
第480図 H2号住居址出土弁生土器実測図

4 H 3号住居址

本住居址は、調査区中央付近か・き・く-5・6グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta 1・7・9・10号堅穴遺構、D28・110・164・165・180・287号土坑、F 1号掘立柱建物址と重複関係にあり破壊される。また南東隅を擾乱により破壊される。

平面形態及び規模は、推定で東壁708cm、西壁725cm、南壁728cm、北壁743cmで、東西760cm、南北747cmを測り、東西にやや長い方形を呈する。主軸方位はN-10°-Eを示す。

覆土は2層に分割された。1層は黒褐色土層で、粒子細かく、粘性がややあり、黄白色ローム・漆黒色土を多量に含み、5mmの大さ小石粒・炭化粒子・バミスを微量含む。2層は粒子細かく、黄白色ローム・5mmの大さ小石粒を含む褐色土層である。確認面からの壁高は5.5~33.5cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁薄は北

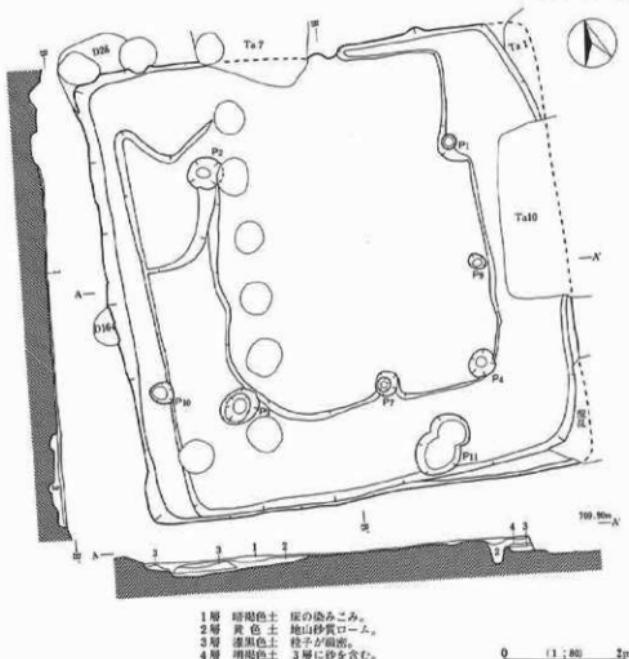


1層 黒褐色土 粒子細かく粘性中。黄白色ローム・漆黒色土を斑点状に多量に含む。炭化粒子5mm大の
小石粒・バミスを微量に含む。

2層 褐色土 粒子細かく粘性中。黄白色ローム・5mm大の小石粒を含む。

0 (1:80) 2m

第481図 H 3号住居址実測図

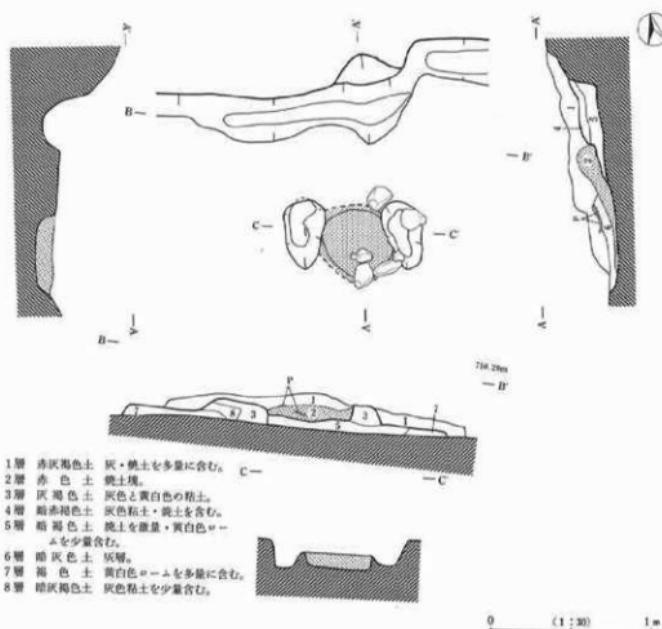


第482図 H3号住居社掘り方実測図

壁東側で確認された。溝幅は22~38cmを測り、7~13cmの深さを有する。断面形は「U」字状を呈する。床面は、東壁・西壁・南壁の内側約130~180cmを「コ」の字状に20cm前後掘り込み、黄色砂質ローム(2層)・漆黒色土(3層)・明褐色土(4層)を埋め戻した後、暗褐色土を2~10cmの厚さで貼床が施されており、平坦で堅緻な状態である。ピットは8個検出され、そのうちP₁~P₄は主柱穴である。各主柱穴間は各々400cm前後ではば方形に配される。P₁は53×92cmの不整椭円形を呈し、深さ285cmを測る。P₂は径40cmの円形で91cmの深さを有し、南側がやや壊状となる。P₃はD180号土坑に上面を被覆されるが、58×78cmの椭円形で98cmの深さを有する。P₄は40×50cmの椭円形を呈し、深さ77cmを測る。P₅はP₁の北側、P₆はP₃の西側に位置し、P₇・P₈はP₃・P₄間に位置するが、性格は不明である。また貼床下よりP₉・P₁₀・P₁₁が検出された。

カマドは北壁中央やや東寄りに位置し、焚口から煙道までの長さ140cm、袖部の幅約85cmの規模を有したと考えられる。煙道部は壁体を長さ18cm、幅45cmの舟先状に掘り込んで構築される。火床部は壁から約100cm離れた床面を径50cmの円形に掘り込んで構築され、内部には10cmの厚さで焼土が観察された。袖部は灰褐色粘土(3層)を用いて構築され、火床部の両側には袖石が埋設された25×42cmの椭円形を呈するピットが2個検出された。火床部周辺には、10~15cm前後の礫が7個検出されており、カマドの構築材と考えられる。

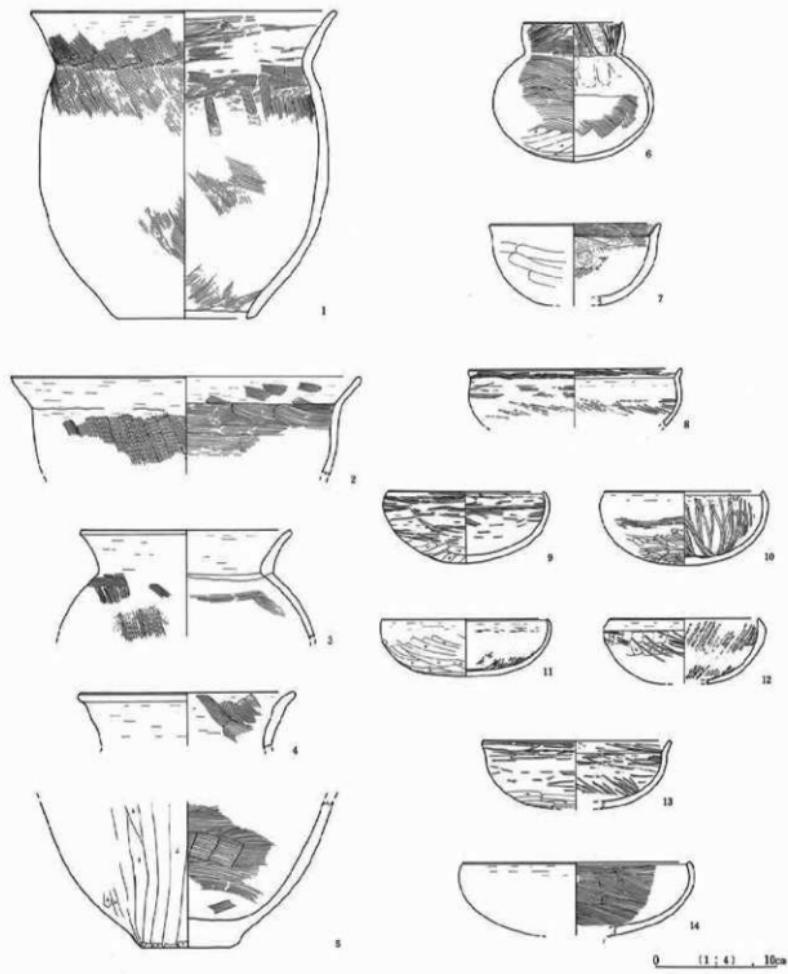
遺物の出土状況は、カマド内及び周辺に集中する傾向が認められ、その他の遺物は、住居址内に散在し、床面直上または床面よりわずかに浮いた状態で出土した。484図1・2・3・5・7・8・11・13・14はカマド内より出土し、484図4は南西隅の床面より出土した。484図6は北壁東側より、484図10は中央付近南側より床面よりわずかに浮いた状態で出土した。また484図12は貼床内より出土した。



第372図 H3号住居址カマド実測図

第372表 H3号住居址出土遺物一覧表

拂団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
484-1	瓶	口径 25.2 胸径 23.8 孔径 10.6 器高 25.3	孔部や外反し、胴部ゆるやかに内寄しつ立ち上がり、最大径を持つ口部に至る。	口縁部内面横位の窓・ガキ 口縁部・胴上半部縦位の刷毛目 胴部内外面刷毛目	回転実測
484-2	瓶	口径 28.8 現高 7.9	口縁部外側気味に外反する。 口縁に最大径を持つ。	口縁部外側ヨコナデ 胴上半部外側縦位の刷毛目 口縁部内面ヨコナデ・刷毛目 胴上半部内面横位の刷毛目	回転実測 胴下半部を欠損
484-3	甕	口径 15.4 現高 8.6	球形を成す胴部から「く」の字に外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴上半部内外面刷毛目	回転実測
484-4	甕	口径 17.9 現高 4.3	口縁部やや外傾しながら外反する。	口縁部外側ヨコナデ 口縁部内面ヨコナデ・刷毛目	回転実測
484-5	甕	底径 7.5 現高 12.0	平底より球胴部に至る。	胴下半部外面上へ下への荒削り 胴下半部内面横位の刷毛目	回転実測



第44図 H-3号住居址出土遺物実測図

検査番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
484-6	罐	口径 8.3 頸径 8.0 胴径 13.2 器高 11.4	丸底より珠網を経て頸部で厚まる。 口縁部や内側気孔に直立する。	口縁部外面刷毛目 胴中央・上半部刷毛目 胴下半部・底部荒削り 口縁部内面ココナガの後、底位の窓：ガ キ 胴中央部以下刷毛目 胴上半部に指痕痕	回転実測

辨認番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
484-7	环	口径 14.1 現高 6.2	丸底より内壁気味に立ち上がり、口辺に至る。 口辺部内縁を持ち、短く外反する。	口辺部内面刷毛目 口辺外面ヨコナデ 体部外面削り 体部内面削毛目調整の後、放射状の暗文風呂ミガキ	回転実測 底部欠損
484-8	环	口径 17.6 現高 4.7	体部内壁気味に立ち上がり、内縁を持ち、短く外反する口辺に至る。	口辺部内外面横段の笠ミガキ 体部外外面笠ミガキ	回転実測 底部欠損
484-9	环	口径 13.0 器高 5.9	丸底より内壁して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部内外面主として横段の笠ミガキ 体上半部内外面笠ミガキ 体下半部・底部外外面削り	完全実測
484-10	环	口径 12.9 器高 5.1	丸底より内壁して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部外外面ヨコナデ 体上半部外表面横段の笠ミガキ 体下半部・底部外外面削り 体部内面削ミガキ	回転実測
484-11	环	口径 13.6 器高 4.7	丸底より内壁して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部外外面ヨコナデ 体部・底部外外面削り 体部内面放射状の暗文風呂ミガキ	回転実測
484-12	环	口径 12.2 現高 5.4	丸底より内壁して立ち上がり、深い外縁を持つ口辺に至る。	口辺部外外面ヨコナデ 体上半部外表面横段の笠削りの後、笠ミガキ 体部内面笠ミガキ	回転実測 底部欠損
484-13	环	口径 15.4 現高 5.6	体部内壁して立ち上がり、内縁を持ち、短く外反する口辺に至る。	口辺部内外面横段の笠ミガキ 体上半部外表面笠ミガキ 体下半部外表面削り 体部内面暗文風呂ミガキ	回転実測 底部欠損
484-14	环	口径 18.7 現高 6.0	体部内壁して立ち上がり、口辺に至る。	口辺部外外面ヨコナデ 体部外表面調整不明 体部内面横段の刷毛目	回転実測 底部欠損



□□

9 (1:1) 2cm

第373表 H 3号住居址出土石器一覧表

辨認番号	器種	石種	法量 (cm, g)			備考	
			直径	孔径	厚さ		
485	臼 玉	滑石	0.53	0.12	0.21	0.13	研磨痕

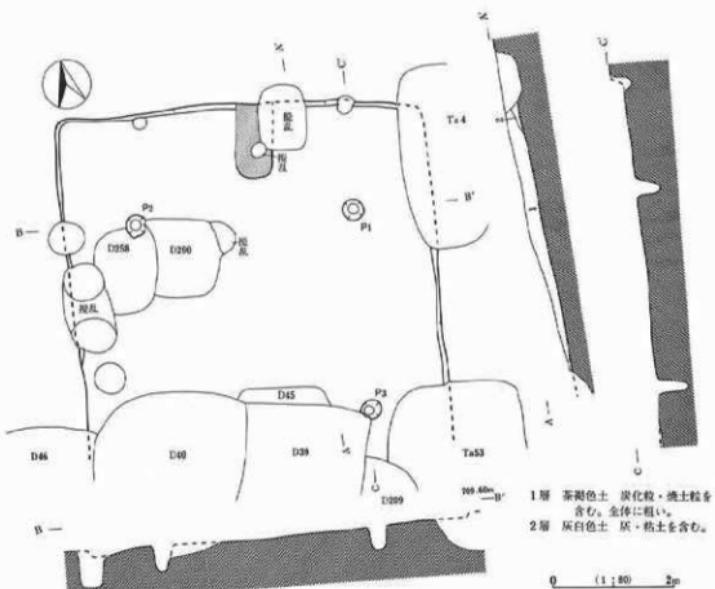
第485図 第3号住居址出土石器実測図

5 H 4号住居址

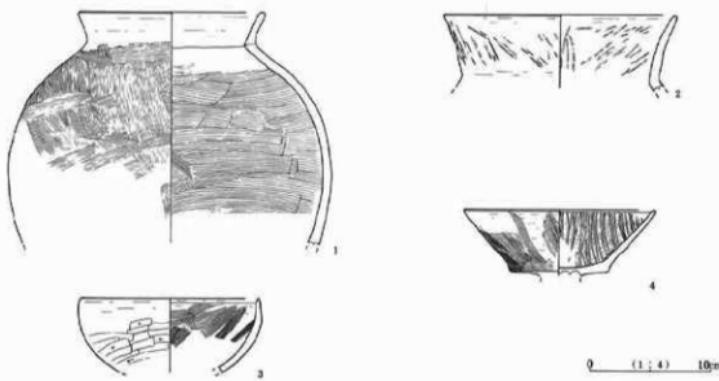
本住居址は、調査区南側さ・しー6・7グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta4・53号竪穴遺構、D39・40・45・46・209・258・290号土坑、F2号掘立柱建物址と重複関係があり、Ta4号竪穴遺構に東壁北側、D258・290号土坑にP;南側、F2号掘立柱建物址に西壁の一部、Ta53号竪穴遺構、D39・40・45・46・209号土坑に南側を破壊され、さらに攪乱によって北壁の一部を破壊される。

平面形態及び規模は南側が破壊されているため明確ではないが、北壁長は576cmで、東西長は残存部で600cmを測り、ほぼ方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-11°-Eを示す。

覆土は粒子粗く、炭化粒・灰土粒子を含む茶褐色土層1層のみである。確認面からの壁高は0~25cmを測り、

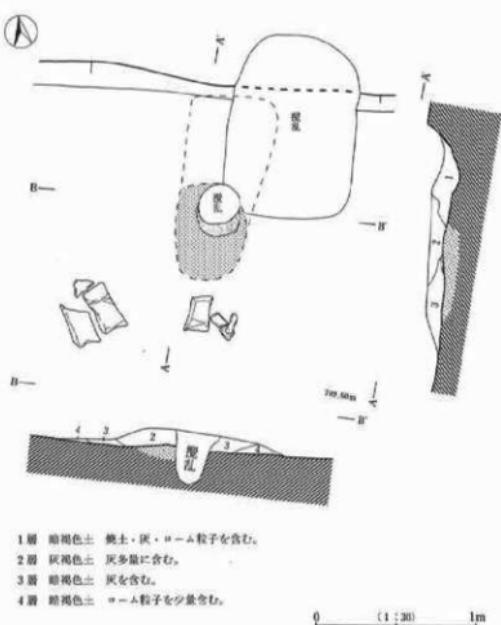


第486図 H4号住居址実測図



第487図 H4号住居址出土遺物実測図

床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は黄褐色ローム層を踏み固めてあり、全体に平坦であるが、南に向ってわずかにレベルを低下させている。ピットは総数で3個検出された。いずれも主柱穴で、P₁—P₂間322cm、P₁—P₃間295cmを測り、南西の主柱穴は破壊されているが、東西に長い長方形に配され



第488図 H4号住居址カマド実測図・遺物分布図

る。平面形態はいずれも径35cmの円形を呈し、深さは各々41cm・55cm・50cmを測る。

カマドは北壁中央に位置するが、擾乱により北東部を破壊されており、残存状況は極めて不良である。北壁から約50cmの床面上に44×60cmの範囲で焼土と灰が認められ、さらにその南にカマドの構築材と考えられる溶結凝灰岩が検出された。袖部は既に崩壊しており、旧状は不明である。

遺物の出土状況は、本住居址からは極く少量の土器部が出土しており、特に集中する箇所は認められない。487図1はカマドの西側の床面より出土し、487図4はカマド内より出土している。また擾乱層から分銅形石製品が出土している。

第374表 H4号住居址出土遺物一覧表

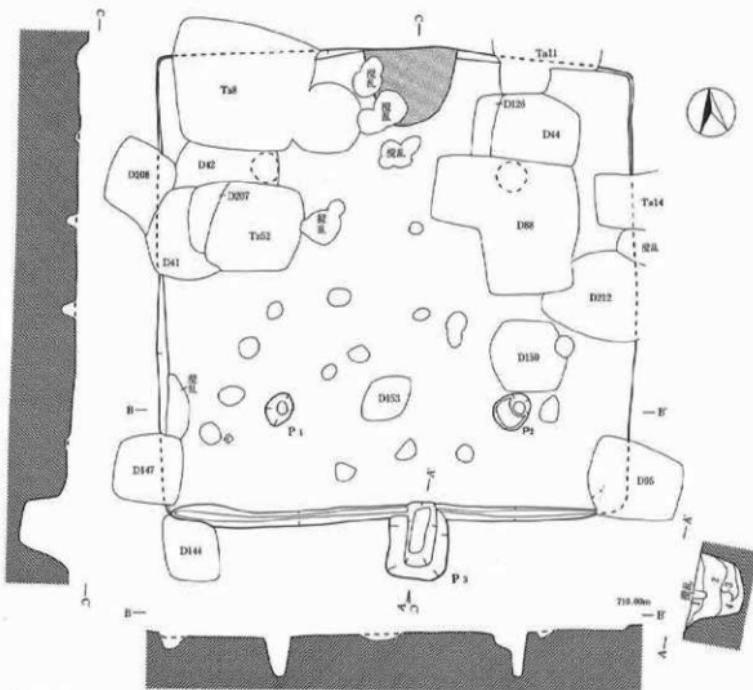
掲出番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
487-1	甕	口径 15.1 胴径 26.7 現高 18.9	胴部は球形から頸部まで窄まり、「く」の字に近く外反する口縁部を持つ。	口縁部外面ヨコナデ 胴部外表面左→右への刷毛目 胴部内表面として上→下への刷毛目	回転実測 胴下半以下欠
487-2	甕	口径 19.1 現高 6.2	口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部外面ヨコナデの後、荒々ガキ	回転実測 口縁のみ残存
487-3	环	口径 14.7 現高 6.1	体部ゆるやかに内窪して立ち上がり 口辺部に生る。	口辺部外面ヨコナデ 体部外表面右→左への荒削り 体部内面刷毛目	回転実測 底部欠損
487-4	高环	口径 15.7 現高 5.4	环部直線的に外傾し、口辺部に至る。	环部外面ヨコナデの後、上→下への刷毛目 环部内面刷毛目調整の後、微文風イガキ	回転実測 环部のみ残存



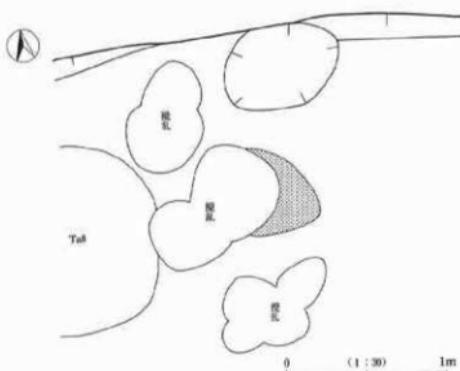
0 (1 : 2) 5cm

第489図 H 4号住居址出土石器実測図

6 H 5号住居址



第490図 H 5号住居址実測図

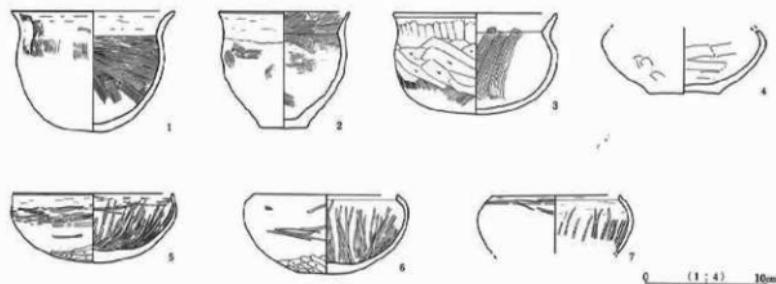


第491図 H5号住居址カマド実測図

3個検出された。 $P_1 \cdot P_2$ は南側に配される主柱穴で、北側の主柱穴はD88号土坑・D42号土坑によって破壊されている。 P_1 は $44 \times 56\text{cm}$ の梢円形を呈し深さは 66.5cm を測る。 P_2 は $54 \times 64\text{cm}$ の梢円形で西側にテラスを有する。深さは、テラス部で 29cm 、最深部で 74cm の深さを有する。 P_3 は南壁中央東寄りに位置する張り出しピットで、壁体を一辺約 100cm の方形に掘り込み、さらに $48 \times 108\text{cm}$ の長方形に掘り込んだ貯蔵穴で深さ 1287cm を測る。覆土は4層に分割された。1層はバミス・砂粒を含む茶褐色土層、2層は粒子が細かく、バミスを含む褐色土層、3層はバミス・ローム粒子を含む褐色土層、4層は粒子の細かい暗褐色土層である。

カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部はすでに失われ、さらに西側を擾乱により破壊されており、火床部がわずかに確認されたのみで、残存状況は極めて不良である。

遺物の出土状況は、492図1・2は P_3 内より出土し、492図4は中央付近西側床面より、492図5・6は北東隅床面より出土しており、特に遺物の集中する箇所は認められない。



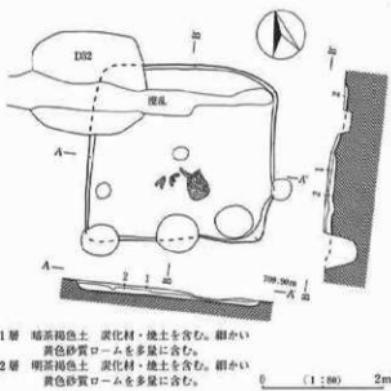
第492図 H5号住居址出土遺物実測図

第37表 H 5号住居址出土遺物一覧表

発掘番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
492-1	小形器	口径 13.5 胴径 12.2 底径 3.4 器高 10.0	丸味を帯びた平底から内輪気泡に立ち上がり、ロ繊部はゆるやかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面底位の刷毛目 胴部内面横位の刷毛目	完全実測
492-2	小形器	口径 10.8 底径 10.3 器高 3.8 器高 9.5	平底から内輪気泡に立ち上がり、ロ繊部はゆるやかに外反する。	口縁部外面ヨコナデ 胴部外面刷毛目 胴部内面横位の刷毛目	回転実測
492-3	小形器	口径 13.5 胴径 13.4 底径 13.2	丸底から内輪して立ち上がり、ロ繊部は「く」字に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴上半外面磨き工具によるナデ 胴中半外面横位の刷毛目 胴下半部刷毛目	完全実測
492-4	小形器	口径 13.6 底径 6.2 器高 ? 器高 5.3	上底から内輪気泡に立ち上がる。	胴下半部内外面刷毛状工具によるナデ	回転実測 胴下半以下欠
492-5	坏	口径 13.1 器高 5.7	丸底から内輪気泡に立ち上がり、ロ辺部でやや直線的に内傾する。	口辺部外面ヨコナデ 体部上半横位の窓ガキ 体部下半・底部鋸割り ロ辺部内面ヨコナデの後、後位の窓ガキ 体部内面放射状紋文風窓ガキ	完全実測
492-6	坏	口径 11.9 底径 4.6 器高 6.4	丸味を帯びた平底から内輪気泡に立ち上がり、ロ辺部で内傾する。	体部上半外面横位の窓ガキ 体部下半外面・底部鋸割り ロ辺部内面放射状紋文風窓ガキ ロ辺部内面ヨコナデ	回転実測
492-7	坏	口径 10.6 器高 4.7	内輪気泡に立ち上がる体部から、内傾するロ辺部に至る。ロ辺端部はわずかに外反する。	ロ辺部外縁ヨコナデ後横位の窓ガキ 体部外面不明 ロ辺部内面ヨコナデ 体部内面放射状紋文風窓ガキ	回転実測 底部欠損

7 H 6号住居址

本住居址は、調査中央付近ノ・カーテン内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D32号土坑、F3号掘立柱建物址と重複関係にあり、D32号土坑に北西隅を、F3号掘立柱建物址に南壁付近を破壊される。また搅乱により、北壁付近を破壊される。



第493図 H 6号住居址実測図

平面形態及び規模は、北壁・南壁・西壁は推定で各々 290cm・284cm・270cm、東壁は 245cmで、東西 309cm・南北 290cm を測る東西にやや長い方形を呈する。主軸方位は N-18°-E を示す。

覆土は 2 層に分層された。1 層は炭化物・焼土を含み、粒子の細かい黄色砂質ロームを多量に含む暗茶褐色土層で、2 層は明茶褐色土層である。確認面から壁高は 3 ~ 20cm を測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は全体にはほぼ平坦であるが、わずかに凹凸が見られ、中央付近や南寄りにナラの木と思われる炭化物が出土した。

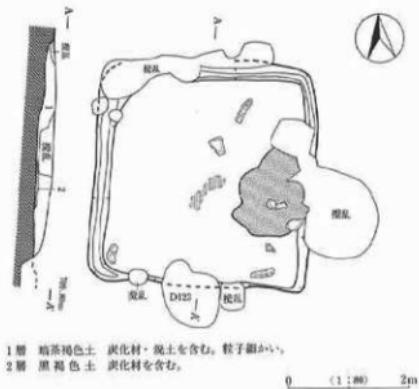
ピット・カマド等の付属施設は検出されなかつ

た。

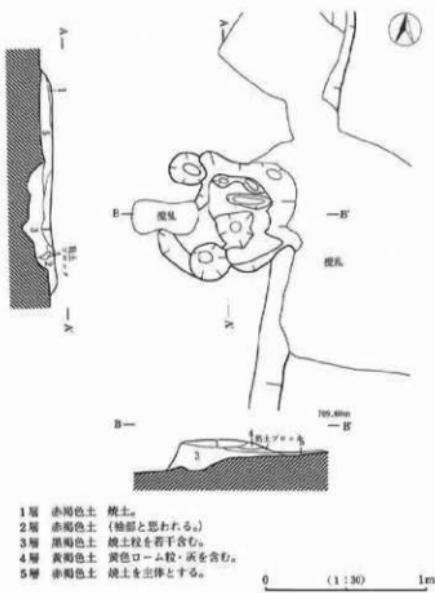
遺物の出土状況は、覆土中より極く少量土師器が出土したのみである。

8 H7号住居址

本住居址は、調査区中央付近西側き、く・8・9グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D123号土坑と重複関係にあり、南壁中央部を破壊され、さらに搅乱によって東壁中央部、北壁西



第494図 H7号住居址実測図



第495図 H-7号住居址カード実測図

側、南壁の一部を破壊される。

平面形態及び規模は、東壁356cm、南壁344cmで、西壁・北壁は推定で各々340cm・326cmを測り、南北にやや長い方形を呈する。主軸方位はS-83°-Eを示し、床面積約10.3m²を測る。

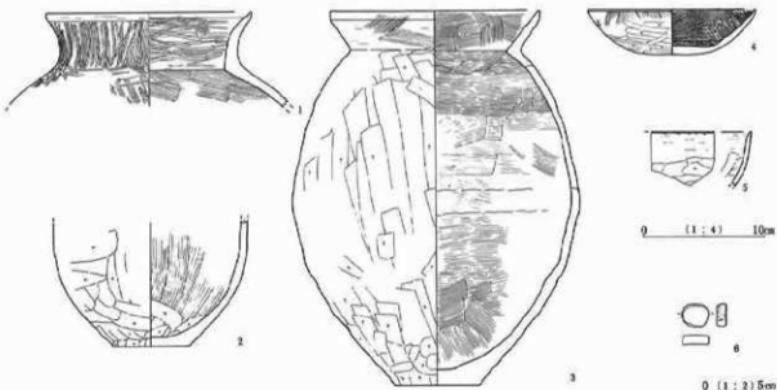
覆土は2層に分割された。1層は暗茶褐色土層で粒子細かく、炭化物・燒土を含む。2層は炭化物を含む黒褐色土層で、床面直上にわずかに観察されるのみである。確認面からの壁高は1.5~24.5cmを測る。壁溝は西壁・北壁・東壁北側において検出され、住居址をほぼ半周する。壁溝幅は10~30cmを測り、2.5~6.5cmの深さを有する。床面は全体にはぼ平坦であるが、西に向ってわずかにレベルを低下させている。また床面中央には燒土が観察され、北壁付近東寄り、南東隅より炭化材が出

十二

ビットは検出されなかつた。

カマドは東壁中央に位置する。天井部・袖部は既に崩壊し、煙道部は搅乱によって破壊されており、旧状は不明である。袖部の幅は約80cmの規模を有すると考えられる。火床部は壁直下の床面を70×75cmの不整形に掘り廻めた後、黒褐色土（3層）を埋め戻して設けたと考えられ、約5cmの厚さで焼土が観察された。また、火床部両側には袖石を埋設した徑約20cm・25cm深さ8cm・14cmの円形ピットが2個検出されたが、袖石は既に失われている。

遺物の出土状況は、カマド内及び周辺に集中する傾向が認められる。496図1・4は中央付近南寄り、床面より約10cm浮いた状態で出土した。496図2はカマド内より出土し、496図3はカマド南側床面直上より出土した。



第496図 H7号住居址出土遺物実測図

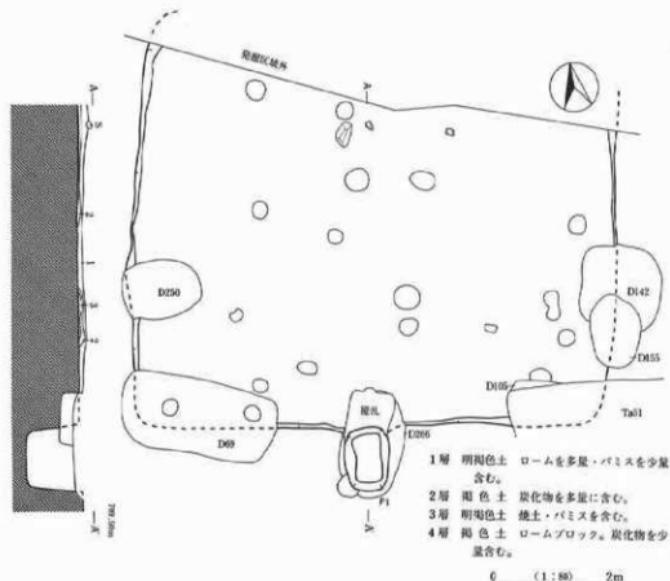
第377表 H7号住居址出土遺物一覧表

揮因番号	器種	法量(cm)	形態的特徴	手法的特徴	備考
496-1	甕	口径 16.9 底高 7.7	口縁部ゆるやかに外反する。	口縁部外面縦位の箇ミガキ 網上半外面不規則な箇ミガキ 口縁部内面横位の箇ミガキ 網上半内面横位の刷毛目	回転実測 網面以下欠
496-2	甕	直径 6.3 底高 10.2	平底から内面気珠に立ち上がる。	網下半外面箇削り 網下半内面縦位の刷毛目 底部内面箇削り	回転実測 網中央以上欠
496-3	甕	口径 17.2 網径 23.7 底高 6.9 器高 30.8	平底から球形を経て頸部で窄まる。 口縁部「く」の字に折れ、直線的に外反する。	口縁部外面ココナデ及び刷毛目 網外部下面→上への箇削り 口縁部内面刷毛目 網部内面横位の刷毛目	回転実測
496-4	环	口径 13.8 底径 5.1 器高 3.6	丸窓を帯びた平底から、ほぼ直線的に口辺に至る。	口辺部外面刷毛目 体部外面・底部箇削り 内面箇ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
496-5	环	口径 (13.2)	内側する体部からやや外反する口辺部に至る。	口辺部内外面ココナデ 体部外面箇削り 体部内面刷毛状工具によるナダ	研片実測
496-6	土製板円	径 2.2 厚さ 0.8	周縁を円形に研磨	内耳土器片を利用しており、本遺構には伴わない。	

9 H8号住居址

本住居址は、調査区北端う・え・おー5・6グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta51号竪穴造構、D69・73・76・105・134・138・142・155・250・251・256号土坑と重複関係にあり、D142・155号土坑に東壁南側、Ta51号竪穴造構・D105号土坑に南東隅、D69号土坑に南西隅、D250号土坑に西壁南側、D266号土坑に南壁中央を破壊される。さらに径40cm前後の擾乱によって床面を破壊される。

平面形態及び規模は北側が調査区域外であるため、南壁が推定で740cm、東西796cmを測るのみで他は不明であるが、ほぼ方形を呈するものと考えられる。



第497図 H8号住居址実測図

覆土は3層に分割された。1層はローム粒子を多量に含み、バミスを少量含む明褐色土層、2層は炭化物を多量に含む褐色土層、3層は焼土・バミスを含む明褐色土層である。確認面からの壁高は12~31cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は黄褐色ローム層を踏み固めて堅密な状態であり、平坦である。なお、床面上より多量の焼土・灰及び垂木とそれに直交する母屋桁と考えられる炭化材が出土している。出土状況は桁の上に垂木が乗った状態で出土し、また、南北方向の垂木の上に東西方向の垂木が乗った状態が観察される。このことから本住居址の上屋構造は方形隅丸の寄棟造りであり、さらに上屋の構築状況をある程度推察することができよう。なお棟木・主柱と考えられる炭化材は検出されなかった。

ピットは南壁中央に張り出しピットが1個(P1)検出された。

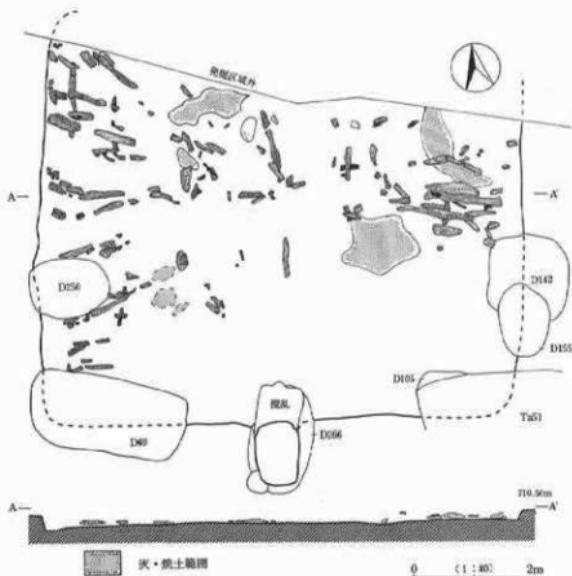
上面をD266号土坑、攪乱によって破壊されるが、残存部で東西74cm、南北104cm、深さ80cmを測る長方形を呈し、壁体から約100cm張り出す。

覆土はロームブロック・炭化物を少量含む褐色土層1層のみである。

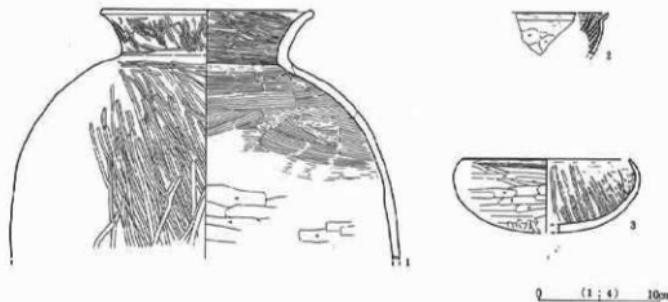
カマドは北側が調査区域外であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は、北側が未調査であるため明確ではないが、南壁中央付近に集中する傾向が看取される。

499図1はP₃の付近床面直上より出土し、499図3は南壁東側直下より出土した。



第498図 H8号住居址炭化材分布図



第499頁 H 8 号住居址出土遺物實測圖

第378表 H8号住居址出土遺物一覽表

種別番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
499-1	甕	口径 17.6 現高 20.4	球胴から「く」の字に折れ、強く外反する口唇部に至る。	口唇部外面主として縫合の荒ミガキ 口唇部内面縫合位の荒ミガキ 胴部上半縫合位の荒ミガキ 胴部下半縫合位の刷毛目 胴部中央縫合位の荒ミガキ	回転実測

探査番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
499-2	环	口径 (14.2) 現高 3.5	内側する体部を経て、やや内側気味に外反する口縁部に至る。	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面左→右への荒削り 体部内面放射状縫文風窓: ガキ	回転実測
499-3	环	口径 (13.8) 現高 6.1	内側する体部を経て、やや内側する口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデの後、横位の窓: ガキ 体部外面横位の荒削り 底部外面荒削り 口辺部内面ヨコナデ 体部内面暗文風窓: ガキ	回転実測

10 H 9号住居址

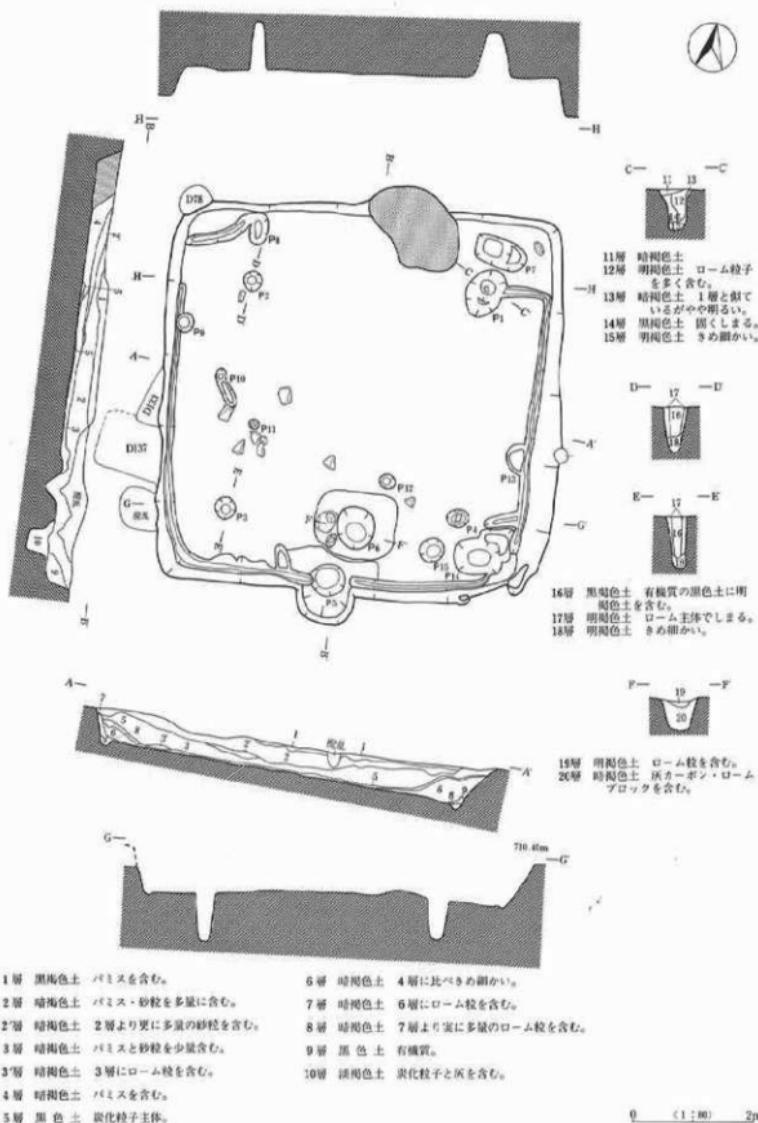
本住居址は、調査区北端うえ一7・8グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D22・D78・D133・D137・D244・D252・D253・D257号土坑と重複関係にあり、覆土上面、西壁の一部上面を破壊される。

平面形態及び規模は、東壁610cm、西壁610cm、南壁575cm、北壁596cmで、東西655cm、南北630cmを測り、東西にわずかに長い方形を呈する。床面積は35.5m²を測り、主軸方位はN-9°-Wを示す。

覆土は11層に分割され、堆積状態から自然堆積と考える。1層はバミスを含む黒褐色土、2・2'層は暗褐色土層で、バミス・砂粒を多量に含み、2'層は2層に比べ砂粒を多量に含む。3・3'層はバミス・砂粒を少量含む暗褐色土層で、3'層はローム粒子を含む。4層はバミスを含む暗褐色土で、5層は炭化粒子を主体とする黒色土層である。6・7・8層は暗褐色土層で、6層は粒子細かく、7・8層はローム粒子を含む。9層は黒色土層で、有機質を含む。確認面からの壁高は43~70cmで、床面から急傾斜で立ち上がるが、東壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。壁溝は北壁を除く三壁で検出され、西壁の壁溝は北西隅より約110cm位置で断続し、東壁の壁溝は北東壁より約110cmの位置で直角に屈曲してP₁に至る。さらに北西隅床面より長さ約120cmの溝が検出された。溝幅は10~26cmを測り、2.5~12cmの深さを有する。床面は黄色ローム層を踏み固めてあり、平坦で堅固な状態である。ピット数は総数で12個検出された。P₁~P₄は主柱穴で、P₅は58×83cm半円形で南側にテラスを有する。深さはテラス部で13cm、最深部で69cmを測る。覆土は5層に分割された。P₂~P₄は径30~40cmのほぼ円形を呈する。深さは各々76cm・83cm・68cmを測り、断面は「U」字形を呈する。P₅は南壁中央に位置する張り出しピットで、壁体を幅98cm、長さ50cmの半円状に掘り込み、さらにその中に53×60cmの円形に掘り込んで構築され、30cmの深さを有する。覆土は炭化粒子と灰を含む暗褐色土層1層である。P₆はP₅の北側に位置し134×110cmの円形で54cmの深さを有する。覆土は明褐色土層と暗褐色土層の2層からなる。また、周縁部は黄色ロームを利用して約5cmの盛土が行われている。P₇・P₈とも貯藏穴と考えられる。P₉はカマドの右側、北東隅に位置する灰落しのピットと考えられ、48×47cmの横円形を呈し、東側にテラスを有する。深さはテラス部で17cm、最深部で34cmを測る。覆土は灰を主体とする灰褐色土層1層のみである。P₉~P₁₅については性格等不明である。

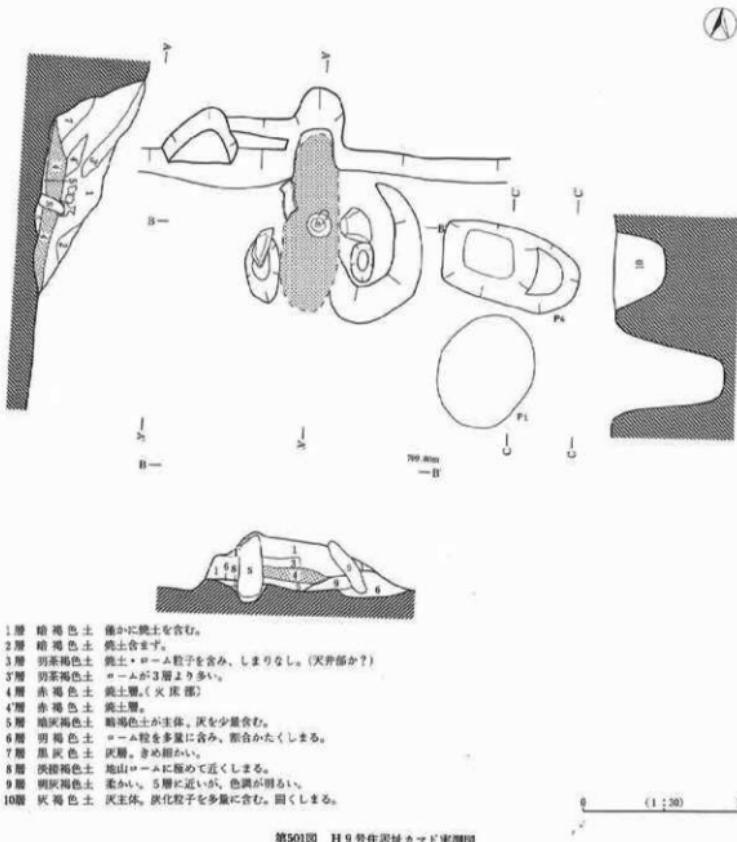
カマドは北壁中央東寄りに位置し、煙道から焚口の長さ280cm、袖部の幅150cmを測る。煙道部は壁体を長さ100cm、幅75cmの半椭円形に掘り込んで構築する。火床部は地山を利用し、灰を敷きつめて構築されたと思われる。また、焼土が火床部から煙道まで約10cmの厚さで観察されたが、天井部の崩落によるものとも考えられる。袖部は火床部の両側に約10cmの深さで埋設された安山岩2個と甕の口縁部~胴部の破片を利用し、構築土には明茶褐色土(3層)と明褐色土(6層)を利用したと考えられる。支脚石は長さ17cm、幅7cmの安山岩が用いられ、さらに高杯が逆位に乗せられた状態で出土した。また煙道部の西約60cmの位置に幅95cm、長さ68cmの半円次の掘り込みが見られ、煙道部と思われることから、カマドのつくりなおしが想定される。

遺物の出土状況は、カマド内とP₉周辺に集中する傾向が認められる。502図1はカマド西側より床面から約30cm



第500図 H-9号居住址実測図

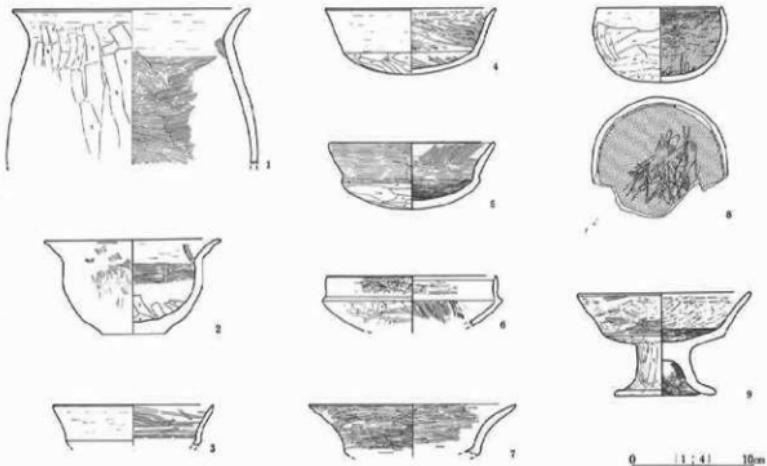
浮いた状態で出土し、502図2は西壁中央付近より約10cm浮いた状態で出土した。502図3・8はP₇より、502図4・5はP₈の東床面直上より出土し、502図7はP₁₄内より出土した。502図9は支脚石の上に逆位に乗せられた状態で出土した。



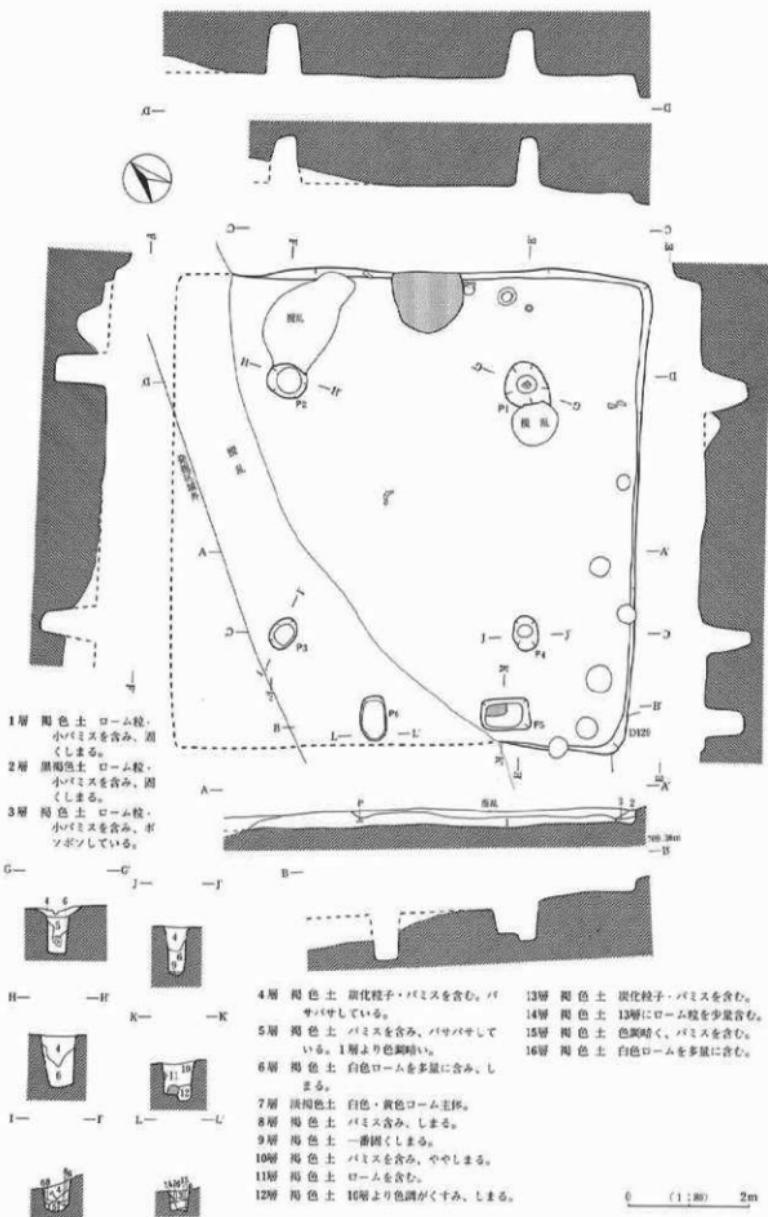
第379表 H9号住居址出土遺物一覧表

掲図番号	器種	法量(cm)	形態的特徴	手法的特徴	備考
502-1	甕	口径 19.4 現高 12.7	球胴からゆるやかに外反する口腹部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 頭部・胴上半下へ上への鉛削り 胴上半内面横位の網目	回転実測

辨認番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
502-2	小形甕	口径 14.4 胴径 11.5 器高 7.7	平底から内窪して立ち上がり、ゆるやかに外反する口部に至る。	口部内面ヨコナデ 胴部外側毛目 胴上半内面横位の刷毛目 胴下半・底部内面剃削り	回転実測
502-3	甕	口径 13.2 現高 3.4	口辺部はやや外反する。	口辺部外面ヨコナデ 口辺部内面横位の荒ミガキ	回転実測
502-4	甕	口径 14.0 器高 5.1	丸底から直線的に立ち上がり、口辺部はやや外反する。 外縁を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 口辺部内面ヨコナデの後、荒ミガキ 底部内面剃削り	完全実測
502-5	甕	口径 13.5 器高 5.5	丸底から直線的に立ち上がり、口辺部は外反する。 体部中央に強い縦を持つ。	口辺部・体部上半横位の刷毛目 口辺部内面ヨコナデ 体部上半内面横位の刷毛目 体部下半・底部外曲面剃削り 体部下半・底部内面刷毛目	完全実測
502-6	甕	口径 14.0 現高 4.6	丸底からゆるやかに内窪し、口辺部で直立する。 体部上半に強い縦を持つ。	口辺部内外面荒ミガキ 体部外曲面剃削りの後、荒ミガキ 体部内面刷毛目	回転実測
502-7	甕	口径 17.0 現高 4.3	丸底から体部口辺部とともにゆるやかに外反する。	口辺部・体部内外面横位の荒ミガキ	回転実測
502-8	甕	口径 16.3 器高 6.1	丸底からゆるやかに内窪し、口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部・底部外曲面剃削り 体部内面横位の荒ミガキ 体部底部内面、瓣文風荒ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
502-9	高甕	口径 14.3 胴径 4.2 器高 8.4 器高 8.5	外反気味に開く底部から直線的に立ち上がる脚部を経て、外縁を持ちやや外反する脚部に至る。	脚部外曲面荒ミガキ 脚部内面荒ミガキ 脚部外縁以下右→左への荒削り 脚部底面下→上への荒削り 脚部内面刷毛目	完全実測



第502図 H9号住居址出土遺物実測図

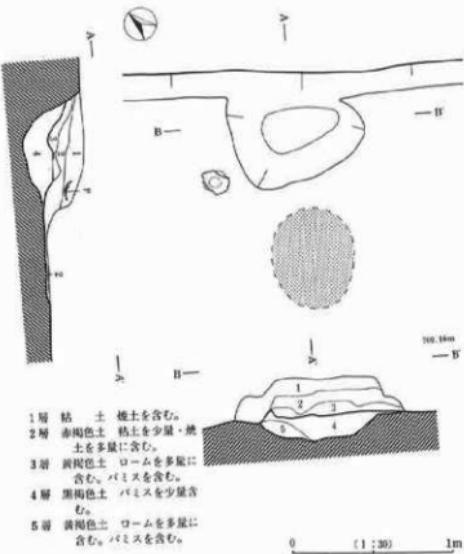


第503図 H10号住居断面図

11 H10号住居址

本住居址は、調査区西端い・うー11~13グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D129号土坑と重複関係にあり、南東隅を破壊される。さらに南西部を擾乱によって破壊される。

平面形態及び規模は、東壁長768cm、南北長は推定で778cmを測るのみで、他は不明である。主軸方位はN-46°-Eを示す。



第504図 H10号住居址カマF実測図

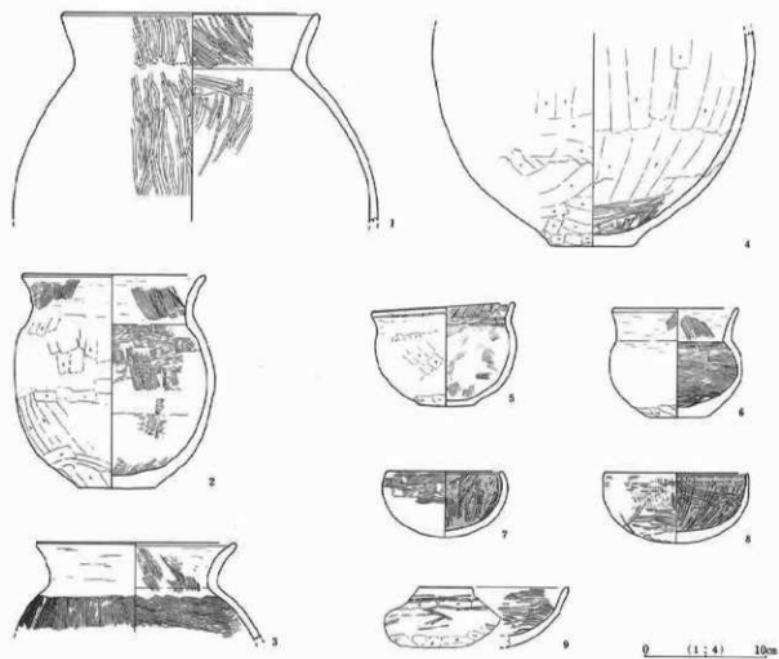
はテラス部で52cm、最深部で66.5cmを測る。覆土は3層に分割され、テラス上より約18cmの粘土塊が検出された。P₄は南壁中央直下に位置し、上面は擾乱によって破壊されており、残存部で42×74cmの楕円形を呈し、55cmの深さを有する。なお、このP₄は入口部施設とも考えられる。

カマドは北壁中央に位置する。壁体の掘り込みは見られず、壁直下の床面を50×80cmの楕円状に掘り込み。黒褐色土（4層）、黄褐色土（5層）を埋め戻して構築される。天井部・袖部は既に崩落しているため旧状はつかめないが、焼土を含む粘土（1層）を構材として設けられたと考えられる。火床部は地山を利用しており、焼土が薄く観察された。

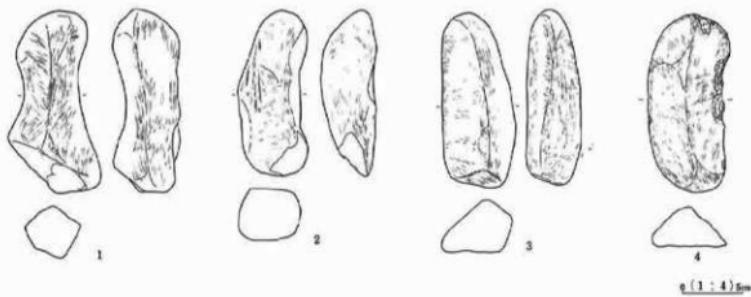
遺物の出土状況は、北半部、特にカマド周辺に集中する傾向が認められる。505図1・2・6はカマド東側の床面直上より、505図3・4・8はカマド内より出土した。505図5はP₁内より、505図7はP₁の西側約80cmの床面より、505図9は中央付近より床面からやや浮いた状態で出土した。この他、編物石が4点出土し、506図1は中央付近床面より、506図2はカマド西側より、506図3・4は東壁北側直下より出土した。またP₁-P₂間やP₂寄りの床面より約10cm浮いた状態で銅鏡（463図163）が出土した。

覆土は3層に分割された。1層は褐色土層、2層は黒褐色土層、3層は褐色土層でローム粒子とバミスを含む。確認面からの壁高は0~43cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面は黄色ローム層を踏み固めて堅固な状態であり、全体にはほぼ平坦である。ピットは総数で6個検出された。P₁~P₄は主柱穴である。P₁・P₂は擾乱により一部上面を破壊されるが、径70cm・60cmのほぼ円形を呈し、75.5cm・82.5cmの深さを有する。P₃は上面を擾乱により破壊されており、残存部で40×54cmの楕円形を呈し、55cmの深さを有する。P₄は貯蔵穴と考えられ、南壁東側直下に位置する。東西80cm、南北52cmの長方形で北西側にテラスを有する。深さ

P₄は貯蔵穴と考えられ、南壁東側直下に位置する。東西80cm、南北52cmの長方形で北西側にテラスを有する。深さ



第505図 H10号住居址出土物実測図



第506図 H10号住居址出土土器実測図

第380表 H10号住居址出土遺物一覧表

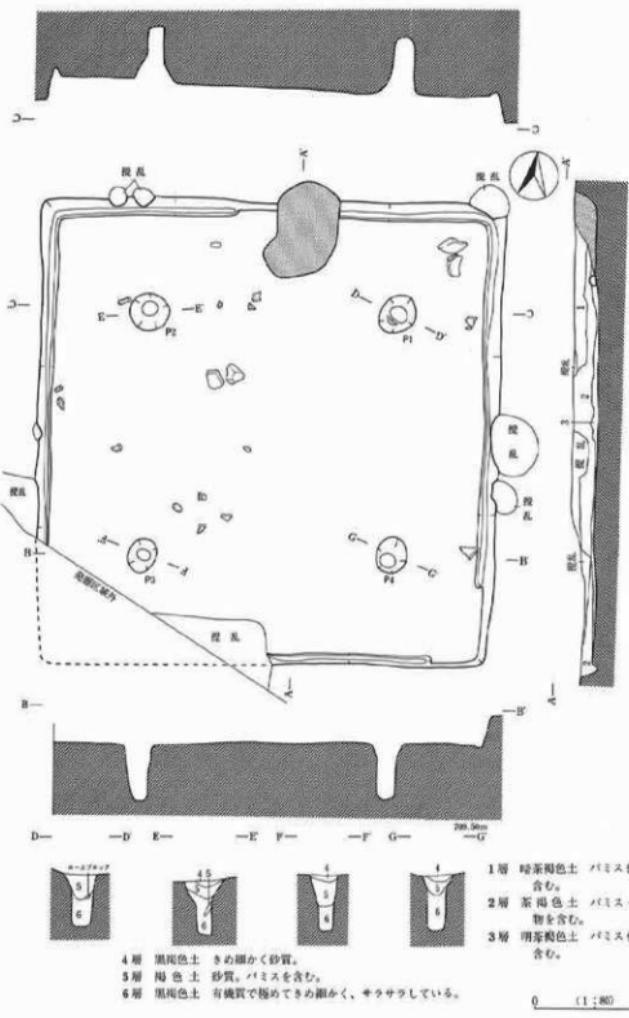
博団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
505-1	甕	口径 20.9 胴径 30.0 現高 17.2	球胴から頸部で窄まり、直線的に外反する口縁に至る。	口縁部内外面窓(ガキ) 胴部内外面窓(ガキ)	完全実測 胴下半以下欠
505-2	小形甕	口径 15.0 胴径 16.5 器高 17.6	平底からやや球胴化する胴部を経て頸部で窄まり、ゆるやかに外反する。	口縁部内外面窓(ガキ)及び刷毛目 胴部内外面窓削り 胴部内面主として横位の刷毛目	完全実測
505-3	甕	口径 16.4 現高 8.0	球胴から頸部で窄まり、ゆるやかに外反する。	口縁部外面窓(ガキ) 胴部上半内面上→下への刷毛目 口縁部内面窓(ガキ)及び刷毛目 胴部上半内面横位の刷毛目	回転実測 胴中央以下欠
505-4	甕	底径 7.0 現高 17.7	平底から球胴に至る。	胴下半外面窓削り 胴下半内面上→下への窓削り 底部内面不規則な窓(ガキ)	回転実測 胴上半以上欠
505-5	小形甕	口径 11.7 胴径 11.6 底径 4.6 器高 8.1	平底から内凹して立ち上がり、直線的に外反するに至る。	口縁部外面窓(ガキ)、一部に横位の窓(ガキ) 口縁部内面窓(ガキ)及び窓削り 胴部上面→下への窓削り 底部周外側横位の窓削り 胴部内面不規則な刷毛目	回転実測
505-6	小形甕	口径 10.1 胴径 10.9 底径 4.5 器高 9.0	平底から内凹して立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面窓(ガキ)及び刷毛目 底部周外側窓削り 胴部外面調整不明 胴部内面横位の刷毛目	完全実測
505-7	甕	口径 9.5 器高 5.4	丸底から内凹して口辺部に至る。	口辺部横位の窓(ガキ) 体部外面不規則な窓(ガキ) 体部内面暗文風窓(ガキ) 内面黑色研磨	回転実測
505-8	甕	口径 11.8 器高 5.8	丸底から内凹して口辺部に至る。	口辺部・体部上半外側横位の窓(ガキ) 内面暗文風窓(ガキ) 内面黑色研磨	回転実測
505-9	甕	現高 5.0	体部内凹気味に立ち上がり、やや外反する口辺部に至る。	口辺部・体部上半外側横位の窓(ガキ) 口辺部外側左→右への窓削り 底部外側窓削り 内面横位の窓(ガキ)	破片実測

第381表 H10号住居址出土石器一覧表

博団番号	器種	石質	法量(cm, g)				備考
			長さ	幅	外周	重量	
506-1	圓物石	安山岩	14.8	6.5	14.3	690.4	表面に使用擦過痕
506-2	圓物石	安山岩	13.5	5.3	14.9	415.7	表面に使用擦過痕
506-3	圓物石	安山岩	14.4	6.0	16.1	553.5	表面に使用擦過痕、表面磨耗
506-4	圓物石	細粒 安山岩	14.6	6.3	14.7	324.5	加工面有り。表面に使用擦過痕

12 H11号住居址

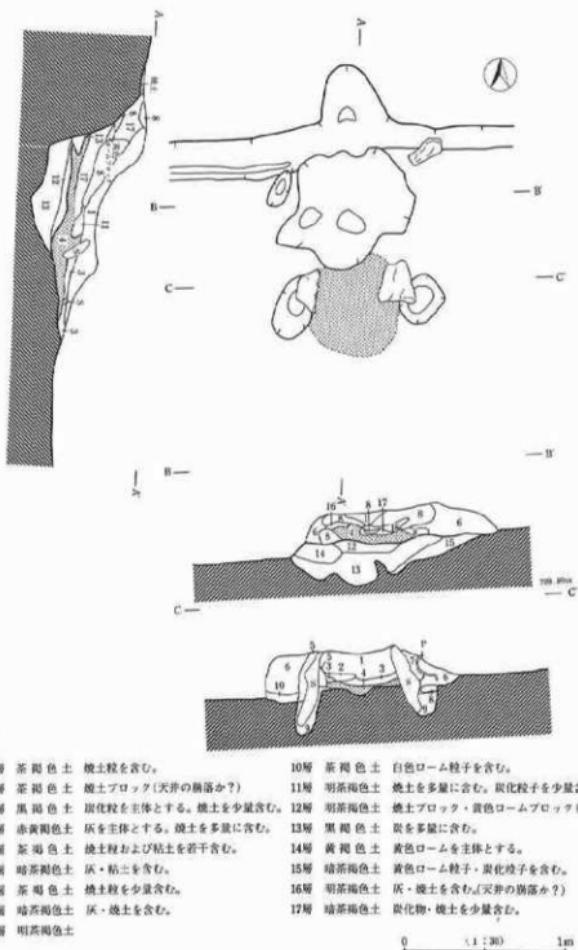
本住居址は、調査区西側お・か・き-10・11グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D203号土坑と重複関係にあり、上部を破壊して構築される。また南壁西側、東壁の一部上面を搅乱によって破壊され、南西隅は調査区域外である。



第50728 H11号 住居社実測図

平面形態及び規模は、東壁長755cm、北壁長753cm、西壁長・南壁長は推定で755cm・718cmで、東西762cm、南北760cmを測る方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを示す。

覆土は3層に分割された。1層はバミスを少量含む暗茶褐色土層、2層はバミス・炭化物を含む茶褐色土層、3層はバミスを少量含む明茶褐色土である。確認面からの壁高は35~51cmと深い。壁体は床面から急傾斜で立ち上がり、黄色ローム層を利用して構築され、堅固な状態である。壁溝は南東隅で断続するが、ほぼ全周する。溝



第508図 H11号住居跡カマド実測図

幅は6~18cmで、深さは3.5~10.5cmを測る。床面は黄色ローム層を踏み固めて堅緻な状態であり、ほぼ平坦である。

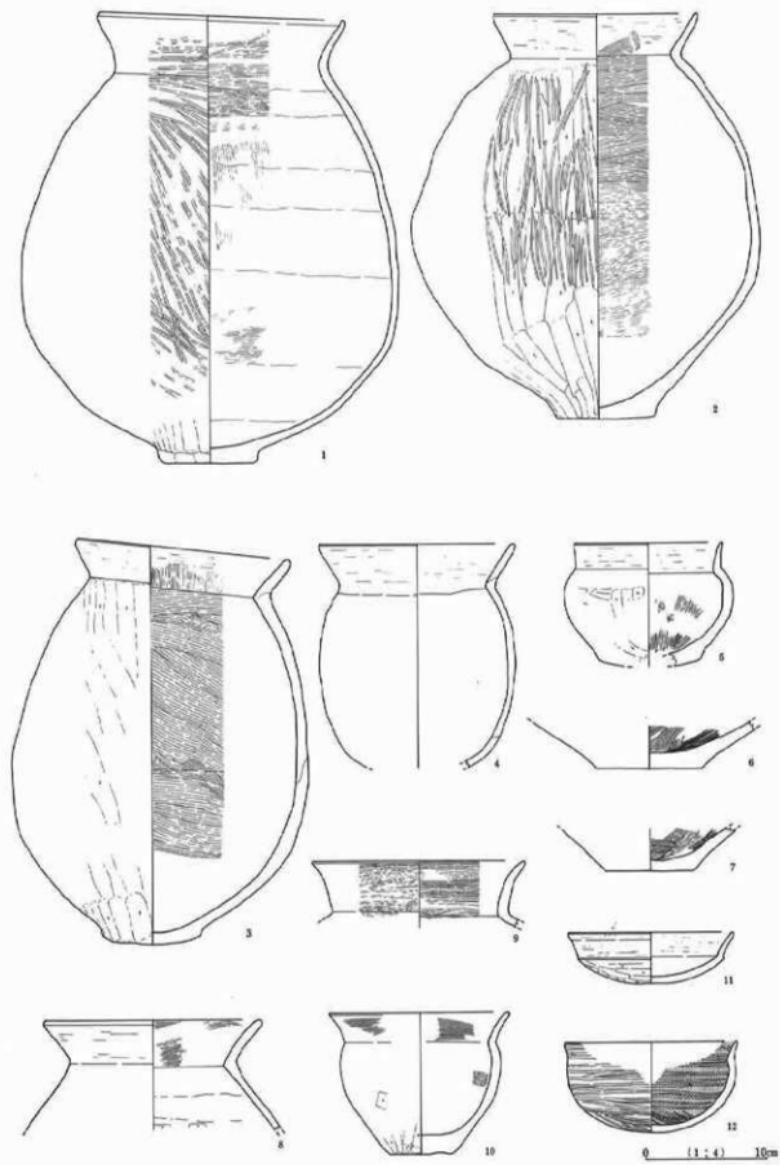
ピットは主柱穴が4個検出された。 P_1 は 57×69 cmの楕円形で南西側にテラスを有する。深さはテラス部で27cm、最深部で91cmを測り、断面形は有段の「U」字状を呈する。 P_2 は径64cmの円形で95cmの深さを有する。 P_3 ・ P_4 は 45×58 cm・ 50×60 cmの楕円形で深さは各々95cm・96cmを測る。覆土は P_2 ・ P_3 ・ P_4 は1層黒褐色土層、2層褐色土層、3層黒褐色土層の3層に分割され、 P_1 では1層は観察されなかった。

カマドは北壁中央に位置する。煙道から焚口の長さは180cm、袖部の幅110cmの規模を有する。天井部・袖部は既に崩落しているため、旧状はつかめない。煙道部は全体を長さ60cm、幅40cmの梢円状に掘り込み、壁直下の床面を75×83cmの不整形に掘り込んだ後、明茶褐色土(12層)・黒褐色土(13層)・黄褐色土(14層)・暗茶褐色土(15層)を埋め戻して構築される。火床部は地山を利用し、焼土が約8cmの厚さで観察された。袖部は、火床部の両側に安山岩が袖石として配置されていた。黄色ローム層を20cm・25cmの深さに、やや「ハ」の字状に埋められ、火床より約25cm露出している状態で、これに粘土を含む茶褐色土(5層)を補強材として構築されている。

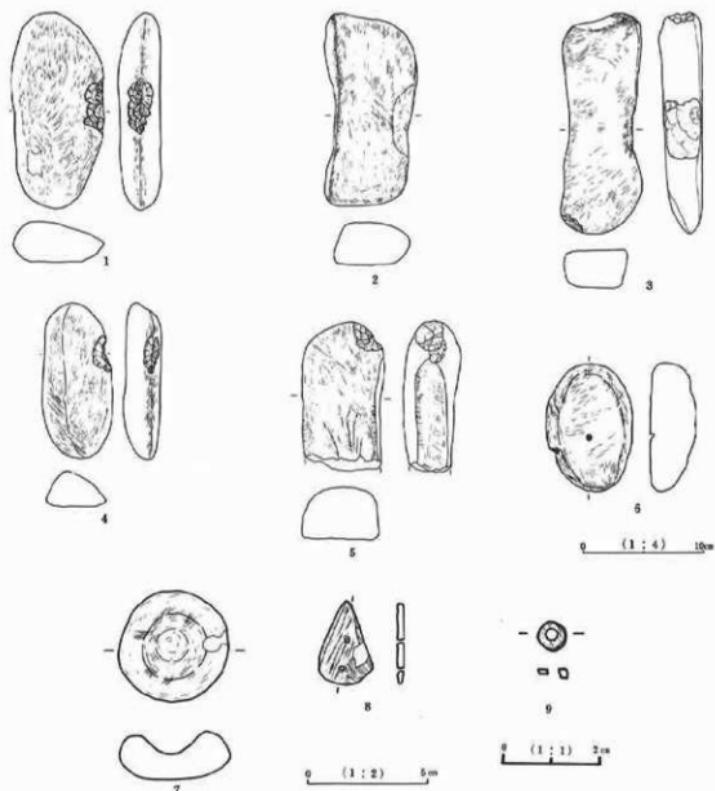
遺物の出土状況は、住居址内に散乱し、床面直上または床面からやや浮いた状態で出土した。509図1・11はP₁付近、509図3はP₁付近に散乱した状態で出土し、509図2はカマドの西60cmの床面上に横転した状態で出土した。509図4・12はカマド内より出土し、509図5はカマドの東約110cmの床面より出土した。503図7は中央付近床面直上より、509図8はカマドの西側及びカマド内より出土した。この他、編物石(510図1・2・3・4・5・6)が西壁中央付近及びP₁・P₂間より出土している。

第382表 H11号住居址出土遺物一覧表

辨認番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
509-1	甌	口径 20.0 胴径 30.9 底径 8.2 器高 36.8	平底から内側して立ち上がり、頭部で窄まる。口縁部は直線的に外反し、端部でやや内側する。 最大径を胴下部に持つ。	外腹底面双边以外は笠 \times ガキ 底部双边外面削り 口縁部、頭部内面笠 \times ガキ 胴部内面削毛目	完全実測
509-2	甌	口径 16.6 胴径 28.7 底径 8.2 器高 33.1	平底から内側して立ち上がり、頭部で窄まる。口縁部は内側気味に外反する。 最大径を胴部中央やや下方に持つ。	口縁部内外面 \times コナデ 胴部外面笠削りの後、笠 \times ガキ 胴部内面削毛目	完全実測
509-3	甌	口径 17.5 胴径 24.4 底径 8.1 器高 32.7	丸味を帯びた平底から、やや内側気味に長胴化する頭部を絶て頭部で窄まる。口縁部「く」の字に折れ、直線的に外反する。	口縁部内外面 \times コナデ 胴部外面上→下への笠削り 底部周边凹面下→上への笠削り 胴部内面削毛目	回転実測
509-4	小形甌	口径 16.0 胴径 16.2 現高 18.3	やや長胴化する頭部を絶て頭部で窄まる。口縁部は直線的に外反する。	口縁部内外面 \times コナデ 胴部内外面調整不明 (部位不明の刷毛状工具によるナデ)	回転実測
509-5	小形甌	口径 12.1 胴径 13.9 底径 8.2 現高 10.1	丸味を帯びた平底から、内側する頭部を絶て頭部で窄まる。口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部内外面 \times コナデ 胴部外面削り 胴部内面削毛目	回転実測
509-6	甌	底径 8.7 現高 3.7	底部平底	外面単位不明の刷毛状工具によるナデ 内面削毛目	回転実測 底部のみ残存
509-7	甌	底径 7.3 現高 3.5	底部平底	外面単位不明の刷毛状工具によるナデ 内面削毛目	回転実測 底部のみ残存
509-8	甌	口径 17.7 現高 9.0	頭部上半内傾して立ち上がり、頭部で窄まる。口縁部「く」の字に折れ外反する。	口縁部内外面 \times コナデ 胴部外面单位不明の刷毛状工具によるナデ 胴部内面单位不明の刷毛状工具によるナデ及び笠削り	回転実測 胴中央以下欠
509-9	甌	口径 17.3 現高 5.5	口縁ゆるやかに外反する。	口縁部内外面笠 \times ガキ	回転実測 口縁のみ残存
509-10	小形甌	口径 14.9 胴径 13.3 底径 5.2 器高 11.6	平底から内側気味に立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部に至る。	口縁部内外面削毛目 胴部外面削り 胴部内面削毛目	回転実測
509-11	甌	口径 13.4 器高 4.2	丸底からゆるやかに内側し、やや外反する口縁部に至る。	口辺部内外面 \times コナデ 体部・底部外面笠削り	回転実測
509-12	甌	口径 14.1 器高 7.4	丸底からゆるやかに内側し、弱い腰を持ち外反する口縁に至る。	口辺部内外面 \times コナデ 底部内外面風呂 \times ガキ 内面黑色研磨	回転実測



第509図 H11号住居址出土遺物実測図



第510図 第11号住居址出土石器実測図

第383表 H11号住居址出土石器一覧表

掲図番号	器種	石質	法量 (cm. g)				備考
			長さ	幅	外周	重量	
S10-1	縞物石	安山岩	16.1	7.6	18.1	612	加工痕有り、表面に使用擦過痕
S10-2	縞物石	安山岩	15.8	7.1	17.1	795.9	表面に使用擦過痕及び敲打痕
S10-3	縞物石	安山岩	17.8	6.4	15.2	739.5	表面に使用擦過痕
S10-4	縞物石	安山岩	12.7	5.7	—	273	加工痕有り、表面に使用擦過痕
S10-5	磨石	安山岩	現長 12.5	6.3	—	608	表面に使用擦過痕及び敲打痕 表面削耗し残り光沢
S10-6	筋縫車	軽石	10.4	7.1	厚さ 4.7	176.1	表面に研磨痕、未成品
S10-7	凹石	軽石	4.5	—	凹深 2.7	21	表面に研磨痕、凹部に使用擦過痕

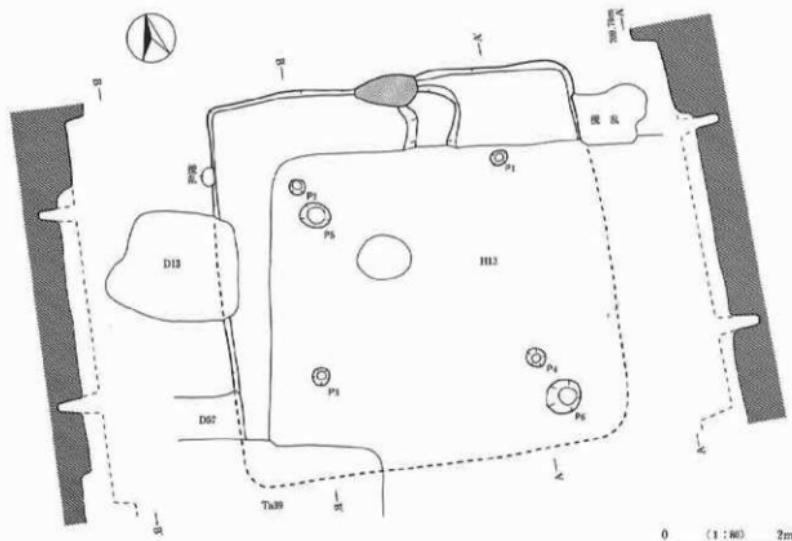
拠出番号	器種	石質	法量(cm, g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
510-8	石製 模造品	滑石	3.5	2.2	0.28	5.1	表面に研磨痕
510-9	白玉	滑石	0.6	—	0.19	0.13	孔径0.18cm

13 H12号住居址

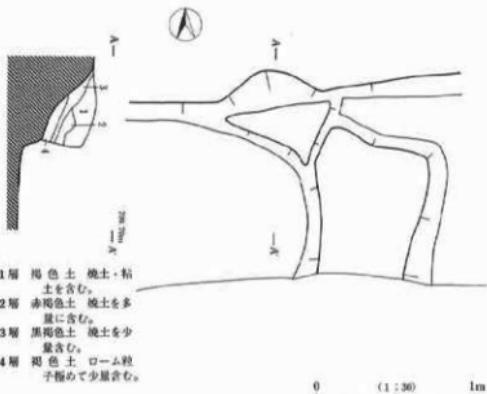
本住居址は調査区北端う・えー10・11グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。H13号住居址、Ta39号堅穴造構、D13・57号土坑と複雑関係にあり、H13号住居址に北壁、西壁付近を残して大部分を、Ta39号堅穴造構、D13・57号土坑に西壁一部を破壊される。

平面形態及び規模は、北壁、西壁付近が残存しているのみであるため北壁594cm、西壁は推定で612cmを測るのみで他は不明であるが、方形を呈すると推定される。主軸方位はN-4°-Eを示す。確認面からの壁高は19.5-43cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁脚は検出されなかった。床面はわずかに残存しているのみであるため明確ではないが、堅固で平坦な状態である。

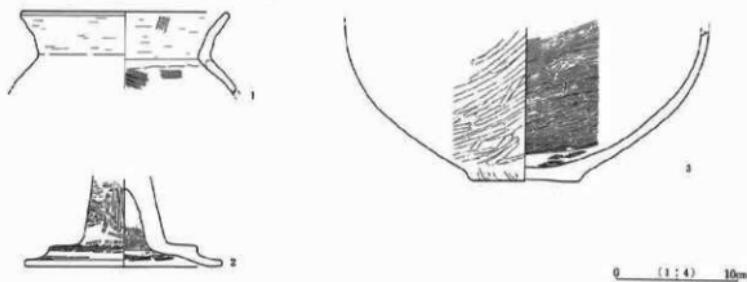
ピットは総数で6個検出された。そのうちP₁～P₄は主柱穴である。ピットはいずれもH13号住居址により上面を破壊されており、計測値は全て残存部についてのものである。平面形態は径30cm前後の円形を呈し、深さは各々48cm・49cm・44.5cm・44cmを測る。各ピット間の距離は、P₁-P₂間310cm、P₂-P₃間288cm、P₃-P₄間325cm、P₄-P₁間308cmで東西にやや長い方形に配されている。



第511図 H12号住居址実測図



第512図 H-2号住居址カマド実測図



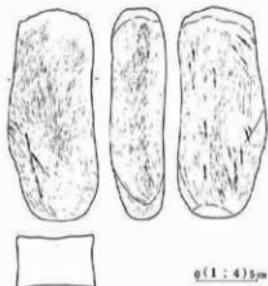
第513図 H-12号住居址出土遺物実測図

第384表 H-12号住居址出土遺物一覧表

件名番号	器種	法量(cm)	形態的特徴	手法の特徴	備考
513-1	瓶	口径 17.2 現高 6.3	球胴からゆるやかに外反する口縁部に生る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴上半外面刷毛状工具によるナデ 胴上半内面刷毛目	回転実測
513-2	高杯	脚径 6.4 - 4.9 現高 16.3 現高 7.2	脚部階段状を呈し、直線的に立ち上がる脚部に至る。	脚部外面窓ミガキ 脚部内面単位不明の窓削り及び刷毛目 胴部外面放射状窓ミガキ 胴部外面以下横位の窓ミガキ 胴部内面ヨコナデ及び刷毛目	完全実測 杯部欠損
513-3	瓶	底径 9.0 現高 12.9	上底から球形化した胴部に至る。	胴下半外面右上→左下への窓ミガキ 胴下半内面横位の刷毛目	回転実測 胴上半以上欠

カマドは北壁中央に位置するが、天井井、袖部、火床部は既に破壊されており、煙道部がわずかに残存するのみで、残存状態は極めて悪い。煙道部は壁体を幅50cmの舟先状に掘り込み、壁直下に床面より約13~18cm高い三角状のテラスを有する。

遺物の出土状況は、本住居址の大半が破壊を受けているため、遺物の出土量は少なく、513図1+3がカマド内より、513図2が北東隅より床面から約7cm浮いた状態で出土した。



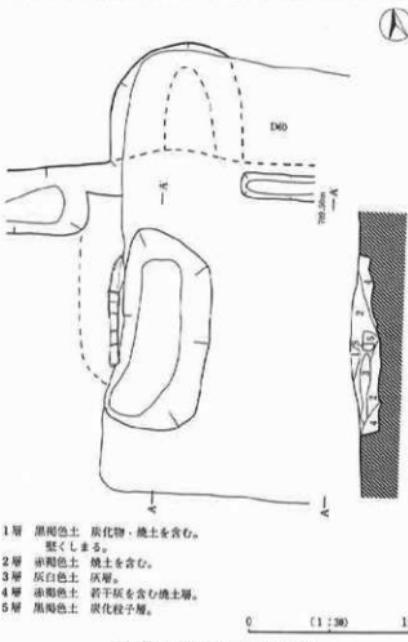
第514図 H12号住居址出土石器実測図

第385表 H12号住居址出土石器一覧表

辨別番号	器種	石質	法量(cm, g)		
			長さ	幅	厚さ
514	砥石	砂岩	17.4	7.2	4.4
備考					
大形四面砥石、四面に使用痕がある。 荒砥と考えられる。 使用頻度は低いが、四面とも使用による凹みが認められる。					

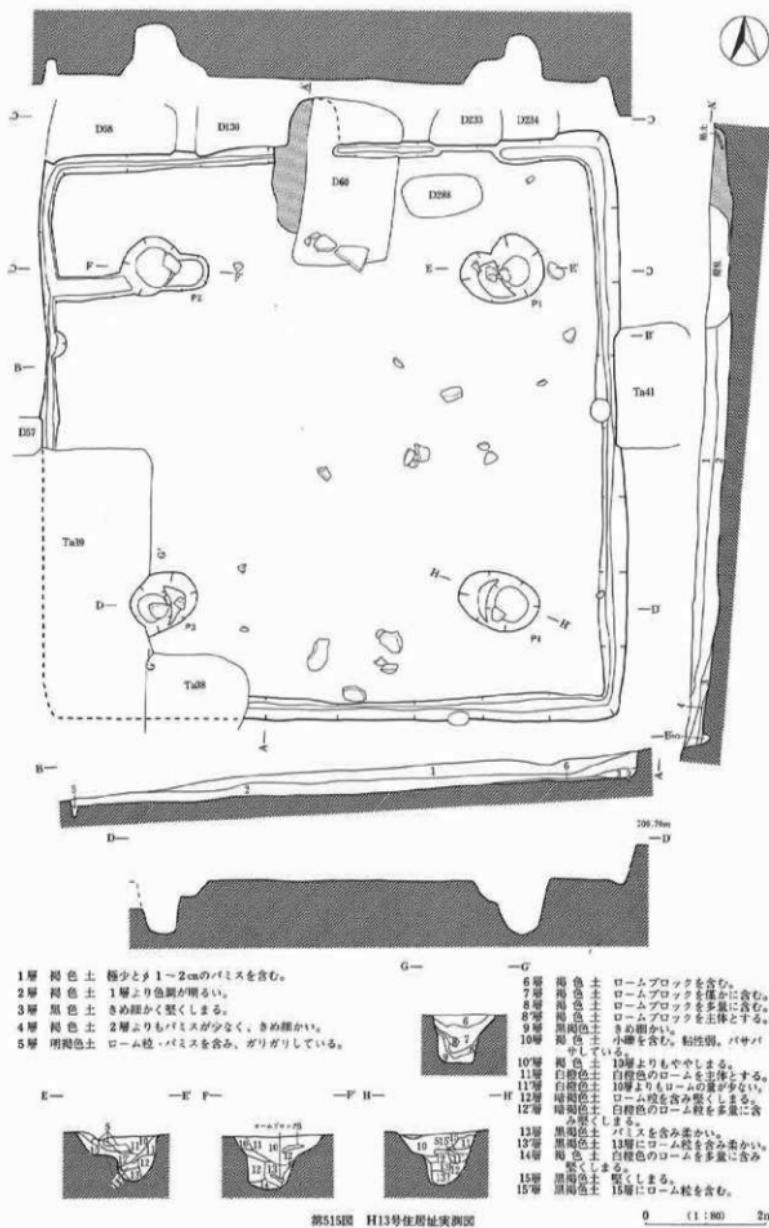
14 H13号住居址

本住居址は、調査区北端うちえ・おー9・10・11グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。Ta38・39・41号窓穴遺構、D58・60・130・233・234号土坑と重複関係にあり、北壁、南西部を破壊される。さらに搅乱によって北壁中央を破壊される。



第516図 H13号住居址カマド実測図

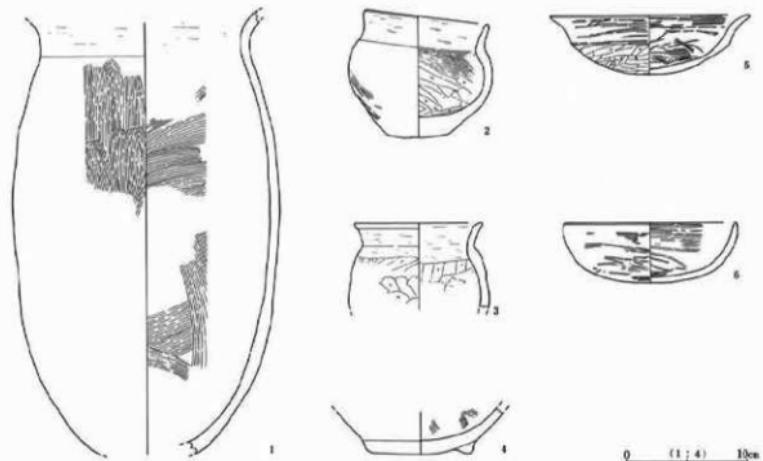
平面形態及び規模は、北壁長920cm、東壁長954cm、西壁・南壁は推定で910cm・936cmで、東西944cm、南北950cmと大型で方形を呈する。主軸方位はN-2'-Wではほぼ北を示す。覆土は5層に分割された。1層・2層はバミスを含む褐色土層、3層は黒色土層で、粒子細かく、しまりを有する。4層は褐色土層でバミスを散量含む。5層はローム粒子とバミスを含む明褐色土層で、壁溝を充填している。確認面からの壁高は、13~59cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁体は黄色ローム層を利用して構築され堅固な状態である。壁溝は北壁東側で一部断絶するがほぼ全周し、さらに西壁の壁溝は北西隅より約160cmの位置から直角に東へ約100cm延びP₂に至る。溝幅は10~60cmで深さは4~23.5cmを測り、断面形は「U」字状を呈する。床面は黄色ローム層を踏み固めて、堅緻な状態であり、全体に平坦である。ピットは4個検出された。いずれも主柱穴で、内側に一段のテラスを有す。



る。 P_1 は $106 \times 138\text{cm}$ の不整楕円形で、深さはテラス部で 32cm 、最深部で 77.5cm 、 P_2 は $96 \times 146\text{cm}$ の楕円形で、テラス部で 44cm 、最深部で 95cm を測り、 P_4 は $83 \times 134\text{cm}$ の楕円形を呈し、テラス部で 43cm 、最深部で 93cm の深さを有する。 P_3 は西半部をTa39号竪穴造構によって破壊されるため長径は不明であるが、短径 92cm を測る楕円形を呈すると考えられ、深さはテラス部で 28cm 、最深部で 80cm を測る。覆土は、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ はテラス部付近まで粘性なく、小砾を含む褐色土を基調とし、以下は白橙色土層・暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層に分割される。 P_3 はロームブロックを含む褐色土を基調としており、最下層は粒子の細かい黒褐色土層である。

カマドは北壁中央に位置するが、西側をわずかに残してD60号土坑に破壊されており、形状は不明である。火床部はD60号土坑の床面より検出され、 $106 \times 230\text{cm}$ の楕円形に掘り込んで設けられる。火床面は激しい熱を受けたためか脆い状態である。袖部はわずかに左袖部に使用された袖石が検出されたのみである。

遺物の出土状況は、土師器が少量出土したのみで、特に集中する箇所は認められなかった。517図1・5は住居址内に散乱した状態で出土し、517図3は南壁東側直下より出土した。また東壁北側直下より土製鉄鍵車（518図1）、南側直下より滑石製鉄鍵車（518図2）が出土し、 P_1 の北側より碧玉製の管玉（518図3）が出土した。

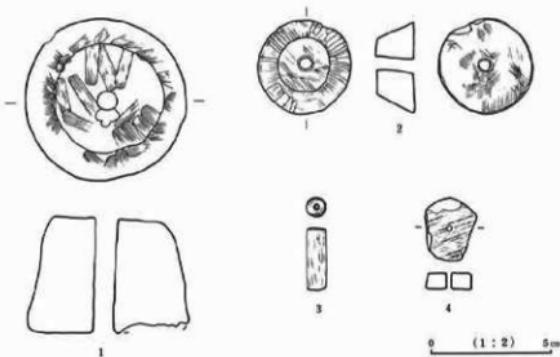


第517図 H13号住居址出土遺物実測図

第386表 H13号住居址出土遺物一覧表

種類番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
517-1	壺	口径 22.0 現高 36.5	長胴を呈する胴部から外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上一一下への刷毛目 胴部内面刷毛目	回転実測
517-2	小形壺	口径 10.2 胴径 11.8 底径 4.9 器高 10.0	肥厚するやや丸底を帯びた平底から 深胴を経て直立矮陣に外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面単位不明の刷毛状工具によるナ デ、一部に巻きの凹：ガキ 胴部上半内面ナデ	回転実測

辨団番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
517-3	小形盤	口径 10.4 胴径 11.6 現高 7.0	球脚化した脚部を経て、やや外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部上半外面箋削り 胴部上半内面上→下への箋削り	回転実測 胴下半以下欠
517-4	盤	底径 8.1 現高 3.8	底部貼付高台	外面周毛状工具による単位不明のナデ 内面不規則な崩毛目	回転実測 底部のみ残存
517-5	环	口径 16.5 器高 4.3	丸底から内壁気味に立ち上がり、口辺部で外反する。	口辺部内外面横位の窓ガキ 体部・底部外面箋削り 体部内面不規則な窓ガキ	回転実測
517-6	环	口径 14.0 器高 4.9	丸底から内壁気味に立ち上がり、口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部内外面横位の窓ガキ	回転実測



第518図 H13号住居址出土石器・土製品実測図

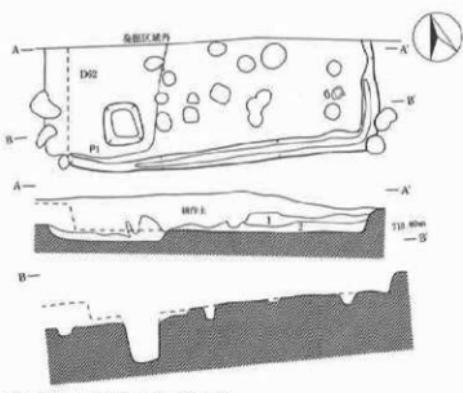
第387表 H13号住居址出土石器・土製品一覧表

辨団番号	器種	石質	法量(cm, g)				備考
			長さ	孔径	厚さ	重量	
518-1	土製防護車	土製	6.6	0.8	4.8	200	表面に箋状工具によるナデ
518-2	石製防護車	滑石	3.8	0.48	1.52	35.6	表面に削痕及び研磨痕
518-3	管玉	碧玉	2.5	0.14	0.8	2.55	表面に研磨痕
518-4	石製換道具	滑石	2.6	0.2	0.65	6.35	幅2.15cm、表面に研磨痕

15 H14号住居址

本住居址は、調査区北端西側の11・12グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色層上面において検出された。D62号土坑と重複関係があり、西側を破壊され、さらに、径30cm前後の搅乱によって床面及び壁体を破壊される。また、北側大部分は調査区域外であるため未調査である。

規模は、南側一部分のみの検出であるため、南壁の548cmが測定できるのみであり、平面形態・主軸方位等は不

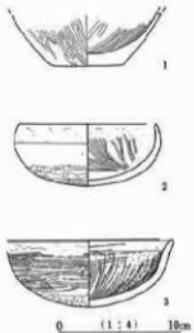


1層 開色土 砂質ローム粒・小礫を含む。
2層 開色土 1層より細かく、炭化粒子を含む。
3層 黒灰色土 死灰土。炭化粒子を含む。
4層 開色土 ローム粒を多量に含む。

0 (1:100) 2m

第519図 H14号住居址実測図

検出であるため、土師器が極く少量出土したのみである。520図2はP内より出土し、520図3は南壁直下床面より出土した。



第520図 H14号住居址出土遺物実測図

第388表 H14号住居址出土遺物一覧表

件番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
520-1	小形 甕	底部 現高 5.8 4.2	平底から内壁気味に立ち上がる。	脚下半・底部周辺底位の 籠目ガキ	回転実測 脚部以上 欠損
520-2	甕	口径 器高 (11.2) 5.0	丸底から内壁して立ち上り、口辺に歪む。	口辺部内外面ココナデ 底部外側窓削り 体部内面暗文風籠目ガキ	回転実測
520-3	甕	口径 器高 13.9 5.5		口辺部内外面ココナデ 体部外側窓目ガキ 底部外側窓削り 体部内面暗文風籠目ガキ	

16 H15号住居址

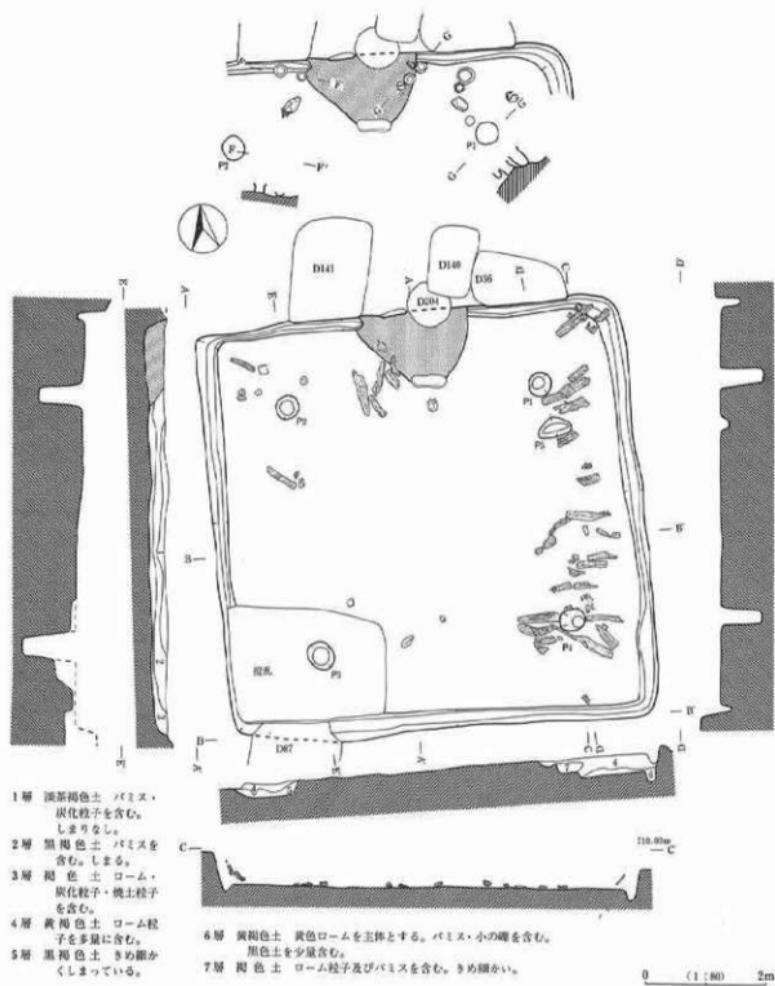
本住居址は調査区中央北寄りお・かー7・8・9グリッド内に位置し、全体層序第II層黄褐色土層上面において検出された。D36・89・121・141・204号土坑と重複関係にあり、北壁及び南壁の一部を破壊され、また南西隅を搅乱によって破壊される。

平面形態及び規模は、東壁648cm・西壁678cm・南壁681cm・北壁682cmで、東西708cm・南北683cmを測り、東西にわざかに長い方形を呈する。床面積は44.6m²を測り、主軸方位はN-1°-Wを示す。

明である。

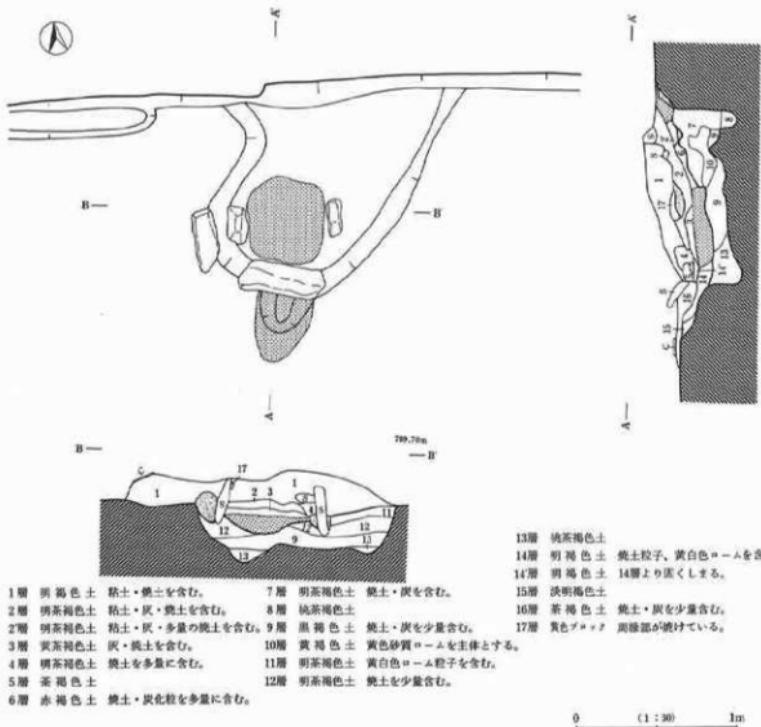
覆土は耕作等の影響を受け大部分が搅乱されているが、東側で2層に分割された。1層は砂質ローム粒と小礫を含む褐色土層で、2層は1層より粒子細かく、炭化粒子を含む褐色土層である。確認面からの壁高は9~21.5cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は東壁と南壁の一部で検出され、東壁の壁高は南東隅から100cm、南壁の壁溝は南西隅から約100cmの位置で断続する。溝幅は12~26cm、深さは6.5~9.5cmを測る。床面は全体にはほぼ平坦であるが、軟弱な状態である。ピットは南壁西側より1個検出された。上面をD62号土坑に破壊されるが、残存部で62×68cmの長方形を呈し、69cmの深さを有する。

遺物の出土状況は、南側一部分のみの



第521図 H15号住居址実測図

覆土は3層に分割され、堆積状況から自然堆積と考えられる。1層はバミス・炭化粒子を含む淡茶褐色土層で、2層はバミスを含む黒褐色土層である。3層は褐色土層でローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む。確認面からの壁高は、9~50cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は住居址を全周し、溝幅は8~26cmで、深さは2.5~7.5cmを測る。断面形は「U」字状を呈する。壁体は黄色ローム層を利用して構築され、比較的堅固な状態である。床面は、東壁・西壁の内側約100~200cmを20~30cm掘り込んだ後、黄褐色土（4・6層）・黒褐色土（5

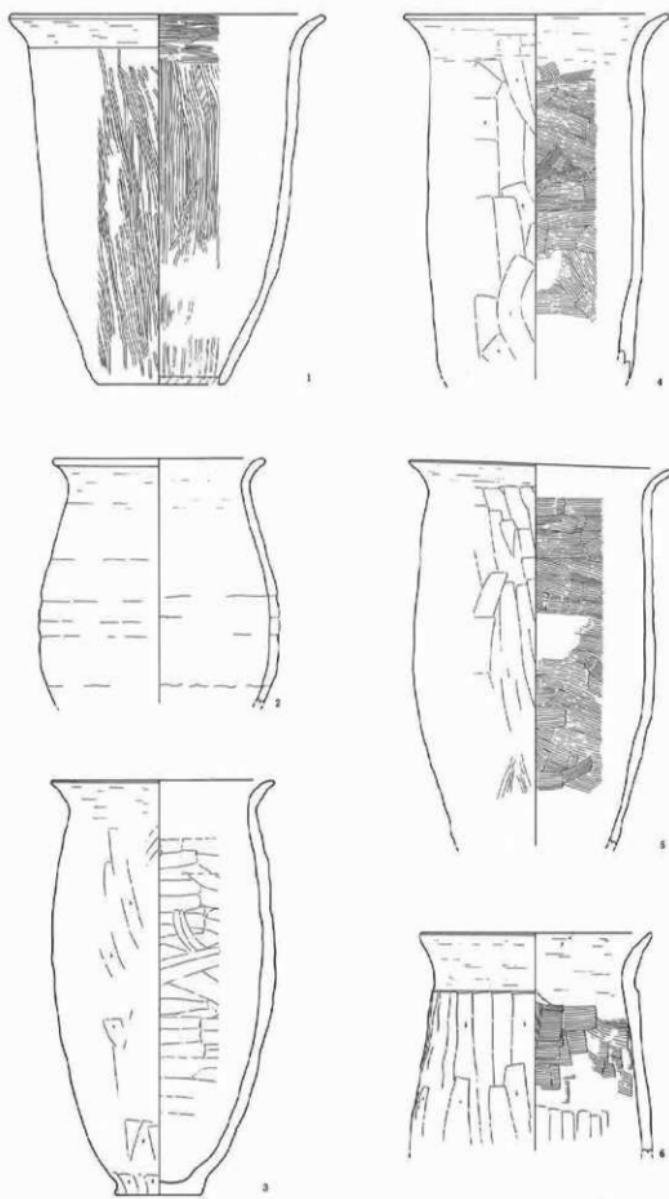


第522図 H15号住居址カマド実測図

層)・褐色土(7層)を埋め戻して貼床が施され。中央付近は黄色ローム層を踏み固めて構築されており、全体に平坦で堅固な状態である。なお床面上より多量の炭化材が出土し、特に東壁付近に集中する。炭化材はいずれも住居址の中央に向った状態で出土していること等より垂木と考えられ、桁・主柱と考えられる炭化材は検出されなかった。ピットは総数で5個検出された。 $P_1 \sim P_4$ は主柱穴であるが、 P_5 は搅乱によって上面を破壊される。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ は径40cm前後を測る円形を呈し、深さは各々71.5cm・72cm・70.5cmを測る。 P_3 は残存部で38×50cmの椭円形で、82cmの深さを有する。 P_5 は P_1 の南38cmの位置に配され、32×56cmの椭円形を呈し、深さは12cmを測るが、性格は不明である。

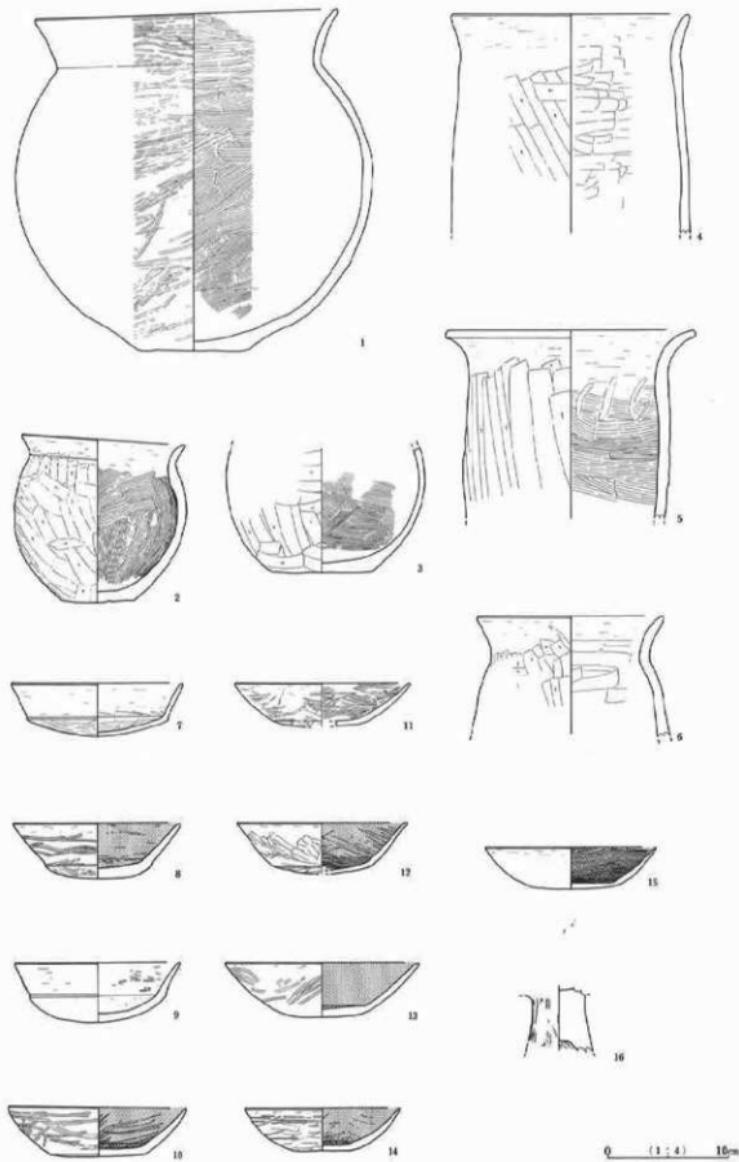
カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部は既に崩壊しており、残存状況は極めて不良である。火灰部は壁下を幅110cm・長さ120cmの不整形に掘り込んだ後、明茶褐色土(11層)・暗茶褐色土(12層)を埋め戻して設けられ、約10cmの厚さで焼土が観察される。袖部は崩壊しているため形状は明らかでないが、長さ約30cmの安山岩が袖石として埋設され、さらに補強材として灰を含んだ粘土を被覆して構築される。

遺物の出土状況は、本住居址より多量の土器が出土している。平面的な分布は住居址北側、特にカマド周辺に集中する傾向が顕著である。垂直分布は、いずれも床面からの出土であり、その出土状況から、これらの土器は本住居址に共伴するものと考えられ、本住居址の所産期を決定する上で良好な一括セトと思われる。

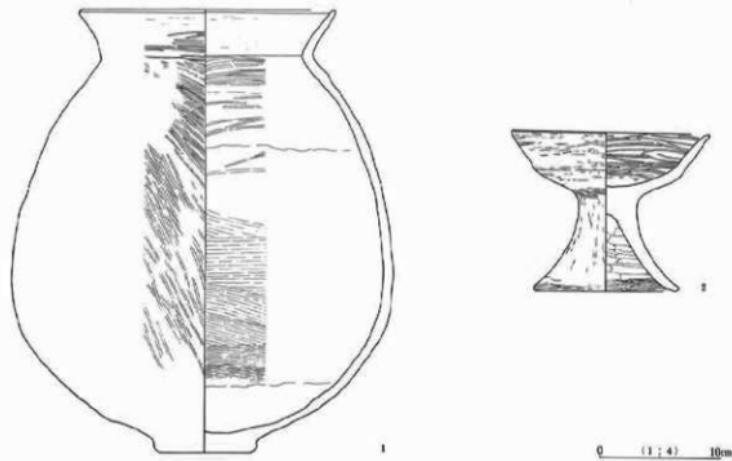


0 (1 : 4) 10cm

第523 図 H15号住居址出土遺物実測図



第524図 H15号住居址出土遺物実測図



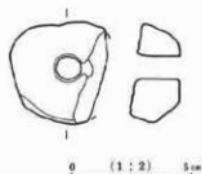
第325図 H15号住居址出土遺物実測図

第389表 H15号住居址出土遺物一覧表

標目番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
523-1	瓶	口径 25.5 孔径 10.5 器高 30.4	孔部から直線的に立ち上がる胴部を経て強く外反する口縁部に至る。	口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面横位の笠: ガキ 胴部外表面の笠: ガキ 胴部内面横位の笠: ガキ 孔部内面斜削り	回転実測
523-2	甕	口径 17.2 胴径 19.6 現高 20.1	長胴から立ち上がり、強く外反する口縁部に至る。	口縁部内面ヨコナデ 胴部外表面毛状工具による單位不明のナデ 胴部内面調整不明	回転実測
523-3	甕	口径 18.5 胴径 18.4 底径 7.0 器高 34.1	平底から長胴を経て強く外反する口縁部に至る。	口縁部内面ヨコナデ 胴部外表面下への笠削り 胴部内面毛状工具によるナデ 底部周辺外面下→上への笠削り	回転実測
523-4	甕	口径 21.7 胴径 17.7 現高 29.9	長胴で直線的に立ち上がる胴部を経て外反する口縁部に至る。	口縁部内面ヨコナデ 胴部外表面下への笠削り 胴部内面主として横位の刷毛目	回転実測
523-5	甕	口径 22.0 胴径 20.2 現高 31.2	長胴で直線的に立ち上がる胴部を経て強く外反する口縁部に至る。	口縁部内面ヨコナデ 胴部外面方向不明 (一部下→上) の笠削りで、不半部に笠ナデ 胴部内面横位の刷毛目	回転実測
523-6	甕	口径 19.0 現高 12.9	長胴を経て外反する口縁部に至る。	口縁部内面ヨコナデ 胴部外面上→下への笠削り 胴部上半内面横位の刷毛目 胴部中央内面横位の刷毛状工具によるナデ	回転実測
524-1	甕	口径 24.8 頸径 21.7 胴径 29.3 底径 8.8 器高 27.8	平底から大きく張らむ胴部を経て頸部で窄まり、外反気味に開く口縁部に至る。	口縁部内面横位の笠: ガキ 胴部外面横位と斜位の笠: ガキ 胴部内面横位の刷毛目	完全実測 空?

発見番号	器種	法量(cm)	形態的特徴	手法的特徴	備考
524-2	小形 甕	口径 13.4 胴径 14.0 底径 6.0 器高 13.4	平底から球形化して立ち上がり、外反する口縁部に至る。 器形大きく変わ。	口縁部内外面ヨコナデ 頭部外面上→下への範削り 胴部外面上→上への範削り 胴部内面上→左下・上→下への範削り	完全実測
524-3	小形 甕	口径 16.4 底径 8.5 現高 10.4	平底から球形化する胴部に至る。	外面左→右・上→下への範削り 内面主として横位の削毛目	回転実測
524-4	甕	口径 19.3 胴径 19.6 現高 18.1	直線的に立ち上がる長胴から外反して開く口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面上→上・右→左への範削り 胴部内面削毛状工具によるナデ	回転実測
524-5	甕	口径 20.3 胴径 17.0 現高 15.4	直線的に立ち上がる長胴から強く外反して開く口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上→上への範削り 胴部内面削毛状工具によるナデ 胴部内面一部に丸ナデ	回転実測
524-6	甕	口径 15.3 現高 9.7	長胴化する胴部を経て、外反する口縁部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上主に上→下への範削り 胴部内面削毛状工具によるナデ	回転実測
524-7	甕	口径 14.0 器高 4.4	丸底から直線的に外傾する口辺部に至る。 体部下半に縫い縫を持つ。	口辺部・体部上半内外面ヨコナデ 底部外面範削り 体部下半・底部内面削毛状工具によるナデ	回転実測
524-8	甕	口径 13.6 器高 4.5	丸底から直線的に外傾し、口辺部に至る。 体部下半に縫い縫を持つ。	口辺部・体部上半横位の範ミガキ 底部外面範削り後範ミガキ 内面黒色研磨	完全実測
524-9	甕	口径 13.6 器高 4.9	丸底からやや外反して立ち上がり、口辺部に至る。 体部外外面に縫い縫を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 体部下半範削り不明 口辺部内面横位の範ミガキ 体部・底部内面範ミガキ	回転実測
524-10	甕	口径 14.7 底径 7.9 器高 4.1	やや丸味を持った平底からやや内壁気味に立ち上がり口辺部に至る。	外側横位を主として範ミガキ 体部内面横位・斜位の範ミガキ 底部内面放射状暗文風範ミガキ 内面黒色研磨	完全実測
524-11	甕	口径 14.4 現高 3.6	やや丸味を持った平底から直線的に立ち上がり、口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面上主として横位の範ミガキ 底部外面範削り 体部内面横位・斜位の範ミガキ 底部内面範ミガキ	回転実測
524-12	甕	口径 14.0 現高 4.2	丸底から直線的に立ち上がり、口辺部でやや外反する。 体部下半外面上に縫い縫を持つ。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面上横位工具によるナデ、及び一部にミガキ 底部外面範削り 体部内面横位・斜位の範ミガキ 底部内面放射状暗文風範ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
524-13	甕	口径 16.0 底径 5.2 器高 4.5	丸味を持った平底から直線的に立ち上がり口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部外面範ミガキ 内面黒色研磨	回転実測
524-14	甕	口径 12.7 底径 5.0 器高 3.5	丸味を持った平底から内壁気味に立ち上がり口辺部に至る。	口辺部外面ヨコナデ 体部上半外面上横位の範ミガキ 体部外面範削り、一部ミガキ 底部外面範削り 体部内面上主として横位の範ミガキ 底部内面放射状暗文風範ミガキ 内面黒色研磨	回転実測

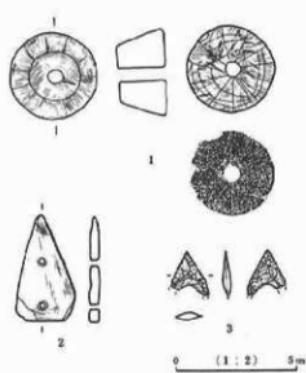
拂因番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
524-15	环	口径 14.9 器高 3.4	丸底から直線的に外傾し、口辺部に至る。 底部内面下半に弱い縦を持つ。	口辺外面ヨコナデ 体部外面单位不明の荒状工具によるナデ 体部内面横位の荒ミガキ 底部内面輪文模様ミガキ 内面墨色研磨	回転実測
524-16	高环	脚径 4.4 現高 5.3	脚部は直線的に立ち上がる。	脚部外面範位の荒ミガキ 脚部内面磨解り	回転実測
525-1	环	口径 21.2 脚径 31.5 底径 8.1 器高 36.3	平底から球膨化する脚部を經て底部で窄まる。縫合部は「く」の字に折れて外反する。	口縁部外面ヨコナデ及び荒ミガキ 口縁部内面ヨコナデ 脚部外面左上→右下への荒ミガキ 脚部上半内面横位の荒ミガキ 脚部下半内面横位の脚毛目	完全実測
565-2	高环	口径 16.3 脚径 4.8 底径 11.9 器高 13.1	弱い縦を持つ所部とラッパ状に開く脚部から成る。	底部内外面横位の荒ミガキ 脚部外面横位の荒ミガキ 脚部内面横位の荒解り 底部内外面横位の荒ミガキ	完全実測



第526図 H15号住居址出土石器実測図

第390表 H15号住居址出土石器一覧表

拂因番号	器種	石質	法量(cm, g)				備考
			径	孔径	厚さ	重量	
526	筋運車	輝石	4.6 ~4.1	0.95	2.0	12.4	孔部周辺に抉り痕 表面にかすかな使用痕 欠損



第527図 通構外出土石器実測図

第391表 通構外出土石器一覧表

拂因番号	器種	石質	法量(cm, g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
527-1	筋運車	滑石	3.5	0.65	1.95	31.8	
表面放射状に刻線 全面に研磨痕							
527-2	石製模造品	ホルンベッス	4.35	2.35	0.45	8.3	
孔径 0.21 cm(上), 0.2 cm(下) 孔部周辺に穿孔時の加工痕 全面に研磨痕							
527-3	石 砕	玄武岩	1.82	1.5	0.34	0.52	脚部欠損

第392表 遺構外出土石器一覧表



鉢番号	器種	石質	法量(cm, g)			
			径	孔径	厚	重量
備考						
528	臼 玉	滑石	6.61	0.07	0.14	0.13
全面に研磨痕						

第393表 大井城跡(黒岩城跡)古墳時代住居址一覧表

遺構名	鉢番号	検出位置	形態	規模(cm)		壁長(cm)		床面積 m ²	壁残高 cm	主軸方位		
				東西	南北	東	西					
炉・カマド												
H 1	469	ナ-5・6 セ-5	長方形	334	306	256	252	310	326	9.1	3.5~21	N-10°-W
			—	—	—	主柱穴2	—	D 26に破壊される	—	—	—	—
H 2	477	<-8・9 け-8~10 こ-9・10	(方形)	—	(770)	685	—	—	—	—	37~66	N-10°-E
			北壁中央	—	—	主柱穴3 貯蔵穴1 他 2	—	T a 15・D 211・F 3に破壊される 周溝により南西部を破壊される 周溝有す	—	—	—	—
H 3	481	か・き・く -5・6	方形	(760)	(747)	(708)	(725)	(728)	(743)	(51.8)	6.5~33.5	N-10°-E
			北壁中央	—	—	主柱穴4 他 4	—	—	—	—	—	—
H 4	486	さ・し-6・7	—	(600)	—	—	—	—	(576)	—	0~25	N-11°-E
			北壁中央	—	—	主柱穴3	—	T a 4・53, D 39・40・45・46・299・258・290, F 2に破壊される。 北壁中央付近を搅乱により破壊される。	—	—	—	—
H 5	490	<・け・こ -5・6・7	方形	(788)	794	(708)	745	(750)	779	(57.3)	0~17.5	N-7°-E
			北壁中央	—	—	主柱穴2 貯蔵穴1	—	T a 8・11・14・52, D 41・42・44・88・95・126・144・147・150・153・207・208・212に破壊される。 周溝有し、ピット状の複数多し。	—	—	—	—
H 6	493	<・け-7	方形	(309)	(290)	245	(270)	(284)	(290)	(7.9)	3~20	N-18°-E
			—	—	—	—	—	D 32, F 3に破壊される。 周溝有す。	—	—	—	—
H 7	494	き・く-8・9	方形	(359)	(374)	356	(340)	344	(326)	(10.3)	1.5~24.5	S-83°-E
			東壁中央	—	—	—	—	D 123に破壊される。 北壁・東壁を搅乱により破壊される。 周溝有す。	—	—	—	—

遺構名	番号	検出位置	形態	規模(cm)		壁長(cm)				床面積m ²	壁残高cm	主軸方位
			東西	南北	東	西	南	北				
H 8	497	う・え・お -5・6	伊・カド	ピット				備考				-
			(方形)	(796)	-	-	-	(740)	-	-	12~31	
H 9	500	う・え -7・8	-		-		T a 51, D 69+73+76+105+134+138+142+155+250+251+256 に破壊される。 ピット状の複数有す。					
			馬太方形	655	630	610	610	575	596	35.5	43~70	N-9'-W
H 10	503	い・う -11~13	主柱穴4 貯蔵穴2 他9		北壁中央		D 22+78+133+137+244+252+253+257に破壊される。 周溝・張出ピット(南壁中央)有す。					
			方形	-	(778)	768	-	-	-	-	0~43	N-46'-E
H 11	507	お・ぎ -10・11	主柱穴4		北壁中央		D 129に破壊される。 複数により南西部が破壊される。 人口部施設有す。					
			方形	762	760	755	(755)	(718)	753	(53)	35~51	N-7'-W
H 12	511	う・え -10・11	主柱穴4 他2		北壁中央		D 203を破壊する。 複数により南壁を破壊される。 周溝有す。					
			(方形)	-	-	-	(612)	-	594	-	19.5~43	N-4'-E
H 13	515	う・ぎ -9~11	主柱穴4		北壁中央		T a 38+39+41, D 58+60+130+233+234に破壊される。 複数により北壁中央を破壊される。 周溝有す。					
			方形	(944)	(950)	954	(910)	(936)	920	(83.2)	13~59	N-2'-W
H 14	519	い・う -11・12	-		-		D 62に破壊される。 ピット状の複数有す。 周溝有す。					
			-	-	-	-	(548)	-	-	-	9~21.5	-
H 15	521	お・か -7~9	主柱穴4 他1		北壁中央		D 36+89+121+141+204に破壊される。 周溝有す。					
			方形	708	683	648	678	681	682	44.6	9~50	N-1'-W

執筆分担

事 務 局 第 I 章

白倉 盛男 第 II 章大井城跡（黒岩城跡）の自然環境

林 幸彦 第 II 章大井城跡（黒岩城跡）の歴史環境、第 III 章、第 IV 章第 1 節 2 ~ 4

小山 岳夫 第 IV 章第 1 節 1、第 IV 章第 2 節 1 ~ 4

佐々木宗昭 第 IV 章第 2 節 5 ~ 6

羽毛田卓也 第 IV 章第 2 節 7 ~ 9 + 11、第 IV 章第 3 節 1 ~ 16（遺物）

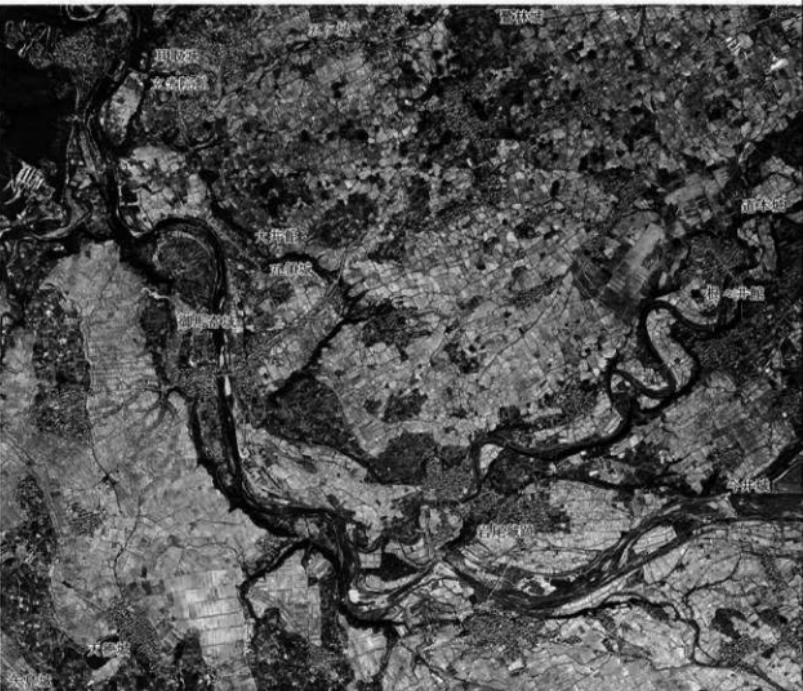
三石 宗一 第 IV 章第 3 節 2 ~ 16（遺構）

森泉かよ子 第 IV 章第 2 節 10

大井町跡周辺
航空写真
(東洋航空事業株式会社撮影)



1 岩尾城跡付近
航空写真
(東洋航空事業株式会社撮影)



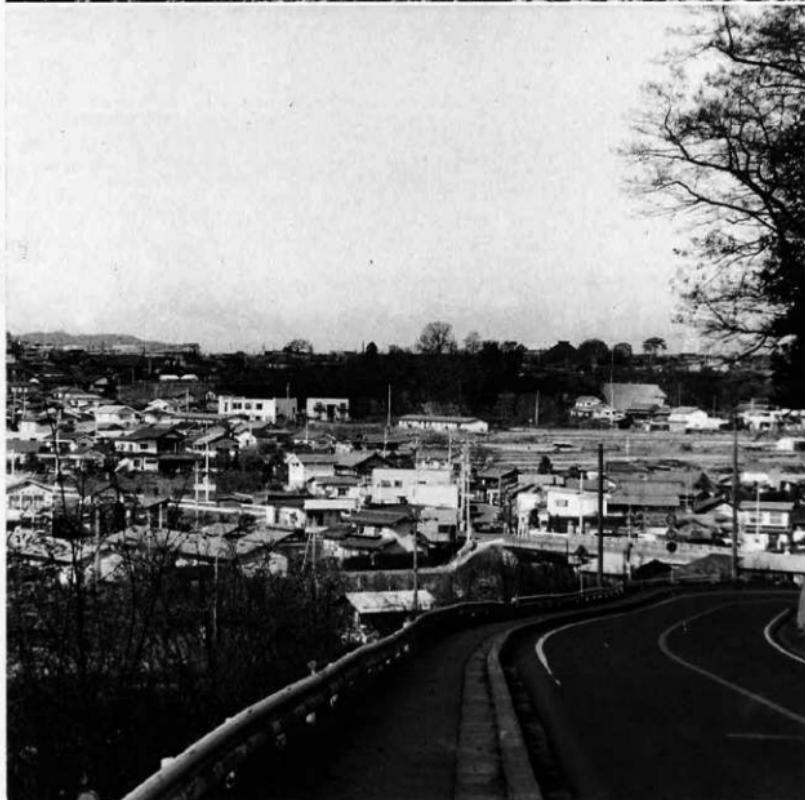
2 野沢城跡付近
航空写真
(東洋航空事業株式会社撮影)



1 調査区遠影
(東方より)



2 調査区遠影
(南東方より)



1 Ta 1号竪穴遺構
(北より)



2 Ta 3・31号
竪穴遺構
(東より)



3 Ta 5・6号
竪穴遺構
(北より)

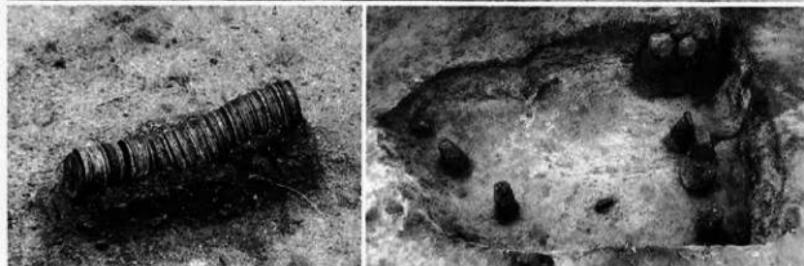




1 Ta 5号竖穴遺構
(北より)



2 Ta 6号竖穴遺構
(北より)



3 Ta 4号竖穴遺構
遺物出土状況

4 Ta 4号竖穴遺構
(東より)

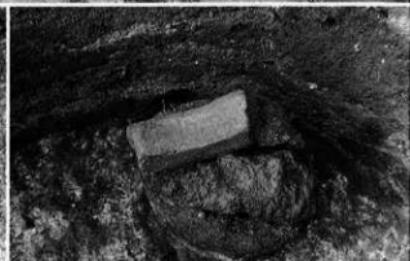
1 Ta 7号竪穴遺構
(南より)



2 Ta 8号竪穴遺構
(北より)



3・4
Ta 8号竪穴遺構
遺物出土状況



1 Ta 9号竪穴造構
(東より)



2 Ta 10号竪穴造構
(西より)



3 Ta 10号竪穴造構
(東より)



1 Tai 1号竪穴造構
(東より)



2 Tai 1号竪穴造構
(西より)



3 Tai 3号竪穴造構
(南より)





I Tai 3号竪穴遺構
(北より)

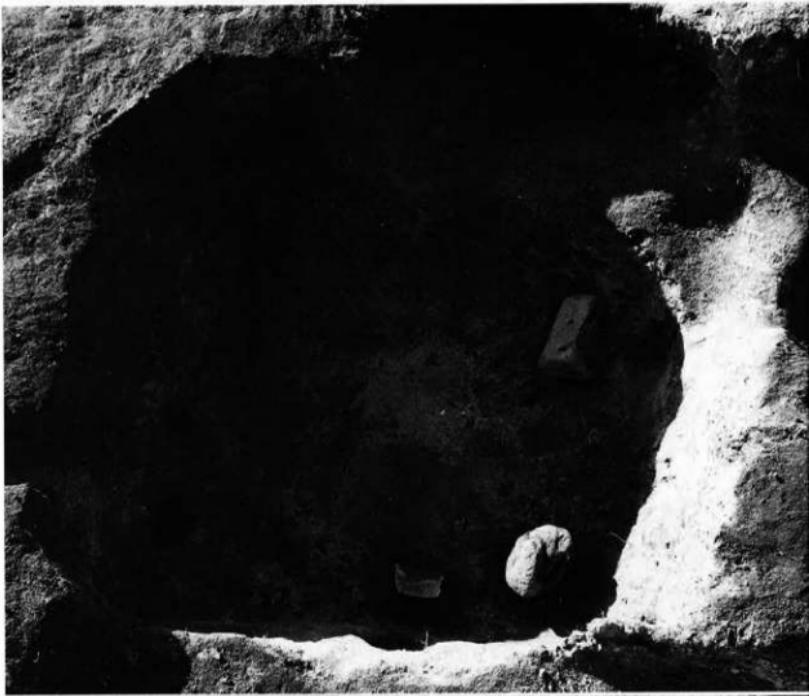


2 Tai 6号竪穴遺構
(北より)



3 Tai 6号竪穴遺構
遺物出土状況

I Tai7号竪穴道構
(東より)



2 Tai8号竪穴道構
(東より)





1 Ta19・21号
竖穴遺構 /
(北より)



2 Ta20号竖穴遺構
(北より)



3 Ta20号竖穴遺構
遺物出土状況

1 Ta22号竖穴道構
(南より)



2 Ta23号竖穴道構
(西より)



3・4 Ta23号竖穴道構
遺物出土状況





I Ta23号竖穴遺構
(北より)



2 Ta24号竖穴遺構
(東より)

1 Ta25号竪穴遺構
(北より)



2 Ta25号竪穴遺構
(東より)





1 Ta26号竪穴道横
(北より)



2 Ta27号竪穴道横
(西より)

1 Ta28号竪穴造構
(東より)

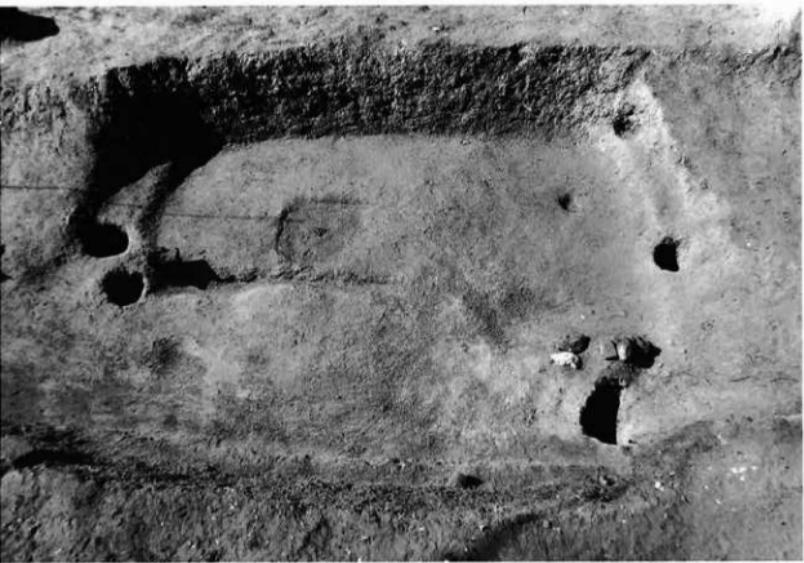


2 Ta29号竪穴造構
(北より)

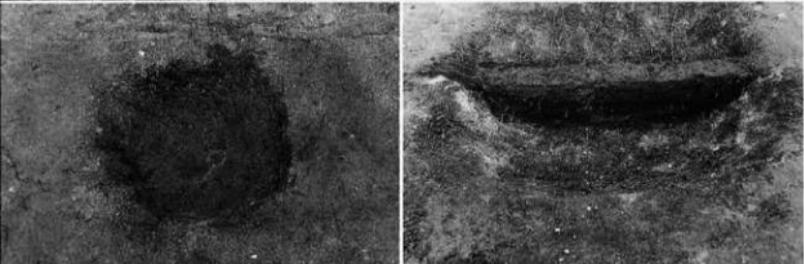


3 Ta25号
竪穴造構土層





1 Ta30号竪穴遺構
(東より)



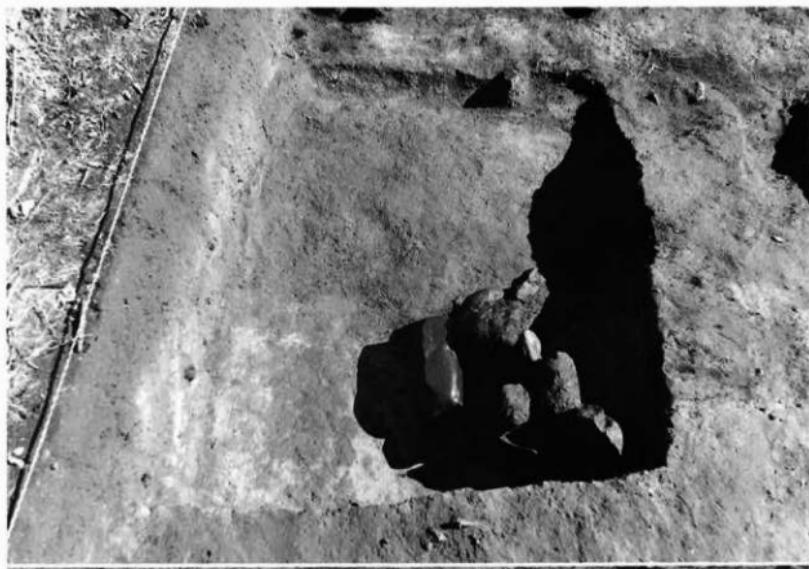
2 Ta30号竪穴遺構
炉址

3 Ta30号竪穴遺構
炉址土層



4 Ta32号竪穴遺構
(西より)

1 Ta34号竪穴遺構
(西より)



2 Ta35号竪穴遺構
(北より)



3 Ta35号竪穴遺構
遺物出土状況



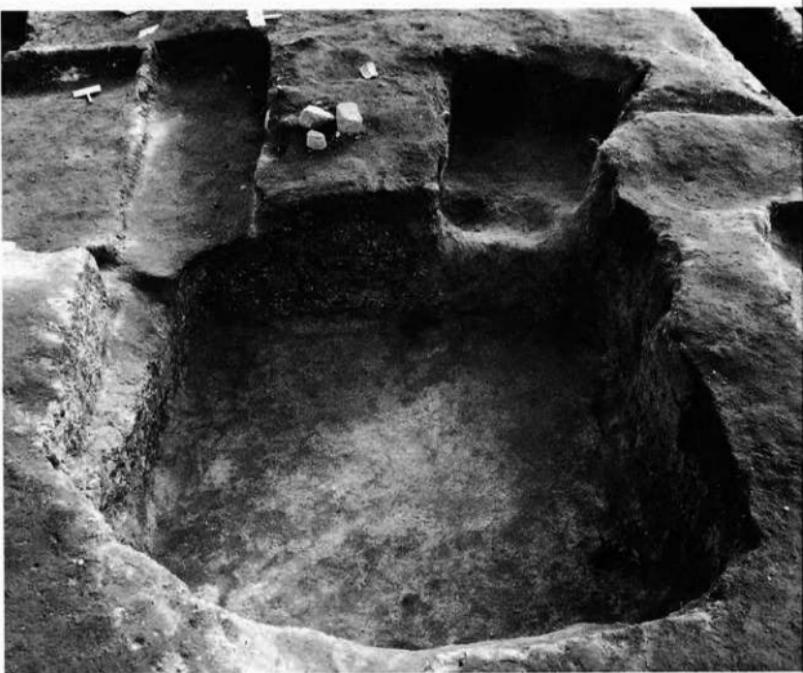


I Ta36号竖穴遺構
(束より)



2 Ta36号竖穴遺構
遺物出土状況

1 Ta36号竪穴遺構
(北より)

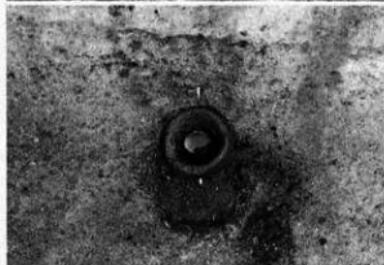


2 Ta36号竪穴遺構
(東より)





1 Ta38号竖穴造構
(北より)



2 Ta38号竖穴造構
遺物出土状況



3 Ta38・39
竖穴造構
(北より)

1 Ta38・39
堅穴遺構
(北より)



2 Ta40号堅穴遺構
(西より)



I Ta41号竪穴遺構
(北より)



2 Ta42号竪穴遺構
(北より)



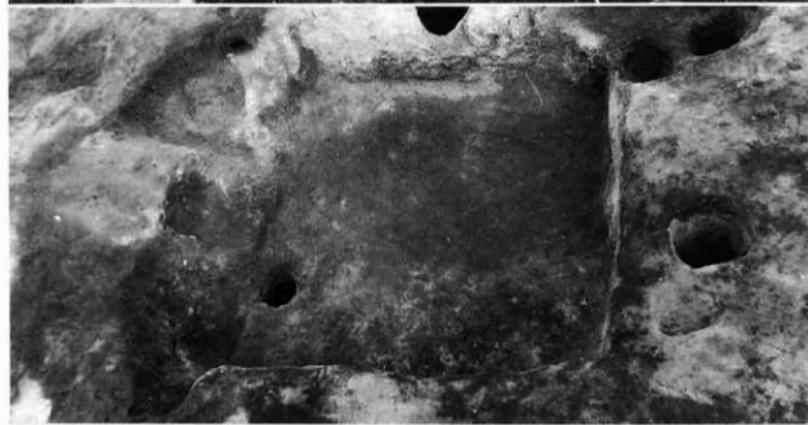
1 Ta42号竪穴道構
(東より)



2 Ta43号竪穴道構
(西より)

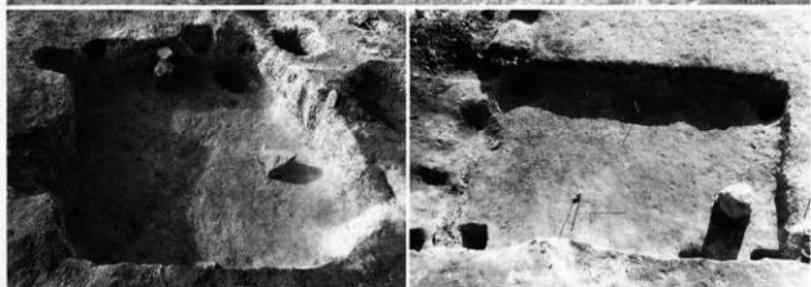


3 Ta44号竪穴道構
(南より)





1 Ta49号竖穴造構
(東より)



2 Ta46号竖穴造構
(東より)

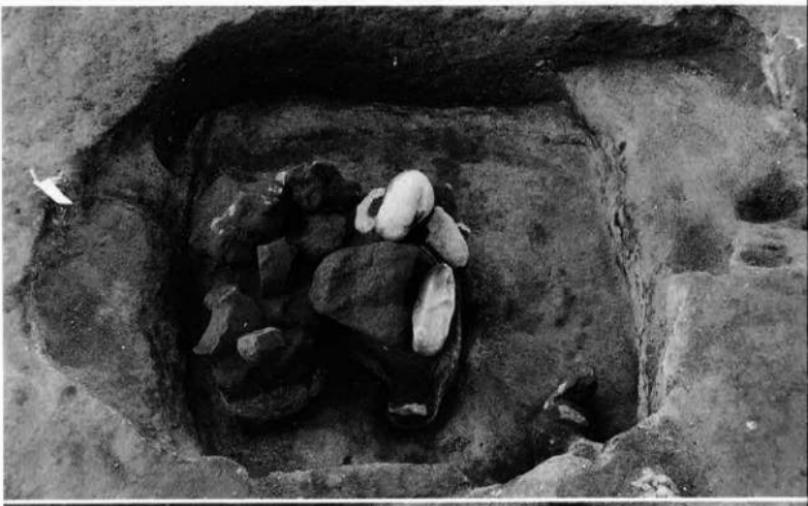


3 Ta50号竖穴造構
(北より)



4 Ta51号竖穴造構
(西より)

1 Ta52号竖穴遺構
(東より)

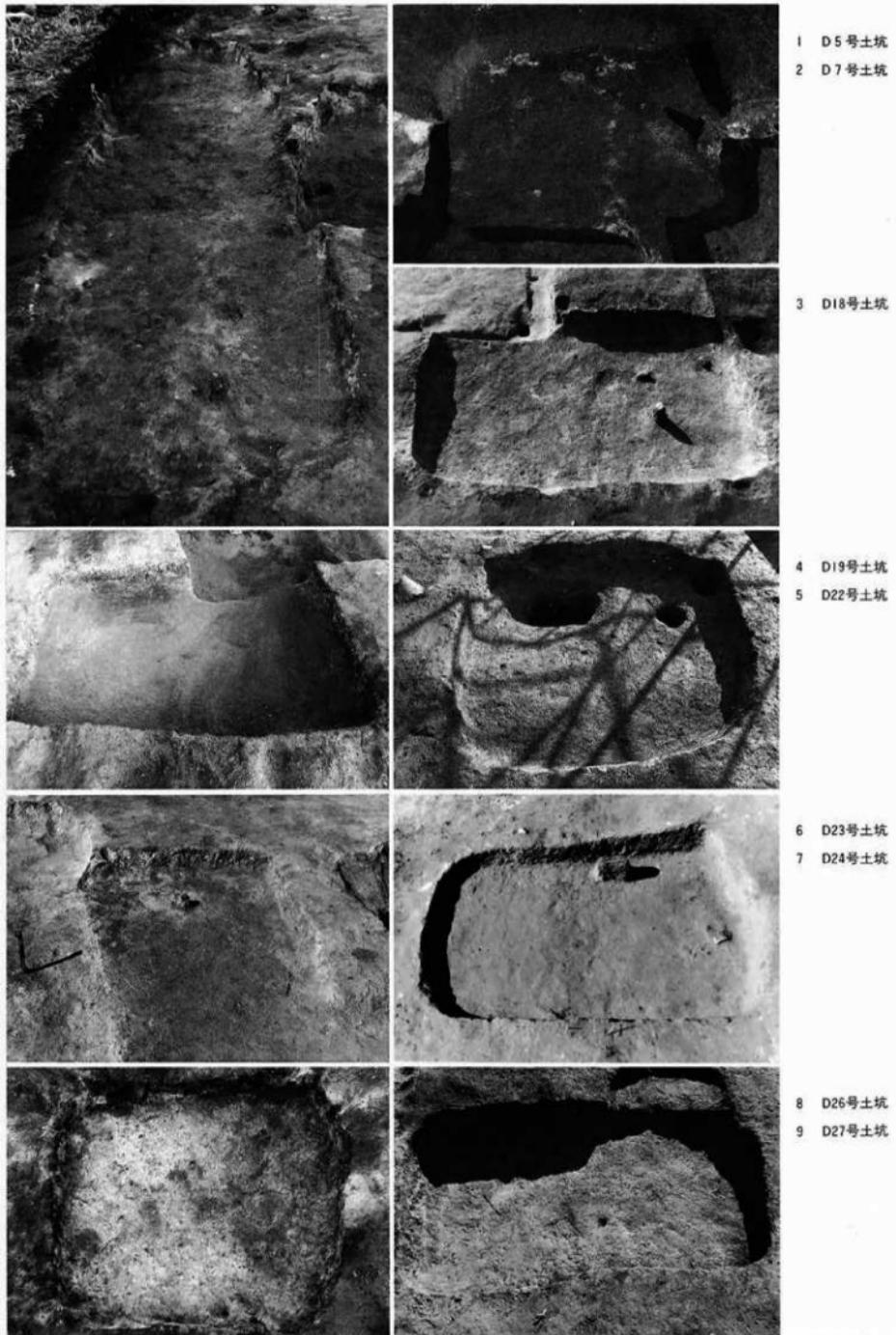


2 D2号土坑

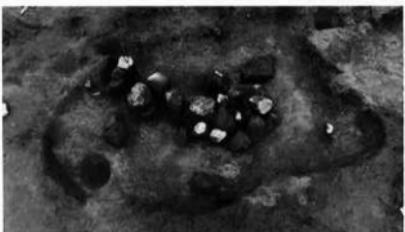


3 D4・6号土坑





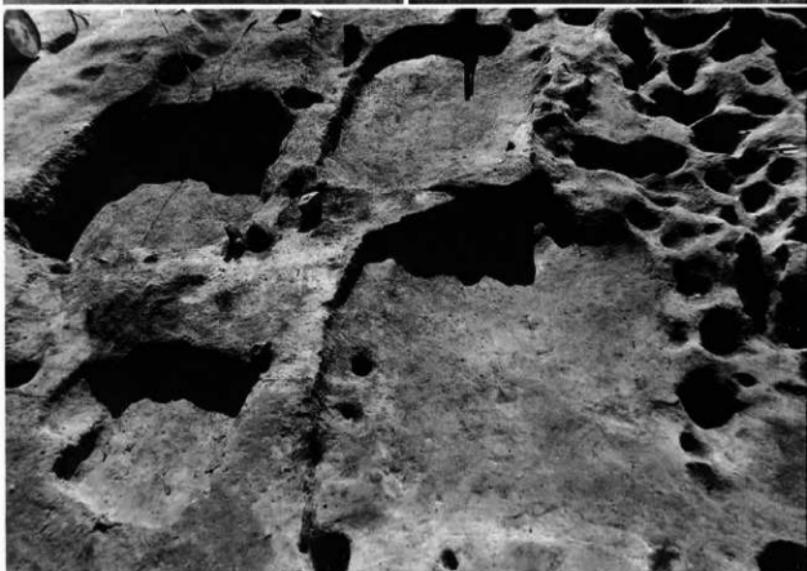
1 D29号土坑



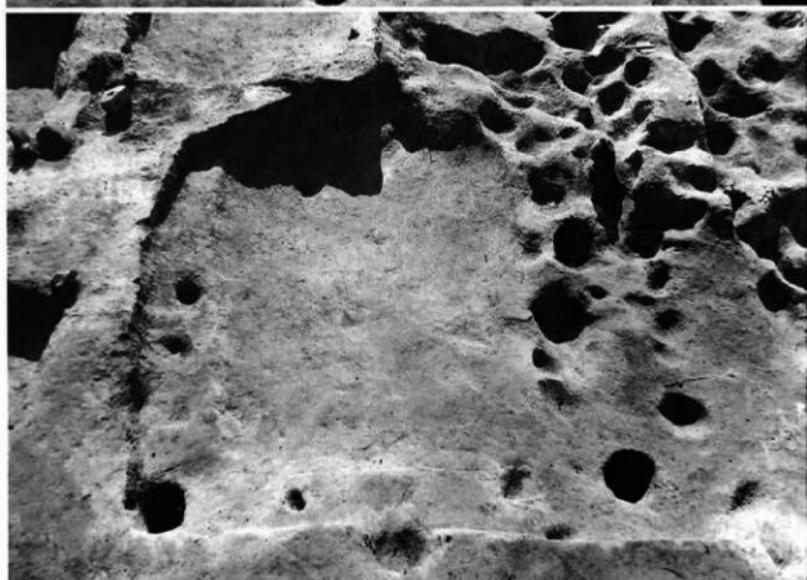
2 D30号土坑

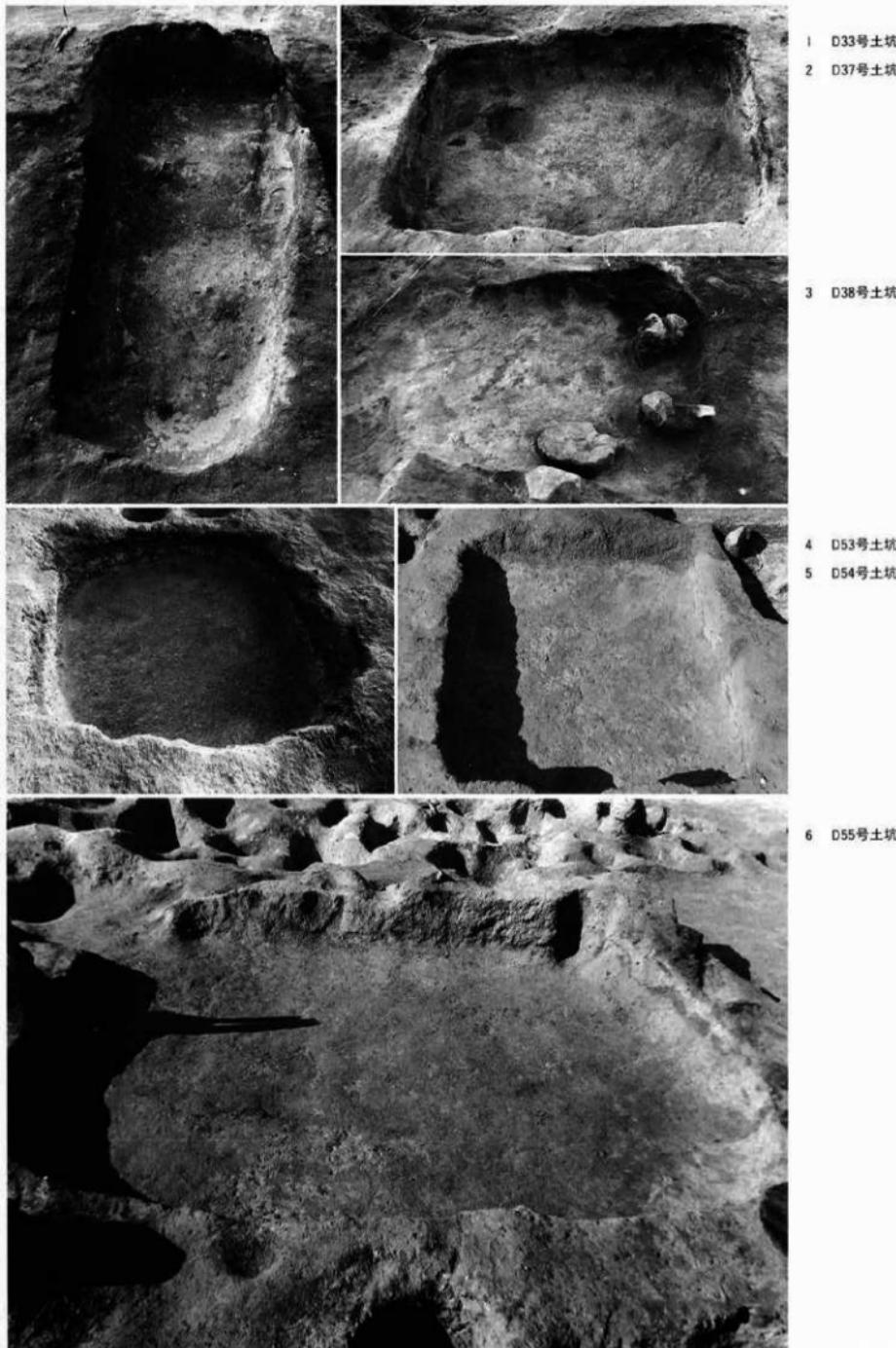


3 D31号土坑
周辺



4 D31号土坑





1 D33号土坑

2 D37号土坑

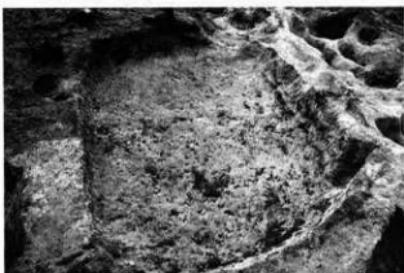
3 D38号土坑

4 D53号土坑

5 D54号土坑

6 D55号土坑

1 D55号土坑



2 D56号土坑



3 D56号土坑



4 D59号土坑



5 D60号土坑

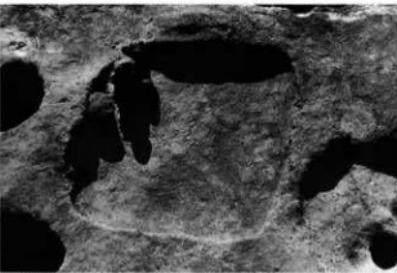


6 D65号土坑



7 D68号土坑



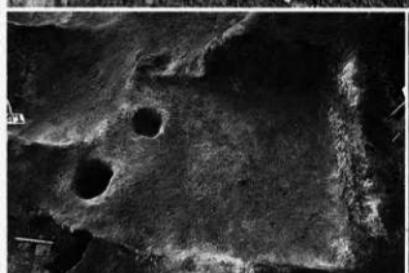


1 D69号土坑

2 D70号土坑

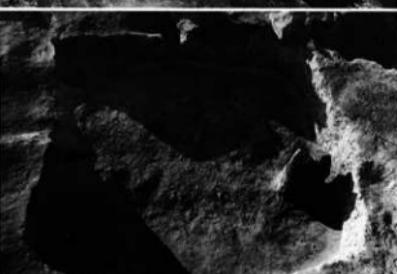
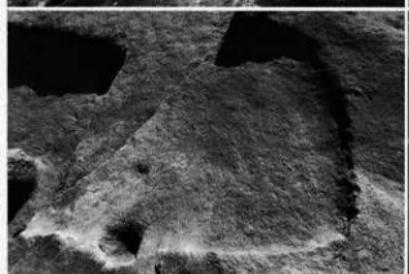


3 D72号土坑



4 D77号土坑

5 D79号土坑



6 D80号土坑

7 D82号土坑

1 D82号土坑

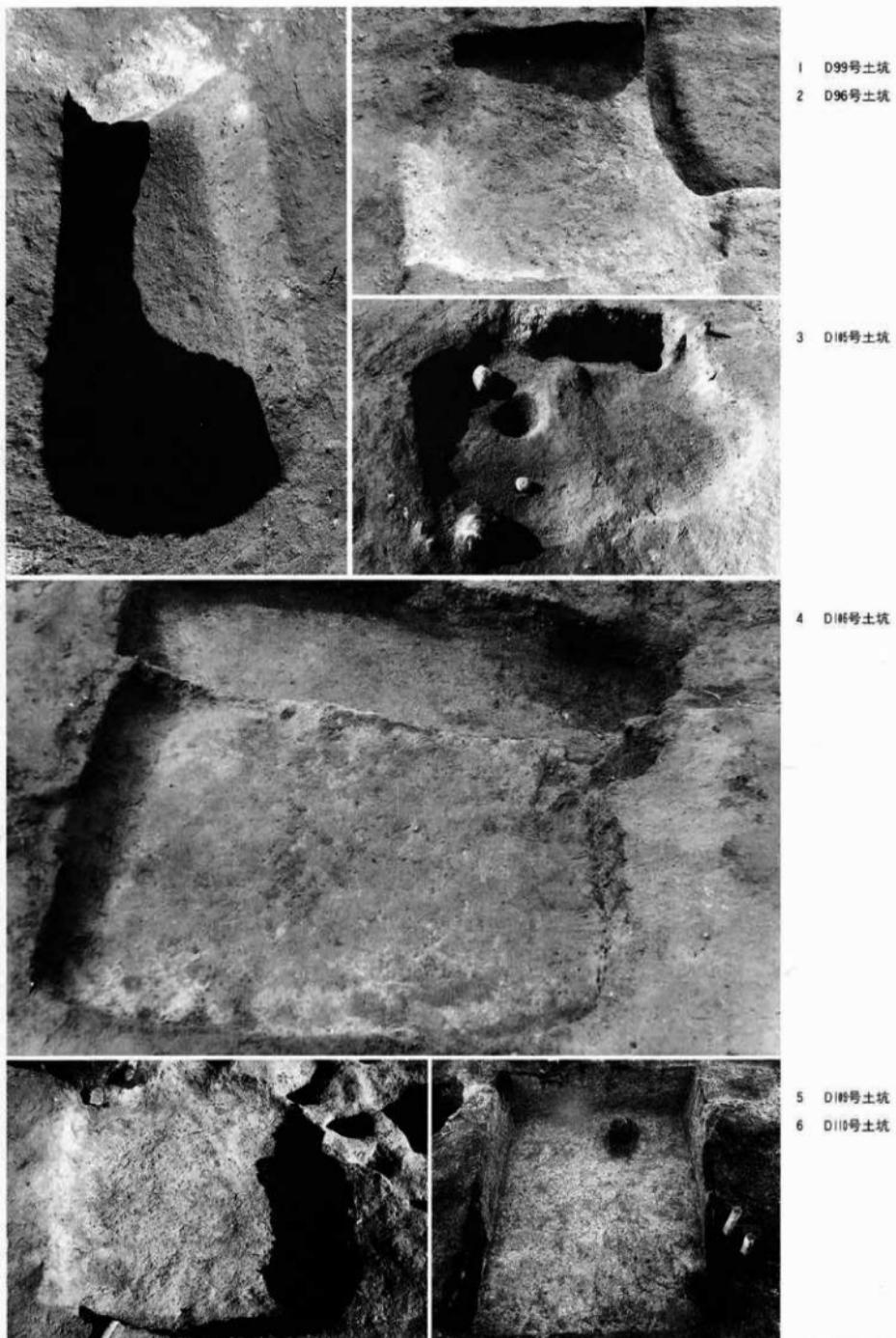


2 D84号土坑



3 + 4 D87号土坑





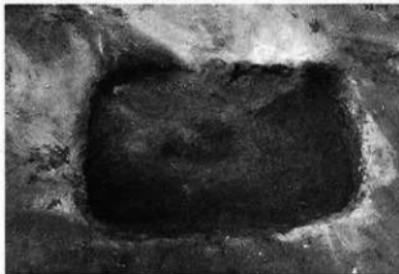
1 DIII号土坑



3 DIII号土坑



5 DIII号土坑



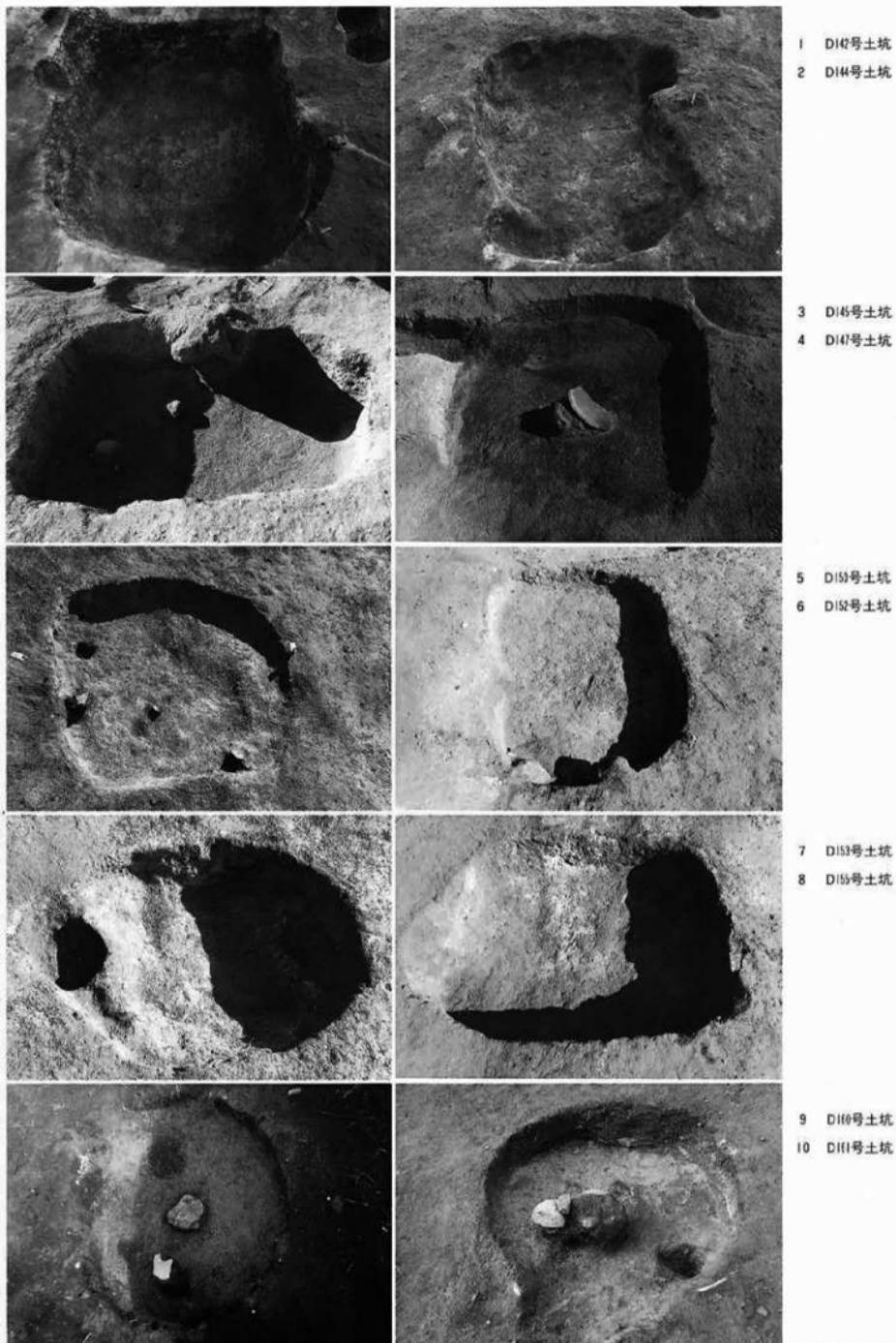
7 DIII号土坑



9 DIII号土坑



10 DII6号土坑



1 DI62号土坑



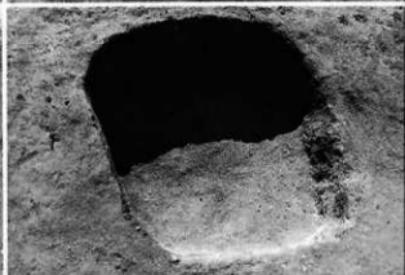
3 DI66号土坑

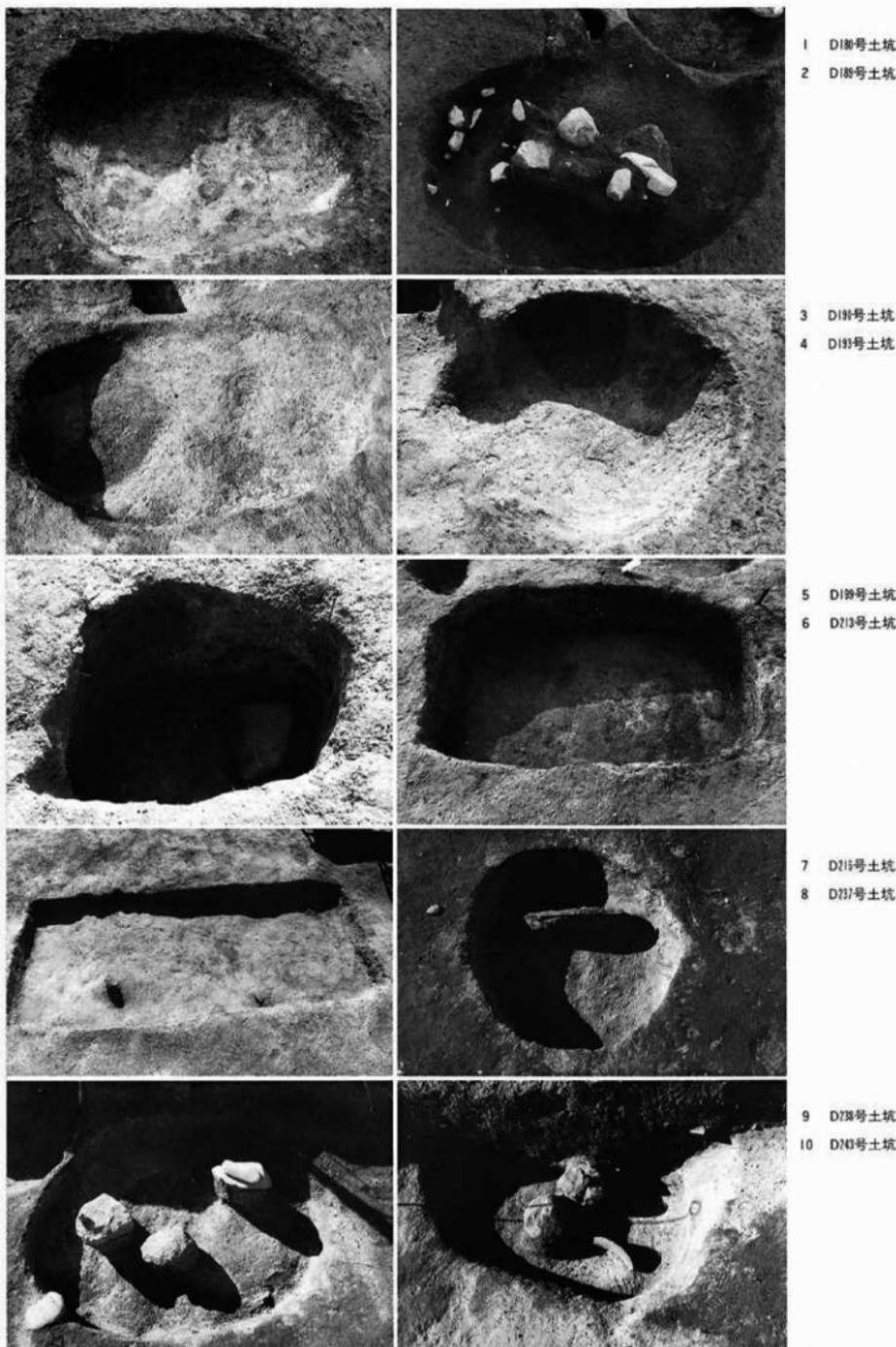


5 DI75号土坑



7 DI80号土坑





1 D25号土坑



2 D24号土坑



3 D23号土坑



4 D24号土坑

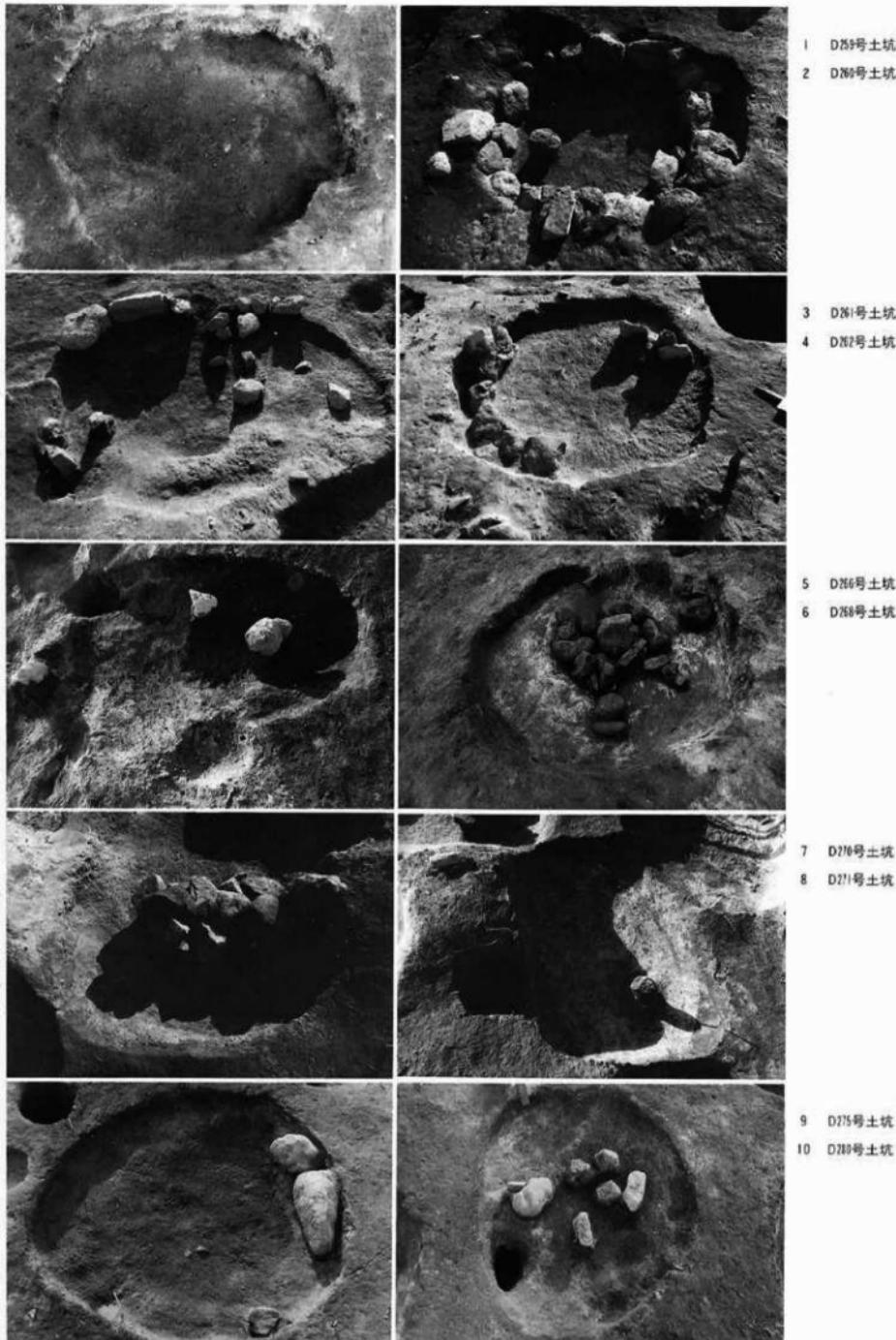


6 D25号土坑



7 D25号土坑





1 M I 号溝状遺構
(南より)



2 M I 号溝状遺構
(北より)



1-14
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器



355-1



355-2



355-3



355-5



355-6



355-7



355-8



355-9



355-10



355-12



355-13



355-14



355-15

種別番号 出土遺物

1	355-1	Ta 4
2	355-2	Ta 4
3	355-3	Ta 8
4	355-5	Ta 12
5	355-6	Ta 18
6	355-7	Ta 19
7	355-8	Ta 21
8	355-9	Ta 23
9	355-10	Ta 23
10	355-12	Ta 26
11	355-13	Ta 28
12	355-14	Ta 32
13	355-15	Ta 32
14	357-16	Ta 35

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10
11	12
13	14

以下各撰板回叢

357-16

1~14

大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器

357-17

357-19



357-19

357-21



357-23

357-25



357-25

357-27



357-27

357-29

遺物番号 出土地點

1 357-17 Ta 36

2 357-19 Ta 39

3 357-20 Ta 39

4 357-22 Ta 40

5 357-23 Ta 17

6 357-24 Ta 42

7 357-25 Ta 44

8 357-26 Ta 43

9 357-27 Ta 49

10 357-28 (Ta 49)

11 358-29 H 11

12 358-31 D 11

13 358-32 D 11

14 358-33 D 13



357-29

358-31



358-32

358-33

1~14
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器



358-34



358-37



358-21



358-40



358-41



358-42



358-44



種別番号 出土地点

1 358-34 D 13

2 358-37 D 35

3 358-39 D 51

4 358-40 D 61

5 358-41 D 61

6 358-42 D 68

7 358-44 D 71

8 358-46 D 81

9 358-47 D 136

10 358-48 D 140

11 358-49 D 115

12 358-51 D 125

13 358-53 D 185

14 358-54 D 186



358-47



358-48



358-45



358-51



358-52



358-54

1~14

大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器



359-55

359-56



359-58

359-59



359-61

359-62

編目番号 出土遺構
出土地点

1 359-55 D-188



2 359-56 D-191

360-43

360-44

3 359-58 D-232



4 359-60 D-262

360-45

360-46

5 359-61 5-9 G



6 359-62 5-13 G

7 360-63 5-10 G



8 360-65 5-7 G

9 360-66 5-10 G



10 360-67 5-11 G

11 360-68 5-11 G



12 360-69 5-10 G

13 360-70 5-12 G



14 360-71 5-4 G



360-68

360-69



360-73

360-74

1~15
大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器



360-73



360-74



360-75



360-76



360-77



360-78



360-79



360-80



360-81



361-82



361-83



361-84



361-85



361-86



361-87

掉瓦番号 出土地點
出土地點

1	360-73	<-3 G
2	360-74	9-5G-<-9G
3	360-75	11-6 G
4	360-76	8-9 G
5	360-77	L-5 G
6	360-78	南斜
7	360-79	南斜
8	360-80	南斜
9	360-81	南斜
10	361-84	H 8
11	361-85	南斜
12	361-87	A-10 G
13	361-88	9-2 G
14	361-88	L-3 G
15	362-90	南斜

1 ~ 3

大井城跡(黒岩城跡)
出土土師質土器



362-89



362-91



362-92

4 ~ 6

大井城跡(黒岩城跡)
出土内耳土器



標印番号 出土地點
出土地點

1 362-89 表探

2 362-91 9-11G

3 362-92 Tx 9

4 362-2 Tx 11

5 362-1 Tx 8

6 362-0 Tx 16

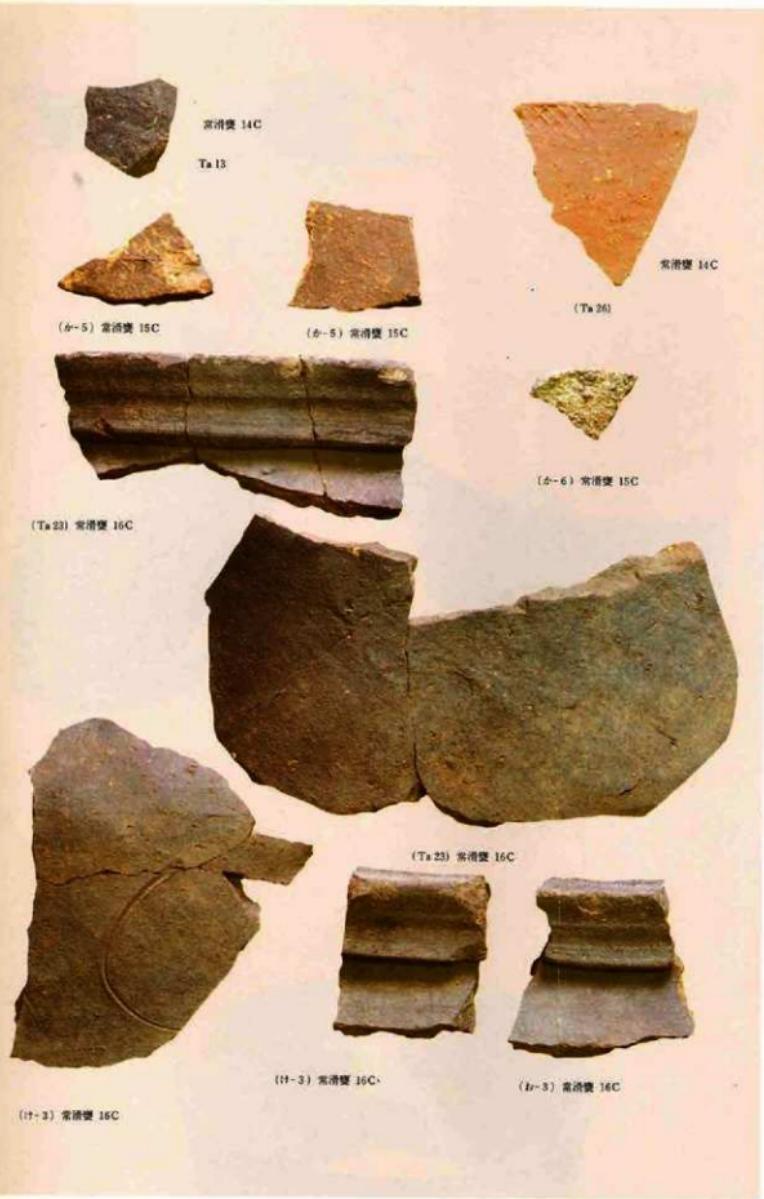


362-2

362-1



362-0



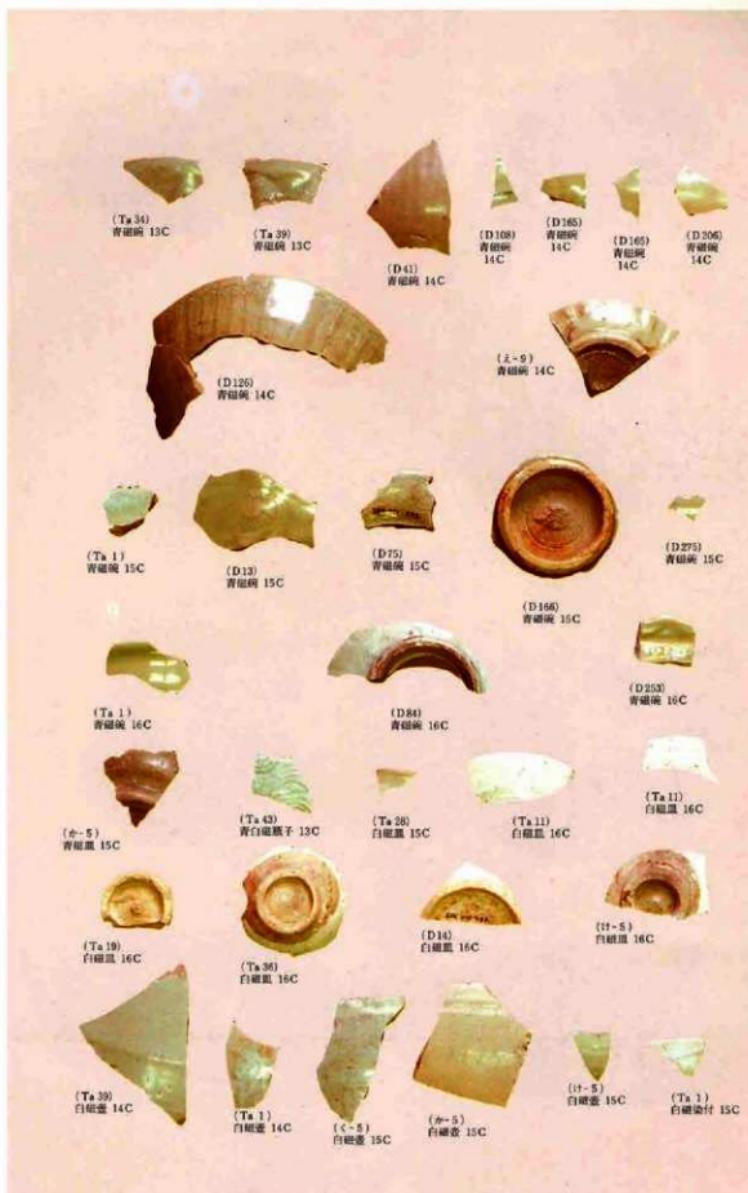
常滑系陶器



中津川・美濃系陶器



瀬戸・美濃系陶器



拍載磁器

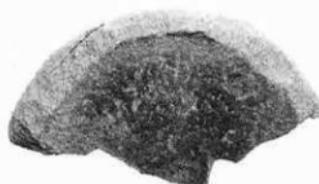
1 ~ 10
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



387-11



379-8



382-14



391-26



379-1



391-26

種別番号 出土遺物
出土地點

1 387-11 J-9 G

2 379-8 Ta 16

3 382-14 M 1

4 391-26 Ta 46

5 375-1 D 365

6 391-26 Ta 46

7 376-2 D 84

8 380-9 D 84

9 386-20 Ta 31

10 393-30 表面



376-2



393-9



386-21



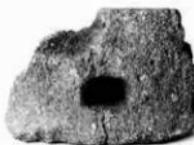
393-10

1~10

大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



395-34



395-34



395-35



395-35



398-23



399-42



399-42



399-42



395-38



400-46

標印番号	出土遺構 及土地位
1 395-34	Ta 39
2 395-34	Ta 39
3 395-20	Ta 31
4 395-33	Ta 8
5 398-23	D 100
6 399-42	Ta 30
7 399-42	Ta 30
8 398-40	D 112
9 395-18	L-12G
10 400-46	Ta 42

1~10
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



405-27



403-65



401-47



395-34



403-51



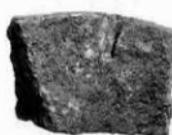
390-27



397-38



403-65



398-40



403-51

	番号番号	出土遺構 出土地点
1	405-57	8-10G
2	400-45	D 29
3	401-47	Ta 25
4	395-34	Ta 39
5	403-51	8-9-12-11 G
6	392-27	D 26
7	397-38	Ta 18
8	400-45	D 29
9	398-40	D 112
10	403-51	8-9-10-11 G

1~10

大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)

384-17



382-13



385-34



377-5



380-9



377-6



379-8



380-8



384-35



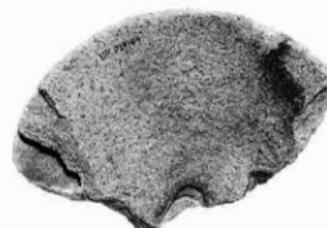
379-7

	標題番号	出土遺構 出土地點
1	384-17	大・C-1CG
2	382-13	D256
3	385-34	Ts 29
4	377-5	大・S-11G
5	380-9	D84
6	379-8	Ts 16
7	379-8	Ts 16
8	379-8	Ts 16
9	386-35	大・3 G
10	378-7	D84

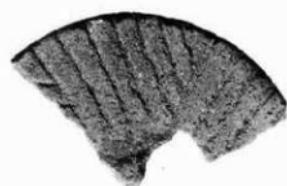
1 ~ 9
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



377-4



477-61



379-8



399-41



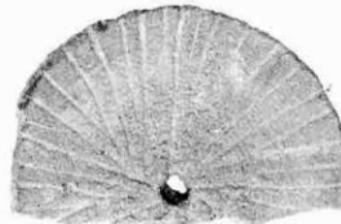
380-9



380-15

種別番号 出土遺構
出土地點

1	377-4	D 29
2	477-61	D 64
3	379-8	Ta 16
4	399-41	D 278
5	380-9	D 64
6	383-15	D 72
7	491-47	Ta 25
8	493-51	9-3-10-11G
9	395-34	Ta 29



477-51



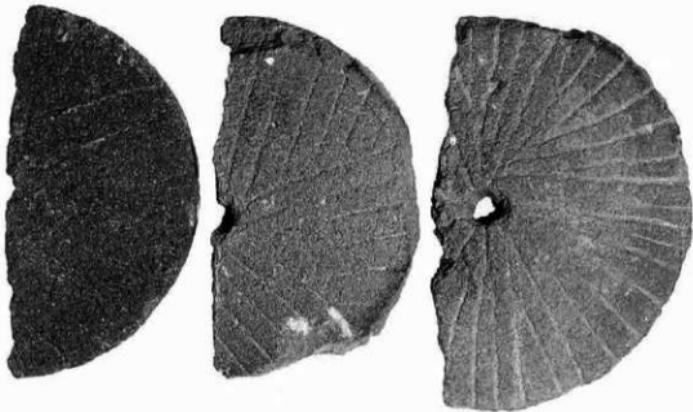
491-47



395-34

1 ~ 6

大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



400-45

397-38

403-51

	神戸番号	出土遺構 出土地点
1	400-45	D 29
2	397-38	Ta 18
3	403-51	か・9-10-11G
4	401-47	Ta 25
5	401-47	Ta 25
6	401-47	Ta 25
7	405-59	Ta 8
8	407-60	Ta 42
9	393-12	D 29
10	399-43	Ta 36



401-47

401-47



401-47



408-56



397-38



393-12



399-43



1-3
大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(粉挽臼)



382-13

404-52

385-19



406-44

399-35



378-7

382-49

種別番号 出土地點
出土地点

1	386-39	Ts 42
2	382-13	D236
3	404-52	A-3 G
4	385-19	D84
5	406-44	M 1
6	399-35	A-3 G
7	378-7	D84
8	382-49	D236
9	379-8	Ts 16
10	377-4	D29
11	386-9	D84
12	399-41	D228



379-8

377-4



386-9

399-41

1~10

大井城跡(黒岩城跡)
出土石臼(茶臼)

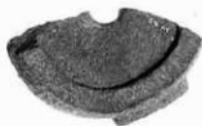
409-2



409-2



409-2



409-4



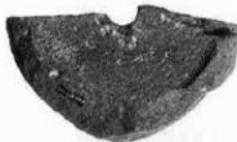
410-13



412-9



417-17



412-9



416-13



416-14



5 420-21



1 414-12



6 菱形の蓋もの



2 414-12

404番号 出土地点

1 414-12 D240-D147

2 414-12 D240-D147

3 419-20 Ta16-D180
表層

4 420-2 Ta 20

5 420-21 2-2 G

6 菱形の蓋もの

7 菱形の蓋もの

8 417-14 D34



7 菱形の蓋もの



3 419-20



8 417-14



4 420-2

1~11

大井城跡(黒岩城跡)
出土石擂鉢



425-11



425-2



425-11



425-3



425-11



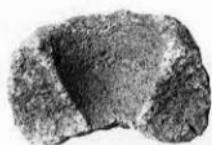
425-3



425-2



425-2



425-2



425-2



425-1

番号	出土地點
1	425-11 Tx 1
2	425-11 Tx 1
3	425-11 Tx 1
4	425-3 Tx 12
5	425-3 Tx 12
6	425-3 Tx 12
7	425-2 表面
8	425-2 表面
9	425-2 表面
10	425-1 Tx 42
11	425-1 Tx 42



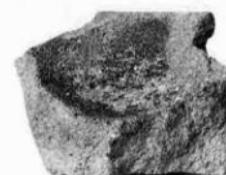
427-16



429-23



427-16



429-23



427-16



429-23

辨別番号 出土遺物
出土地点

1 427-16 か・さ・く・5-6G

2 427-16 か・さ・く・5-6G

3 427-16 か・さ・く・5-6G

4 429-23 さ・く・10G

5 429-23 さ・く・10G

6 429-23 さ・く・10G

7 427-16 Ta 42

8 427-16 Ta 42

9 427-16 か・さ・く・5-6G



427-16

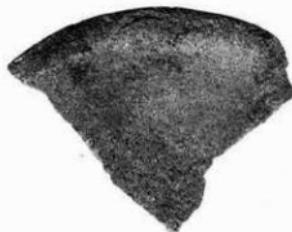


427-16



427-16

1~15

大井城跡(黒岩城跡)
出土石礫跡

429-15



429-16



429-17



429-18



429-19



429-20



429-5



429-17



429-21



429-6



429-17



429-22



429-24



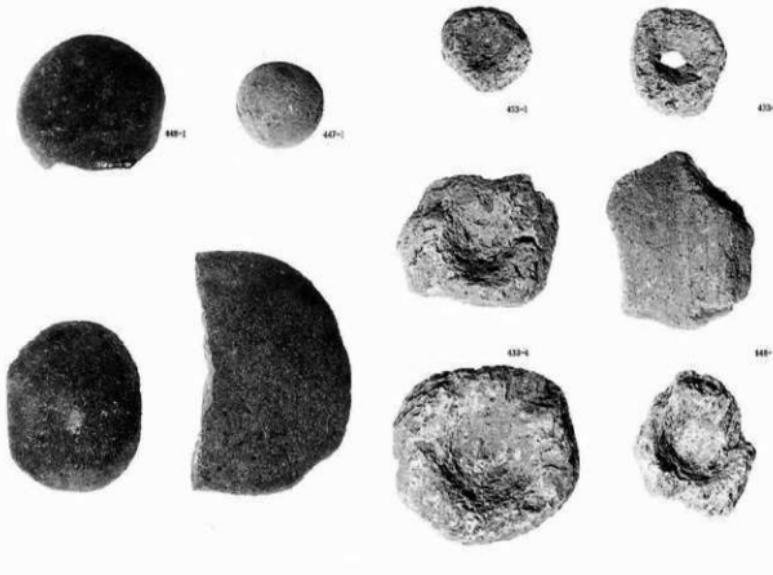
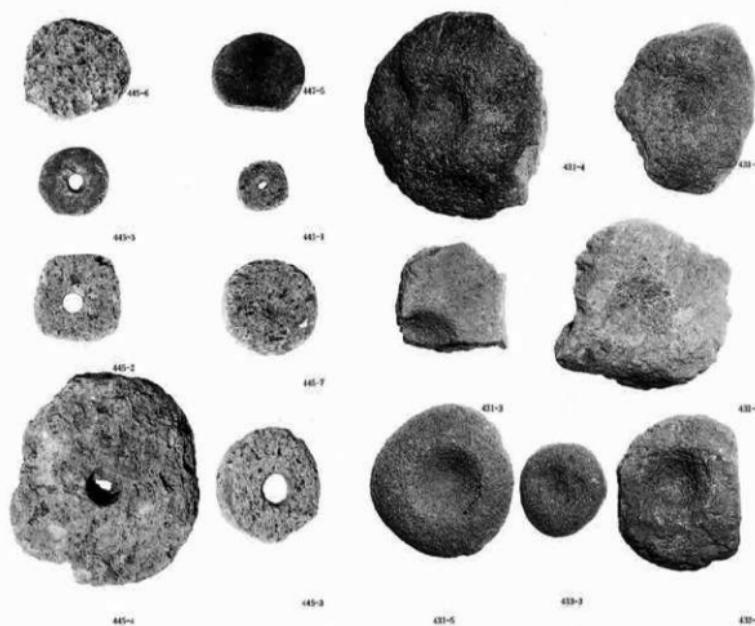
429-18



429-19

種別番号	出土遺構 出土地点
1	429-15 A-3-C-6G
2	429-15 A-3-C-6G
3	429-5 D124 壁土
4	429-5 D124 壁土
5	429-34 B-C-10G
6	429-14 Tx 42
7	429-14 Tx 42
8	429-17 D108
9	429-17 D108
10	429-18 Tx 42
11	429-20 Tx 52
12	429-20 Tx 52
13	429-22 D106
14	429-25 B-3-11G
15	429-19 D217

1 ~ 4
大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品



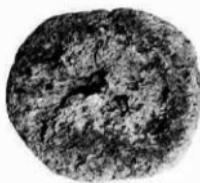
1 ~ 6

大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品



425-4

425-4



441-4

441-4



447-4

447-7

447-6



444-3



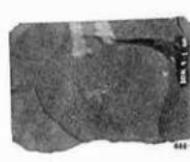
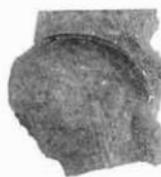
435-5

435-6

435-7

435-6

435-7



444-5



435-1

435-3



439-1



440-2



437-8



440-5



437-4



439-5



439-1



437-6



440-4



439-1



437-2



439-3



442-2



442-1



441-5

1・2
大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品

1

大井城跡(黒岩城跡)
出土石製品

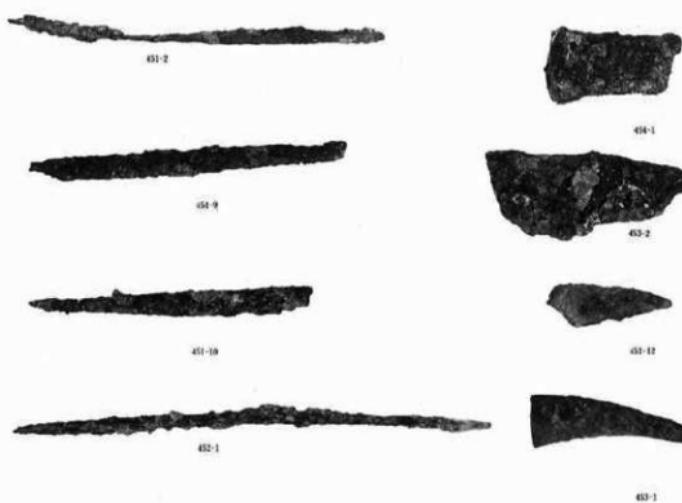


2

大井城跡(黒岩城跡)
出土金属製品



1 · 2
大井城跡(黒岩城跡)
出土金屬製品



1・2

大井城跡(黒岩城跡)
出土金属製品



45-11



45-12



45-13



45-15



45-16



45-17



45-18

45-8



45-6



45-17



45-16



45-2



45-9



45-14



45-1



45-3



45-18



45-22



45-9



45-25



45-6



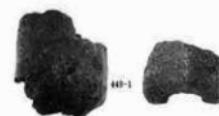
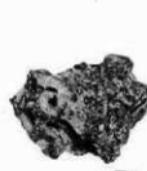
45-11



45-14



45-25



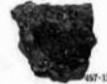
362系 106



457-6



457-16



362系 103



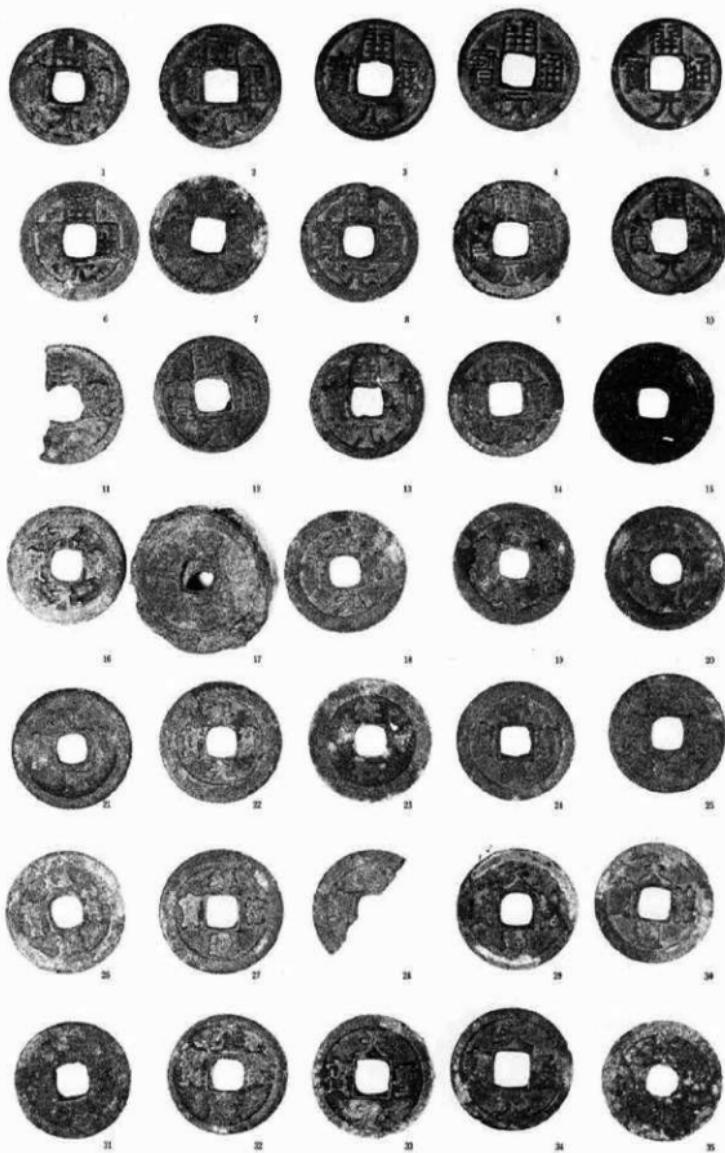
362系 104



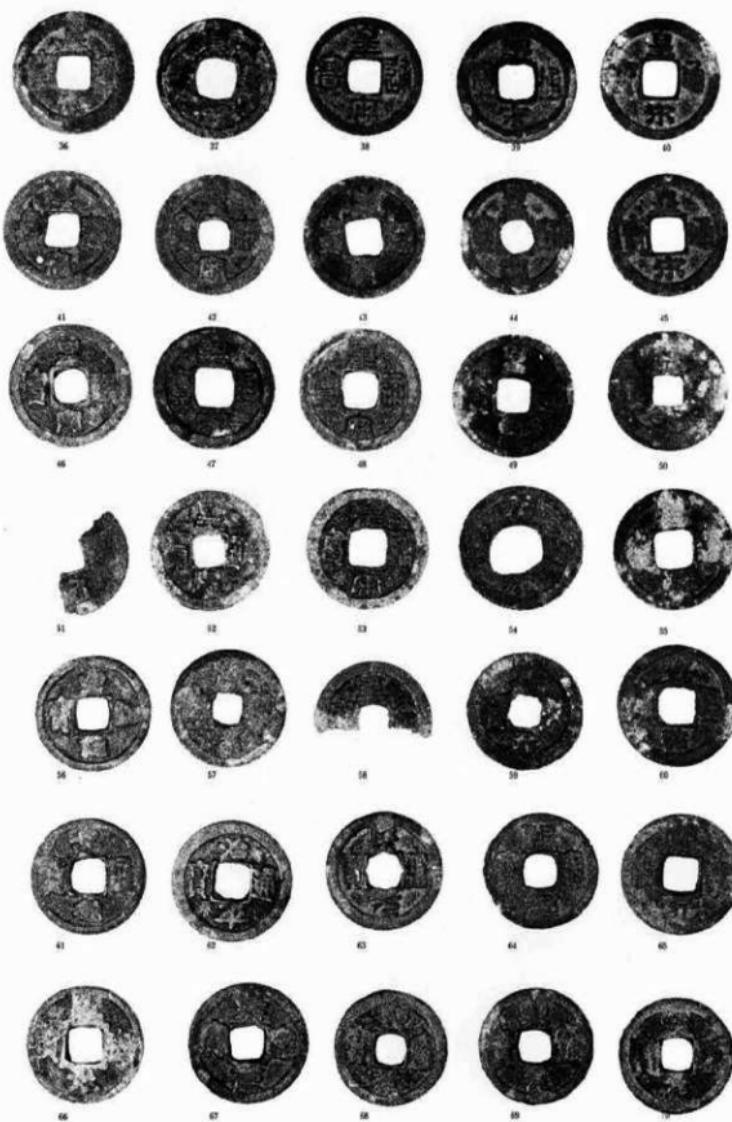
457-18

1~3
大井城跡(黒岩城跡)
出土金屬製品

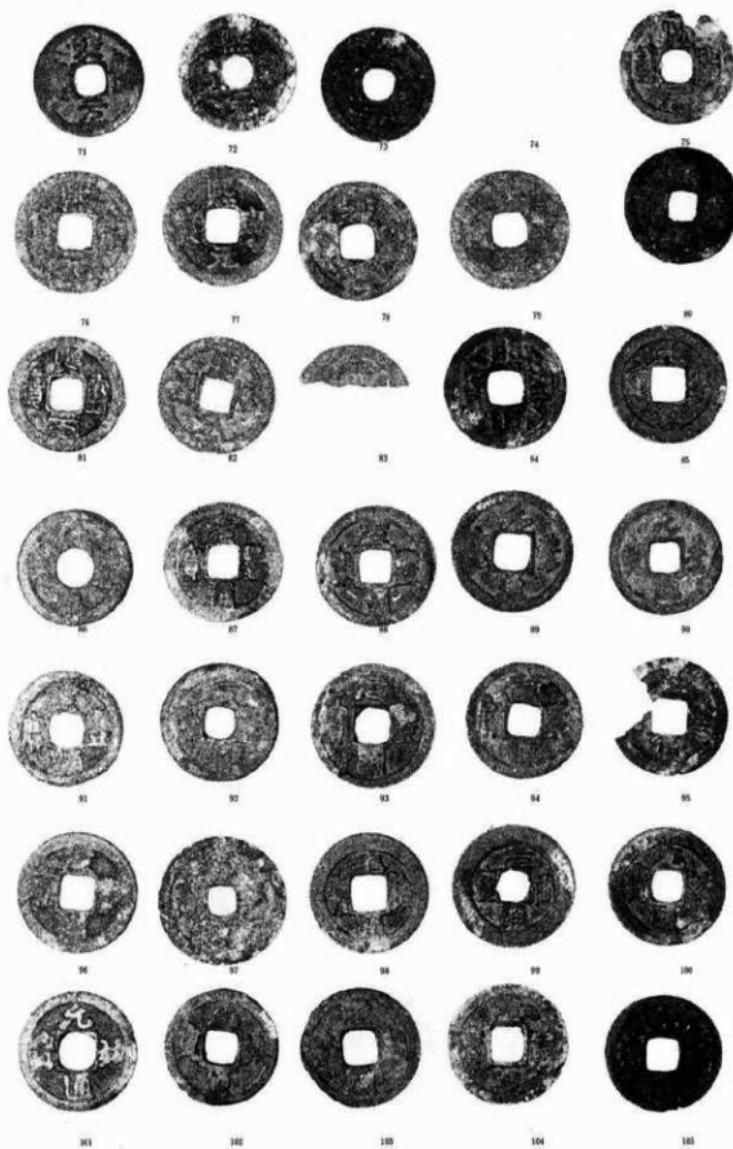
大井城跡(黒岩城跡)
出土古銭



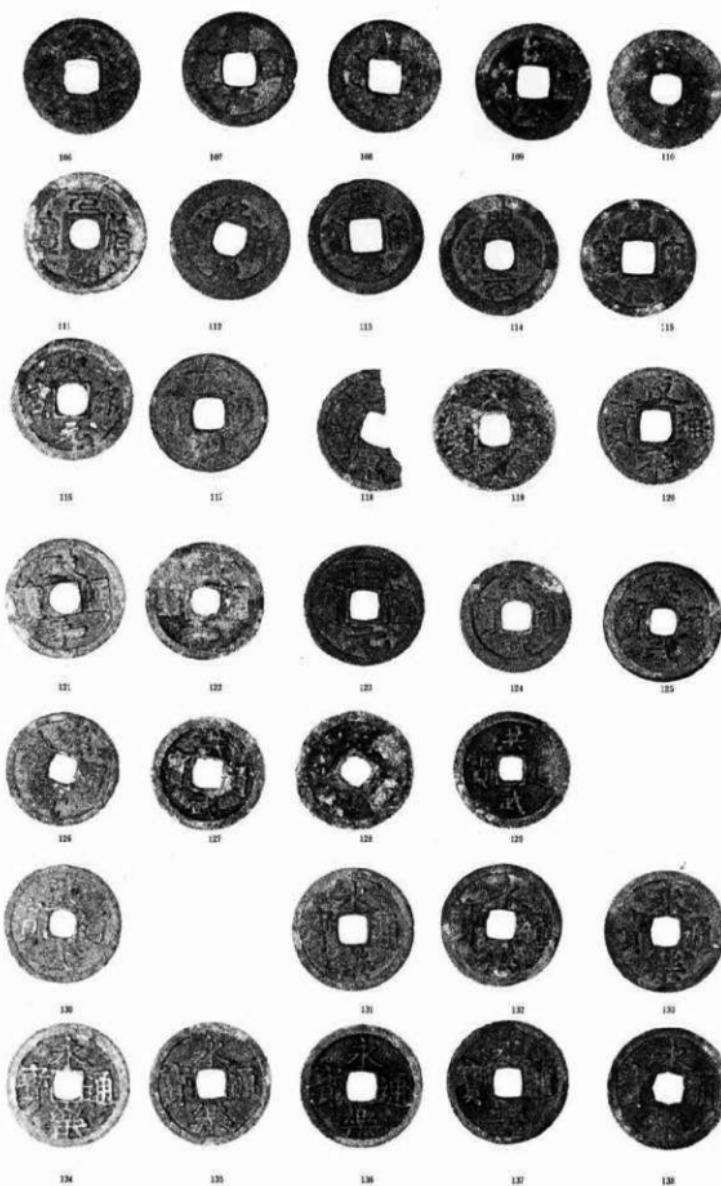
大井城跡(黒岩城跡)
出土古錢



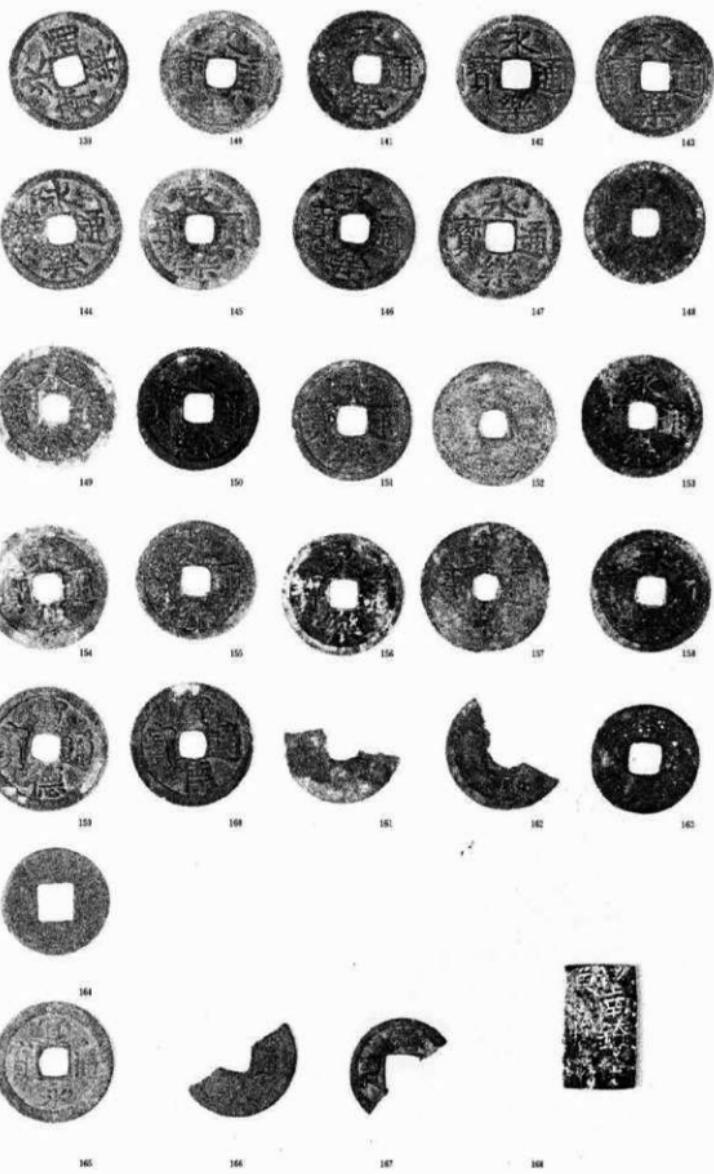
大井城跡(黒岩城跡)
出土古錢



大井城跡(黒岩城跡)
出土古錢



大井城跡(黒岩城跡)
出土古錢



大井城跡(黒岩城跡)
Ta 4 出土古鏡
(差97枚)



大井城跡(黒岩城跡)
スナップ

1 大井城跡(黒岩城跡)
おとし穴



2 大井城跡(黒岩城跡)
スナップ



3 大井城跡(黒岩城跡)
スナップ





1 F₁ 捂立柱建物址



2 F₂ 捂立柱建物址



3 F₃ 捂立柱建物址

1~6

大井城跡(黒岩城跡)
出土五輪塔



66-1



66-4



66-2



66-5



66-6



66-3



1 H 1 号住居址
(北方より)



2 H 1 号住居址
遺物出土状況



3・4
H 1 号住居址
出土土器

1-4

H 1 号住居址
出土土器



470-6

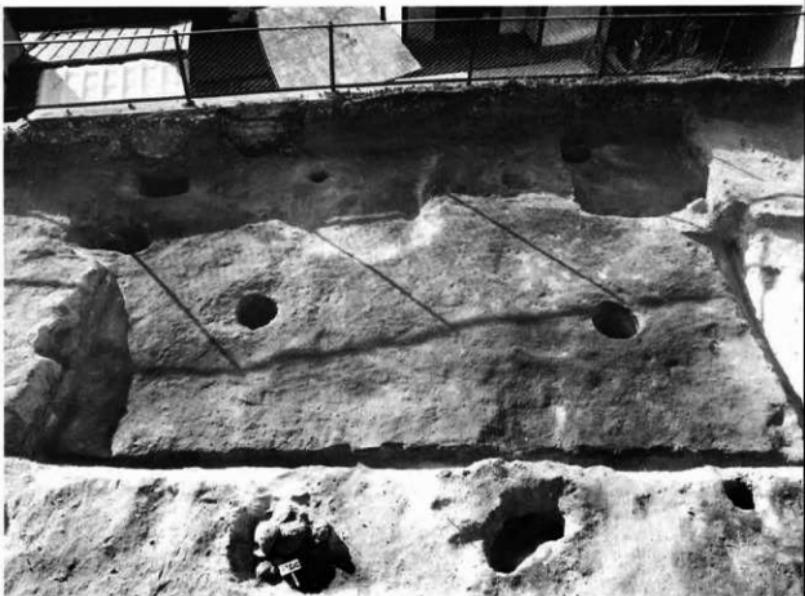
470-4



470-2

470-7

5 H 2 号住居址
(東方より)

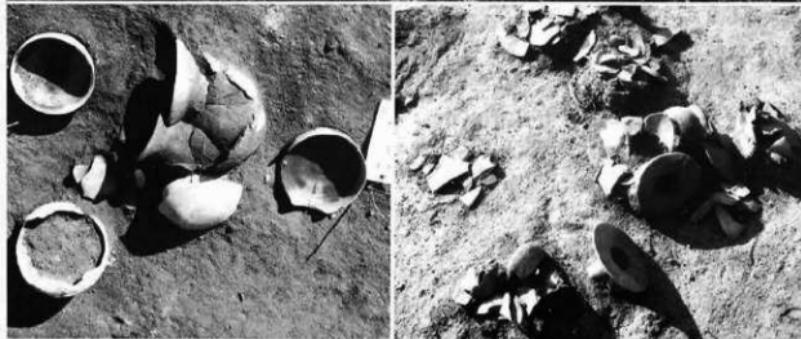




1
H 2号住居址
炭化材、遺物出土状況



2
H 2号住居址
炭化ヨシ出土状況



3・4
H 2号住居址
遺物出土状況

1 H 2 号住居址
遗物出土状况



2 H 2 号住居址
出土砾物石



3 H 2 号住居址
遗物出土状况





1 H 2 号住居址
縄物石出土状況



2 H 2 号住居址
出土石製品



3 H 2 号住居址
(カヤ)出土状況



3・4
H 2 号住居址
出土遺物

1—8
H 2 号住居址
出土遗物



476-1



476-2



476-7



476-10



476-2



476-9



476-8



476-3

1~11
H 2号住居址
出土遺物



477-8



477-14



477-16



477-15



477-11



477-10



477-12



477-9



477-10



477-11



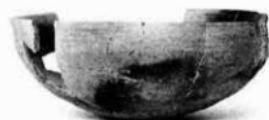
477-12

1~9

H 2号住居址
出土遺物

477-18

477-19



477-21

477-7



477-5

477-4



477-6

477-2



477-1



1 H 3号住居址
(南方より)



2 H 3号住居址
カマド

3~11
H 3号住居址
出土土器



485

529-6

527-3

12 H 3号住居址
出土石製品



1 H 4 号住居址
(東方より)



2 H 5 号住居址
(南方より)



3・4
H 5 号住居址
出土土器



482-1



482-2

1~4

H 5号住居址
出土土器



492-3



492-5



492-6

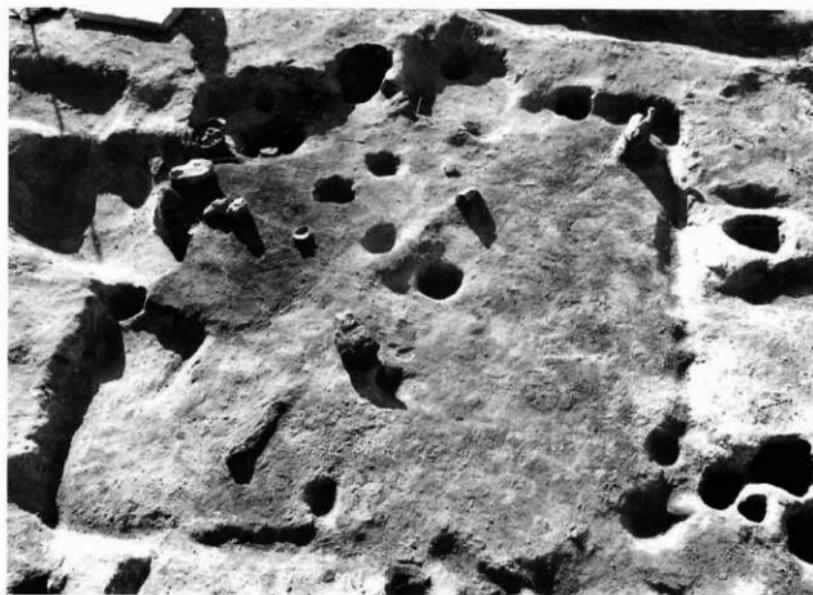


492-4

5 H 6号住居址
(北方より)



1 H 7号住居址
(北方より)



2~4
H 7号住居址
出土土器



HH-2



HH-3



HH-4



1 H 8号住居址
〔東方より〕



2・3
H 8号住居址
出土土器



4 H 9号住居址
〔東方より〕

1 H 9号住居址
カマド



2 H 9号住居址
遺物出土状況



3 H 9号住居址
カマド

4 ~ 7
H 9号住居址
出土土器



502-9



502-8



502-4



I H10号住居址
(南方より)



2 ~ 7
H10号住居址
出土土器



H10-2

H10-1

H10-3

H10-4

H10-6

H10-5

1・2

H10号住居址
出土土器



3 H10号住居址
出土繩物石

505-8

505-1

505-4

4 H11号住居址
(東方より)



5・6

H11号住居址
出土土器



509-1

509-2



1 H11号住居址
カマド

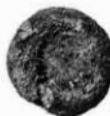


2 ~ 6
H11号住居址
出土土器



S109-12

S109-10



7 H11号住居址
出土石製品

1 H12号住居址
(北方より)



2 H12号住居址
出土遺物



3 H13号住居址
(東方より)





1~3
H13号住居址
出土土器



S17-4



S17-1

S17-2



4 H13号住居址
出土石制品



S18-1



S18-2

5 H13号住居址
纺锤车出土状况



S17-6



6 H13号住居址
出土土器

7 H13号住居址
管玉出土状况

1 H14号住居址
(北方より)



2 H15号住居址
(東方より)



3 H15号住居址
カマド
(南方より)



4 H15号住居址
カマド東側の
遺物出土状況
(東方より)

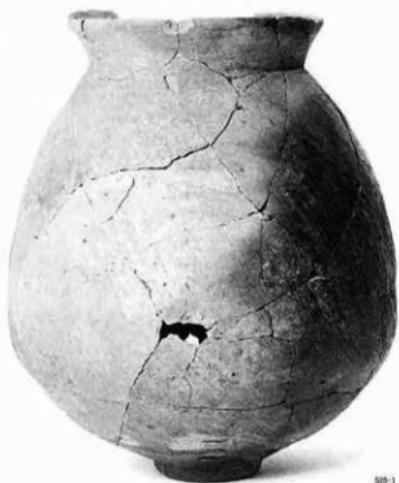




1 H15号住居址
カマド東側の
遺物出土状況
(東方より)



2~5
H15号住居址
出土土器



S24-1

S23-4

S23-1

S23-5

1 ~ 2

H15号住居址
出土土器



3 H15号住居址
遗物出土状况



4 H15号住居址
炭化材出土状况



5 ~ 7

H15号住居址
出土遗物

513-1



513-4

513-3

1~10
H15号住居址
出土遺物



S24-2



S24-3



S24-4



S24-5



S24-6



S24-7



S24-8



S24-9



S24-10



S24-11

大井城跡(黒岩城跡)
スナップ



大井城跡(黒岩城跡)発掘調査報告書

昭和61年3月31日発行

編集者 大井城跡発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

長野県佐久市大字中込3056

電話 0267-62-2111

印刷所 株式会社佐久印刷所